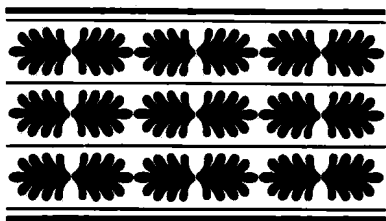
徳川家康
山岡荘八
10
無相門の巻

講談社文庫

徳川家康 10 無相門の巻

山岡荘八

講談社

目次

挿絵　木下二介

徳川家康

10 無相門の巻

次に吹く風

一

茶屋四郎次郎は、じりじりと照りつける炎天下を矢矧の大橋へ急いでいた。
うわべは徳川家の呉服調達の御用人で、その実は京方面の諜報は一手に引受けていると言ってよい茶屋であった。
すっかり商人ぶりは板について、その眼も以前の鋭さから、いかにも裕福な長者らしい風貌に変っている。
手代と見せた護衛二人を連れて、橋の中央にかかると、彼は足をとめて流れを見やり、それから行手に深緑をかざした岡崎城を仰いだ。
「どうじゃ、ここは、別天地の感ではないか」
「はい。戦のあるとないとは、吹く風の匂いが違いまするな」
「しかし、こんどはどうなるかのう」
「どうなるかとおっしゃると、こっちも火の粉がふりかかると言われまするので」
「お館さまは、さほどではないが……何分、三河には頑固者が揃うて居るでのう」

茶屋四郎次郎はそう言うと、陽かげのない橋の上でわざわざ草鞋の紐を結び直した。
「すると、北陸のことが片付きますれば、筑前どのの手は、この方面に伸びるとおっしゃりまするか」
「そうなろうのう、もはや、岐阜の運命も決ったゆえ、天下の平定となれば、徳川家だけをそのままにはしておけまいでなあ」
「そうなったら、なるほど一大事でござりまするなあ」
「一大事などという段ではない。お館さまの上に生涯でいちばん大きなさわりになろう。さ、急ごうか」
「はい。この岡崎の城にはお寄りなされませぬので」
「それがのう」
　歩き出して振返って、
「寄らずにそのまま浜松へ行く気であったが気が変った」
「気が変ったとはお寄りなされまするので」
「寄らずばなるまい。いま、この城の城代は石川伯耆守数正どの、石川どのと、密談せずに通りすぎてはならぬ気がする」
　手代はそれで黙ったが、茶屋はまたひとり言のように、
「とにかく、北の庄の城はおち、北陸の備えは一新した。ここでお館さまに、戦勝祝いの使者を出して頂かねば、筑前どのとの後のもつれが増そうでな……」
　四郎次郎は、それ等のことを家康に報告、献策のため浜松に赴く途中であったが、道々考えて

みると、三河武士の中に、秀吉と対談して、面目も傷つけず、感情も害さぬような外交手腕のある者が思い当らなかった。
武骨一辺で、秀吉を成上り者と軽んじたのでは、それこそ後が大変だったし、逆に秀吉にまるめられる可能性も充分あった。
秀吉はその点摩訶(まか)不思議な力を持った大天才なのだ。
相手がひどく素朴(そぼく)だと見てとったら、恐らくその肩を叩いて一度で自分の味方にしてしまうに違いない。
(これはやはり石川どのでなければ勤まるまいが、さておきき入れなさるかどうか……)
茶屋はまっすぐ城へ向いながら、しきりにそれを考えていた。

二

岡崎城も以前の構えから見ると、すっかり変った。家康自身の功業と歩速を合せて、城廓も櫓(やぐら)も立派になったし、それを囲む樹木の繁りも加わって、どっしりとした重さを加えている。
石垣も濠も、三代続いた苦闘と繁栄の秘密を空に囁(ささや)きかけている。
と言って、ついこの間落ちた北の庄の城に比べては櫓も低く、敷地も狭いのだが……
「城ではない……そこに住まう人の心だ」
茶屋四郎次郎は、額の汗を拭きながら、勝手知った連尺(れんじゃく)木戸へすすんでいって、
「京の呉服御用を勤めまする茶屋四郎次郎でございまするが、ご城代さまに……」
と、いんぎんに申入れた。

「なに、京の呉服商だと」
門番は四郎次郎の顔を知らなかったと見えて、
「いったい何の用なのだ。御城代さまは忙しいぞ」
「はい、浜松のお館さまのもとへ参向致します途中、ちょっとご挨拶にまかり出ましたので」
「取次げば、会うと思うのだなご城代が」
「はい。たぶんお許し下さると存じまする」
「よし、無駄でないと分れば取次ぐ」
茶屋は手代を振返って苦笑した。
万事がこの調子なのである。素朴で失礼で、そしてどこかに愛嬌もあるのだが、物言う時には嚙みつきそうな語勢である。
三河気質……とでも言おうか。これが足軽小者にまで滲透しているので、戦となれば素晴しく強いのだが、さて、平時のかけ引き、社交となるとちょっと困りものであった。
以前、信長のもとへ使した、酒井忠次と大久保忠世の両人が、ついに家康の嫡子信康を窮地に陥れた前例もある。
ところが、こんどは信長よりも遙かにむずかしい相手の秀吉と、とにかく接触しなければならないことになったのだ……
茶屋四郎次郎は、木戸口に立たされたまま暫く待った。門のすぐ中には供待ちも対面所もあるのだから、そこで待たせて呉れたら助かるのだが、そんな融通はききそうもない。
「茶屋どの、通らっしゃい」

「はい。ご城代さまはお会い下さりまするか」
「商人」
「はい」
「その方は、ご城代とは古いつきあいか」
「はい。もうかなり古くから」
「そうらしい。丁寧に案内せよと仰せられた。来いッ」
四郎次郎はまた苦笑して、
「では、二人の手代は、この供待ちで」
「なに、そうか。まだ二人居たか。よし、神妙に控えて居れ。その方たちのことを訊くのを忘れた」
「かしこまりましてござりまする」
手代を供待ちに待たせて本丸へ中門をくぐってゆくと、大玄関へ、若侍二人が出て来て迎えて呉れた。
「茶屋どのか、こっちへ通らっしゃい」
これも、門番と同じ口調で、案内された茶屋が商人姿なのでムッとしている様子だった。
たずねる石川数正は、本丸の小書院で、しきりに祐筆と何か話しているところだったが、四郎次郎の姿を見ると、
「おおこれは松本氏、さ、ずっとこれへ」
言いながら、祐筆と若侍に退るように眼顔で知らせた。

三

茶屋四郎次郎は祐筆と若侍が退出してゆくまで敷居ぎわで神妙に頭を下げていた。

家康よりも三ツ年長の石川数正は、この時すでに四十五歳になっている。

十歳で家康の傍小姓にあげられ、長い間ともに人質暮しを続けて来て、家康の長子信康を三河へ迎え取る時にはわざわざ同じ馬に乗せて引取って来た功臣だった。

それだけに三河武士の中では圭角がとれ、風貌にも物腰にも円熟した重厚さがにじみ出ている。

「松本氏、北国のことは、到頭きまりがついたようでござるな」

「はい。万事が筑前どのの、方寸の通りになってゆきました」

「さ、ずっとこれへ。誰も聞いて居る者はない。こなたの考えを聞かせて下され。北国は誰に任されましたかの、筑前どのは……」

茶屋四郎次郎は、ゆっくりと数正の前にすすんで、もう一度噴き出てくる汗を拭った。

「実は、お館さまに、とりあえずと思うて、罷り出ましたが、お館さまには浜松にご在城でござりましょうなあ」

「されば、もはや甲斐からお戻りなされている筈でござる。あの国の国制を定められてな。しかし、またこの秋には甲斐から駿河と、ご自分で廻られるおつもりらしいが」

「ご熱心なことで」

「まことに、われ等もつくづく感嘆致して居ります。筑前どのが城攻めなされている間に、こっ

ちはすっかり地固めせねばと仰せられてなあ」
「その事でござりまする。地固めについては、この茶屋など、何の不安も覚えませぬが、それから先の事がちと……」
「と、言われると、筑前どのに、何か変った気配でもあると言わっしゃるか」
「いいえ、北国のことはこんど、越前と加賀の内、能美、江沼の二郡をさいて丹羽長秀に下され、本領の若狭と共に治めさせ、加賀のうち石川、河北の二郡は前田利家に能登と共に与えられ……」
「待って下され。越前は丹羽長秀に」
「はい。加賀、能登は凡そ前田父子でござりまする。父の利家は能登の七尾から金沢へ移って築城致しましょう。又利長は府中より加賀の松任へ、七尾には前田安勝、長連龍などを置き、佐々成政は越中の富山へおいて上杉家の交渉に当らせて居りまする」
「ふーん。ひどく前田領は多くなった。それで佐久間玄蕃はどうなりましたな。戦の最中に行衛知れずになったとか聞いたが……」
「それが、途中で捕まりました。玄蕃も権六郎もな……はじめはしきりに降伏をすすめたらしいが、玄蕃は頑強にこれを突っぱね、わざわざ京へ連行されて引廻しの上、首をはねられました」
「ふーん。それでは柴田の一類は根絶したか」
「みなみな意地にこだわって、少しく思慮が足らなんだ……と、より申しようがござりませぬ」
「して、このあとは、どう動くとご覧なさる」
「これで信孝さまも終り……この次は、大坂築城ではあるまいかと存じまする。天下は、この秀

吉が握ったぞと、故右府さまの安土の築城、あれになぞらえて、天下の諸侯に賦課を命ずる……となりますると、ご当家にもかかわり無いことではございませぬぞ」

　四郎次郎はそう言ってじっと数正を見詰めてゆく……

四

　数正はゆっくりと頷いた。

　戦が済めば、徳川家からもいずれ戦勝祝いの使者は出さなければなるまい。

（その使者を誰にするか？）

　それは茶屋だけではなく、数正にとっても関心のあることであった。

「ご城代さま」茶屋四郎次郎は、ちょっとあたりを見回すようにして、

「こんどのお使い、誰が宜しゅうございましょうかな。筑前どののもとへ遣わされるお方は？」

「使いは誰でもよい筈じゃが……」

　と、数正は相手の視線をそらすようにして、

「そのあとでうるさい事になろうも知れぬの」

「そのあとで……？」

「さよう、筑前どのは、必ず何か口実を設けてお館に、自分のもとまで伺候するよう計らえと、その使者に仰せられようでな」

「そのことでございまする」

　と、こんどは茶屋が身をのり出した。彼の案じているのも、それから先のことであった。

「万一、ご使者が、それを止むないことに考えて、お請けして戻られたらどうなりましょうかご城代」
　数正は、ゆるく首を左右に振った。
「お館はとにかく、老臣どもが承知すまい。使者は戻って切腹ものじゃな」
「切腹と分っては行く方がござりますまい」
「まず無いであろうの」
「というて、わざわざ筑前どのの許迄お祝いに赴き、向うが来いと言われるのに、その儀は……と、お断りも出来かねましょうかと」
「それは出来る」
　と、数正は、陽焼けした頬に皮肉な笑みをうかべて、
「それは出来るが、にべもなく断って来る程なら、相手の感情を傷う点で、始めからお祝いなどに行かぬがよかったという結果になろうの」
「そうなったのでは話になりませぬが……」
　茶屋も思わず眉を寄せて苦笑した。
「相手はそれで、捨置くお方ではござりませぬので……」
「されば、その点でのう……」
「ご城代さま！」
「妙案があるかな松本氏に」
「いいえ、妙案などのあろう筈はござりませぬ。が、これは、お祝いの使者も出さずに済むこと

ではないように考えまするので……」
「わしもそれは、同じことじゃ。が、さて、誰が使者に行くかとなると……」
「この茶屋は、なみの者では済まぬ、お館さまに若し、誰がよかろうかと訊ねられた時には……」
そこまで言うと数正はギロリと鋭く四郎次郎を見返して、
「何者の名を挙げてお答えなさる気じゃ」
「はい……」ちょっと息をつめて右手を出して指をくり、
「井伊どの、榊原どのでは、まだ若すぎて、筑前どのがご不満でござりましょうし」
「それで……」
「本多どのでは、ちとはげしすぎまするし……酒井、大久保さまでは、この前の信康さまのこともあるゆえ、お引請けはなされますまいし」
「それで……」
「私は、やはり、あなた様と、本多作左どのの名より他に、挙げるお方がござりませぬ」
四郎次郎はそこで又、相手の肚を見透そうとしてじっと息をこらしていった。

五

石川数正は、黙って庭先を見やったまま、暫く答えようとしなかった。
その様子が、ひどく手応えのない感じなので、茶屋四郎次郎は言葉をつづけた。
「この事は若い方々には分りますまい。いや、老臣衆の中にも、筑前どのの気性を誤りなく読みとって居られる人は稀れかと存じます。筑前どのは、何時のころからか、ご自分を天下平定のた

めに生れ来った太陽のお子と確信されてござりまする。この確信はおそろしい……筑前どのの命ずるままにならぬ者は、平定のための敵として、必ずこれを見遁しませぬ」

「………」

「この茶屋は、こんどの柴田攻めで、その事をまざまざと見せつけられました。柴田どのの意地の強さもさることながら、筑前どのもまた、一歩も譲らぬ異常な強硬さでござりました。いや、それだけならば敢て恐れるに足りませぬ。が、その上に、故右府さまに優るとも劣らぬ智略を持たれ、しかも摩訶不思議な人心収攬の術を心得て居りまする。堺から京、大坂の商人は言わずもがな、筑前どのに肩をたたかれて、味方せなんだ者は殆んどない……信孝さまの家臣も、柴田勝豊が家臣も……」

石川数正は、眼をそらしたまま小さく、しかし何度も頷いた。

茶屋の言おうとすることが、彼には分りすぎる程分っていた。

秀吉の人物そのものが、稀有の英才であるばかりでなく、その奉じている「天下平定」の大志がそのまま神仏の意志に叶っている。神仏自身は口を利かない。しかし、万民に平和を渇仰させていて、それが大きく秀吉を背後から支えている。

その点では家康も、秀吉によく似た理想をもっていた。

ただ家康の場合は、少しでも現実の世界に平和を押しひろげようというのであり、秀吉の場合は、自分こそ天下平定のために選ばれて出て来た者と確信して動いている。その点にわずかながら相違があり、そのわずかな相違がまた大きな衝突の危険をはらんでいるのだ……と数正は思っていた。

「それにしても、松本氏の人選はおもしろい」
　暫くして、数正はホッと息して茶屋を見返した。
「わしと、あの頑固一徹な作左どのに白羽の矢を立てられるとはのう」
「恐れ入りました」
　四郎次郎は、笑いながら頭を下げて、
「私には、お二人さまは、まことによく似たお方と見えまするので」
「ほう、近ごろ老耄したと言われるわしと、老いていよいよ壮んな頑固ぶりの作左どのとが似ているとは妙なことを言われるぞ」
「はい、外に現われた形ではございませぬ。内にかくされた赤心でございまする」
「ふーん」
「恐れながら、この茶屋は、三河武士の精髄は、お二人の心奥に凝ってござるとお見受け申して居りまするので」
「ハハ……」
　数正は豊かな表情で笑っていった。
「松本氏が、都の水を呑まれて、仲々巧者になられたぞ。何のわれ等ごときに……」
「いいえ、筑前どのに屈さぬだけのご性根、はばかりながらお二方に……と、存ずればこそ、かく……」
　数正はもう又わきを向いて、ボーッと庭を見やっていた。

六

「ご城代さま、都の水を飲んで口巧者になったとは心外なお言葉でござりまする」
　茶屋はまた一膝すすめて、
「私は、今にして両雄並び立たずの古語を思わずに居れませぬ。筑前どのの力とご気性、この二つをよくよく究めてかからぬと、徳川家にとって、これは、三方ヶ原以来の大難となるやも計られませぬ」
「と言われると、筑前どのの方から、合戦を挑まれると言わっしゃるのじゃな」
　数正はいぜん視線をそらしたままで言った。
「たとえ筑前どのが合戦を挑まれても、お館さまは応じられまい」
「いいえ、合戦を挑むかわりに、臣礼を執れと強いて参るに違いござりませぬ。今ではもはや、丹羽長秀どのも、細川藤孝どのも、みな筑前どのの家臣にござりまする」
「すると、お身の案ずるのは、お館さまが、筑前どのの家来にはなるまいと言われるのか」
「御意にござりまする。お館さまはとにかく、家来衆が承知すまい。それゆえ、ここで、尋常ならぬ用意の布石が必要だと申上げて居りますので」
「ハハ……」
　数正はまた笑った。
「よう分りました。だがお案じなさるな。お館はそのようなお方ではない。わしも、お身の言葉は肝にきざんで置こう。又、お館の命があれば使いもしよう。それゆえ、今宵はゆっくりここで

休んで一刻も早よう浜松へ赴かれるがよい」
茶屋四郎次郎は、まだ、何か言い足りない気がして不服だったが、これ以上の言葉ははばかられた。
(果して、これで、この人は分って呉れたのだろうか……?)
忌憚なく言えば頼り無かった。眼の色変えて、もっと自分に質問の矢を向けて来るものと期待していた。
「――よし、それならば、わしから願うて使者に参ろう。何の筑前とてただの人ではないか」
そうした言葉を期待して、そうなったら、あの点、この点と、秀吉の性癖をもっと細かく話しておこうと思ったのだ。
しかし、数正は少しも真剣に乗って来ない。この人もやはり秀吉を、軽く見過ぎているのではあるまいかと思うと、やがて運ばれて来た膳部も酒も美味くなかった。
数正は、以前とは人が変ったように見えた。柔くはなったが、肝腎な気魄がどこかへ消えうせてしまったような気がする。
家康の所領が四ヵ国に及んだので、もはや大名の地位は約束されたも同じだった。それだけに鋭気がにぶったのか、それとも尊大になったのか……?
その夜は、本丸の一室に手代とともに宿泊させて呉れたが、翌朝、城を発つときには、数正はもう顔を見せなかった。
それも何となく四郎次郎には、裏切られたような淋しさだった。
(まさか、この城の城代で満足しきってしまったわけでもあるまいが……)

茶屋が出発すると、数正は、さり気ない様子でわが子の康長に言った。
「松本四郎次郎は出ていったか。あれも少々口数が多すぎてのう」

七

石川数正には、茶屋四郎次郎の言おうとしている事は分りすぎるほどに分っていた。
というのは、同じ問題で、すでに数正はこの正月、家康と争ったことがあるからだった。
家康は、何を考えているのか、しきりに、清洲の織田信雄と文通を重ねている。
それが数正には、何となく不安であった。
信雄が信孝のように柴田や滝川とは結ばず、しきりに家康を頼って来るのは、その内心に、信孝と同じように、秀吉への反感があるからに違いなかった。
信雄は、家康がまだ北条氏と戦っている時から、しきりに、甲斐の家康の陣中へ手紙や贈物を届けて来た。
近畿の事情が切迫しているから、早く北条氏直と和平をととのえ、軍を返して、我等に一臂の力を藉して呉れというのであった。
始め家康は、それを巧みに利用して、北条氏との間を信雄にあっせんさせるつもりらしかったが、それが数正には危い橋に見えてならなかった。柴田勝家は、信孝と結んだことに依って自ら滅亡を招いていった。家康が信雄と接近することは、やがて秀吉の眼を光らせずにはおくまい。
「――清洲とのご交際は、お心なさるがよろしゅうござりましょう。痛くもない腹をさぐられるは詰らぬことでござりまする」

いつもは、笑って頷く家康が、その時には、あらわに不快な色を見せてわきを向いた。
それぱかりか、去年の暮、秀吉がいよいよ岐阜城へ兵を出したという時に、信雄から家康に是非とも会見したいと申し入れて来た。
家康はあっさりこれを承諾して、この正月、岡崎の城までわざわざ信雄を招いて会談した。
しかもその席へは重臣たちも近づけず、何を話し合ったのか今もって分らない。そのあとで、二人は馬を並べて吉良まで鷹狩りに行ったりした。正月の二十日のことである。
鷹野から戻って来ると、数正は、ずけずけと家康に言った。
「――お館、獲物はござりましたかな」
「――おう、兎と雉が少々であった」
「――そのような獲物のことではござりませぬ」
「――なに」
家康は、その時は笑って数正をたしなめた。
「――故右府さまとわれ等は、並の間柄ではない。失意の信雄どのを慰めた……別に獲物は無くともよかろうが」
「――獲物がなくばおよしなされませ。詰らぬことでござりまする」
「――詰らぬこと？」
「――はい。兎や雉と、大事な家臣の生命を取替えなければならぬような事になっては詰らぬことでござりまする」
「――黙れッ数正、そちは、わしに指図する気か」

「――はい。時によっては致しまする」
「――口を慎しめ。わしにはわしの考えがある。二度と申すなッ」
同じ城に住んでいたら、その後、きっと家康はその「考え――」を数正に分らせたに違いなかったが、それから間もなく浜松へ戻っていったので、そのままになっている。
したがって、秀吉のこれからの出方を案じている点では、数正は決して茶屋四郎次郎に劣るものではなかった……
彼はただそれを口にするのをきびしく自戒しているのだ。

八

「康長、於勝（おかつ）も呼んで呉れぬか」
石川数正は、四郎次郎が城を出ていったと知ると、嫡男を見返っておだやかに笑った。
「客人がの、おもしろいことを言ったぞ」
「おもしろい事とは、さっき父上が、喋舌（しゃべ）りすぎると仰せられた客人のことで」
「そうじゃ。さすがにお館のお目に叶（かの）うただけあって器量人じゃが、少しこんどは喋舌りすぎた。その中でな、こう言ったわ。どこへ使に出しても安心していられる者は、わしと鬼作左の二人だけじゃとな」
「それが……おもしろいのでござりまするか」
「そうじゃ。おもしろい。あまりに目がね違いでのう。この三河には、わしや鬼作左のような者は川原の小石ほどにたくさんあるわ。まあよい。於勝も呼んで来い」

数正には、男の子が三人あった。嫡男は康長ですでに元服しているが、次男は勝千代、三男は半三郎、まだいずれも前髪立ちであった。

何も彼も家康の出世に賭けて妻帯がおそかった故で、子供と父の年齢の差は大きい。

やがて康長が、二男の勝千代を連れてやって来た。

勝千代は躰は大きかったが、まだ十四歳で、その眸はあどけない稚なさに光っている。

「康長、於勝……わしは二人に今日ちょっと訊いてみたいことがある」

「はい。何でござりましょうか」

「おぬし達は、祖母さまから、よう仏の教えを聞いていよう」

「はい。聞いて居ります」

弟の勝千代が答えるあとから、康長は首を傾げて、

「聞いては居りますが、まだ知っては居りませぬ。御仏の教えは深いようで」

「そうじゃ」と、数正はうなずいた。

「それゆえ、どの程度か父も訊ねてみたくなった。知らぬこと、分らぬことは、そのまま答えよ。よいか」

「はい」

「その方たちは、この父が、何でお館さまに生命をささげてお仕えするか知っているか」

「はい」と、兄の方が答えた。

「父祖代々のご重恩を蒙って居るからでござりまする」

「ふーん。於勝はどう思うぞ」
「兄上とおなじ……その上に、お父上は、お館さまを尊敬しているし、お好きでもあるからだと思います」
「ふーむ」
と、数正はうなずいて、
「では訊ねるが、もし、この父が、お館さまを嫌いになり、お館さまより、もっと大きな恩を下さる方があったら、この父はお館さまのもとを離れて、その大きな恩を下さる方へ仕えるというのじゃな」
そう言われると兄弟はそっと顔を見合せて首を傾げた。
(なんで父がこのような問いを発するのか？)
「違いました」
と、兄が言った。
「そういうお方があっても父上は行きません」
弟の方は賢しげに首を傾げて黙っていた。
数正は声を立てて笑った。
「ハハ……、於勝はずるいぞ。分らぬことを黙っているのはずるいぞ。ハハ……」

九

「いいえ、ずるくはありません！」

勝千代は子供らしく首を振った。
「いま、どう答えようかと考えているところです」
「そうか。ではもう少し考えてみるがよい。兄は違ったというのじゃな。違ったと言えば、他に違わぬ答えがなければならぬ。これもよく考えて次の答えを聞かせて貰おう」
数正はそこで、扇子をひらいて、ゆっくりと胸へ風を入れだした。
「分りません!」
暫くして勝千代が言った。
「兄上と同じ、間違うていた……父上は、誰がどのような大恩を下されても、やはりお館さまのお側は離れません……その事は分っているが、何故なのか分りません」
「よし、於勝の答えは出た。康長は?」
言われて兄はそっと額の汗を拭いて、又、天井を睨みだした。
「分っているのだが、言われぬのじゃ」
「ほう、それは不都合な口じゃの。そのような口は縫うてしまえ」
「それが……武士の道だからでござりましょう。次に大恩を与える人が現われても、以前の恩は消えませぬ。それゆえ……恩を返すか、それとも節を守ってゆくか……」
「康長」
「はいッ」
「では、大きな手柄を立てて以前の恩を返せば、わしは他所へ行ってもよいかの」
「さあ……?」

「行く父か行かぬ父か。それを先に考えてみたらよい」
「うーむ。やっぱり行く父上ではござりませぬ」
「よしよし、その通りじゃ。さ、そこでもう一段と考えよ。何故行かぬかの。この父は……」
康長は問い詰められて、
「参りました。分りませぬ。教えて下され」
「ハハ……、それで凡そその方たちの思案のほども分った。ばば様の仏の教えはまだまだ分っておらぬわい」
兄弟は又顔見合して、無邪気に小鬢を掻いていった。
「よいかの。わしはお館さまが、いつの頃からか、仏の道をまっすぐに進み出されたゆえ、たとえどのようにご無理を仰せられようと、又ひどい仕打ちに合おうと、決して離れはせぬのじゃぞ」
「仏の道……」
「そうじゃ。お館さまは、はじめは勇ましい武将でおわした。それが中頃から、考え深い武将になられ、近ごろでは仏の道を歩むお方になられたのじゃ。よいかな、仏の道は、人を斬ることではない。戦をすることではない。一人でも多く生かすこと……一人でも多く育てること。強いばかりが武将ではない。そこの道理をきわめられたゆえ、わしは喜んでお館さまについて行けるのじゃ」
弟の勝千代は、また悪戯らしく首を傾げて考えていたが、
「お父上、いったい、お父上は、いま、何をなさろうと言うのですか。何の必要があって、その

ようなことをきかせるのですか。勝千代にはそれが分らぬ」
彼は仏の道などよりも、それを言い出した父の方に遙かに興味を覚えているのだった。
「たわけめ。話をそらすな」
と、数正は苦笑した。

十

「こんどはお父上が言葉をそらされた」
勝千代はすかさず父に一矢むくいて、
「なあ兄上、父上が何んのためにさっきのような事を仰せられるか？　それが分れば思案の仕様も別にあろう」
兄の康長は用心ぶかく黙っていた。
彼には薄々父の苦悩が分っていた。
茶屋四郎次郎が、わざわざ立寄って話してゆく前に、実は、父のもとへ、家康から内々に話があった。
「――上方のことはどうやら筑前の思うままに決ったらしい。そこで、戦勝祝いの使者を立てねばならぬが、他の者ではまずい。おぬし行って呉れぬか」
その時、康長は父の供をして浜松城に赴き、次の間に控えていて二人の会話を聞いていたのだ。
「――それだけは、ご免なされて……」
と、父は答えた。

「――なぜだな？」
「――上方への使者は鬼門でござりまする。こんども参れば、必ず筑前は、大坂築城の手伝いを命じましょう。否とは言えないような手詰めにあって、引受けて参ればお館はじめ老臣がたに怨まれようし、断って筑前が機嫌を損じたのでは、使者の役目は立ちませぬ。この事だけはご免なされて……」
家康はその時、話をそらしてしばらく別の雑談をしていった。
そして、四半刻ほどして又話をもとへ戻し、
「――やはり使者は、数正、おぬしに行って貰わねばならぬぞ。他の者では心もとない」
と、言い出した。
問題は、なるべく手伝いの犠牲を少くして、しかも、秀吉につけ入る口実を与えないよう、巧みに機嫌を繋いで来いということらしかった。
「――それだけはご免なされて……」
と、又父は言った。
「――安土築城のおりの、酒井、大久保ご両氏の前例もあれば、築城を控えての使者は鬼門でござりまする」
家康は、ちょっと不機嫌な様子で黙っていたが、
「――では、おぬしと作左で、誰を遣わすか相談せよ。ただの者では勤まらぬぞ」
と、きびしく言った。
その筈である。秀吉の築城はおそらく天下へその威武を知らしめようとする目的からに違いな

く、したがって裕福と見たり、われと威を競う者と見たら、その者に賦課を重くするのは当然のことと言える。

と言って、いま徳川家もまた新領へ無数の城や砦を作らなければならない立場にあった。

父の数正は、家康の居間を出ると本多作左衛門をたずねて半刻あまり密談した。

この時には、康長は何を話合ったか聞けなかったが、城を出た時の父の顔いろは決して冴えたものではなかった。

(何かある……苦しいことが)

康長が、そう思って黙っていると、数正は苦笑したまま話しはじめた。

「では言いきかそうか。そちたちには分るか分らぬか知れぬが……」

「はい、承わりとう存じます」

「実はな、この父は羽柴筑前どののもとへ使者に参るやも知れぬ」

数正は、そこで言葉を切って、又暫く静かに扇をうごかした。

十一

「その……使者に赴かれるのが、何か……?」

弟の勝千代が眼を光らして父の顔をのぞきこんだ。

「されば、……この使者、ずっと昔にのう、駿府の今川家へ奥方さまと若君を受取りに参った折りの使者よりも、ずっと至難なことになろう」

「な……なぜでござりまする」

「それは、筑前どのが眼の上の瘤は、やがてご当家になろうからじゃ。わしが筑前どのであっても、ここでは同じことをするかも知れぬ。大きな城を作るゆえ、黄金も、材木も、石も人夫もどしどし出すようにとな」
兄弟は、再び小首をかしげて顔を見合った。
彼等にはまだなかば分って、なかばはわかっていなかった。
よく分っているのは、父が何か困惑しているらしいことだけだった。
「そこで、使者に参るおりは、その方たちも連れて行こうと思う。連れて参れば、或いは戻れぬやも知れぬ……が、それでよいかな」
「それは、お父上が、そうせよと仰せられれば……なあ勝千代」
「うん」
と、勝千代はあいまいに答えて、
「それが、仏の道に叶うこと……と、父上はお考えなさるのですね」
「そうじゃ！」
数正ははじめてわが意を得たという風にはっきりと頷いた。
「よいか。こんどの事はわしも仲々決心出来なかったのじゃ。しかし……お館は、この数正が馬の前鞍に乗せ、生命を賭けて駿府の今川家から救い出して参ったご嫡男、信康さまさえ、家中のため、天下のためには涙をのんで失われた……わしはそのお心のうちを想うて、ようやく決心したのだが……」
兄弟はいつか瞬きを忘れて父を見つめている。

父の口から信康の話が出る時には、いつもその眼がにじんで来る故でもあった。
「あの時の信長さまばかりではあるまい。人間は、日本一の城を築いて、その威を天下に示そうとするような時には、どうも鬼神になるものらしい。筑前どのも、こんどはそれをなさる。それだけに鬼神であっても愕かぬ覚悟と才覚がなければ、うかとは、こんどの使者には立てぬ」
「父上！」
勝千代の方が先に声をふるわして口を出した。
「行けばよいのでしょうご一緒に。そして万一の時には死ねばよいのでしょう」
「急くな勝千代」
と兄がたしなめた。
「死ぬか生きるか、そのようなことは父上のご思案にあることじゃ。われ等はどこ迄も、父上のお指図の通りにすればよい。黙ってお聞きなされ」
「ウム。それは聞いている。で、そのご使者には、いつ出発なされまするので」
数正は今日もその眼ににじんだ涙を拭いて微笑した。
「それを聞いて安堵した。才覚はわれ等にある。お館が、もう一度浜松へわれ等をお呼びになろう。そこでよくご相談してそれからじゃが、もう遠いことではあるまい。あと、三日か、五日か……」
「では、それ迄に、われ等も準備を、なあ勝千代」
「はいッ」
数正は、二人の子供を見やって、こんどはのびのびと笑っていった。

硬骨軟骨

一

茶屋四郎次郎は、浜松城で家康に会うと、そのままま た飄然(ひょうぜん)として発っていった。
おそらくその報告は詳細(しょうさい)をきわめたものであり、家康からも何か新しい指示があったのであろう。
しかし家康も何も語らず、四郎次郎も、どこへも立寄った様子はなかった。
すでに五月になって、柴田勝家の滅亡は、秀吉自身からも充分に宣伝めいた知らせがあったし、伊勢へ出陣していた刈谷(かりや)の水野惣兵衛忠重からも、湖北の攻防を詳細に絵図まで入れて報告して来ていたので、家康はその大略は知り得ていたに違いない。
知っていて風馬牛(ふうばぎゅう)の態度をとり得るのは、家康に何か期するところがあるからではあろうが、いつとはなしに聞えて来る秀吉の大坂築城の風聞(ふうぶん)はかなり旗本の諸将の神経を刺すものだった。
秀吉は、信長のようにきびしい憎悪をその敵にも見せなかった。その意味ではむしろ、家康の武田家の遺臣に対する態度を見習っているかのような様子さえ見受けられた。
勝家だけには仮借(かしゃく)ない態度で接しながら、その前後で行動に曖昧(あいまい)な節の見えた武将をそのまま翼下(よっか)に抱擁して、今では二十余ヵ国をその手中に納めてしまっている。
したがって彼の実力をもってすれば、優に三十ヵ国の人々を動員して大坂に築城し得るという

答えになる。

　と言って、その城が恐ろしいのではない。城が出来上ったあとの侵略を人々は憂えるのである。

「――天下を平定する」

　そうした口実で立ち向われては、東の徳川、北条も、北の上杉景勝も、中国の毛利輝元も、はや彼に刃向うことは出来まい。

　と言って、わずか一年にも満たない間に、織田家の遺領の殆んどすべてを手に入れてしまった秀吉に、このまま臣礼を執らせられるという事は、頑な三河武士にとってやりきれない事であった。

「――さてもさても素晴しい盗賊が出て来たものよのう」

「なに盗賊が!?」

「――そうじゃ、筑前がことよ。もともとあれは野武士と組んだ百姓の子、義理も道もわきまえまいが、それにしても、明智光秀を逆臣呼ばわりして、その舌も乾かぬうちに、ごっそり天下を盗み居る。いやはや呆れた者が現われた」

　そんな風評が赫々とした戦勝の知らせとともに、いつか浜松の城の内外へひろがって行った。

　家康はそれにも依然馬耳東風、七月にはまた駿河から甲斐へ旅すると言い出した。

「――いったいお館はどうなさるお気なのじゃ」

　五月初旬の午後であった。

　梅雨気味の雨のしとしと軒を叩く書院で、家康が、しきりに甲、駿の新しい砦の絵図を検べているところへ、本多作左衛門が、のっそりと入って来た。

家康はちらりとそれを見たまま黙って朱筆を放さない。

「殿！」と、こんどは作左は、お館と言わなかった。相変らずの紙子頭巾で、

「信雄さまは、殿お一人を力になされている。いったい何を考えて甲州へ行かれるのじゃ」

まるで叱っているような無作法な語気であった。

二

家康はしばらくしてゆっくりと筆をおき、硯に蓋をしてから絵図を畳んだ。

作左衛門の言うことは分っている。別段聞くまでもないといった調子が、その動作にはっきりとにじんでいる。

「作左」と、ようやく振返って、

「茶屋は、こなたに会うていったか」

作左衛門はそれを聞くとフフンと笑った。

「わしは、あの男とそれほど別懇な間柄ではござりませぬ」

「ほう、またこなたの癖で、虫が好かなくなったのか」

「はじめから、虫にも癇にも障らぬ男だあの男は。あの男の顔をみると、筑前が手柄を言い立て、わざわざ浜松まで褒めに来たと書いてある。筑前に毒気を吹きかけられて、すくんでしもうたと書いてある」

「作左、そのような話ならば夜分に致せ。わしはこれから子供たちに会うて来る」

作左衛門は舌打ちして首を振った。

「それよりお人払いを願いたいので」
「なに、人払いだと……？」
「されば、うかうかしてござるとこの城からも、筑前への内応者が出そうな気がする」
言いながら、作左は近侍から小姓を意地わるく見回して、
「わしの許へは別に調べが届いているが、いやはや、天下に腰抜け共は多いもので……ここに筑前が毒気にあたって、寝返りうった者どもの名を調べて来ました。人払いの上ご覧下され」
家康はチカリとみんなを見回して、それから眉をしかめて苦笑した。
「みな、作左がああ申す、座をはずせ」
そしてみんなが次の間へさがってゆくと、
「又苦情か爺は」
しかし、その時には作左衛門はもう以前の仏頂面ではなかった。
「殿！」と、きびしい声で呼びかけて、それからニヤリと笑っていった。
「筑前が勝利の原因、しかと腑に落ちさせられましたか」
「なに、筑前が勝利の原因？」
「されば……こんども野戦よりは城攻めに見るべきものがあるようで……しかし筑前が真の強さは位攻め……これが第一でござりました」
家康はちょっと不審な面持になったが、これもまたすぐに笑ってうなずいた。
「位攻めとは、人数で相手を圧倒して来た……という事か」
「さよう。が、これは異とするに足りませぬ。城を攻める時には、必ず城方より人数は多いも

の……ところが、筑前の位攻めには、もう一つ見落し出来ぬものがござりまする」
「ふーん。人数だけではなく、必ず相手の内に内応者と見られる者をつくって置くというのであろう」
家康に訊き返されると、作左衛門はこんどは溶けそうな笑顔になった。
「それにお気づきならば、何も言うことはござりませぬ。内応者がありそうじゃと疑い出しては攻められる方の戦力は半減。それで筑前は勝ちつづけた。このあたりに忘れてならぬお心掛けがござりましょうぞ」
家康は、じっと上眼で作左を見つめて、
「おかしな爺だ。それで、今日、わしに何を言いに来たのだ。すぐ筑前と一戦せよとでも言いたいのか」
こっちも作左以上の意地わるさで声をおとした。

三

作左は又フフンと笑った。その様子は、時に家康を揶揄するようなひびきを持つ。
「一戦せよと言うてする殿か」
「何じゃと!?」
家康は、再び眼に笑いを取戻して、
「うぬは、三方ケ原で戦うた、わしの性根を忘れたな」
「忘れた……」

作左はケロリとして頷いた。
「あの頃の殿は勇ましかった。が、もはや忘れた……忘れてよいのじゃ。が、殿……」
「何を言おうというのだ。持って廻るな」
「何時か一度は戦わねばならぬ。その時に位負けせぬ用意はあろうか。殿に……」
「わしに無かったら、そなたにあるというのか」
「これはしたり、四十二歳になられた殿に、この作左、なんでいちいち指図がなろうか。ご思案を伺いに罷(まか)り出ました。但(ただ)し、ご思案がなければ、これよりわが家へ立戻って、腹切って死にまする。面白くもない世に生きているのは飽々(あきあき)した……」
家康は呆れたように作左を見直した。
いつも突飛(とっぴ)なことを言い出すので、それに慣れている気であったが、腹を切るとは少々言葉がはげしすぎる。
「爺(じい)……」
「なんじゃ殿」
「こなた誰かと会って来たな?」
「会うたら悪いと言わっしゃるのか」
「喧嘩のような口を利くな。こなた、筑前がこんどの勝利は、わが家の興廃にかかわる大事と言いたいのじゃ」
「それを殿が手を拱(こまぬ)いている。拱いている間に、向うはさっさと事を運ぶ。わしは、あの猿に這(は)いつくばって仕えてゆく殿など見たくはない。それゆえ切腹したがよいかどうかと相談に来たま

でじゃ」
家康の眉がピクリと動いた。あまりの暴言に怒りかけたのがよく分る。
しかし、それはただ一度だけで、やがて家康は庭の深緑に視線をうつして呼吸を整えた。
秀吉に頭を下げて仕える自分を見たくはない――その言葉の裏にあるものは、自分への愛情と信頼だけなのだと思うと、叱って済むことではなかった。
「爺……」
「思案があるのか殿。殿は信長公の生前も、決して家臣ではなかった。三河の親類であった。その殿が、筑前の家来に落ちてゆくのは見たくない。これは決してこの爺一人の心ではなく、三河から生死を共にして来た、みんなの肚と思わっしゃるがよい」
「分っている。が、そなたの顔には別のことが書いてあるぞ」
「別のこと……」
「そうじゃ。わしに思案があると見抜いている。それを聞かずにいられぬほど、そなた、年取って性急になったのじゃ」
「ほう、これは面白い、そこまで分っていたら、その思案を伺いましょう」
「思案は出来たが、さて、その人選じゃ」
「ふーむ。するとやはり、人を選んで、筑前がもとへ祝いの使者を出すのじゃな」
「祝いの使者は武将同志のつきあいじゃ。そのあとに思案がある。急がずに聞け」
言われて作左衛門はまた意地わるそうな眼で、じっと家康を見つめだした。

四

こんどは家康が作左衛門を揶揄するような眼(まな)ざしになっていた。
この主従(しゅうじゅう)の間を貫く感情は決してただの主と家来ではなかった。時には得難い親友であり、時には激しく叩き合う競い相手であり、時にはあらわに憎み合うことすらあった。
「作左、わしはこんどはな、心の底から筑前の勝利を喜んでいる」
「フーン、くそ面白くもないことじゃ」
「そこでわしは、祝いの使者に托して何を贈ろうかと考えた……」
「うかうかしていると、所領の四ヵ国、そっくり贈らねばならぬことにもなりましょう」
そうした作左の言葉にこだわりなく家康は又言いつづける。
「馬鎧(うまよろい)の五百領も贈ろうか、それとも黄金の千枚も整えさせようか」
「何んじゃと!?」
「とつおいつ思案して、そのようなものではまだまだわが喜びをあらわすに足りないことに気がついた。そこでな、わしは、わしのいちばん珍重している、あの初花(はつはな)の茶壺(ちゃつぼ)をおもいきって贈ることに決心した」
「ほう……」と、作左は眼を丸くして、
「あの松平清兵衛が殿に呉れた、へんなしの茶壺をか!?」
そう言うとクスリと笑って、
「殿も、まん更、とぼけても在(お)わさぬようじゃ。そうか、あの茶壺をか……」

このもの入りの折に、黄金だの馬鎧だのと言ったら、思いきり罵るつもりの作左だったが、茶壺ひとつの贈物と聞くとニタりと笑ってうなずいた。
「あれを思いきったは、見上げたものじゃ。しかし殿」
「まだ苦情があるのか爺に」
「ある！　殿はまだ、あの茶壺に箔をつけて居りますまい」
「ハ、ハク……を？」
「そうじゃ。とかく名器というものには、箔の上にも箔をつけるもの。殿は、あれを清兵衛に貰った時に、嬉しい顔もせず、有難がった様子もなかった。それではならぬものじゃ。早速清兵衛を呼び出して、箔をつけさっしゃるがよい」
「なるほど……」
いつか家康も、身をのり出した。主従の表情が悪戯ッ子の眼まぜに代ってクスリと一つ笑いあった。
「名案があるか作左に」
「あるともあるとも。筑前は成り上りもの、喜ばすには勿体が要る。あの壺はなあ殿、清兵衛が堺へ出向いて、生命にかけてもと所望してようやく手に入れて来た天下の名器じゃ」
「それは……まことか爺？」
「知らぬ！」
作左は首をふった。
「そうならねば箔がつかぬ。あれを清兵衛が手に入れたと聞くと、宗易も友閑も……いや、堺中

の茶人どもが歯がみをして口惜しがった……」
「仲々くわしいの」
「知らぬ！　何しろ新しく天下人(てんかびと)になられた羽柴筑前(はしばちくぜん)に、茶人どもが献上しようと思うていた天下一品の名器じゃからな。それを清兵衛は殿に献じた。殿は狂喜して、あのケチンボが五千石の所領を褒美(ほうび)にと言い出した……」
　そこまで言うと、
「待て、とぼけ親爺め、よい加減に致せ」
　家康は渋い顔でわきを向いた。

五

　家康がわきを向くと作左衛門は図に乗ったかたちで喋舌りまくった。
「それがいかぬ。筑前などという狸(たぬき)は、いつでもふぐりの皮を八畳敷にひろげて、その中へすっぽりと相手を包みこむ代物(しろもの)じゃ。この位の箔をつけんでどうするものか。よいか殿……殿のケチは天下に聞えている。折角天下に聞えているものを、かかる時に巧みに使わぬ法はあるまい。とにかくこれはあの煤(すす)け茶壺の由来(ゆらい)なのじゃ……天下に聞えた殿が、喜びのあまり五千石やると言われたので、松平清兵衛はぶるっと身震いした」
「なに、身震いしたと……」
「する筈じゃ。あとで必ず惜しくなる。惜しくなったら難癖つけて取潰されるやも知れぬ。そこで清兵衛は五千石の儀は、思いも寄りませぬと固く辞退した」

「よくもよくも、思うままを吐す爺め」
「もう、そろそろ終りに近い。聞かっしゃるがよい。そこで、それなら何か望みはないかと問われ、改めて所望に任せ、子々孫々まで、蔵役、酒役そのほか一切の諸役を免じられたという名器……それゆえ浜松ではこれを五千石の壺という」
「分った。もうよせ！」
　家康はついに、手を振って、
「うぬも、わしにあの壺を贈らせる気でやって来たのだとよく分った。それゆえ、その口上の言い得る使者の名を申せ。うぬのことじゃ、もう、そ奴と会って内々相談をとげて来ている筈じゃ」
「なるほど……」
　と、作左衛門は乾いた唇をしめしながら、
「さすがは殿……急所を突くわい。だが、その相談ぶった相手の名は、殿のお口から、誰に致せと言われ、双方の思惑がぴたりと合わねば申上げられぬ。殿は、天下の名器五千石の壺を持たせて、誰を筑前がもとへおやりなさるご所存じゃ？」
「作左……」
「はい」
「これはの、余人には勤まらぬ」
「いかにも、余人には勤まらぬ」
「おぬしがもとへ、そのことで秘かに相談に参ったは、浜松在住の者ではあるまい」
「いかにも浜松在住の者ではない」

「言おう、それは岡崎から、その方のもとへこっそり出て来た……そうであろう」
「殿！」
「石川数正……数正めじゃ。その、余人には勤まらぬ使者は……」
「殿！」
と、もう一度作左衛門は叫ぶように言って、それからその場へ平伏した。
「数正は、わしに使せよと申して来たのじゃ。が、わしはその任ではない。その代り、数正ばかりを苦境に立たせはせぬ。数正が滅んだらわしも滅びる。数正が腹切ったらわしも切ろうと約束した。筑前は数正が戻って呉れば、必ず数正は、自分の方へ内応したと言いふらす。そして数正一人を斬らせるばかりでなく、数正と同意のものが家中にたくさん居ると言いふらし、内から崩す手を打つは知れてあること……」
「作左、案じるな。この家康は、筑前が謀計に乗ぜられて、その方や数正を斬るほど、やくたいもない者ではないわ」
「殿！」
「作左……」

六

作左衛門は不意にポロポロと涙をこぼし、その涙を太い指尖で、畳の上へごそり、ごそりとこすりつけた。
家康の人選と、彼の考えはぴたりと一つに合っていたのだ。

この上は何も言うことはない筈なのに、たった一つだけ、まだ言いたいのは老いの愚痴でもあろうか。

「殿もだんだんご大身になられて、家臣の数も多くなったが、筑前がもとへ使させる者はたった一人……この事をお忘れなさるな」

「分って居るわ」

と、家康も胸が詰っている様子でわきを向いた。

「こんどのことは三方ケ原以来の、わが家の大事じゃ」

「それを伺うたら、この作左に、もう一つ頼みがある。殿、おきき入れ下され」

「誰がための頼みじゃそれは」

「仏心深い数正とその母、そのばばに代って頼みたいのじゃ殿に」

「なに、数正に代ってじゃと……」

「はいッ。もはや一向宗の者どもも騒ぎを起す気遣いはない。三河での念仏道場の再興を、数正が心がけに免じてお許しなされ。きっと良い実を結びましょうぞ」

家康は、それには直ぐに答えなかった。答えなかったが、さして反対の様子もなく、

「作左、数正はおぬしの家へ来ているのか」

と、軽く訊いた。

「数正自身ではない」

「まさか老母がやって来たわけでもあるまいの」

作左は首を振った。

「数正が、そのような大事を肉親に告げるものか。使に来たのは、数正が家のおとな、渡辺金内じゃ」
「渡辺金内……」
「いや、さすがは数正、よい家来を持って居る。金内ばかりではない。佐野金右衛門、本田七兵衛、村越伝七、中島作右衛門、伴三右衛門、荒川惣左と、いずれも数正が分別の深さを見習うて、土呂以来水も洩さぬ心の結ぼれ……じゃが、その背後には、蓮如上人建立の本宗寺の信仰が、大きな背景になってござる」
「分っている」
と家康は又うなずいた。
「分っているゆえ渡辺金内にそう申せ。早々に数正を浜松へ寄こすよう。それからこれはわしの内意じゃと洩してやれ。念仏道場のこと、家康は心にとめ置くぞと」
「ありがたや！　さすがに殿……」
そう言うと、作左の顔が又ゆがんだ。こんどもポトリと涙は落ちたが、作左はそれを見なかった。見る代りにぐっと眼をつむって肩をふるわせ、それからのっそりと立上った。
「では、早急に、数正が浜松へ来るよう計らいまする。ご免なされませ」
作左はそのまま廊下へ出ると、ぐっと腰をのばすようにして呟いた。
「やれやれ、飛んだところで、数正めと性根比べになって来たわい」
その言葉の意味はおそらく誰にも分るまい。今分らぬだけではなく、永久に分らぬままに消えてゆく、歴史の裏の裏の秘事になろう。

（それでよいのだ……）
と、作左は思う。人間のほんとうの性根など神仏以外に誰が知ろう。
「いや、時にはその神仏も分るかどうかのう……」
作左はまっすぐに大玄関へ歩いてゆく……

七

作左は本丸の大玄関を出ると、東側に新しく築かれた、俗に作左衛門曲輪と呼ばれる侍屋敷のわが家へ急いだ。
何かほのぼのとした明るさと、やりきれない切なさが矛盾のままで心に渦を巻いている。
作左衛門自身は、とうに死んだ気で家康に仕えて来ていたのだが、こんどの数正の役目を想うと自分のことのように胸が痛んだ。
石川数正が使いに行くと、秀吉はおそらく、肩をたたき、抱かんばかりにして歓待するに違いない。引出物も、あの煤け茶壷の何倍かのものを呉れるであろうし、徳川家の大忠臣とおだてもするであろう。
その上、きっと、わしの天下になったら、家康に言うて何万石か何十万石か遣わそうなどと、人間の弱点と本能を衝きまくってくるに違いない。
ただそれだけならば、決して案ずることはなかった。こちらにがっしりとした土性骨が徹っている。
「――有難き仕合せ」

などと、語呂を合せて退出して来ればそれで済むのだ。
ところが秀吉は、それだけで、相手を手放す人物ではないこと、信長の死後の行動で、あまりにハッキリとしているのだ。
必ず数正は、われに内応していると、巧妙な宣伝を徳川家の家中にふり撒いてゆくに違いない。
お互いに諜者は放ち合っているので、時には思わぬ秘密が、相手方に洩れてゆくのは避けがたかった。
そうした時に、
「――あれは数正が知らせてくれたことでの」
そんなことを度々言いふらされたり、信長のように偽せの手紙など書かせてあちこちに見せられたりすると、はじめは信じなかった者も、やがては心を動揺させ、いつか警戒から憎悪の眼に変って、もとの家中に居耐えぬようになってゆくのが常であった。
そうなると、秀吉は又改めて誘いの水を向けて来る。やり切れずにその誘いに応ずると、結局最初から内応していたのと同じ結果になってゆくのだ。
秀吉はそうした術策の鬼才であった。
それをハッキリ見抜いているだけに、作左衛門は、家康に相談された時、誰を推薦しようかと、しきりに頭を悩ましていたのだった。
そこへ突然、数正の方から、自分が使いしよう、口添えして呉れと、家老の渡辺金内を使者に立て、手紙を持たせて来たのである。
それを見た時、作左は、ぐさりと胸へ短刀を突き立てられたような気がした。

これが数正ではなくて、余人であったら、作左はすぐに疑ってみたであろう。
「――こやつのもとまで、もう秀吉の手はのびていたのか……？」
と。もし、立身だけを考える者があったとしたら、いま秀吉のもとへ使いするのは、絶好の折と言えた。しかし、作左の知っている数正はそんな事の考えられる男ではなかった。
（これはあれの仏心から出た事らしいぞ……）
それにしても凄じい。恐らくこれは秀吉の鬼才に翻弄されて罠にわが身を千切られるに違いないのに……
作左はわが家の前に立つと、
「作左どののお帰り」
大声で自分でふれて、のっそりと玄関へ入っていった。

八

作左は、居間へとおると、
「於仙」と、わが子の仙千代を呼んで、
「数正が使いの者は何をしている？」
と、訊ねながら袴を脱ぎすてた。
これも遅く産れて、数正の子供同様、まだ前髪を落したばかりの嫡子であった。
「はい、手前と碁を打って居りました」
「碁は強いのか、渡辺金内は」

「はい、一度勝つと次には負け、負けると次には勝ちまする」
　作左は苦笑して、
「それは、その方が弱すぎるからじゃ。碁盤はそのまま座敷にあるか」
「はい。一刻に四五番勝負がつきますので、飽きてそのまま床の間に押しやってありますが……」
「どうだ途中で待ったというか金内は」
「はい。勝つときには一度も言わず、負ける時には待ったを二度三度致しまする」
「ふーん。性根の据っている男と見える。考えて待ったをしながら負けるのは苦しいものだ」
「では、考えて負けたのですか。それがしに」
「知れたことよ、その方などは、勝っても分らず負けても分らぬ。戦だったら大変なことになろうぞ。わが首を探さねばならなくなるわ……」
　そう言うと作左は血相の変っている仙千代を好もしそうに見やって、
「嘘じゃ。戦場と碁は違う。碁などのあまり強い奴に、戦の上手な者はない」
　そう言い直して部屋を出かかり、又、
「於仙――」と、わが子をふり返った。
「その方も、若しも忠義競べ、我慢競べを、この父が命じたら、どんなに苦しくともやるであろうな」
　仙千代はむっとした表情のまま、
「それがしは母上の子です」
　と、答えた。
「臍曲りめ。うぬは、この作左より母の方が辛棒強いと思うて居る。まあよい。母の子ならばあ

とへは退くまい」
　そのまま待たせてある質素な八畳間の座敷の前へ歩を運んで、
「エヘン！」と、一つ咳払いしてから襖をあけた。
「これはお戻りなされませ」
　石川数正の使者渡辺金内は、まだ三十がらみの、いかにも無表情な男であったが、丸い膝を揃え直して挨拶すると、
「お骨を折らせまする」
　と小さく言い添えた。
「骨など折らぬ」
「は？」
「骨などは、わざわざ折らぬと申したのだ」
　相手は作左の気持をはかりかねて、そっと首を傾けてゆく。碁で負ける手を考える時の顔がこれであろうと作左は思った。
「さて、あれこれ考えたが、数正はわるい事をわしに頼んだわ」
「何とおっしゃります。わるい事を」
「さよう。わしは始め、こなたに言われたとおり、こんどの使者、石川数正をお遣わし下されと言う気であった。ご前へ罷り出るまではな」
「なるほど……」
「ところが御前へ出てみると、何としても思うことが口に出ぬ。それで、数正を使者にやる儀

は、この作左が大反対じゃと言うてしもうた。困ったものよのう、わしの口も……」
　相手は一瞬、ぎくりとし、それから射ぬくような眼になり、じっと作左を見つめだした。

九

　作左は、改めて相手を見ようともしなかった。
　はだけた胸をパタパタと煽ぎながら、
「この作左には、そうした悪い虫があっての、この虫は、人が右をと言えば左を向く、左をと言えば右を向く。それゆえ、岡崎へ立戻ったら悪く思わぬようにとよく数正に申して呉れ」
「恐れながら……」
　と、金内は瞬きもせずに、
「こなた様がそう言われた時、お館さまは……お館さまは、何と仰せられましたので」
「おお、わしが、数正の名を出したら殿は膝を叩いてそちもそうか、わしも数正を遣わす気であったと先に申された」
「するとお館さまは、ご承知下されましたので」
「はやまるな」
　と、作左はまた無愛想にわきを向いた。
「殿がそう仰せられたゆえ、わしの虫が、ギクリと臍を曲げたのじゃ」
「な……なぜでござりましょう」
「なぜかわしに分るほどなら困りはせぬ。本多作左衛門とはそうした男じゃ。そこでわしは、わ

しが殿のお前にやって来たのは、数正を使いにやってはならぬと申しに出て来たのだと言うてしもうたわ」
「そんな……妙なことが……」
「それがあるのだ！　この作左には……殿が、数正では心もとないと言えば、いや、あれでなければならぬと言ったであろう。が、殿が、あれをと仰せられたゆえ、それはならぬと言うた」
「……………」
「分るであろう。これが作左の虫じゃ。殿はなぜならぬ、なぜ不賛成じゃと問いかけられた。そこでわしはこう答えた。徳川の家中でわしは第一番の硬骨者だが、数正はタコじゃと申した。家中の一番の軟骨で、方々へ吸い付こうとばかりしている。それゆえ猿めがもとへ使者にやるなど思いも寄らぬと言うてしもうた」
　渡辺金内の額に、ぐっと怒りの血管がうきあがった。しかし彼はそこで怒気を爆発はさせなかった。
「さようでございまするか。して、ご老人は、心の中でも、わが主人をさようなお方と思われてでござりましょうか」
「いや、さほどではない。これは虫の仕業ゆえなあ。虫はそのあとで、またこう言うたわ。数正を使者に遣わしてご覧じろ。必ず猿めに買収されて戻って来る。うっかりすると御家もともに売りかねまい。いや、さほどでなくとも、恐らく長丸さまを人質に差出そうなどと……とんだ弱音を吹いて、足許を見られて戻るゆえ、この作左は反対すると申して来た。虫の勢いでな」
　金内の膝の両手はいつか固く拳になって小さくぶるぶる震えだしている。

「とにかく……」

と作左はまた言葉をつづけた。

「わしは反対じゃが、殿は遣わすお気持らしい。それゆえ、わしのこなたに申した通りを戻って数正に告げてくれ。そして、自分で出て来て直接殿に頼まずとも、こんどはお召が参るであろうとな……まさか、殿と喧嘩もならぬ。わしはあのような軟骨ではと思うても、殿が命じるのならば、ただ毒付いているだけのことよ。今日はもう遅い。明早朝に発ってゆくがよい。そうそう、こなたは、碁を打つそうじゃの。その碁盤をとって呉れ。飯までに一局囲もう」

そう言うと、作左は無遠慮に、震えている相手へあごをしゃくった。

十

碁盤を取れと言われて、一瞬だったが、渡辺金内の表情にはサッとあやしい殺気が走った。自分の主人をタコと言われ、御家も売りかねないといわれては、金内とても同じ三河の血をひく武士だ。相手と刺違えても……と、思ったのかも知れない。

その様子をジロリと見やって作左はまたずけずけと言った。

「おぬしは、わしの伜（せがれ）に、わざわざ負けて呉れたそうじゃが、この年寄りに、そのような労り（いたわり）はいらぬぞ。早く碁盤を出さっしゃい」

金内は、次の瞬間、つと立って碁盤を運んだ。その動作に、まだ蒼白い（あおじろい）怒りとの闘いがまざまざと感じられる。

二人の間へぴったりと盤面をおくと、

「ご老人は白でござりまするか、黒でござりまするか」
容赦はせぬという尖りが口調に出てしまった。
「フン」と、作左はあざ笑った。どこまでも意地わるく相手を試すのが、今ではこの年寄りの趣味になってしまった感じだった。
「おぬしまず好きな方をとれ。わしの碁はの、相手によって白になったり黒になったりする碁ではない」
金内はまたぴくりと肩をうごかしたが、しかしそこで彼の肚は決ったらしい。
まだ訊くことが残っている。腹を立ててよい時ではない……
「では、黒を頂きまする」
「あたりまえのことよ。さ、おろしなされ石を」
それにしても何という念の入った毒舌であろうか。（よし勝ってやろう）と、金内は思った。
そして、きびしい音をたてて一目おくと、
「するとご老人は反対されましたが、お館さまはわれ等が主人でなければならぬと仰せられたのでござりまするな」
「そうだ。殿も仲々偏屈者じゃからの」
作左は無造作に石をおきながら、
「殿が承知で、数正が行きたいと言うのじゃ。仕方がなかろう」
「それだけを承われば、主人にも覚悟がござりましょう」
「その覚悟じゃが……並の覚悟ではならぬと申せ数正に」

「それは主人の肚にあること、仰せまでもござりますまい」
「なに、数正の肚にある。わしはわしの肚にいる虫のことを申したのじゃ。いったんこうと言い出したからには、わしは最後まで、数正の悪口を言いつづけるぞ。よいか、それ数正があやしいぞ。やはり数正は猿めに買収されて来居ったとな……」
金内はふと顔をあげて老人を見直した。
作左衛門の言葉はひどく無造作だったが、碁は性格むき出しの喧嘩碁になって来ている。
(これは何か、言外に、意味があるのではなかろうか……?)
「人間はな金内……」
「はいッ」
「臍曲りも徹底すれば天下の宝じゃ。わしは、数正が家中に居れなくなるまで、一歩も悪口の手はゆるめぬぞ。そして、数正が逃げ出したらむろんわしも、ぬくぬくと禄は喰まぬ。それでは臍競べにはならぬ。他人を陥れたことになる。他人を陥れては大きな恥じゃ」
そう言っていきなり右隅を切って来た作左の石のはげしさに、金内は思わず又息をのんだ。

十一

(事によると、この老人は、主人数正の心のうちをすっかり汲みとっているのではなかろうか)
そう思い出すと、金内はひどく心がみだれた。
「それでよいのか。それではその石は生きまいぞ」
「いいや、これで戦いましょう」

「待ったをせよ待ったを。そこで討死するようでは若い。それでは数正についてはゆけぬぞ」
金内はじろりと上目で作左衛門を見返して、
「では、仰せの通り待ったを致しまする」
「ハハハ……考えたな。考えろ考えろ。よく考えて、誤った石は打たぬものじゃ」
そこへ伜の仙千代が燭台をささげて入って来た。気がつくといつかあたりは夜になりかけている。
「膳の用意が出来ましたが」
「待て！」と、作左は仙千代をおさえて、
「いま、その方の仇を討っている。暫く待て」
そう言ってから思い出したように、
「のう金内」
「はい、何でござります る」
「念仏道場のこと、殿は心にとめおくと申されたぞ」
「は……？　念仏道場、でござりまするか」
「そう申せば分る。さ、次を打て」
やがて金内はそっと石をおいて頭を下げた。老人は口ほど碁は強くなかった。しかし、ここで老人に勝っては却って負けになりそうな気がして、金内はわざと四五目負けてやった。
「膳を持て」
老人はいかにもうれしそうに、
「どうじゃ。やはり参ったであろう」

「参りました」
膳が出ると、老人はまた、ひどくむっつりとした顔になって、何を考えているのか、ついに金内にははっきりそれがつかめなかった。
(口ほど憎んだり、反感を持ったりしてはいないのだが……?)
その夜金内は床に入って、もう一度、ゆっくり作左衛門の言葉を味わい直した。しかし、出て来る答は、
(怒らなくてよかった!)
ただそれだけで、何か老人に近より難い一線がカチンと心に残っていった。
(あるいは主人に、これで分るのかも知れない……)
六ツに床をはなれて出立の支度をしていると、すぐ又仙千代が膳をささげて入って来た。
「ご造作をかけました。何卒お父上さまに宜しゅう」
食事が済んでも作左衛門は姿を見せなかったので、金内は、そのまま玄関へ立っていってハッとなった。
作左衛門は玄関口から外へ出て、金内を見送ろうとして待っていたのだ。
「これは、わざわざ、恐縮千万でござりまする」
「世辞を言うな」
「は……?　世辞などでは……」
「もうよい。客を見送るは作左が家風、気をつけて参れ」
「はッ、ではご老体にもお躰を」

「言わなくとも大事にする。おれの躰じゃ」
その癖、金内が一礼して門を出てゆくと、その後姿に向って丁寧に頭を下げてゆく作左衛門であった。
恐らく、渡辺金内は、作左の心に叶った、立派な石川家の家老だったのに違いない。
金内は足を早めて、まだ濃い朝霧の中へ消えていった。

三河の使者

一

石川伯耆守数正が、家康から秀吉への贈物、初花の茶壺と太刀一腰、馬一頭をたずさえて、岡崎城を出発したのは五月二十一日だった。
石川家の家老、渡辺金内が、浜松から戻って来ると入れ違いに数正は浜松へ出ていって、家康にそれを命じられて来たのだが、金内から本多作左衛門の奇怪な言動を伝えられたとき、数正は眼を赤くして聞いていた。
彼には作左衛門の言葉の意味がひしひしと分っていったのだ……
だが、金内がすべてを語り終ったときには、それとは全く違った言葉で答えた。
「――そうか、作左めそう申したか。あやつ、われらが、この由緒ある城を預って居るのが嫉ましいのじゃ」

金内はびっくりして、
「――まさか、そのようなお方では……」
そう言いかけると数正は又ピシリと押えた。
「――買いかぶるなあの頑固者を。自分だけが忠義の士と思いあがって、その実嫉み心のはげしい男だ。こんども、わしが筑前どののもとへ参るのが、肚の中ではたまらぬのじゃ。見ていよ。戻って来ると、必ずわれらを悪しざまに罵ろう」
金内は黙ってしばらく数正を見つめていたが、やがて、かすかに笑いをうかべて、
「――いかにも、仰せの通りでござりまする」
と、合槌打った。
金内にも、数正がどうしてそのようなことを言うかが次第に分って来たからだった。
数正は浜松から家康の贈物を持って戻ると、岡崎へ一泊した。
家康と数正の間で、どのような話が交わされたのか？　留守中のことを、あれこれと指図して、
「では行って参るぞ」
中島作右衛門、村越伝七、荒川惣左衛門の三重臣に足軽十二人を引きつれて明るい表情で城を出た。嫡男の康長と二男の勝千代はそれを大手前まで見送ったが、別れる時にも馬上で屈托ない笑顔を作っていた。
しかし一行が矢矧の大橋へかかる頃から次第に眉間へ深い竪皺が寄って来た。
幾ら思案を重ねてみても、秀吉との対面は息苦しかった。

（相手の出方も見ぬうちに、心を労してみたとて無駄ではないか……）
何度か自分に言いきかせては見るものの、すぐ又重苦しい惑いが胸を圧して来る。
すでに秀吉は、
「――家康はこうして呉れよう」
と、すっかり肚を決めてしまっているのではなかろうか。
岐阜の信孝は、秀吉のために切腹させられている。
そのやり方の巧妙さは、数正にとって身の毛のよだつものであった。
勝家が滅んでゆくと、秀吉は、信孝の弟の信雄（のぶかつ）に命じて岐阜城を攻めさせた。信孝はその時家臣の殆（ほと）んどが逃亡していて、城を開くより他なかったのだが、まさかに秀吉が、信長の子の自分を殺せというとは思っていず、弟信雄の要求するままに、城をあけて、尾張知多（ちた）郡の内海へ赴いたのだ。
ところが、秀吉は仮借（かしゃく）なく、信雄に、兄の信孝を切腹させよと命じていったのだ。
恐らくそれは弟の信雄にとっても心外きわまることであったろう……

二

信雄と信孝は、同じ日の生れであった。
それで、嫡子の信忠と同腹の信雄は二男ということになっていたが、生れた時刻は信孝の方が早かった。
それに性格も信孝の方がはげしかったので、信雄は内実では弟に扱われた。

その弟からの勧告で、岐阜城を出るとき、信孝は使者に立った中川勘左衛門に、
「——他ならぬ中将が扱い、縋って居るぞと申して呉れ」
声をおとしてそう言ったと伝えられている。
恐らく、肉親の信雄が、秀吉にとりなして、小城ひとつ位は与えられるものと思っていたのに違いない。
ところが、知多郡の内海まで赴いたときに、又、中川勘左衛門が使者に立って、信雄の名前で切腹を命じて来たのだ。
その口上は、清洲会議の決定に従わず、かつ柴田勝家と事を企み、家中を騒がしたことは「兄——」として許しがたい。依って切腹を命ずるというのであった。
「——なに、中将が、わしの兄じゃと……!?」
はじめ信孝は嚇怒した。その筈だった。こうした結果になると分っていたら、決しておだやかに開城などする信孝の性格ではなかったのだ。
まだ城中には、太田新右衛門その他の近臣も残っていたし、かなわぬまでも籠城して、勝家同様、城と運命をともにしたに違いない。
それが素直に城を渡したのは、肉親の信雄が扱いに一縷の望みを托したからに違いなかった。
いや、それよりもまだ秀吉をどこかで信じていたからでもあろう……
ところが秀吉は、主筋にあたる信孝に、みずからは手を下さず、信雄の名で巧妙に切腹を迫って来たのだ。
信孝は千切れるように唇を嚙んで、

「――中将に告げよ。秀吉めに謀られて、わが手をわが身で断つのかと……」

しかしそれももはや愚痴であった。

信孝は野間の大御堂寺に入って憤死をとげた。

この大御堂は、源頼朝が、わが家臣に討たれて死んだ父義朝の菩提のために建立した悲しい由緒の伽藍であったが、そこに又一つ悲劇の墓が加わった。

信孝は白装束に着換えて切腹する時に、虚空を睨んで高らかに辞世の和歌を口ずさんだと、岡崎衆はささやきあっている。

　昔より主をうつみの星なれば
　報いを待てや羽柴筑前

或いはこの歌は、使した中川勘左衛門が、主君信雄の心を想い、死んでゆく信孝の悲憤を想って偽作したのかも知れない……と、数正は思っている。

いかに激怒の果とは言え、信孝の作にしてはあまりに生々しい。

この時、信孝は二十六歳。

それにしてもいったんこうと心に決めた相手は、断じて許さぬのが秀吉の性根であった。

この次は、信孝の言葉のごとく、必ず信雄であろうとは誰もが考えるところであったが、その信雄が幸か不幸かしきりに家康を頼っている。

しかも家康は、その信雄と、わざわざ岡崎で会見したり、数日共に鷹狩りしたりしているのだ。

(事によると、秀吉は、家康に異心なくば、信雄を討て……)

などと言うのではなかろうか。そう思うと、旅する数正の心は暗鬱そのものだった。

三

はじめ数正は、秀吉は長浜の城にいるものと思っていた。

自分で築き、自分で領民を馴らしきっている長浜城だった。それをあっさりと勝家に与えて、さっさと又取返したのだ。

取返すためには、これほど勝手のわかった好都合の城はない。それを知らずに、喜んで受取った勝家の人の好さ……が、それはもはや他家のことではなくて、そろそろ徳川家の問題になりつつあるのだ。

それだけに、秀吉が長浜から坂本の城に移っていると聞かされると、数正は、何となしに溜息した。

数正が、坂本の城に到着したのは二十八日だった。

秀吉はこれを丹羽長秀の新築した大広間に眼を細くして迎えた。

「おお、書面が先に着いていたので待ちかねていた。ずっとこれへ。ずっとこれへ」

泳ぐようにして手招いてから、

「そうじゃ。まず家康が口上を聞こうかの。それが先だった。いやはや、わしとしたことが、喜びすぎてのう」

まるきり子供のように小鬢（こびん）を掻いてみせたりする。

数正はしかし、その言葉の中の「家康――」と呼びすてにした一語をききもらしはしなかっ

た。以前にはどんなときにも「徳川殿！」であったのが。
「このたびは北陸の戦、あざやかなご勝利、お芽出度う存じまする」
「ウンウン」
「主君家康、早速お祝いに参上致すべきところ、近ごろ肥りすぎましてこの暑気に歩行困難、それがし代って参上致しましてござりまする」
「なに、家康は肥りすぎて、股ずれでもすると言われるのか」
「お察しのとおりでござりまする」
「ハハ……あまり甲駿の地をかけ回りすぎた故であろう。いや、年をとるとお互い躰が利かなくなるものじゃ。わしなども、賤ケ岳のおりには十三里の道を引返すのに二刻半（五時間）もかかってしもうた」
「恐れ入りました。われ等では十二刻もかかるところを二刻半とは……」
「ハハ……、それはそうと、三七どの（信孝）は哀れなことをしたものじゃの」
「御意の通りにござりまする」
「清洲どの（信雄）も思いきったことをなされたものじゃ。肉親に切腹申しつけるとは……よくよく腹に据えかねてのことではあろうが」
「仰せの通りでござりまする」
「家康もご大身になられた。新城普請の話でもあるかの」
「さようの所まではまだ手が……」
「そうか。回りかねるか。わしはこの秋、大坂へ城を築くぞ。こんど大手柄をしたので池田入道

父子は他所へやっての……そうそう、その方、六月二日、わしと共に京へ赴かぬか」
「京へ……で、ござりまするか？」
「これこれ、忘れてはならぬぞ。その日は故右府さまの一周忌じゃ。それを立派に大徳寺で済ましての、三十余国の者どもに命じて築城する。どうじゃ。京へわしの供して行って見ぬか」
数正は、相手の止ることのない能弁にふりまわされて、全身にびっしょり汗をうかべたまま、贈物の披露の折さえつかめなかった。

四

秀吉の話はとめどなく、右にとび左に飛んだ。
うかつに聞いていると、何を言おうとしているのか分らず、或いは分裂症にかかっているのではないかと怪しまれるほどであったが、よく味わうとそれはみな一つの威嚇であり宣伝であった。
中でも耳に痛く残っているのは、秀吉が、信孝を切腹させたということで、信雄をチラリと非難したことであった。
恐らく、秀吉は幼児の三法師だけを残して、信雄は失いたいのに違いない。
そうして了えば信長の人事は根こそぎ改革されて、新しく思いのまま秀吉の世界がひらけて来る。
「中国の毛利はもはや秀吉によしみを通じて参ったし、越後の上杉とも、佐々成政を通じて話はついた。四国、九州と、早く天下を治めてゆくのが、右府さまへの忠義じゃからの」

話のたびに徳川家のことだけは抜けている。
しきりに数正の気を引いているのがよく分った。
数正が、ようやく贈物の初花の茶壺のことを言い出したのは、かれこれ半刻以上、秀吉の能弁に押しまくられたあとであった。
「なに、初花の茶壺を……!?」
と、秀吉は眼を丸くした。
(考えたな……)
と、思ったのか、それを心から喜んでの愕きかは、数正に判断が出来なかった。
「そうか。それはそれは、あの名器のことはわしも茶人どもからよく聞いている。早速それは、わしから天下に披露せねばなるまい。宗易を呼んで、その名器のために茶会をやるかの……いや、これは、このあたりでやっては拙い。なに、わしは、この冬までには天下一の城を浪花の地に完成してみせてやる。そのおりに、天下一の城で天下中の者どもを集め、天下一の名器をめぐって茶会をやる……それがよかろう数正。どうじゃ」
数正はそっと秀吉の口から出て来る「天下」の数を数えながら、
「御意に叶うて、これ以上の喜びはござりませぬ」
と、頭を下げた。
「いや、家康は、わしの好みをよう察した。名器への執心は格別のもの、それを手離すはさぞ惜しかったことであろう」
「はい。それかどうか、その壺には五千石の壺という異名が流言でついてござりまする」

「なに、五千石の壺……」
「はい。松平清兵衛が、あれを殿に献上しましたおり、殿が返礼に五千石やろうと仰せられましたので」
数正がようやく話の糸口を見つけたつもりで話しだすと、
「数正……」
と、秀吉はかんたんにさえぎった。
「家康はこの壺の返礼に、五千石やろうと言ったのか」
「仰せの通り、殿の喜びようが、見えるようにござりまする」
「フーム。何ということじゃ。この名器に五千石とは……わしはのう、この間賤ケ岳で少しばかり敵の首をとった小姓どもに、みな五千石ずつつかわした。そうか、たった五千石か……」
数正はハッと言葉に詰った。
そう言われてみると、作左衛門が家康につけた知恵と、秀吉の、天下を四つ五つも並べたような喜びようとは、草笛と大法螺ほどの違いがある。
「数正……」
と、急に秀吉は、声をおとした。

五

数正がそっと顔をあげると、秀吉は身をのり出すようにして、
「家康はちと、財を惜しみすぎる癖があるの」

「はい。領民どもが見習うほどに粗衣粗食、とは申せ、あの地にはまだ近畿とは比較にならぬ荒地が多うござりますれば」
「そのようなことを訊いているのではない。主君のために生命を投出して、働きつづけて来たものの待遇がよくないと申して居るのだ」
「お言葉ながら、それで、みなみな満足致して居りまする」
「フーム」
と、秀吉はひどく真顔で、
「よし、ひとつわしが悪戯してやろうかの」
「いたずら……と、仰せられますると」
「国割りにして、築城の手伝いを頼むのだ。家康が領国はいま、三河、遠江、駿河、甲斐、それに信濃の一部もあれば五ヵ国じゃ。わしの領国を、山城、大和、河内、和泉、摂津、近江、若狭、越前、加賀、能登、越中、丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、備前、備中、美作、淡路と数えてゆくと、二十数国ある。つまり四分の一だけ家康が持ってあるゆえ、これに大坂築城の四分の一の入費を出せと申すのじゃ。どうじゃ数正、おもしろかろうが」
数正はゾーッと肌が総毛だった。
やはり秀吉は分裂症どころか、計算しぬいた位攻めで、じょじょに網を絞っているのだ。
それにしても、二十数ヵ国と新領を数えていって、大坂築城の四分の一の入費を、とは何という巧みな威嚇であり比喩であろうか。
数正が答えかねているのを見ると、秀吉はいよいよ面白そうに声をおとして、

「どうじゃ。そう言ってみたら、家康は、何と答える数正」
　数正は、じょじょに三河者の血の沸りだして来るのを感じた。どんな場合にも決して怒りは見せないこと。
（事と次第によっては、相手の腹中へとびこんで……）
　そう決心して来ているのが、危く揺れてゆくのを覚えた。
「さようなことを仰せられるより……」
　と、辛うじて数正は言った。
「いっそ、入費の半ばを貸して呉れと仰せられてはいかがなもので」
「なに、入費の半分を……そのように、家康は裕福なのか」
「いいえ、そう申せば、これはハッキリ一戦しようと肚を決めましょう」
「数正……」
「はいッ」
「その方も面白いことを申すな。一戦したのではそちらの入費がよけいにかかるわ」
「でも、五ヵ国、又々お手に入れられましたら、それで償いはつこうかと」
「ハハ……」
　と秀吉は笑い出した。
「戯れじゃ。戯れじゃ。そのように真顔になるな。家康はいま、東の固めに手も足もでぬであろう。家康に異心なきかぎり、この秀吉にも異心はない。そうじゃ、その天下の名器を一つ拝見するとしよう。話はたしか、その返礼に五千石と言うところからそれたのであったの」

その頃から、しだいに陽は傾き、湖面をわたる涼風が、部屋いっぱいに流れていた。

六

大書院に饗応の膳部がはこばれて来たのはそれから間もなくだった。
ずっと陣中暮しをして来たせいか、ここでは出て来る者は殆んど女たちであった。その女たちに取囲まれて、秀吉は、上機嫌に盃をあげ、それから数正にそれを渡して、自分はしばらく、数正の運んで来た壺に見入った。
(果してこれも名器などが分るのかどうか?)
そんな皮肉な眼を、数正は盃のかげで相手にそそいだ。
「数正……」
「はいッ」
「これを五千石の壺などと、たわけた綽名(あだな)は浜松へ立戻ったらすぐに取消さねばならぬぞ」
「さようでござりましょうか」
「それはこの名器への辱(はず)かしめじゃ。たとえば、家康がもとで五千石取っている者があっても、それを五千石の価値しかない武士とは言えまい」
「は……」
「家康とわしではものの価値を決める物指(ものさし)が違うて居る。これはの、わしならば喜んで十万石出す逸物(いちもつ)じゃ」
「十万石……」

「さよう」
と、鷹揚にうなずいて秀吉は茶壺をはなした。離すともう、見向こうともしないのだから、この言葉はそのままには受取りがたい。
「わしと家康では身代が違うとして、わしが四万石出すところを、家康が一万石出すというのならばまた理に叶うが、十万石を五千石、二十分の一では眼がないと言わねばならぬ。そう思わぬか」
「さような儀もあるかと……」
「そうであろう。そうであろう。たとえば、その方がわしの許にあるとする。わしはこれに喜んで十万石を与え、城一つ任せて大名に取立てよう。つまり十万石の価値は充分にあるこなたに、二十分の一の五千石では、あまりにひどいと思わぬか……いや、これは茶壺の話じゃ。それゆえ、五千石の壺ではならぬ。浜松へ立戻ったら、十万石の壺と名を変えるのじゃな」
楽しそうにそう言ってから、
「しかし待てよ。家康のもとでは、その話は他人が信用せぬぞ……やはり取消したがよいのう」
数正はこのころから次第に冷静さを取戻した。
五千石と十万石。
こうした好餌で誘いの水を向けられては、大抵の者が心を動かす筈であった。いや、始めは、誘いの手と分っていても、だんだんそれは頼るこころに変ってゆくのであろう。
（これで秀吉の手の内は一つ見た……）
数正はわざと渋い表情のまま、

「それなる壺は仕合せにござりまする」
と、小声で言った。
「渡るべき人の手に渡らねば、生涯、五千石の壺で終るものを、お見出しに預って」
「ハハ……そう思うたら、よいか、壺のためにその名は取消させよ」
「かしこまりました。きっと申伝えまする」
「数正」
「はい」
「家康は羨しいの。壺は手離しても、その方のようなよい家臣をたくさん持っている。この後ともに、充分忠義を励むがよいぞ。家康が家の柱になれよ」
秀吉は小児をさとす親のような口調でしみじみと言い出した。

七

石川数正は、このあたりでもはや彼の方から、攻勢に移ってよい頃あいと見てとった。
「ははッ……」
と、言って、両手をつかえ、それからわざと暫く顔をあげなかった。
「数正、どうしたのじゃ」
「いや、何も……」
「その方、涙ぐんでいる。泣いたな？　何を想い出したのじゃ、泣き上戸かその方は」
「お眼をけがして恐れ入りました。ただ、ふっとこなた様の、やさしいお言葉に誘われまして

「……」
「なに、わしの言葉に誘われて？」
「はい……もう訊ね下さりまするな」
「数正」
「はいッ」
「気にかかることを申すぞその方。わしは涙を見ると黙って居れぬ性分じゃ。訊こう、何かこの秀吉の言葉が気にさわったのか」
　数正は、ゆっくりと頭をあげて、こんどはまっすぐに秀吉を見上げた。
「重ねてのおん仰せ……何も申上げずば却ってご機嫌を損じましょうと存じ、申上げまする」
「おおそれがよい。聞こう」
「さきほど、こなた様は、家康は羨しいと仰せられました」
「いかにも言うたぞ。こなたのようなよい家臣を持ってなあ」
「その上、家康が家の柱になれと……そのお言葉でござりまする。そのお言葉を、われら主人の口から聞きとうござりました」
「ほう、すると、家康は、その方を疎んじて居るとでも申すのか」
「もっての他！」
　数正は、きびしく首を振って、
「信ずればこそ今日のお使いも命じまする。が、口先では、いつもきびしく叱りまする。その事を、ふと想い出しましたが数正の不覚、折角の興をそぎました。お許し下さりませ」

秀吉の眼は微妙に光った。
事によると、数正の術策を逆に読みとったのかも知れない。
「数正」
次に呼びかけた時には、半ば冷笑のきざしさえ感じられた。
「すると、その方は、あの気の長い家康が、もそっと、その方たちに優しく接すればよいと言うのか」
そう訊き返されると数正もいよいよ闘志がわいて来る。
「これは心外なことを仰せられまする」
「心外じゃと……」
「はい。人には人それぞれの持って生れた性癖がござりまする。それゆえ、主人家康の、優しい言葉など真平にござりまする」
「ほう、では、何故泣いたのじゃ」
「それを申上げましては、家康が家の柱になれと仰せられたお言葉にもとりまする。ただ、ふっと……人間にはそのように、ただふっと涙ぐむことが間々あるもの、その性癖が数正にもあったと思召されて、このままお許し下し置かれまするよう」
「ハハ……」
と、秀吉は笑った。
「そうか。それは悪かった。では訊くまい」
言いながら又盃を数正に渡すよう小姓に命じて、秀吉の眼は、いよいよ底深い光のままで細め

られた。

八

数正は秀吉の視線がわが身に向けられると、そのたびに皮膚が収縮する思いであった。
かつて、姉川の戦のおりなどには、
(この、ひょうけた顔の百姓が……)
そんな気持で、しげしげと見てやった顔であったが、今ではそれが、眩しいまでに鍛えぬかれて光っている。
一度眼を伏せるとうかつには見返せなかった。と言って、ここで、このまま引きさがっては、秀吉のあやつるままに踊らせられる人形になり終る。
「どうじゃのう数正」
盃に酒のみちたところで、秀吉はまたさりげなく言った。
「家康には、わしの心が読めていようかの」
「と、仰せられまするると、故右府さまのお志を継がれる天下統一のおこころでござりまするか」
「そうじゃ。読めているのう。その方までが、直ぐにそう答えるようでは」
「仰せの通り……」
と、数正は、はじめてまっ直ぐに秀吉を見返した。
「そのお志がわかりますればこそ、こなた様のもとへ早速それがしをつかわされたものと存じまする」

「数正……」

「はいッ」

「家臣はどうであろうかの、家康は分っているが、家臣たちには」

「その儀は……」

と、答えて、数正はわざと大仰に首をかしげた。

秀吉の方から、わざわざ彼の掛けた罠にかかって来たようでもあり、その反対でもあるようだった。

「家臣どもは、家康ほどには分るまいなあ」

「しかし……」

と、数正は小首をかしげたまま斬り返した。

「分らせねばならぬと存じまする。主人家康の第一の目標は、家門の繁昌もさることながら、応仁この方の戦乱を終息させたい……この一事にかかって居ると存じまするので」

「ふーむ。応仁以来の乱れに……となれば、わしの志と同じものじゃが……」

「そして故右府さまのご遺志でもござりましょう」

「家康はな」

「はいッ」

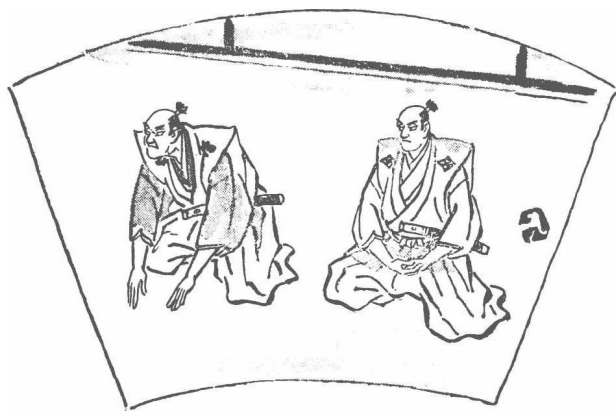
「家門の繁昌が第一で、そなたの申す、日本の統一は第二と、わしには思われるが……」

「もっての他！」

と、数正ははっきり言って微笑した。

すべては彼の思いのままに話が進展して来た証拠であった。
「主人家康にそのような考えがござりますれば、三介さま、柴田さまと手を取り合うて、清洲さま、北条さまを動かし、上杉を誘うてこなた様に挑みかかったに相違ござりませぬ。なれど……志は、こなた様と同じゆえ、こなた様が近畿を平定なさるまで、北条を押え、清洲を妄動させず、上杉に備えて、こなた様のお志を、陰に陽にお助け申上げました。この点恐らく、直接に戦場へ馳せ参じました武将以上、戦功第一かと心得まする」
秀吉は、じっと数正を見つめたまま、思わず大きく頷いた。
「やはり家康はうらやましい。よい家臣を持って居る……」

九

数正は、再びここぞと身をのり出すようにして、
「われ等も老臣の端（はし）くれにござりますれば、主人家康に進退は誤まらせとうはござりませぬ。それには第一に、主人家康よりも、はげしい気性の家臣たちを納得させること……これをつねに心掛けて居りまする」
「なるほど、家康の家臣の中には、荒武者どもが多いからの」
秀吉は秀吉で、ここらが数正に誘いの手をのべる潮時と見たらしい。
いかにもさりげない様子で、
「第一に酒井忠次、本多平八郎、それに本多作左、榊原小平太、大久保忠世……いや、揃うておるわ、頑固者がのう」

「仰せの通り、いずれも家康のためには、命を鴻毛の軽きに比する者どもばかりでござりまする」
「数正……」
「はいッ」
「それで、その方に、これ等の荒武者を押えきれる自信があるのかの」
（来たなッ！）
と、数正は直感した。すべては彼の予想のうちにあることだった。
「それは、その場の名聞如何によりまする」
「名聞……と、申すと？」
「故右府さまのご念願が、そのまま活かされて居るや否や……それが、正しくこなた様によって踏み行われている限り、家康はむろんのこと、家臣たちも決して異心を抱く筈はござりませぬ」
「ハハ……」
と、秀吉は、のどぼとけまで見せて笑いだした。
「では、その方に自信はないことになるではないか。わしの出方次第ということになあ」
こんどは数正が、盃をコトリと置いて笑い合した。
「まこと、仰せの通りにござりまする」
「いや、その方の話は分りよい。のう、みな、これほどハッキリとわしの前でものを言うたのは、数正だけじゃ。これ、佐吉、弥九郎、さ、数正にあやかるよう盃を貰うがよいぞ」
秀吉は小西行長と、石田三成にそう命じて、それからもう一度 快さそうに笑った。
数正は、二人がささげて来る盃をとって、ゆっくりとそれを呑みほして、それぞれ一人へ返し

ていった。
（この盃が、恐らくわが身を破滅に導く盃になるのでは……）
ふとそれを思ったが、そのことも充分考えぬいたあとであった。
ここでは秀吉のふところに、すすんで飛びこむより他にないのだ。たとえどのような警戒心を持ってのぞんでみても、
「――数正は、わしに内応している」
秀吉の口から、その囁きが洩れた時には数正の不運は決定的になってゆくのだ。
「いや、思いがけないおもてなしを受けまして、数正、生涯忘れることはござりませぬ」
「まだよい。もそっと過せ。女ども酌をして取らせ数正に」
「もう充分でござりまする。あまりご好意に甘えて、取乱しましては、帰ってから頑固者どもに叱られまする」
「よいよい、まだよい」
秀吉が自分で立ち上りかけたので、数正はまた坐り直した。掴みかけた獲物は断じて逃さぬ秀吉の眼がまたも膚を刺すようだった。

十

その夜、数正は、正体ないまでの酔を見せて宿舎に送られた。宿舎は同じ城内の二の丸の客間だったが、ふと真夜中に乾きを覚えて眼ざめて見ると、自分のそばに伽の女が膝をそろえてうたた寝していた。

数正は女をめざめさせまいとしてそっと手を伸し、水差しを取った。水差しは南蛮渡りの切子で、話には聞いていたが、手をふれるのは初めての品であった。
（もはや、堺の町もしっかりと押えている……）
そう思った時に、ふと、女は顔をあげ、それからあわてて、
「あ、お水でござりまするか」
白い指を、数正の黒く武骨な手首にからませて、コトコトと水を注いだ。
「これはこれは、こなた、ずっと付いていて呉れたのか」
「はい、うかとまどろみまして、ご免なさりませ」
「何の、こちらは、正体もなく酔い痴れて、いろいろ造作をかけたことであろう、許されよ」
そう言うと、女はちょっと困ったような笑みを浮べて、
「ここへ来られまするると、すぐにやすまれ、何のお世話も致しませぬ」
「忝けない。もうよい。引取って下され」
「はい……あのう、でも、それでは……」
「べつに用はない。これから朝までひと眠りじゃ。遠慮のう引取られよ」
そう言ってから数正は、自分の寝かされている寝具も女の衣裳も、華やいだ色彩の加賀絹なのに気がついた。
「お願いでござりまする」
と、女は羞恥と真剣さの入り混った、ふしぎな表情で、また数正の手にすがった。
「どうぞ、このままお側へおいて下さりませ」

「なに、お側へとは……」
「あのう、大切なお客様ゆえ、よくおもてなし申せと……」
数正はびっくりして相手を見直した。短檠の柔い光りに照し出された女の顔は、まだ十八か十九であろう。
（これは都の浮かれ女であろうか……）
その浮かれ女を雇うておいて夜の伽に出して来るとは……
「お願いでござりまする。お心に染まずば、朝までなりと」
数正はその言葉をききとがめて、
「もし気に入ったらどうするのじゃ」
「三河へお伴ない下さると仰せられたら、そのように致せと申付かってござりまする」
「ふーむ。それはご念の入った思召しじゃ。して、こなたはどこの生れぞ」
「はい、堺でござりまする」
「ずっと浮かれ女か」
「浮かれ女ではござりませぬ」
女はちょっと気負った声になって、
「徳川家の大黒柱、武勇のほまれ高い殿と承わり、わが身から願うて伽にまかり出ました」
数正は思わず小さく舌打ちした。
（まだ秀吉との対決は終っていなかったのだ……いったいこれは、何を試そうとしているのか？）
「そうか。そのような女子であったか……許してくれ。わしは浮かれ女もよう知らぬ、頑固一徹

な三河者での……」

言いながら、ごそりと布団の上へ起直った。

十一

(いったいこの女性をどう扱ったらよいのであろうか?)

とにかく背後に秀吉の眼が、いたずららしく光っているのがよく分る。

磊落に寵愛すると予期しているのか、固くなって拒むと思うているのか。それとも、ここで女性に手を出すような男では……と、意地わるくそれを試す気なのかも知れなかった。

いずれにしても、数正にはひどく勝手の違う相手であったが、これが秀吉の指図とあれば後へはひけないものを感じる。

「おう、これは、われ等が国では見かけぬほどの嫋女じゃ」

数正は、そう言うと年甲斐もなく頬の熱して来るのが忌々しかった。

「いったい年齢は幾つぞ。こなた」

「はい、十八でござりまする」

「十八……それは、われ等が息子の嫁女によい年じゃ。して名は何と言われる?」

「阿吟と申しまする」

「そうか。阿吟か……して、父御は武士か町人か」

「刀の鞘師でござりまする」

「ほう、職人の娘御か……」

そう言った時には、娘の上体はそっと数正の膝に傾きかかって、熱い手が数正の手首にそっとからんでいた。
「いや、見れば見るほど、よい器量じゃ。これは又とない贈物を頂いた。こなたをわしに下さると仰せられたは、むろん筑前さまであろうな」
「はい……」
「よしよし、必ず国許へ伴うて、伜が嫁女にして取らそう。いや、これはありがたい土産が出来た！」
「あのう、それでは……」
「と、いうて、今すぐには連れて行けぬ。三河者には三河者の仁義があっての」
　数正は、いつかタラタラと背筋へ汗を這わせていた。
（ここで、相手に口を利かせては一大事……）
　そう思うだけで、頭のシンがカーッと熱く燃えてくる。
「よいか。こなたから、このわしが、どのように喜んでいたかを、筑前さまによく伝えてくれ。本来ならば、このまま伴うて帰りたいところじゃが、それではご好意に甘えすぎる。いずれ城普請のおりには、それがし再びお使者に参ろう。そのおり、きっと筑前さまの御ために、何か一つ手柄して、それから大手を振って伜が許へ伴おう。分ったの、それまで、こなたを筑前さまのもとへ預けておく。よいか必ずその気で、心づよく相待つように……分ったの……」
　女ははじめ刺すような眼をして、じっと数正を見つめていたが、やがてじょじょにうなだれた。
（数正は、伜の嫁に下されたと思いこんでいる……）

そう分ると、相手はまだ押し返して来れるほど娼性を持ってはいないようだった。
「分ったらそれでよい。今夜はそなたの気ままに致せ。ここに居るもよし、退って休むもよし……いや、よい土産話が出来て、わしも楽しい」
女は、再び顔をあげた。が、その顔はもはや怨じる顔でも媚びる顔でもなくなっていた。
おそらく、どこかでホッとしているのであろう。
数正の唇辺にふと微笑が湧きあがった。
（いかがでござるな筑前どの……）

残　月

一

ここは、西国巡礼十四番の札所、近江国滋賀郡、近松寺の西北五丁、高岡の上に建った三井観音堂の境内だった。
すでに季節は冬に入って、落葉樹はみな裸であったが、その裸木の間をめずらしい温さの小春日が縫っている。
右はずっと近松寺が見透され、左には三井寺で聞えた園城寺の伽藍が一望に見おろせた。
しかし、いまこの岡にかかった主従――約、十五、六人の一行には、そうした眺望を楽しむさまはなく、従者たちはいずれも主人の身辺をひどく神経質に警戒しているようすであった。

「怪しい者の姿は見えまいな」
四十七、八の重臣らしい武士が小声でたずねると、
「巡礼の母子が一組、あれに休んで居るだけでござりまする」
と、若い従者が答えていった。
「そうか。坂の下から、左右の林、よく見張らせておいてくれるように」
「かしこまりました」
若い従者が前後に駆け去ると、
「お館さま、このあたりが宜しかろうと存じまするが」
あとに残ったのは、主人らしい、二十五、六の大名と三人の家臣だった。
いずれも旅姿というではなく、気軽なそぞろ歩きと見える身なりであったが、その眼は鋭くあたりに配られている。
四人はそのまま頷きあって路傍のひときわ日射しの明るい落葉の中の岩くれに腰をおろした。
「この南の狭い谷間道が逢坂山へ続いているのか」
と、主人が言った。
「はい、やがて秀吉めは、ここを通って来る筈でござりまする」
主人は蒼白なおもてをあげてその道筋へ小手をかざした。
その面輪は、若い日の信長によく似ている。いま、秀吉によって、伊賀、伊勢、尾張の三国を与えられ、桑名郡の長島城主となっている織田信雄と、その三家老、津川義冬、岡田重孝、浅井田宮丸の四人であった。

「秀吉の大坂城はもはや竣功したのであろうか」
「はい。まことに尊大な構えにて、以前の安土の城をしのぐ巨大さ。外観は五層なれど、内部は八層と、内報がございました」
　答えたのは四十五、六の津川義冬で、義冬はいま伊勢国松ヶ島の城を預けられている重臣だった。
「父の信長が、二十余年かかって仕遂げた仕事を、秀吉は一年でうまうまと奪うたの」
「仰せの通り、まことに思いも寄らぬ大奸物でござりました」
「予はそうとばかりは思わぬ。人生のことはみなこれ力じゃ。力において、予が劣っていた……」
「と、仰せられまするが、世間には、光秀を煽動して叛逆させたのも秀吉が謀略……などと言う噂さえ立って居りまする」
　信雄は軽く舌打ちして顔をそむけた。
　彼はいま、大坂から京を回って出て来る秀吉と会見するため、眼の下の三井寺まではるばると出向いて来て、秀吉を待つ間の、これはそぞろ歩きであった。

二

　曾つて父の信長は、富田の正徳寺で、美濃の蝮、斎藤道三を慴伏させたものであったが、その子の信雄に、果して、こんどの三井寺の会見で、父の一部将にすぎなかった秀吉と互角の交渉が出来るかどうか。
　むろんここでも、三河の使者以上の苦心と策略がつづけられた上での会見で、今日の三家老と

のそぞろ歩きは、言わば他聞をはばかるその策謀の最後の仕上げのためであった。
「ここで、はっきりとお館さまの腹中を伺いおきたい儀は……」
信雄が顔をそむけて青空を睨みだしたので、こんどは岡田重孝が口をはさんだ。
「第一に、徳川どのは、どのような確約をお館になされたかという儀にござりまする」
「その儀ならば案ずるな。家康どのは秀吉めに恩もなければ義理もない。それゆえ、充分にわれらを支援しようと密約が出来て居る」
「徳川どのがお味方下されば、縁につながる北条どのも、むろんお味方下さるのでござりましょうな」
信雄はぎろりと重孝を見返って、
「きくまでもないことじゃ」
と、叱るように言った。
「それよりも、大坂へ使して来た、その方たちの眼が、秀吉を見誤って居らぬかどうかと、それが気にかかってならぬのじゃ」
「その儀ならば……」
と、こんどは浅井田宮丸だった。
「われ等三人の眼の期せずして一致しました儀にござりますれば」
「と、申すと、秀吉は思いあがっては居るが、別に異心はないと言うのか」
「その通り……と、存じまする」
「異心のない秀吉ならば、なぜわがもの顔に安土の城へ出入りし、予に大坂まで出て参れなどと

無礼なことを申すのだ。大坂まで出て参れと申せば、予を家来と思うている証拠ではないか」
「恐れながら……」
信雄の声が高かったので、津川義冬は、そっとあたりを見回した。
「それはお館さまの考え過ぎではございますまいか。と、申すのは秀吉めは、どこまでも清洲会議の決定どおり、三法師さまを織田家の跡目と考えて居るゆえの、うかつな放言であったのではございますまいか」
「放言か、あれが、心にもないことを、うかつに言う秀吉か」
「はい。秀吉にはそのような軽々しいところがございまする。それゆえ、お館さまに、大坂表へ出て参れとは少しく筋目が違いませぬか……そう申したところ、あっさりとそれを認めて、この三井寺まで出て来て会見となったのでございまする」
「予にはそれが不服なのじゃ。三井寺まで出て参るほどならば、なぜ安土の城まで来ぬ。安土で三法師どの同席の上、話すべきことを話すが筋とは思わぬか」
信雄にきびしく言い張られて、岡田重孝と津川義冬は困ったように顔を見合せた。
「予はな、秀吉が、何のために突然会見を申出たか、その心事を怪しむのじゃ。何か企んでいるのではないかとなあ……大坂の築城が出来上れば、天下へ号令の仕度は出来た。仕度が出来れば邪魔になるのは、この信雄……信孝は亡く、三法師は頑是(がんぜ)ない幼童なのじゃ」
重孝と義冬はまた顔を見合せて、それから固くうなずき合った。

三

どうやら信雄は、新しく出来上った大坂城へ使して来た、この三老臣を疑っている様子に見える。

そのことは、津川義冬にとっても、岡田重孝にとっても心外であった。いや、浅井田宮丸とて同じであろう。

とにかく秀吉は、

「――信孝どの最期の模様も伺いたいし、出来上った新城もお目にかけたいゆえ、信雄どのに一度大坂城へやって来るよう、すすめられたい」

三老臣を通じ、書面で促して来たのであった。

信雄はこれを聞くと激怒した。父の信長が二十年かかってやりとげた仕事を、僅々一年の間に、簒奪し去った秀吉が、ついに自分に臣礼を執らせようとして迫って来たのだと考えると、眼のくらみそうな憤怒であった。

そこで、早速、三老臣を秀吉のもとに遣わし、その無礼を難詰させたのである。

そして、とにかく秀吉はその非を認め、三老臣の顔を立てて、三井寺まで出て来て信雄と会見することになったのだ。

したがって外交的には彼等は立派にその目的を達し、勝利をおさめた筈であったにもかかわらず、その三老臣が大坂に滞在しているうちから、妙な風評が、あちこちに立ちはじめていたものらしい。

「――信雄の三重役は、大坂へやって来て、秀吉の実力を見せつけられ、ついに変心した」
という、思いがけない噂なのである。
彼等はそれを長島城に帰りついてから始めて知った。
みなの自分たちを見る眼に、ふしぎな冷たさが宿っているばかりでなく、報告のために信雄の前へ伺候すると、信雄までが、妙によそよそしかった。
「――秀吉は、ひどくその方たちを歓待したそうじゃの」
そして、三井寺まで双方出向いて、今後のことを話合うことに取決めた旨を伝えると、
「――フン、予が何で近江までわざわざ討たれに出て行かねばならぬのじゃ」
始めはてんで聞き入れようとしなかった。
それを三人は三方から懇々と説いていったのだ。
いま秀吉に抗うことは、相手の待ち設けている罠に進んでかかることになる。とにかくここでは秀吉の言うがままに三井寺で会見して、まず異心のないことを示しておき、それから逆に当方の策略を施すことだと説きつけた。
その策略とは、北条氏と結んだ徳川家康に、油断ならぬ節がある……と、信雄の方から逆に秀吉に持ちかけて、公然と家康に接近してゆこうという皮肉なものであったが……
とにかくそれで一応信雄は納得し、ここまで出て来ているのであった。
それなのに、いま、この山中で、再び信雄は動揺しだしている。
しかもそれは明らかに、根もない三老臣裏切りの噂にあるように思えた。
義冬は重孝と顔を見合せると、

「思いきって申上げまする」
荘重な口調で癇立った感情と闘っているらしい信雄に向き直った。
「思いきって……思いきるとは何のことじゃ」
「お館さまは、われ等へのお疑いをまだお晴らしないと見受けまするゆえ、思いきって、われ等三人の覚悟をご披露致しまする」
それをきくと信雄は、ぎょっと全身を固くして身を起した。

四

「聞こう。申せ!」
と、信雄はせきこんだ。
「まさか、その方たちは、ここで予に、秀吉へ頭をさげよなどと申すのではなかろうな」
「恐れながら……」
義冬はもう相手の感情を無視した静けさで、
「いちどお上に疑われました三人、三井寺を死所にしようと申合せてござりまする」
「三井寺を死所とする!?　何のためじゃそれは」
「むろんお上のご安泰のためでござりまする」
「わからぬ。いよいよ分らぬそのような申条では」
「お上!　われ等三人、秀吉の三井寺到着を待って謀叛致そう……そう秘かに心に決めて居りまする」

「えっ、そ、それはまことかッ」
「相成るべくは、お上には申上げず、われ等の手で討果すつもりでございました。が、万一手違いあっては一大事ゆえ、思いきってお打明け申しまする」
「ふーむ。してその手段は？」
信雄が急き込んで身をのり出すと、こんどは岡田重孝があとを引取った。
「われ等は、秀吉が憎うござりまする。骨肉に徹(とお)るほど憎うござりまする。あの大奸物は、表面ではわれら三名の顔を立て、申出をそのまま聞入れた態(てい)にしておいて、裏面でわれ等をむごい罠に落しました。われ等が秀吉に内応したなどと、思いもよらぬ風評を立てさせたは、秀吉自身に相違ござりませぬ。それゆえ、その怨みを晴らさずば、われ等の武士道が立ちませぬ」
信雄はいつか大きく眸を見開き、しっかりと拳を握ってきいている。
「それで、秀吉が三井寺に到着し、お館さまと会見の済んだあとで、ひそかに秀吉まで申上げたい儀があると拝謁(はいえつ)を願い出まする。あの大奸物め、われ等が立場の困窮を知って居りますゆえ、笑うて許すに違いござりませぬ。むろん秀吉の側に人も居りましょうが、内々で重大な進言をと申せば、さして人数も多くはあるまいかと……そこで三人一緒に襲いかかり、二人はその場で斬られても一人は必ずあの細首を掻切り得る。その手はずはすでに充分勘案してござりまする」
信雄の眸が、いつか憂鬱な怒りのいろを失くして、ひそかに活気を帯びだした。
おそらく、彼が考えても、それは不可能なことではないと思われだしたからであろう。
「ふーむ」
と呻(うめ)いて、木の間越しに空を見上げ、それからその眸をすぐに三井寺の伽藍の重なる下界に移

した。
三老臣が秀吉に内応しているという噂は、信雄にとっても信じたくない噂であった。
その噂を、彼等はいま、秀吉自身がまき散らしたのだという……そうなれば、三人が憤激するのも無理はない。その憤激と憎悪が、秀吉の謀殺を決意させたものとすれば、その心理の経過にはいささかの無理も感じられなかった。
「そうか……」
しばらく考えていたのち、信雄はホッと吐息をもらして頷くと、
「そうした決意をしていたのか」
「お上！」
と、こんどは田宮丸が、眼を据えて呼びかけた。

五

「さようの儀にござりますれば、お上には、秀吉と会見なされた節、なるべく彼奴を警戒させぬよう、宜しゅうおあしらい置きの程、改めてお願い申しておきとう存じまする」
田宮丸にそう言われると信雄はまた固くうなずいた。
「分って居る。そうと決まれば、別に拒むこともない」
「それから次にもう一つ……もし万一、三人が三人とも討取られた節は……いやいや万々そのようなこともござりませぬが、秀吉めを討ち損じ、三人みな討たれた折のお覚悟をも、しっかりとお決めおき願いとう存じまする」

「おお……それは当然なこと」
　こんどは信雄が眼を据えた。
　たしかにそこまで考えおくべきだったし、更にもう一つの場合もあった。
　それは三人とも討たれたが秀吉の首は取ったという場合であった。
　もし秀吉が討たれたら、天下はどのような動きに移ってゆくであろうか。
　光秀が討たれた時とは比較にならぬ大きな混乱がやって来るに違いない……
「わるかった！」
　と、信雄は率直に頭をさげ、
「いや！」とあわてて首を振り直した。
「予は決してその方たちを疑ごうてなどはいなかったが、ただ、いまの言葉で、その方たちを案じさせて居ったとは分ったゆえ、それをまず詫びておくのだ」
「お分り下されましたか」
「分らずにどうするものか。よいか、予もその方たちと同じことは考えてみていたのだ。わざわざ近江まで出向く以上、何とぞして秀吉めを討ちたいものと……しかし、相手は名負ての曲者ゆえなあ」
「それ承って安堵しました」
　三人はホッとしたように顔見合せて、
「では、お考え下されませ。浅井どのが申されるような、万に一つの場合のお覚悟を」
「おう、それならば出来ている」

信雄は昂然と胸をそらして、
「万一その方たち三人とも秀吉が小姓どもに討取られた節は、予は直ちに近江を立ちのき、長島に馳せ戻って、徳川どのと語らい、合戦の旗挙げするまで……また、その方たちは落命しても、秀吉の首を討落してあった節は、そのまま安土へ入城し、三法師を擁して、横道者の秀吉に誅罰を加えた旨を天下に告げてゆく。さすれば、以前はみな父が家人のことゆえ、秀吉狐に化かされ居った一年間の悪夢から目覚め、それぞれ安土へやって来るに違いない。この場合も背後に徳川、北条とあることゆえ決して上杉、毛利に乗じられる隙は、見せぬぞ」
三人はそっと顔を見合せて、しばらく黙ってうなだれあった。
恐らく彼等の訊ねたいことと、信雄の答えとはひどく喰い違っていたのに違いない。
信雄も、すぐにそれに気付いた。
そこで更に語気を強めて、
「よいか、今の後の場合には、そちたちは、織田家再興の人柱ゆえ、それぞれ伜共に一国ずつあてごうて国持大名とする。また、秀吉を討てずに落命した場合も、この信雄の生命ある限り、必ず一城は与えて今より粗略な扱いはせぬ。分ったであろうな」
「はい……分りました」
二人がおし黙っているので、津川義冬はかすれた小声で呟くように答えた。

六

信雄は義冬の答えでホッとした様子だった。しかし、三人はそれなり妙に沈みこんだ。

「打合せておくことは、それだけか」
「はい」
「では、陽のかげらぬうちに寺へ戻ろう。寺へ戻ったら、充分相手に気づかれないよう戒心しようぞ」
「では……」
こんどは義冬が先に立ち上り、うやうやしく信雄に一礼した。そして信雄が先頭を歩きだすと、もう一度三人は顔を見合せて肩をおとした。
明らかに失望したものの表情であった。
バラバラッと前後から供の者が集って来て、そのまま一行は坂道を三井寺の方へくだりだした。
少し遅れて浅井田宮丸と肩を並べた岡田重孝は、
「困ったのう」と、小さく言った。
「器が違うようじゃ」
田宮丸は答える代りに、そっと頷いて視線をはるかな山脈にそらしていった。
――器が違うとは、秀吉と信雄の比較でもあり、信長と信雄のことともとれた。
信長は「日本平定――」という大旗に、「勤皇」の背骨をとおして強烈に闘いつづけた。
それだけに私怨で起ったと思われた光秀は、はじめから庶民の反感を買って、星ほどの光も発し得なかった。
秀吉はそれ等の事情を細かく計算しつくして「主君の報復」と「信長の遺業」という二本の旗をふりかざし、真昼の太陽を想わす強さで、その計画をおしすすめた。

そうした前二者にくらべて、信雄はいったいどれだけの覚悟と旗で立向おうというのか……三人が知りたかったのは、その一点だったのだ。
三人が秀吉を討ち損じた後で、誰を軍師とし、どのような理想でどのような手を打つか？　それを聞こうとしたのに、信雄の答えはあまりに卑小な感情的なものであった。
——それぞれ伜どもを国持大名にしてやろう……とは。
一行が三井寺にたどりつくと、間もなく秀吉も逢坂山を越えて近江へ入って来た。
これも供揃えはさしたることはなく、自慢の大小姓衆に前後を護らせ、自身は輿に乗って、総勢わずか三百余りだった。
これならば、万一大衝突になっても、信雄方が優勢かも知れない。信雄の方では六百近い侍を、人夫の中に混入して来ているのだ。
信雄は秀吉が宿所に入ると上機嫌で近侍をかえりみた。
信雄のために、本堂わきの客殿をあけておき、彼自身は後房へ通ったのだ。
「——案外、秀吉めも礼を尽すこころらしい」
その時も、岡田重孝は、聞えぬふりをしてわきを向いていた。
二人の対面は、その翌日、巳の上刻に本堂で行われた。
正面に金屏風を立てめぐらせ、双方から八人ずつの重臣が出席して、秀吉の方から先に出ていって、信雄の廻廊を渡って来るのを迎えた。
「これはこれは、中将さまにはようこそ」
まず丁重に頭を下げて、それから秀吉は、ワッハッハッハと眼を細めて笑った。

七

秀吉と信雄の会見は、あっけないほど簡単に済んでしまった。

と、言うのは秀吉が殆んど信雄に口を開かせず、信雄もまた、はじめから、自分たちの殺意を見抜かれまいとして、必要以上に寡黙であったせいもあろう。

秀吉はまず大口あいて笑ってみせてから、まるで叱るような口調で喋舌りつづけた。

「承われば、中将さまには、この秀吉に異心ありと思ぼされ、何彼とお疑いなされ居るとのこと、秀吉まことに心外でござりまする。申すもおこがましきことながら、中将さまご幼少のおりより、つねに故右府さまのご身辺にあり、いささか年齢は違うても、同じ躾で育った秀吉、異体なれど同心の間柄。何でそれがしが、中将さまに異心などを抱こうや。この秀吉の志すは、ただただ故右府さまのご悲願を遂げる事にござりまする。然るに秀吉をねたむ者あって、悪ざまのざん言、そのようなことは、秀吉には筒抜けでござりまする。また少しくお心ひろくわたらせられたら、秀吉こそ織田家の柱石とお分りの筈。お疑いなどはもっての他なれば、本日限りお笑い下され、そのままお忘れあるように……」

信雄はその時も、何度か蒼ざめ、何度か頬をこわばらせた。

何よりも気になるのは、秀吉の方へは万事が筒抜けだという一語であり、考えように依れば、昨日の山中の密談なども、知っているぞと言わぬばかりの口吻だった。

「いや、筑前がそう言われるのならば、嘘はありますまい。又、この信雄に、疑心などはない。それは誓うてよいことじゃ」

「さもありなん！」
と、秀吉は膝をたたいた。
「われ等は中将さまが三家老を大坂へお遣わしなされた折にも、よくよく誤解なきよう申した筈。いや、本日とて、お顔を拝せばそれで重畳。実はこのたびも、長島の城にあっては何彼とご不便かとも思われ、由緒ある末森城を改築して進ぜたいと存じ、或いは大坂表まで立越され、秀吉が築城をご覧に入れようかとも存じて居るところなれど、……そうそう、それはわざわざ中将さまには申上げますまい。中将さまは器量抜群の三家老をお持ちなさる。三家老に、この秀吉、あとで、とくと談合の上、ご不自由なきよう取計らいましょう」
信雄はそう言われた時に、ホッとしたようでもあり、ぐさりと白刃で胸をえぐられたようでもあった。
三家老は身を捨てても秀吉を刺そうと決意している。
それなのに、その三家老を、秀吉の方からわざわざ身辺に近づけようというのだ。
（これはいったい吉であろうか、凶であろうか）
秀吉の不運と思えばそうも思われ、或いは誰かに内報されて知っていて……と、思えばゾーッと寒気立って来るのである。
「では呉々も異心ないこと、お信じ下され中将さま」
秀吉は、信雄が立つとわざわざ廻廊の外まで自身で見送り、その後姿に何度も頭を下げてから、あたりへ聞える声で言った。
「何とよく似たものじゃ。若き日の右府さまに再びめぐり会うたような気がする。のう、あの、

えりあしの生えぎわまでが生写しじゃ」

信雄の三家老は、それを背に聞いてうつむき勝ちに遠ざかった。

八

信雄が本堂から引きあげると間もなく、秀吉のもとから石田佐吉が、三家老を呼びにやって来た。

「——われ等ご主君は、目下大坂表の用務多忙を極めて居ります。依って、明日早々に引きあげたい。ついては早速三家老と、懇談を遂げたいゆえ、お遣わし下さるように……」

と言う口上だった。

信雄は使者が戻ると、蒼白な顔をゆがめて義冬、重孝、田宮丸と順に見ていった。

「これはおかしなことになったぞ。先方からわざわざ迎えにやって来るとはのう」

浅井田宮丸が、これも固唾をのむ表情で答えていった。

「天のご意志は至妙なもの、疑念を起させては一大事ゆえ、早速伺候致すがよいかと心得まするが」

「重孝も、義冬も異存はないか」

「はッ、浅井どのの言わるる通りかと」

「よし、では早速出向いて、あのしれ者が、何を申すか聞くがよい」

「ではこれにて……」

三人にとっては、生還を期しがたいことだけに、この時も、何かもの足りない感じであった。

「恐れながら……」と、義冬が言った。
「万一の場合は、直ちにここを立退き得るよう……」
「分っている。手筈は済んだ」
その手筈は、むろん三家老も確めてあることとて、これ以上押し返すことも出来ず、そのまま三人は襟を正して秀吉の宿舎に向った。
途中では誰も何も言わなかった。
信長以来の恩義に応えて、秀吉を刺すより他にないのだと、それぞれ心に繰返しながら、誰もが妙に不安なのは、やはり信雄と信長の人物の差が、みんなに分っているからだった。
「明日帰られると申したの、筑前どのは」
「さよう、筑前どのが帰れるようならば、われ等はこの世にない筈じゃが」
「それにしても、温い冬じゃ今年は」
本堂のうしろへ廻って、ちらりと三人は眼を見合せ、それから秀吉の警備のうちへ入っていった。
秀吉はもはや三人を待ちかねていた。
料理はむろん精進だったが、南蛮ものらしい酒壺が三つ並んで膳の上にのっている。
左右に侍しているのは十二人の大小姓たちで、給仕には寺の小坊主らしいものが、四人出て来ていた。
「おお、やって来たか」
秀吉は三人の姿を見ると、

まいぞ」

「おこと等の扱いで、どうやら信雄も少しは大人になったようじゃ。だが、まだまだ油断はなる

相変らず溶けるような笑顔で手招くのだった。

「ささ、ずっとこれへすすめ」

津川義冬はびっくりして訊き返した。

「まだまだ油断がならぬと仰せられるは？」

「あの眼の底を見るがよい。まだ分ったり迷ったりのフララ眼じゃ。どうじゃ、おこと等に妙な無理は言わなんだか」

三人は思わず顔を見合せた。まるきり秀吉は、三人が信雄を裏切って、秀吉に随身してでもいるかのような口吻なのだ。

「何を顔を見合せて居る。ハハ……、信雄に、やはり何か無理を言われて来たな。わしを三人で刺して来いと言ったろう。ワッハッハッハ……」

九

秀吉のあけっぴろげな笑いが、古びた格天井にこだました時、三家老はもはや顔を見合せることすら出来なかった。

「――三人で秀吉を刺して来いと言ったろう」

その一言は、三人の胆をいちどに掴んで引き千切った。

（ことが洩れたのではない。そのような当推量で、他人の度胆を抜くのが秀吉の癖なのだ……）

三人が三人とも、よくそれは分っていながら、突嗟に言葉が返せなかったのだ。
「恐れ乍ら、今のお言葉は……」
しばらくして浅井田宮丸が口を開いた。
「われ等にはとんと合点のゆかぬお言葉でござりまするが、もう一度……」
「合点が行かねば訊き返すな」
秀吉は軽くいなした。
「わしはのう、おこと等三人がわしと心を協せて信雄を監視していて呉れるゆえ、安心しているのじゃ。が、この世に、人の値打ちの分らぬ者ほど厄介なものはない」
「恐れながら……」
こんどは津川義冬だった。秀吉の言葉をそのまま聞き捨てに出来なかったのだ。
「――わしと心を協せて、信雄を監視する……」
そんな言葉が万一信雄の耳に入ったら、それこそ士道は立たなくなると思ったらしい。
「ただいまのお言葉、われ等主君を監視するなど、もっての他と心得まするが」
「なに……」
秀吉はとぼけた表情で脇息から身をのり出した。
「ではおこと等は、この秀吉と違った考えをもっているとでも申すのか」
「われ等は、信雄が家臣にござりまする」
「戸惑うな義冬、それゆえ秀吉と同じ考えだと申すのじゃ。よいか、その方たちは故右府さまに、信雄を誤まらせぬよう呉々も内命されて居る筈じゃ。この秀吉とて直接信雄に付けられはせ

なんだが、同じ兄弟の一人を養子に貰いうけ、織田家とは親類となった身なれば、信雄が身代に別状ないよう、心を砕いてやるのがどこが悪い。あれは、そうした人の情義を解さず、うっかりすると、三人で、秀吉を刺せなどと、無思慮なことも言い出しかねぬ男ゆえ、共々に相談して、よく見まもってやらねばならぬと思わぬのか」

そう言うと秀吉はまた、大口あいて無邪気に笑った。

「いや、その心配が無いようならば、これに越したことはない。何れにせよ、ここまで信雄を連れ出して参ったのはおこと等が手柄、決して秀吉は忘れては居らぬぞ。さ、盃を取らそう」

こうなってはいよいよ三人の立場はおかしくなってゆく。ここまで信雄を連れ出したのは三人の手柄、秀吉は決してそれを忘れてはいないと言う……他人が聞けば、それは秀吉の褒美を狙って内応したとより聞えまい。

しかも、この場合も、反撥する適当な言葉は見出せなかった。三家老は、秀吉の言うとおり、信長以来、信雄につけられたものであり、秀吉もまた織田家のためを表看板にしているのだ。問題は信雄が秀吉に敵意を抱くか否かにかかっている。

秀吉の実力を認めて、おとなしく三ヵ国を治めていたら、或いは信雄は、平和な生涯を過せるかも知れないのだ。

「どうじゃ、まだ何か言い分があるか」

秀吉は酒を注がせながらニコニコと言った。

「言い分など、むろんござりませんが、しかし……」
と、浅井田宮丸が、また慎重に口を開いた。
「われ等が主君信雄を、監視などと仰せられると、いかにも何かお疑いなされているように響きまするので」
「よしよし、ではその言葉は使うまい」
秀吉はあっさりとうなずいて、自分の盃を田宮丸に渡すよう、眼顔で、小坊主に指図した。
そして、いかにも楽しげに、
「しかし、三人よりも、信雄がことは、この秀吉の方がよく知っているかも知れぬぞ。あまり近すぎると山容は見えぬものでな」

十

その頃から次第にあたりは暗くなり、名物の北風が湖上を渡って窓外に吹きつけだした。
その風音にまじる勤行（ごんぎょう）の声が、次第に三家老の心へ焦燥（しょうそう）を運んで来る。
決して秀吉に圧倒されたのではなかったが、自慢の荒小姓たちを従えて、他意なげに盃を重ねてゆく秀吉に、毛ほどの隙（すき）も見出せないのは事実であった。
双方の距離はせいぜい八九尺なのに、立ちあがって、秀吉の胸許へ躍り込むまでには、右手上座の福島市松か、左手上座の加藤虎之助かが、抜打ちに斬って出るのが早そうな気がするのだ。
この想いは義冬も田宮丸も重孝もおなじだったと見えて、時折り視線が出会うと、いずれからともなく、（まだまだ……）と瞬きあってしまっている。

と言って、酒に酔いしれて取乱す秀吉ではなく、もし、それがあるとすれば、荒小姓の油断の隙を待つより他になかった。

大ぜいの坊主たちが運んで来た灯りが、しだいに夜になずんで、話題はしばらく秀吉の賤ケ岳の自慢話になっていった。

「いやはや、誰も彼も、兵法を知って軍略を知らぬ者どもでの。勇者には出逢うたが、智者にはさっぱり出会わなんだ。敢て挙げれば、前田父子ぐらいのものであったろうか。その点、三七信孝も、哀れなお人であったよ」

秀吉はそう言うと、急に思い出したように、

「そうそう、その事で言わねばならぬことがあった。三介信孝には重臣の器量を見ぬく力がなく、これをわざわざ自分のふところから追って了うて、あの惨めな最期を招いた。大声では言えぬが、そのおなじ不明さが信雄にも無いとは言えぬでのう」

三家老は、再び話が自分たちの主君のことに及んで来たので、いずれも躰を固くしていった。

「義冬も、田宮丸も、重孝も、みな不服そうな顔になったが、信雄には、おこと達の知らぬ一面がある。どうじゃな、いっそ今日ここでわしが、三人を人質に出せと交渉して、おこと等を大坂へ伴って戻ろうかの」

「な……な……なんと仰せられまする。われ等三人人質に!?」

義冬が、サッと唇を白くして訊き返すと、

「どうじゃ、賭をしようか」

秀吉はいたずららしく細い首をさしのべて、

「わしはそうした方が、三人の身のためと思うが」
「その方が……われ等の身の為め……と仰せられまするか」
「まずのう、信雄にも、やはり三七どの同様、疑い深いところがある。三人がわしに内応していたなどと言い出さぬものでもないぞ」
秀吉は急に声をおとして、それからニコリと頬をくずした。

十一

「何と仰せられます!?　われらがこなた様に内応しているからと、われ等主君が、われらを疑うゆえ、このまま人質として大坂城へ伴ってやろうか……と仰せられるのでござりまするか」
急きこんで津川義冬が訊き返すと、
「その怖れはないと思うか」
秀吉はいぜん、あたりを憚るような小声で、
「もし、あらば、人質という名目でおこと等三人の生命、この秀吉が守ってやろうと申すのじゃ」
「これは心外千万なッ」
「何が心外なのじゃ。おことら三人、生きてあればこそ信雄が家も安泰と申すもの。それゆえ三人を助けてやろうかと申す……分らぬか」
「お断り申しまする」
「ほう、では、その怖れはないと見るのじゃな義冬は。重孝はどうじゃ？」
「津川どのと同じ……そのような主君ではござりませぬ」

「そうあらば芽出度い。そうありたいものじゃ。しかし……田宮丸はどうじゃ。おことも二人と同じ考えか」
「仰せまでもござりませぬ。われら三家老は主君と一心同体。いったいこなた様は、何をお考えなされてそのようなことを仰せられるのか、田宮丸、とんと合点が参りませぬ」
「なに合点が行かぬと……それはまことか田宮丸」
「はい。いっこう合点が参りませぬ」
「では申聞かそう」
秀吉は急にキラキラと眼を光らせて、
「信雄はのう、家康と手を組んで、この秀吉に敵対しようと思うて居る。その事は、家康の家中の者から予の許へ知らせて来ていると思うがよい」
「げッ！　それは……」
まことかといおうとして岡田重孝は、あわててぐっと口を結んだ。
家康の家中から密告する者があったとすれば、何も彼も筒抜けなのではあるまいか……と、ぎょっとしたのだ。
しかし、よく考えてみれば、これは秀吉の常套手段。誘いに乗って肚を見られてはと、あわてて自制したのである。
「よいか。そのような信雄ゆえ、わしはいっそ三人を人質にして、大坂表へ連行しようかと申したのじゃ。三人が信雄の膝元に居らずば、家康も信雄などは信用しまい。が、三人とも側近にあらば、うかと家康もその気になり、折角治りかけた世にまた大きな波風を立てるやも計られぬ

……と、これが第一の理由。第二は、さっきも申したとおり、万一その方たちの身に疑いをかけられて、危険が及んではとの心遣いじゃ。これでもとんと分らぬかの」
浅井田宮丸は、眼の前がまっ暗になってゆくのを覚えた。すでに秀吉は、あらゆる場合を読みつくして、殆んど狂いのない答を出して来ているのだ。
（これまで！）
と、田宮丸は思った。たとえ自分が秀吉のふところまで飛び込めずとも、次に立つ者の楯にはなろう。そう思って、
「はっ。分りました」
パッと弾みをつけて平伏し小刀の柄に手をかけた時、
「申上げます」
彼の背後で、野太い、初老の男の声であった。

十二

「おお平右衛門か、何としたぞ」
秀吉は浅井田宮丸の肩越しに声をかけた。いままさに飛びかかろうとしていた田宮丸にとっては、秀吉の視線が自分からそれただけでも絶好の機会であった。が……なぜかびりりと全身にひるみが伝わり、思わず彼もまたうしろを振返ってしまったのだ。
そして、そこに坐っているのが三家老もよく知っている秀吉のお使番、富田平右衛門だと知ると、

（富田が何のために……）
その不審と興味とで、更に立てなくなってしまった。
「恐れながら、耳をおすまし下さりませ。御大将の申される通りに相成ってござりまする」
「なに、耳を澄ませと……よし、みな、ちょっと静かにして見よ。おお、聞える聞える、馬のいななきと人の足音じゃ」
秀吉はみんなに手をふりながら、特徴のある開いた耳に片手をあててニコッと笑った。
そう言えばたしかに人馬の動きが、さして遠くない位置でしきりに夜気をみだしている。三家老は思わず唇をかんで顔を見合った。
てっきり秀吉に計られたと思ったのだ。
信雄ともどもこの地まで連れ出し、他意なげに見せかけておきながら、夜に入って寺を包囲されたのでは、もはや手の施しようはなかった。
「なるほど、わしの思うとおりだったの」
秀吉は三家老の顔から見る間に血の気のひいて行くのを眼を細めて見やりながら、そっと立って縁へ出ていった。
「おお、見えるぞ見えるぞ。急いで松明が、東へ向けて動いているわ。平右衛門」
「はいッ」
「その方たしかに見届けて来たのじゃな」
「仰せの通り、間違いござりませぬ」
「そうか。また滝川三郎兵衛でもここの模様を立聞いて聞かせたのであろう。これ、義冬も重孝

も来てみるがよい」
「来て……見よ、と仰せられまするか」
「そうじゃ、あれあのように、そそくさと東へ向けて引揚げてゆく」
「誰が……引揚げているのでござりまする」
津川義冬はまっ先に立ちあがった。
「誰がとはおことらも又甘いものじゃの。むろんおことらが主人の信雄じゃ」
「げッ！」
田宮丸も重孝もはじかれたように立上って縁へ出た。
若しこの時、刺す気があったら秀吉の身辺は隙だらけであった。しかし、人馬の音が、寄せて来た秀吉の伏勢ではなくて、織田信雄の、三人には無断で引揚げてゆくそれと知った愕きで、そこまで思考は働きかねた。
「あ、たしかに殿……」
「何のために、今ごろ、われ等に話もなく」
義冬と、田宮丸のささやき合うのを聞くと、秀吉は声をあげて笑った。
「どうじゃな。わしの言葉の意味が、こんどはハッキリしたであろう。信雄は、おことら三人に、寝首をかかれては一大事と、俄かにこの寺を遁げ出し居ったわ」
「まさか、さようなことが!?」
「と言うても、事実は致し方があるまい。困ったお人じゃ。疑心が多くての。おことら三人、みな秀吉に寝返ったと思うて居る……」

十三

信雄（のぶかつ）の三家老は声もなく座に戻った。
このような時に信雄が三井寺を引揚げて行こうなどとは思いも寄らず、夢に夢みるような茫然（ぼうぜん）さであった。
秀吉は又以前の脇息のそばに戻って腹の底から笑いだした。
「平右衛門」
「はいッ」
「わしは天眼通じゃの。いまいったい何刻じゃ」
「五ツ半（九時）でござりまする」
「では時刻までぴったりと当っていたのう」
「ただただ恐れ入ってござりまする」
「よしよし、自分の影におびえて逃げるお人など、思いのままにさせておくがよい。が、さて、思いのままにさせては居られぬ問題が一つあとに残った」
「さようでござりましょうか」
「そうとも、これ、義冬、重孝、田宮丸」
三人は声もなく秀吉と視線を合わした。
「よいか、これは信雄の疑心がなみなみならぬ上に、それを知っていて利用しようとする佞臣（ねいしん）があるからじゃぞ」

秀吉は、その疑心を利用している最大の人物が自分であることなど、ケロリと忘れて鹿爪らしく言った。

「名は言うてもよいが、……申さずとも、おことらには分っていよう。おことら三人を失脚させて、自分で信雄が家を引っ掻き廻そうと考えている小人ばらじゃ。その小人ばらが、おことらは皆秀吉に寝返ったと告げている。それゆえ、うかと長島城へ戻ってゆくのは危険千万とこの秀吉が申したのじゃ。どうじゃ、これでわれ等が大坂城へ、人質として連行しようかと申したわけは相分ろうが」

三人はもう一度顔を見合わせたが、誰も何も言い得なかった。

薄気味わるいと言ってこれほど妙な掴みどころのない気味わるさは味わったことが無かった。

（いったい、これは誰が書いた筋書であろうか……？）

秀吉の予言が的中していたという感嘆よりも、みながみな、抵抗出来ない魔物の手にあやつられ、思いのままに躍らせられているような気がしてならなかった。

「どうしたのじゃ。信雄があああすることなど始めから分っていたのじゃ。さ、盃を重ねて、あとの事を相談しようぞ。わしは始めからおことら三人を相手にしているのじゃ。おことらは故右府さまのお眼がねに叶うた者どもじゃからのう」

又、お坊主が三人の前へ盃を運ぶと、三人は魂を失った人のように、ぼんやりとそれを取って酒を注がせた。

「さ、ぐっと乾すがよい。わしも乾そう」

秀吉は楽しげに舌を鳴らして一口舐めて、

「平右衛門」
と、またお使番を呼んだ。
「その方ご苦労じゃが、もう一度、寺内をよく見回ってみて呉れぬか。まさか、その心配はないと思うが、信雄が、この三人を刺せなどと、怪しい者でも秘ませ残してあるとわるいからの」
到頭形勢はみるも無残に逆転した。刺しに来た三人が、秀吉のために、刺されぬように庇護されることになろうとは……

防風林

一

陽ざしはめっきり春めいて、浜松城の家康の居間からは、曳馬野以来の老梅が、まっ白な花をつけて光って見えた。家康は時々その方を見やりながら、さっきからもう二刻あまりも、本多作左衛門と石川数正の三人だけで話しこんでいる。
珍らしいことだった。夜の世間話ならばとにかく、近臣を遠ざけた重要な密談にこのように長時間を要することは、殆んどないと言ってよかった。それだけに二間隔てた宿直の間では、大久保平助、井伊万千代、鳥居松丸、永井伝八郎などの小姓組の面々がしきりにそれをいぶかった。
「――これは容易ならぬ話らしいぞ」
「――言わでものこと。わざわざ岡崎から石川伯耆どのを呼んでのご相談。事によると合戦かも

知れぬな」
「――合戦というたら相手は誰じゃ」
「――知れているではないか。羽柴筑前じゃ」
「――ふーむ。するといよいよ面白くなってゆくのう」
「――いや、しかし、それほど重大なことならば、三人だけということはあるまい。吉田の酒井左衛門尉どのも、本多忠勝どのも参り合わせておらぬではないか」
「――では、何だと思うのじゃおぬしは？」
「――名うての臍曲りが顔を合わせて、何か意見の喰い違いが出来ているのではないかのう。時時作左どのが、とほうもない咳払いをする。あんな時にはご老体大抵怒っている時だからの」
　そう言っている時に、またその、尋常ならぬ咳払いが聞えて来たので、みんなは思わず顔を見合った。
「誰ぞある、ちょっと参れ」
　家康の呼声がそれに続いた。鳥居松丸は、あわてて立っていって、
「お呼びでござりまするか」
「おう」と、家康はいつになく頬を赤くした真剣な表情で、
「話が長びくからの、お台所へ湯づけの用意をしておくよう申せ。よいか。用意しておけばそれでよい。運ぶ時には改めて申付ける。退って居れ」
　松丸の方をちらりと見ただけで、すぐ又作左衛門に向き直った。
「すると爺は、三家老は斬らせたがよいと申すのだな」

「やむを得ませぬ」
と、作左は脇を向いたまま答えた。
「三家老はよくよく悪い星の下に生れたもので。筑前め、そうすれば信雄が斬るにきまっていると、ちゃんと胸算用した上でやったことじゃ」
「ふーむ。数正はどう思うぞ」
石川伯耆守数正は、慎重に二三度首を傾げてから、
「それがしも、それより他には……」
「手段がないと言うのか」
「他人ごとならず、胸は痛みまするが」
家康はもう一度「ふーむ」とうなって吐息(といき)した。実は、この二月（天正十二年）に入ってから信雄から又密使がやって来たのだ。
それによると、信雄の老臣、岡田長門守重孝、津川玄蕃允(げんばのじょう)義冬、浅井田宮丸長時の三名は、秀吉に内応しているゆえ斬り捨てたい。が斬り捨てると秀吉は、それを口実にして攻撃しかけて来るに違いないゆえ、家康もそのつもりで開戦の準備を完了しておいて貰いたいというのであった。

二

いずれは信雄から、そうした申出はあるものと、家康はじめ、みな予期はしていたのだが、家康が信雄と、特別親しく往来していた目的はべつにあった。

それは、秀吉が、家康の力をどの程度に考えているのか？　それを、信雄に当る風の強さで計ろうというのであった。

信雄の背後に家康ありと知っても、尚お且つ、平然と信雄に戦を仕掛けて来るのかどうか……？

はじめは、作左も数正も、

「――それほど無謀なことはよもすまい」

心の中でそう思っていたのだが、それはどうやらこっちの独り合点で、秀吉という男は、彼等の想像の器の中に納まりきるようなそんなありふれた人物ではなかった。

信雄の三家老を何の苦もなく罠にかけ、信雄に向けて、絶対服従か開戦かのギリギリの政策で臨んで来て、背後の家康などは歯牙にもかけていないようだった。

そうなると家康としても黙ってはいられなかった。むろん意地や面目の問題ではない。

秀吉はまず信雄を処分しておいて、次には家康に立向って来るに違いないのだ。

「――絶対服従か開戦か？」

それは、現在の信雄の前に突きつけられた白刃であると同時に、明日の家康が身に引受けて答えなければならない問題と、ハッキリ答えが出て来てしまったのだ。

したがって、「絶対服従」してゆく気ならば事は簡単だったが、さもなければ、ここが決断のしどころになってくる。信雄が片付けられた後、単独で起つよりは、信雄を風よけとして、力を協わせて起つ方がどれだけ有利か分らなかった。

第一に、信雄と共に開戦すれば大義名分が立ってゆく。家康は信長の家臣や部将ではなくて、立派に親類であり同盟者であったのだ。それだけに、信長との友誼によって信雄を味方し、逆臣

秀吉を誅罰するとなれば、充分に名分の上から相手を攻撃出来る立場になる。
「――思いあがって、主家の遺児を次々に狙ってゆく逆臣め」
もはやその肚は決っていたのだが、さて開戦の時期は……となると、仲々容易に運びかねた。
そこへ信雄から、秀吉に内応している三家老を斬って開戦のきっかけにしたいという密使だったのだ……
三家老が事実秀吉に内応しているのならば、これも又問題はなかった。すぐに使者に、了承の旨を答えて帰せばそれでよかったのだ……
ところが、その三家老を除くことが、すでに秀吉の巧妙な策謀に乗じられているのだと、ここではハッキリ分っているので、今日の相談になってしまった。
恐らく三家老を斬ってしまったら、信雄自身の力は半減するに違いない。そこでまず信雄に、それは誤解であることを悟らせる手段があるかないかが問題となった。
「駄目じゃそれは……」
作左が、まっ先に首をふった。
「疑い深い人間というものは、思うままにならねばならぬほど、いよいよ人を疑ごうてゆくものじゃ。こちらから妙な意見をすると、やがてこんどは、殿も秀吉と一つ穴のむじななどと疑いだす……」
それゆえ、三家老のことは知らぬふりして、信雄を防風林とし、即座に開戦せよというのが作左の主張であった。

三

作左が即座に開戦を主張するのも、家康がそれに敢て反対しないのも、甲信のことが一応片付いて、後顧の憂いがなくなったからであったが、しかし、開戦はよいとして、出来得れば三家老を助け、共に協力してゆく方が、感情の上からも計算の上からも得策なので、家康も数正もそれを惜しんだ。
「三井寺で、三人は秀吉が大坂へ誘うたのをわざわざ断って戻ったというではないか」
「その通りでござりまする。ところが、信雄さまは、それを一層深く考えすごしてしもうたようで……」
「つまり、信雄を欺し討ちにでもする気で、わざわざ側へ戻って来たと思うたわけか」
「それがしの得た情報では、滝川三郎兵衛が、津川義冬の松ケ島城が欲しくてならず、しきりに三家老に異心あるよう、信雄さまに讒言しているとか」
「困ったものよのう。そうなるものじゃ、紊れる時には」
家康と数正の会話が、又三家老のことに及んでゆくと、
「殿！」と、作左はさえぎった。
「女子のくり言のような……お止めなされ。三家老はもはや止むないものとあきらめて、さて、筑前に一泡ふかす手だてでござりまする。その手だてに考え落ちはござりませぬか」
「落ちはあるまい。のう数正」
数正は改めて眼を閉じて、額に深い立皺を刻んだまま、

「やはり紀州の根来雑賀の衆の一揆に、全力をそそがねばなりますまい」
「それはわしもよく考えている」
「この一揆が成功し、堺から大坂へ二万近い衆徒がなだれ込んだら、新城を築いたばかりの秀吉、いちばんそれに煩わされましょうでなあ」
家康は大きく頷いて、
「あの衆徒を動かす者は保田の花王院と、寒川右太夫行兼じゃ。それにわれ等両人の書面が届けば必ず成就するものと睨んでいる」
「殿！」
数正は眼をつむったまま、
「もう一人お加えなされませそれに」
「誰じゃ。まだあるか」
「紀州の前守護、畠山氏の隠れた勢力を見のがしてはなりませぬ。たしか畠山氏の当主は左衛門佐貞政と申す筈。この人からも一揆の衆徒に連絡させたが宜しゅうございまする」
「なるほど、これはよい念の入れ方じゃ」
「さすれば、この一揆と、淡路の菅平右衛門等の兵船二百余艘の奇襲とで、筑前は必ず緒戦に心をみだし、濃尾に率いて来る兵数は半減すると思います」
「数正……」
と、わきから作左が歯掻ゆそうに口をはさんだ。
「おぬしは兵数、兵数と、兵数ばかりを気にするが、みんなの前では、それは言うまいぞ」

「分って居る。が、筑前という人は位攻めを第一とする人ゆえ、兵数の不足がいちばん心にこたえるのじゃ。それゆえ、出来る限り、あちこちで、反筑前の旗だけは挙げさせねば相成らぬ。殿！　兵船は、淡路の二百艘だけではなく、三河、遠江、駿河の船をかり集め、海上へ筑前の気を散らさせること……これも忘れてならぬ大事でござりまするぞ」

四

家康は、分っている――と、いう風にうなずいた。秀吉との一戦は避けがたいものという答えが出た以上、断じて逡巡（しゅんじゅん）すべきではなかった。一日の逡巡は、奇略縦横（じゅうおう）の秀吉に、どのような妙手を考え出させるか知れないのだ。

と、言ってよく考えてみれば信雄が哀れでならないのも事実であった。

まず信雄を倒しておいて、次に信雄に対したとおなじ出方で秀吉はやって来よう。それまで待たずに信雄と合体して……というのはしかし、どこまでも徳川家本位に出でた計算で、万一失敗することがあれば、信雄は地上から消え失せようが、徳川家はとにかく残るという駆け引きだった。

秀吉はむろんそれに気づいているに違いない。信雄が叛旗をひるがえすとすれば、そのうしろで糸を操（あやつ）るものは家康なのだと……

しかし、その家康も、信雄が三家老を手離したり斬ったりすることがあれば、呆れて信雄の味方はすまいと踏んでいる。

（それゆえ今が起つべきとき……）

と、そこに秀吉よりも一歩深い家康の思案と決断があるのであった。
「むろん船は集めるが、船だけでは足りぬでのう」
と、家康は、はやり立つ作左よりも、慎重な数正に共感している様子で口をはさんだ。
「第一、では三家老を心のままお断りなされと、誰をいったい使者にやるのじゃ信雄のもとへ」
「そのような使者ならば誰でも一向に構わぬ道理だ。まとめに行くのではない。こわしに行くのだから」
「いやそうではないぞ作左」
家康は軽く舌打ちして、
「よいか。筑前は、あれだけ巧妙に才覚しながら必ず攻める相手の家臣の中へ内応者を作ってゆくという噂が立っている。この事が万一外へ洩れると、家康は、誠の道に違うた謀将と言われよう。若しそのような噂が立ったら、筑前も見のがさず、甲・駿・信の者どもが、わしの心に疑念を抱いて動揺しだす」
「では殿は、何とせよと仰せられるので」
「これはの、どこまでも、三家老の助命を計るたてまえで参るのじゃ」
「聞き入れぬときは何とさっしゃるので」
「作左、おぬしも妙な男じゃの。そこまでわしに言わせずともよいであろう。止めたとて、いったんこうと思うたら、思い止る信雄ではないこと、おぬしには分らぬのか」
「これは呆れまいた！」
と、作左は大きく笑いだした。

「人の悪い殿じゃ。それでは数正、酒井重忠を使者にしてはどうであろうかの」
「うむ。重忠ならばよいかも知れぬ」
酒井河内守重忠は、雅楽助正家の嫡子で貫禄分別ともに充分の老臣であった。
「殿、いかがでござりましょう。この事重忠にお命じなされては」
家康はかんたんに頷いた。
「そちたちがよいと申せば異存はない。が、わしはちと席をはずそう。その方たちで、わしは三家老を殺したくないのじゃという旨、よく話して納得させよ。その上で、わしはただ行けとだけ命じよう」
「呆れまいた！」
と、また作左は舌打ちした。
「何とずるい、大狸じゃこの殿は……」

五

家康が席をはずすと間もなく、大広間に出て来ていた酒井重忠が書院に呼び入れられた。
重忠は父に似て豪気ではあったが温容だった。その挙動も、飄々乎(ひょうひょうこ)とした作左にくらべて、ずしりと重く、彼と向い合っていると相手は呼吸が苦しくなった。
数正がまず口を切ると、
「酒井どの、実はの、こなたに大事な使者をと言うことになっての」
「いずれへ赴くのでござる」

と重忠は顔をしかめて答えた。
「それがしはお使者には不向き、あまり妙なことでご推挙はご免蒙りたいが」
「いや、さにあらず……他に適当な者がいないゆえ、殿が重忠にと直々仰せられたのじゃ」
「そうではあるまい。また作左どのの指金でござろう」
作左はハハハ……と笑いだした。
「見破る眼力があればこそ推挙した。行先は清洲じゃ重忠」
「清洲……」
「さよう。いま信雄どのは長島城に居らず清洲に居られる。そこで引受けた！　と、たったそれだけ言うて来ればよいのじゃ」
「引受けた……何を引受けるのじゃ」
「羽柴筑前守を相手にして信雄どのが一戦される。殿は信長公に対する恩義を想い、孤立無援の信雄どのを助けて主家に仇なす筑前めに堂々と膺懲の剣を降す……大きく胸を叩いて、正義の戦なれば引受けたと言ってくるのじゃ」
「作左どの！」
「なんじゃ重忠」
「おぬしまさか、戯れているのではあるまいな」
「なんじゃ詰らぬ。戯れにこのようなことが申せるものか。すでに殿のお肚で決ったこと、何かと言えば慎重にという数正までが同意して、ちゃんとこの場で聞き人になって居るわい」
「ふーむ」と、重忠は数正に眼を移して、

「相違ござるまいか石川どの」
数正はうなずいた。彼はここで三家老のことを言わぬ作左に微笑を送った。この事はわざわざ使者に聞かせるには及ばぬことだった。
それよりも引受けたゆえ、あとの作戦はよく連絡するようにと、その事を厳重に念を押しておくべきだった。
「では、お館さまに、充分勝算はお立ちなのじゃな」
「ハハハ……重忠がまた妙なことを言うぞ。勝つ目算の立たぬうちに戦などする殿か、うちの殿が……」
「それはそうじゃが……」
「そうと分ったら、使者の一件、引受けるであろうな。殿がおいでなされてから、それは荷が重いなどとは言うまいぞ」
「お館さまの命ならば止むを得まい。が、老職二人、何でそれがしを推挙したか、理由があろう。先ずそれを承わろう」
こんどは作左が、数正を見やってニヤリとした。（おぬし、説明せよ）と言う意味であろう。
「それはのう」
数正はまた半眼を閉じるように上体を立てて、
「相手に与える頼母しさを考慮に入れてこなたがよいと申上げたのじゃ。開戦と決った以上は頼母しがらせねば相成るまい。たよりない味方と感じさせては弱くなる。それにもう一つ、作戦上のことで、こちらがこうせよと申したことは、きびしく守らせねば相成らぬ。その押しが無うて

はのう」
　重忠はこくりと重くうなずいた。

六

「それは二つながら当然のこと、だが、それだけではあるまい。その二つだけならば、わしで無くっても他にいくらも適任者はある筈じゃ」
　酒井重忠がゆっくりと押し返すと、
「それだけじゃ！」
　と、本多作左衛門は性急に言い放った。
「つべこべ言わずに引受けさっしゃい。殿が名指しで、わしと数正が賛成している。言うことはない筈（はず）じゃ」
「ハハ……」作左衛門は笑い出し、数正は深沈（しんちん）として重忠を見つめている。
「それがある。その二つだけならば辞退するまでのことじゃ」
「何がおかしいのだ老体は？」
「いや、仲々厄介な男だおぬしは」
「厄介ではない。はじめから何か隠しておると分るゆえ、辞退すると申すのじゃ。前髪立ちの子供ではない。信雄どのに返答出来ぬことを問いかけられて、ノコノコ浜松までお伺いに引返せると思うてござるか。その隠してあるもう一つを言わっしゃい」
「言うたら引受けるというのだなおぬし」

「引受けてよいことなら引受ける」
「駄目じゃこの男は……」
作左は数正をかえりみて、又声を立てて笑った。
「では言うぞ重忠。その代り、言わしておいて引受けぬと申したらこの作左が相手じゃ」
「それは分った。先ず聞こう」
作左はギロリと眼玉を剝いてあたりを見回してから、
「これは、殿の計略ではないと思え。殿は近頃仏気が旺んになられて、われ等に言わせると少々手ぬるい」
ぐっと上半身を乗出して声をひそめた。
「それで、わしと数正とで、断じて羽柴筑前に敗れぬ手段を考えた……」
「断じて勝つと言われたは、殿ではないのか」
「殿であると思うてもよいがの。とにかくその勝つためじゃ。勝つためにはこれも又、止めて止まらぬ放れ駒の信雄どのを、徳川家の風よけに……筑前が腕試しに……使うて見ようというのが真意じゃ」
「なるほど……それで少しは分って来た」
「しかし、この事は、わしと数正より知らぬこと。よいか、そこでもう一人だけ感付いていてもよい者は誰であろうかとなったのじゃ。そしてその結果がおぬしなのだ。打明けたらおぬしも、いやとは言われまい」
酒井重忠は、ぐっと肩をそらして二人を見やり、それからコクンと、折れるように頷いた。

「で、その断じて勝つ手段とは」
「断じて勝つとは、断じて負けぬだけのことよ」
「ではその断じて負けぬ手段は？」
「信雄どのを防風林にして、敵が無性に強いと見た時には、数正が直接筑前がもとに赴き、さっさと戦を止めにするわい」
「相手がそれほど強くない時には？」
「この作左が、ねばりにねばって筑前めを討取らせるまでのこと」
「ではもう一つ……」と、重忠は言った。
「わしが清洲へ行く目的は？」
「遮二無二(しゃにむに)戦にして参れ……と、これは殿の命令ではないが、同時にまた反対なされていることでもない。安心して、三家老を信雄どのに叩っ斬らせて来るがよい。それで戦になってゆくのじゃ」
作左は一気に言ってこんどは声を出さずにニヤリとした。

七

「分った！　それで分った！」
酒井重忠は重ねて答えて、フフフと妙な声を立てた。
「考えて居るなご老職二人」
「考えずには生き残れぬ世の中じゃ」

「つまり、ご老職二人、毀誉褒貶の外に立って御家のために計ろうと言わっしゃるのじゃな」
「おう、毀誉褒貶などと言うものではない。一身一家はむろんのこと、時には一族に累を及ぼしてもよい。あの筑前が鼻をあかして見たいのじゃ」
「では、御家のためでは無うて、意地のためか」
「どちらのためと思うても、それは見る人の心々、こっちの知ったことではないわ」
作左がそう答えると、数正はホッと息して、
「わしは意地のためではない！」
と、きっぱり言った。
「わしの胸三寸に住まう仏が、そうせよとお命じなされるのでやる迄のことじゃ」
「分った！」
重忠ははじめて眉宇に感動を漂よわせ、分厚い胸をポンと叩いた。
「それで無うては、あの筑前が、破竹の鋭鋒避け得まい。信雄どのをひとり討たせたら、次にはご当家とはわれ等にもよく分る。その筑前の鼻を明かせたら、われ等の生命はいらぬ気がする」
「生命はいるぞ重忠、鼻を明かして、あとの筑前が出方をとっくりと見てやるのじゃ。ここではひとつ悪人になっての、信雄どのを煽って来い」
「煽らいでか。いかに煽ったとて勝てば決して悪ではあるまい。信雄どのはすでに筑前に狙われて、身のかわしようもない餌食なのだ」
「では、殿を呼ぼうか作左」
数正が口をはさんだので、

「おれが呼んで来る」
と、作左が立った。
「よいか重忠、殿には何も言わせるな。かしこまったと言うだけでよい。そして、三家老の処刑を止めなかったことは、冥土まで胸につつんで持ち去れよ」
重忠は返事の代りにもう一度胸をたたいた。
作左は、しびれが切れていたと見えて、大袈裟に顔をしかめ、ちんばをひきながら出ていって、やがて奥から家康を連れて来た。
「話は済んだか」
家康は、ゆっくりと脇息に片肘のせると、重忠にではなく、数正にたずねた。
数正はきちんと両手を突いて、
「細かい打合せなど、あれこれ、酒井どのと遂げてござりまする」
「そうか。それで、重忠はすぐに出立するというのじゃな」
「はい。わざわざそれがしにお命じなさると承わり勇んで出発致しまする」
「先方ではの、信雄どのと二人だけで会うがよいぞ」
「それはもう充分に心得て」
「ではその方を遣わしたゆえ、腹蔵なく相談されたい旨の書状を認めよう。よい。誰も呼ぶな。わしが自身で硯は取って来る」
家康はそう言うと、窓ぎわに据えた机の上から、硯箱と紙を取って来て、すらすらと自分で筆を走らせだした。

三人は言い合せたように天井へ眼をそらしている。

八

酒井河内守重忠が、清洲へ向けて出発したのは、二月の二十一日（天正十二年）だった。
この季節の持つ意味は大きい。いよいよ戦となれば徳川側にとって最も好都合なのはこの三月だった。
改めて、賤ヶ岳の合戦のおりの事を想い出すまでもなく、この頃から北国の雪は溶けて、そろそろ山間の交通は自由になる。交通が自由になると上杉家の存在が、それを取巻く人々にとって、至極油断のならぬものになるのだ。
この事は家康にしても例外ではなかった。が、それ以上に、越前から加賀、能登、越中と、進出している秀吉にとっては眼も放せず、手も抜けぬ時期であった。
北条氏にしても無論のことである。そこで開戦と決ればその時期は三月、三月開戦させるためには、二月のうちに手順はつけておかなければならなくなる。
重忠は、その大きな鍵を持って、二十五日に清洲の城へ入っていった。
信雄はすでに待ちかねていたと見え、重忠の到着を聞くと、直ちに自室に招いて労をねぎらった。
「家康どのは、ご元気にわたらせられようなあ」
「それはもう……」
と、重忠は生まじめな顔で、

「またお側女を二人殖やされました。すぐに孕ませることでござりましょう」
「ほう……」と信雄は眼をみはって、
「うらやましい！　それがしは近ごろ、女子どころではなくなった」
「それはなぜでござりまする」
「考えれば考えるほど……」
そう言ってから、信雄は神経質にあたりを見回し、小姓から女中までを遠ざけて、
「予はどこまで話したかのう河内？」
と、訊き返した。
「女子にご用がなくなったところまででござりまする」
重忠は、いぜんとして笑いもしなければ、姿勢も崩さない。大きな巌が、風の中へ立ちはだかったような、重々しい感じで、それが妙に滑稽でさえあった。
「そうそう、その事じゃ。考えれば考えるほど筑前めの増上慢が癇にさわってのう」
「それはいけませぬ！　それではなりませぬ」
「なんといわれる。何がいけないのじゃ」
「春は、すべてが孕むとき、そのお若さで、筑前風情がことをお気にかけられ、自然の営みを怠るなど……どしどしおやりなされませ。家中に活気がわき立ちまする」
「そのようなものかのう」
ついに信雄の頬はほころびた。
「その方も、営んで参ったかな」

「はい。家例でござりまする。戦の始まる時、他出の時には、充分に営めと、祖父も申し、父も実行して来た家例でござりまする」
「ハハハ……それは面白い！　では、戦を始めると申すのじゃな、その方は……」
「あ……」
と、重忠は落着きはらって、ふところへ手を入れた。
「営みの話に夢中になって、主君の書面が後になりました。いざ、ご披見を」
そう言うと紫の袱紗をはらって文箱を取出し、重い動作で膝行して、恭しく信雄の前にそれを据えた。
信雄は、ちょっと眉を険しくしたが、すぐにそれを微笑に変えて文箱をとった。

九

信雄が書面を黙読してゆく間、重忠は茫洋とした表情で庭を見ていた。
信長の雄図を育くんだこの城の松から松の間に紅梅が咲いている。いや、紅梅ではあるまい。それは或いは桃かも知れぬ。しかし重忠に、花鳥風月を賞ずる神経はかけていた。
「ほう！」
とつぜん重忠が言った。
「おもしろい小鳥が居りまするなあ。あれはお飼いなされて居りますので」
「なに小鳥……あれは頬白ではないか」
「お飼いなされて居りまするので」

「頬白は、わざわざ飼わずとも三河に、幾らもいよう。河内は頬白を知らなかったのか」
「ほう……これはうかつでござりました。何分にもわれ等、戦に勝つことばかり考えて居りますので」
「河内」
「はいッ」
「この書面には万一の場合に備え、すべてはその方に旨を含めてあるゆえ、われ等と思うて腹蔵なく談合するようと……ただそれだけしか書いてないが」
「はて、それだけで不足でござりまするか。徳川家には、使者に参って敵に内応するような腑抜けは居りませぬ。それゆえ、大事な使者は、みな同文、あとは腹に納めて出るものと、これは主家の御定例でござりまする」
信雄はこの時もチカリと不快な色を見せたが、すぐそのあとで微笑した。
「羨しい！　それで無うてはならぬ筈じゃ。ではその方、何事も家康どのに腹中を明かされて参って居ると言うのじゃな」
「ご念には及びませぬ。駿、遠、三に甲信の五ヵ国賭けて即答致しまする」
信雄はこんどは、心から羨しそうに嘆息した。
「家康どのはお仕合せじゃ。では、われ等が、合戦は当方から仕掛けたいと申したことに、家康どののご意見は？」
「異存ござりませぬ。義によってお味方するもの……すでにいつにてもご自身ご出馬出来るよう、準備は完了致してござりまする」

「ほう……では、もう一つ……開戦となれば戦陣の配備は？」
「こなた様のお手筈ととのい次第、家康自身尾張に出馬、こなた様と膝を交えて決定致しまする」
「家康どのはどれほどの軍勢を引きつれて出馬下さるか。それもむろん分って居ろうな」
「申すまでもないこと！　全軍でござりまする」
「その数は」
「要所要所へ一揆、反乱などの起らぬように抑えをおいて約三万」
「して、根来、雑賀の衆へ働きかけるかどうかのことは？」
「むろん、これと結ばねばなりませぬ。この一揆の衆徒を動かすため、家康からは保田の花王院、並びに寒川右太夫に誓書を送ってござりまする。これ等の衆徒に堺から大坂を襲わせて、秀吉の出足をくじくこと。こなた様からも念のため、もう一度ご使者をお立て下さるよう。これ等の衆徒に堺から大坂を襲わせて、秀吉の出足をくじくこと。出足をくじかれたことのない秀吉だけに、これが勝敗の半ばを決する大事でござりまする」
「ウーム」
いつか信雄の眼はキラキラと輝きだし、眉は昂然とあがっていた。

十

昂然としてゆくと、信雄はまた、何と風貌の信長によく似てゆくことか。本能寺で倒れる数日前に、安土の城で、信長の手から盃を貰っている重忠は、その時も、こよなく美しい「男の顔――」と見やったのだが、今見る信雄もそれに劣らぬ凜々とした武者ぶりだった。

（外観はさして変らぬのに、中身はなあ……）

重忠はしかし、そうした気ぶりは重厚と言うより寧ろ無神経に見える猛々しさのうしろに隠して、

「さて、まず秀吉の出足をくじいておいて開戦するとして、一揆の衆徒が堺、大坂と押し出したのち、これを背後で支援する者は一人でも多いがよし。よって、こなた様から、紀州の畠山左衛門佐貞政に密書をお送りなさるよう……」

いつか重忠の口調は命ずる重さに変っていたが、信雄はもはや不快な色は見せなかった。むしろわが意を得たと言いたげに膝をたたいて頷いた。

「なるほど、これはうっかりぬかるところであった。よし、事成就のあかつきは、紀伊、河内は進上しようと誘う手がある。相分った！　早速手配りを致すとしよう」

「それから、これは最後にわれ等が存念でござりまする」

「こなたが存念か」

「いかにも。戦の駆け引きは個々に手柄を競う時代では無くなりました。全軍の統率が第一でござりまする。よって家康と、こなた様とで打合せた戦略戦術は、いかなる危急の場合にも、無断変更は許されませぬ。万一無断で変更されては、これが必ず敗れのもととご銘記下さるよう」

「分って居る！　その点信雄は金鉄じゃと、こなたから、家康どのへも家中の者へも告げて呉れ」

「それ承って安堵仕りました」

重忠は大きく頷いて、

「話はもはや終りでござりまする。では、このあたりから武辺話でも」
「重忠……」
「はいッ」
「家康どのは、予が、三家老を斬って、それを開戦のきっかけにしたいと申したことに就いては、何のご異見もなかったか」
「はて……三家老……？　そのような話は一向に存じませぬ。ただ、いつにても開戦差支えなしと、勇み立っては居られましたが……」
重忠はちょっと小首を傾げるようにして眉根を寄せ、
「そもそも、その三家老とか……何か、不都合でもござりましたので」
「いや……なに、話が無かったのならばそれでよい。これは予自身で決むべきことであったかも知れぬ」
「さようでござりましょうな。われら主君は、大切なことなどお忘れなさる方ではない。何も申さなかったのは、お心のままにと言う意味かと、この重忠も存じまする」
「そうか。ではそれもよし……いや、心が軽くなった。今宵からはよく眠れよう。では、このあたりで重忠が武辺話でも聞くとしようか。これ、誰ぞある……中付けておいた酒肴をこれへ運ばせよ」
信雄が上機嫌で手を鳴らすと、重忠ははじめてホッと吐息した。
これで巧みに、三家老のことには触れずに済んだ……

十一

酒井河内守重忠は、清洲城に一泊して、すぐに浜松へ引っ返した。
彼はどうやら信雄と対談してみて、はじめて三家老問題の持つ複雑な意味に気づいていったようであった。
この問題に、家康はじめ、本多作左衛門も、石川数正も、なぜあのようにこだわるのであろうか……？　それをはじめ簡単に三家老のもっている実力の減殺を怖れての事であろうと解していたが、信雄と話している間に、それは全く別な意味をもっている……と、気づいていった。
家康の思案か、それとも数正の深慮か。とにかく開戦してみた結果がひどく思わしくない場合には、信雄が三家老を斬ったことを知らずにいた態にして、
「——そのようなたわけた事をなさるお方では……」
そう言って、さっさと兵を引く事も考えているらしい様子なのだ。
この事は考えようによればひどく狡猾な用心深さだったが、その位の用意がなければ到底秀吉に立向って五分の駆け引きは出来まいとも思われた。
しかしそうした酷薄な現実を信雄は果して冷静に分析し得るかどうか……
上機嫌で重忠を清洲城から送り出すと、信雄は直ちに、三家老へ使いを出した。
「このたび、清洲にて徳川家康の使者、酒井河内守重忠と密談を遂げたる件につき、早々に打合せたいことがある。よって三月三日、長島城へ集合のこと」
そして、信雄自身は、重忠のあとを追うようにして長島城へ戻っていった。

三家老の一人、尾州の星ケ崎城主である岡田長門守重孝はこの使いをうけて首を傾げた。

徳川家との密談とあれば、その内容の重大さは言うまでもないことだった。

すでに信雄は秀吉と一戦する気でいる。いや、秀吉の方でももはや信雄は、このままでは済むまいと、肚を決めている様子なのだ。

それを無理に押えているのは岡田重孝、津川義冬、浅井田宮丸の所謂三家老であった。

彼等は、彼等が同意しない限り信雄に開戦の実力はなく、家康もまた決して軽々しく味方することはあるまいと信じきっていた。

したがって、こんどの打合せというのは、家康が開戦の条件として、何を言い出して来たのか……そのことの相談に違いないと思った。

三家老同意のしるしに、それぞれ家族を人質に寄こせとでも言って来たのか……？

それとも、家康もまた三家老が秀吉に内応しているという、奇怪な世評を耳にして、その真偽を正して来た程度なのか……？

いずれにしても、ここでは躊躇なく長島城へ出向いて行くより他になかった。

行かなければ信雄は、いよいよ疑惑を深めて、何を考えだすか分らなかった。

重孝の言われたとおり、三月三日に長島城へ出頭してみると、すでに義冬も田宮丸もやって来ていて、大書院では、いま、桃の節句の菊酒が出ようとしているところであった。

重孝は、何となくホッとした。

三家老が揃って信雄と会うのは、三井寺で、気まずい別れ方をしてから、これが最初であったが、先着の二人も、信雄も、ひどく打解けた表情で談笑しているのだ……

十二

岡田重孝は、まず丁寧に信雄へ節句の祝詞をのべてから、一座している重臣の顔を眺めわたした。浅井、津川の二老臣のほかに、滝川三郎兵衛雄利、土方彦三郎雄久、飯田半兵衛正家、森久三郎晴光などが、いずれも頬を桃いろに染めて控えている。

このような場で、家康からの密使の内容などは話し出せない。そこで、盃を頂くと、それを小姓に注がせながら、

「三井寺の折には、残念でござりました」

と話しだした。

「筑前どのにはみじんの隙もなく、却ってわれ等が捕虜同様の立場となりまして」

そこ迄言うと、信雄は淡白に手を振った。

「わかって居る。そうなると思うたゆえ、予はさっさと引揚げてみせたのじゃ。そうすると筑前めも、こっちに備えがあるやも知れぬと、幾分は惑おう、かかる時には相手の意表を衝くに限ると思うてな」

「恐れ入りました。しかし、筑前は、敵ながら、あっぱれな政略家でござりまするなあ」

「その事じゃ。それゆえ、こっちも慎重に熟議を遂げてかからねばならぬ。実はな長門、こなたの来る間、みなには一応話したのじゃが、家康のもとから酒井重忠が参っての」

「あの……そのようなことを、この場では……」

「よいのじゃ！　みなにはもう話してある。家康の中条では、こんどこそは天下わけ目の大切な

戦。それゆえ、早速こなた達三家老を招いて、とくと協議なされた上、意見をまとめてお知らせありたい。それによって家康、全軍を引きつれて義戦に参加仕ろうと申して参った」
「あの、われ等も加えて協議した上……」
「そうじゃ。まず、みなの意見をまとめ、それから全力をそそぐようにとな」
　岡田重孝は、しずかな視線を津川義冬と浅井田宮丸に向けていった。
　家康は、彼等が想像していたとおり、家中の議がまとまり、固い結束が出来ないうちは起つ気はないのだ……という頷きあいであったが、しかし信雄はそれを何気ない様子で、チカリと鋭く見取っている。
「恐れながら、それでは、この菊酒を頂戴した上、席を改めて評定致しとう存じまするが」
「長門！」
「はい」
「予はもう決心しているのじゃ。まさかその方、開戦に異存はあるまいな」
「はい……それは、しかし、この場では……」
　うかつに開戦させてはならぬと、三井寺以来、いよいよ秀吉の強大さを見せつけられて来ている重孝が語尾を濁すと、
「よいよい」
　信雄はあっさりと頷いた。
「今日はこのまま酒宴として、評定は明日から致そう。今度こそは是が非でも勝たねばならぬ。それゆえ、その方たちは特に、筑前が軍略の弱味はいずれにあるか？　どこに乗ずる隙を見出す

べきか？　それらの事をこまかくきわめて、みなによく聞かせてやってくれ……いざ開戦となれば、酒宴もなるまい。今日はこれから無礼講として、上下なしに過そうぞ」
あまりにあっさり言いかわされて、重孝はふと不安になった。
（これは何かたくらんでいるのではあるまいか……？）

十三

三日には、ついに何も言い出す機会はなかった。戦が始まれば、それぞれ定められた部署へ配置され、こうしてみんな顔の合うことはあるまい。それゆえ今日は無礼講で過せと言われると、岡田重孝はじめ、他の二老臣も直接反対は出来なかった。
信雄が家康の援助を得て、秀吉と一戦しようとしていることは既定のことだったので、敢て開戦反対のことなど言い出し、信雄の機嫌を損じるまでもないと遠慮したのだ。
したがって重孝も酔わなかったし、津川義冬も酔わなかった。浅井田宮丸だけはすっかり酔って、時々、ふっと自分の考えを口走った。
「――困ったことでござるのう。このままでは船は山へのぼりまするぞ」
しかし、それも周囲が酔っていたので、信雄の耳には入らず、とにかく三日は無事に済んだ。そして四日には当然重大な評定がある筈と、三家老はそれとなく発言の順序などを相談しあっていたのだが、その日も評定は開かれなかった。
正午すぎになって、
「――評定は明五日とするゆえ、本日は各自で、それぞれ意見を取りまとめておくように」

奥へ入ったまま出て来ない信雄のもとから小姓頭が告げて来た。
「こんどはお館も余程慎重のようでござるな」
控えの間で顔が合うと、津川義冬はそう言ったが、岡田重孝は、そうは思わなかった。
「これは少々ばかり反対など申上げてみても、お聞き入れない証拠のように思えるが」
「いや、そうではあるまい。口先では敢て反対せずとも、内心では、みな筑前が日の出の勢いを恐れている。われ等三人、条理を尽して説いて参らば、お館はとにかく、周囲の者がお諫め申すに違いあるまい」
「そうであって呉れればよいが、それがしにはちと……」
重孝はその日もそれ以外には言わなかった。
こうして一日無為に考えさせるということは、信雄の決心の動かぬことを悟れという意味にとれてならなかったのだ……
五日になった。
この日は朝から雨もよいで、気温はひどくあがっていた。七分どおり開いた庭前の桜が、しとしとと降る雨をそのまま吸って、春の暖気を吐きちらしているようだった。
「みな、大広間に集るように」
側近の滝川三郎兵衛雄利がふれて来たのが四ツ（十時）ごろで、三家老はそろって信雄よりも一足先に着座して待っていた。
「今日は思うこと、一言も言い残さずに言上します。津川どのも、浅井どののもそのおつもりで」
重孝がそう言うと、二人は固くうなずき合った。

第一に口を開くのが岡田重孝。それに賛成するのが津川義冬。そこで主君信雄の意見がはっきりする。
意見がはっきりしたところで、こんどは浅井田宮丸が口を開くように、順序はすでに決めてあった。
四ツかっきり信雄は出て来た。
顔ぶれは殆んど三日と変りはない。
「では、これより評定」
信雄は今日も、おかしいほど上機嫌であった。

十四

「家康どのが全軍を催してわれ等のために戦うて呉れると申すのじゃ。これで一戦するのに誰も反対の者はあるまいな」
信雄が、あまりに上機嫌なので、岡田重孝は舌がねばった。
「申上げます」
「おお長門か。その方は星ケ崎の城主、家康どのの旗本と共に、美濃へ攻め入って先陣して貰おうと思うておるが」
「恐れながら、その儀につき、申上げたいことがござりまする」
「何じゃ。家康どのの旗本と一緒ではいやと申すか」
「恐れながら、……この重孝、こんどの開戦には反対でござりまする」

「なに反対……」
信雄は意外なほどあっさりと、
「そうか、理由を聞こう。何分にも大切な戦、どこまでもみなの意見は聞かねばならぬ」
「有難き仕合せ……それにてわれらも話し易うなりました。お館は、徳川どのが全軍を挙げて……と仰せられましたが、これはあまり信用出来ぬのではないかと心得まする」
「ほう、理由を聞こう。理由をな」
「と、申しまするは、徳川どのご家中の、石川伯耆守数正どの、筑前に内応との噂もございまするが……」
「なるほど、石川伯耆がのう」
「しかしそれは信じませぬ。筑前どのは必ずさようの噂を撒かれるお方、が、徳川どのが何しにいま、全軍を挙げてお味方などを申すのか、胸中はよく噛み分けねばなりませぬ」
「亡父への恩義ばかりじゃないと言うのじゃな」
「恐れながら、いずれは吾が身にもふりかかる火の粉と見て、お館を先立てて交渉は致しましても、その実、戦う気はないのではござるまいかと……」
「分った！　家康どのは本心ではない。それゆえ反対だと申すのじゃな」
「仰せの通り……」
重孝が一礼してあとの説明にかかろうとしている時に、津川義冬が、急きこんで口をはさんだ。
「お館さま！　この義冬も岡田どのと同じ意見でござりまする」
「ほう、そちも反対か」

「堰を切って押し流れて来る濁流は、いかなる力をもってしてもさえぎり切れませぬ。ここでは堪忍のほぞを固め、じっと耐えるより他には策はあるまいかと存じまする。さすれば、お館と筑前が年齢の差、必ずもの言う時がござりましょう。お館はまだ三十歳に遠いのに、筑前はすでに五十歳に手が届きまする。やがて自然が筑前の生命を召す時が参りましょう。それまでござりまする。何とぞいまは堪忍の……」

義冬の言い方が、あまり真剣だったので、こんどは浅井田宮丸が身を乗り出して来てしまった。

「お館さま、筑前の心を押える唯一つの手段がござりまする。われ等三家老を大坂へ人質になされませ。われ等三人大坂にあって、決して筑前に無謀は致させませぬ」

「分った！」

と、信雄は言った。

「考えた通りであった。それッ者共！」

信雄の声で、同席していた面々はいっせいに抜刀した。

十五

「あ、これは……何と致しまする」

岡田重孝が立ちかけるのと、同席していた飯田半兵衛正家が、津川義冬に一刀浴びせるのとが同時であった。

「あっ！」

肩先を押えて、義冬はよろよろッと入側によろめき出た。

「慮外なさるな。御前でござるぞ」
「ほざくなッ。主命じゃ」
「なにッ主命じゃと……」
あわてて上段の間をふりかえると、信雄はすでに席を立ってその場には居なかった。
いや、それればかりではない。もはや左右のいずれの出口も、槍ぶすまでさえぎられている。
「これは、何としたのじゃ。何のために、かような慮外を……」
「胸に聞けッ」
土方彦三郎雄久が、三尺近い豪刀を、ぐっと重孝に突きつけて叫んだ。
「憎い裏切者め、八ツ裂きにしてもあき足らぬわ」
「われ等が裏切者とは何を証拠に申すのじゃ」
「問答は無用にせい。主命じゃ。上意じゃ」
滝川三郎兵衛雄利は、小刀を抜いて柱を楯に身構えた義冬に、いきなり脇から一太刀呉れた。
「卑怯者め！　うぬだな三郎……」
「斬れッ、早く斬れッ」
義冬は深傷に耐えかねて、
「計られた……浅井どの、岡田どの……お先に……」
語尾をはっきり言わないうちに、パタッとその場へ倒れていった。
重孝はカーッと全身の血の逆流を覚えて、
「よしッ、かくなる上は手向うぞ。来いッ」

「上意じゃ。裏切者め」
「裏切者とはお館がことじゃ。われ等は家臣、怪しい節があれば、なぜ詰問の上切腹させぬ。みすみす筑前が策略におちて、われ等三人をだまし討ちにかけるとは……」
「斬れッ、たわ言聞く間に早く斬れッ」
「おう、斬れるものなら斬ってみよ」
土方彦三郎が躍りあがって斜めなぐりに左の肩尖から斬って来たが、重孝は、その太刀を横に払った。
パッとあたりへ火の粉が飛んで、囲んだ人の輪がひろがった。
浅井田宮丸長時は、いつか相手の槍を奪い、肩衣をはねあげて、森久三郎と相対している。
「たかが二人ではないか。暇取ってはお叱りを蒙ろう。急げやみな」
滝川三郎兵衛は、抜刀を下げたままこんどは下知するばかりで手は下さなかった。
外はいぜんしとしと生暖い春雨で、畳に這ってこと切れた義冬の躰から、ぬるぬると一筋血がのびだしている。
その血をふんで、重孝はつるりと辷った。
その瞬間に、ギャッ！　とうしろで悲鳴があがった。
浅井田宮丸が、森久三郎に斬られたのだ……と、思った刹那、ジーンと右肩へ焼きごてをあてられたような痛みが走った。
土方彦三郎の豪刀が、重孝の胸の下まで肉を断ち、骨を砕いてふりおろされていたのだ。
「無……無……無念……」

重孝はそのまま、噴き出す血とともに義冬と折重なってこと切れた。

出陣

一

家康は信雄が三家老を討ったという知らせを、刈谷の城主水野忠重からの密告で三月七日には知っていた。

信雄は三家老を討たせると、すぐに津川義冬の松ケ島城は滝川三郎兵衛に与え、岡田重孝の星ケ崎城は水野忠重に、浅井田宮丸の苅安賀城は森久三郎を入れてこれを守らしめることとした。

むろんこれを秀吉が知らずにいる筈はなかった。

おそらく秀吉は、開戦に当って自ら手足を斬った信雄を、内心では笑っていたのに違いない。

そして家康がはじめてその事実を知った七日には、すでに堀尾茂助吉晴に、

「——北伊勢へ兵を出さねばならぬゆえ、その用意をするように」

と命じ、更に翌八日には津田弥太郎に対しても同じ命を下している。

そして自身は十日に大坂から京に入り、十一日には近江の坂本城まで出ているのだから、その神速ぶりは、その事をどのように待ち構えていたかの証拠といえよう。

家康は三家老の討たれた事には何の感想も洩らさず、すぐに浜松城で、戦評定をひらいて

いった。
家康自身は信雄とともに尾張に出てゆく手筈であったが、
「こんどは筑前が手の内を、ゆるりと拝見するかのう」
みんなが揃うと、おだやかな声で言って笑ってみせた。
「よいかの、わしは今まで、鬨(とき)の声をエイトウ！　とだけ挙げさせたが、これからは改めねばならぬ」
突然、妙なことを言い出されて、榊原康政が小首をかしげた。
「エイトウ！　とだけではいけませぬか」
「うん、相手は筑前じゃ。エイトウ、エイッと語尾をもう一度キリリと締めて気合をいれろと申渡せ。エイトウ、エイッ！　これがそのまま勝鬨になるでのう」
みんなはそっと顔を見合せて、何となくニヤリとした。もう作戦上のことでは殆んど打合せることはなかったのだ。
家康が浜松を発すると、彼のひろげた大規模な外交戦は脈々と生きて来る。北陸では佐々成政が、秀吉の領国加賀を衝くであろうし、四国では、長曾我部元親がすぐに淡路へ出て来よう。紀伊では寒川右太夫が一揆の旗を振って和泉、河内へ侵入してゆくであろうし、賤ケ岳の戦に敗れて紀伊に閑居していた保田安政は、根来法師を語らって河内を衝くことになっている。
それに本拠の大坂を秀吉のために占有された本願寺の門徒、根来、雑賀の諸党をことごとく煽って、万一事成就のあかつきには、前田利家の手に帰した加賀も大坂も恢復させようと密約がなっている。

「筑前が、坂本城で愕こう。あっちこっち、忙しいことになりゆくでのう」
家康は、みんなが揃うと、出陣の祝膳をはこばせて淡々と冷酒をふくみ、それから、集った子供たちの頭を順に撫でて、そのまま大玄関へ曳かせた愛馬に跨った。
三月七日の八ツ（午後二時）近く、三家老殺害の知らせが届いて、僅々一刻半ほどしか経っていなかった。
すぐに陣を岡崎にすすめ、更に清洲へ入って作戦するためであった。

二

家康の顔いろも動作も、平常と何の変ったところもない。見ように依れば鷹狩りに行く時ほどの昂奮もないようだった。
と、言って、それが家康のすべてでないことはよく分った。
とにかく、不世出の英才、羽柴筑前を向うにまわして一戦するのである。一兵の駆け引きを誤っても、それは恐らく家康の生涯を決定するほどの打撃になろう。
最初の動員数は約三万五千。
そのうち八千を引きつれて、あとは一応、甲・駿・遠・三の諸方に城方押えとして残しておいた。
浜松城へは大久保七郎右衛門忠世。
岡崎城へは本多作左衛門重次。
二俣城へは酒井雅楽頭重忠。

久能城へは久能三郎左衛門。
掛川城へは石川日向守家成。
甲府城へは平岩七之助親吉。
郡内城へは鳥居彦右衛門元忠。
駿河の田中城へは高力与惣左衛門清長。
深沢城へは三宅宗右衛門康貞。
長久保城へは牧野右馬亮康成。
沼津城へは松平周防守康重。
興国寺へは松平主殿頭家清。
信濃の伊奈城へは菅沼大膳。
佐久郡へは柴田七九郎重政。
小諸城へは芦田下野守信守。
吉田城（豊橋）の酒井左衛門尉忠次は家康に従って出陣したが、別に守将はおかず、西尾城は浜松の大久保忠世に兼ね守らせた。
先陣は、いよいよその豪勇ぶりを現わしだした井伊万千代直政の赤備え。旗本には、奥平信昌、松平又七郎、榊原小平太康政、本多平八郎忠勝、大久保忠隣、本多慶孝、松平家忠、菅沼定盈等々……
八日に岡崎城へ入ったときは、これらの軍勢は矢矧において、家康自身は、ここで伊賀、大和の士の来会を待った。

そして九日には阿野。

十日には酒井忠次と松平家忠等を鳴海にすすませ、更に十二日には熱田の近くの山崎へ陣した。

この頃から、雨天がつづいたが、落花を踏んで、伊賀、大和の士が続々と家康のもとに集りだした。

一方秀吉も、むろん手を拱いている筈はなく、彼は大垣城の池田勝入（紀伊守信輝）のもとへ再三使者を送って、先陣をすすめていた。

「――ここで秀吉と力を協わせ勝利を納めた節は、美濃、尾張、三河の三ヵ国を進ぜよう。早速出陣これあるように」

更に秀吉は森武蔵守長可を誘ってこれを味方とし、手をのばして、刈谷の水野惣兵衛忠重、丹羽勘助氏次などにも執拗に誘いかけた。

しかし、氏次も忠重も、この誘いには乗らなかった。

氏次は使者に来た今井検校を罵倒して追い返したし、水野忠重は、秀吉からの誘いの書面をさっさと家康のもとへ届けて来た。

それには、忠重に三河、遠江の二ヵ国を進ぜようと書いてあった。

恐らくそうした好餌で誘われても易々と秀吉側に勝利があるとは考えられなかったのであろう。

こうして、東西両軍は美濃と尾張の山野から北伊勢へかけ、刻々とくり出して来るのであった。

三

家康が清洲城へ入って信雄と会見した三月十三日には、すでに戦場は北伊勢に及び、近江では池田勝入とその女婿の森武蔵守長可の犬山進軍が開始されていた。

秀吉と家康の智能を傾けつくした前哨戦であったが、これは双方共に相手の意図を察しきれないうらみがあった。

秀吉は恐らく北伊勢に事を起して、家康をこの方へ誘き寄せ、その間隙をねらって犬山城から尾張へ一挙になだれ込もうとしたのに違いなく、その意味ではそれは半ば成功したかに見えた。

十三日の午の刻（正午）。

家康は清洲城の大広間で、酒井忠次、石川数正、松平家忠、本多忠勝等の重臣をしたがえて信雄と軍略の協議に入っていた。

その頃には北伊勢の戦雲はすでに傍観を許さぬものがあった。

というのはこれより四日前の三月九日に、信雄の部将の神戸正武は神戸城を出て亀山城の攻撃を開始していたのである。

ところが亀山城の関安芸守盛信入道万鉄は、その子の一政と共によく守ってこれをしりぞけ、いまや、蒲生氏郷の応援を得て、その形勢は逆睹しがたい危険をはらんでいる。

信雄方でも、すぐに、佐久間正勝、山口重政の両将をして、鈴鹿郡の峯城に入らしめ、これを援ける態勢を整えたのだが、その時にはもう秀吉勢は続々として北伊勢に進出して来つつあったのだ。

当面の目標は峯城で、蒲生氏郷のほかに、長谷川秀一、堀秀政、日根野弘就、浅野長吉、加藤光泰等の諸将が、現地の関万鉄、滝川一益などと力を協わせて南北の伊勢に於ける信雄の勢力を分断する気配が濃厚になっていた。
そうした説明を聞かされて、さすがの家康も深沈とした表情で考え込んだ。
家康は秀吉が、坂本からそのまま美濃、尾張と進出して来るとは思っていなかった。これは充分に家康の方で警戒し、すぐにも大坂へ引返さなければならないように、手を打ってある。
しかし、用兵の数には事を欠かない秀吉は、やがて大坂に有力な留守隊をおいて、自身でやって来るに違いなかった。
その場合に近江から美濃、尾張と来るか、それとも北伊勢からやって来るかは充分に見方の分れるところであった。
「どうじゃな数正、秀吉は伊勢路へ出て来そうには思えぬか」
しばらく経って家康がたずねると、石川数正は酒井忠次をふり返って、
「これは油断がなりませぬなあ」
と、即答を避けた。
「秀吉の策戦はつねに意表を衝くものゆえ」
「いや」
と、信雄が口をはさんだ。
「何といっても尾張はわれ等が代々の本国、それゆえ、本拠の手薄な伊勢からまず先にと計算するに違いないと思われるが」

「中将どの」
酒井忠次がその時、はじめて頑な眼を信雄に向けて重い口を開いていった。
「何か、こなた様、われ等に隠しておわすことはござらぬかな」
「え、隠してとは……？」
そういったが、信雄の顔いろは明らかに変っていた。

四

「われ等、先ほど尿に立ちました折、ちと心にかかる事を耳にしましたが」
忠次はそこまで言うと、ぐっと家康に向き直って、
「峯城はすでに昨十二日の夜半に陥落したと雑兵どもが話していました」
「なに峯城が陥落したと⁉」
家康も、さすがにギクリとしたようだった。
「それは心にかかる。たとえ雑兵どもの私語にしても、出どころをお調べ下され中将どの」
「か……かしこまってござりまする」
信雄は、つとめて顔いろを変えまいとして、しかしかすかに頬をひきつらしているのが分った。
「中将どのは、お館を、伊勢路へ向けたいのじゃ。伊勢路へは羽柴秀長、秀勝もやって来る途中とある。それに田丸具康、九鬼嘉隆などの海上勢力もある。峯城を落したら敵はすぐに松ケ島城へ攻めかかろうでの」

忠次が嘲笑うようにそう言うと、石川数正は、もう一度同じことを呟いた。
「油断はなりませぬなあ。南伊勢では海路の連絡しか取れなくなる」
家康は黙って、じろりと二人を見ただけだった。彼にも、信雄の希望はよく分っていた。尾張は木曾川をはさんでいるし、もともと織田家の地盤なのだ。それだけに敵は入り難いと考えれば、伊勢で家康に働いて欲しいと思うのは無理もなかった。
が家康にすれば、そうした事はこの場合問題にすべきではなかった。とにかく秀吉の出口へ立ちふさがり得る者は自分をおいて他にはないと確信している。
したがって秀吉が、伊勢へ来れば伊勢、美濃へ来れば美濃でこれと対決しなければならない。
それにしても、信雄が、まさかに戦況を隠して自分を伊勢路へ向けようとする等とは思いもよらなかった。
もしそのような小策を弄するとすれば、これは全然力と頼むわけにはいかなくなる。
「殿！　これは、尾張を動かぬがよいように思われまするなあ」
忠次がまた言った。
家康は答える代りに入口へ眼を放った。
信雄が一人の雑兵を連れて、以前よりもまっ蒼な表情で入って来たからであった。
「根もない噂であったかの、中将どの」
「それが……」
信雄はひどく昂ぶった口調で、
「満更根もない事とも思われませぬ。これッ下郎、見たまま聞いたままを申して見よ」

引立てられた雑兵は体だけは逞しいが、ひどく人の好さそうな牝牛のような感じの男であった。
「間違いござりませぬ。峯城は落ちました」
「昨夜かッ」と、数正だった。
「城にあった佐久間正勝どの、山口重政どの、中川勘左衛門どのはどうなされたのじゃ」
「佐久間さま、山口さまは尾張に引きあげると申して城をお捨てなされました。しかし、中川さまは途中で討たれたと、われ等引揚げの途中の村で百姓衆に聞かされました」
「なに中川貞成が討たれたと!?」
これは信雄もはじめて耳にしたのに違いない。さっと眼を血走らせて声を癇立てた。
中川勘左衛門貞成は、岐阜に対する尾張の押え、犬山城の城主だったのを信雄が、北伊勢へ援軍として派遣してあったのだ……

五

家康はこれも身をのり出すようにして、
「中川貞成が討たれたとあれば考えねばならぬ。それは信じ得る噂かどうかじゃ」
「直答許す。徳川殿へ、その折のこと詳細に言上せ！」
信雄は叱りつけるように躰をふるわして雑兵に言った。
雑兵はその声に気押されて、小さくすくんだ。
「それがしは、ただあわただしく通りかかった途中で、百姓衆に聞かされましたもの……真偽の

ほどは……わ、わ、分りかねまする」
「真偽は、分らぬとか。うぬッ、真偽のわからぬ事を、なぜ軽々しく言いふらす」
「はい。お上のお耳に入る……などとは、思いも寄らず、つい、峯城のことを朋輩にたずねらるるままに……」
雑兵がいよいよ小さく、震えながら言うのに、家康は軽くうなずいて、
「よし、それ以上知らぬとあれば退ってよかろう。中将どの……」
「退れッ！」と、信雄はもう一度叱りつけて、
「中川勘左衛門が討たれたこと、敵方に知れては一大事、すぐに物見を出して調べさせましょう」
家康はそれにもう答えなかった。
戦目付としても、犬山城の城主を伊勢に応援させたのが、すでに家康には心外だった。岐阜から尾張をうかがう敵があるとすれば、すぐにも第一線になる犬山城ではなかったか……
「いかが、すぐに物見を出しましょうか」
家康が再び眼を閉じて考えだしたので、信雄はまた訊ねた。
「よろしかろう」
「されば、暫くこの場を……」
あたふたと信雄が出てゆくと、酒井忠次が大形にため息した。
「心細い、お味方じゃぞこれは」
「忠次」
「はい」

「これは筑前に、してやられたかも知れぬ」
「してやられたとは……いやな言葉でござりまするなあ」
「こなた、直ぐに桑名へ発つ用意にかかれ」
「桑名へ参って何とするので」
「あの地で伊勢の味方との連絡に当るのじゃ。他の者では心もとない。その方参れ」
「と、仰せられると、筑前めは、やはり岐阜城へ入って来て、それから尾張へ侵入を志す……と、ご覧なされたので」
「それが、もはや少々手遅れかも知れぬ。どうも坂本から大坂への引き上げ方が、あっさりしすぎていると思うた」
「あっさりしすぎたとは、どのような肚なので」
「池田勝入や、森武蔵が、簡単に味方したという証拠じゃ。それならば、或いは勝入、もはや犬山城に向って進んで居るやも計られぬ」
「なるほど、それでは風雲急じゃ」
「それからこなた、服部半蔵に、南伊勢へ行けと申せ」
「服部半蔵を……南伊勢へと申すと、松ケ島城へ遣わすので」
「そうじゃ。半蔵ならばやるであろう」
「して殿は、この清洲から、いずれへ駒を」
畳みかけて訊ねると、家康は三度び眼を閉じて、
「それをいま思案中じゃが……やはり、小牧山であろうかの」

その時再び血相変えて信雄が広間へ引返して来た。

六

信雄の顔いろは、陶器のように蒼ざめて、眼だけがギラギラと燐光を放っていた。
「これは……大事が、出来てしもうた」
昂奮というよりも、狼狽と憤怒とで舌があやしくもつれている。
「何事でござりまする」
ものには動じない石川数正も、この時はゾーッと背筋が寒くなった。よい事ではない。凶事に違いないと直感出来る信雄の形相だった。
信雄は立ったまま、しばらくわなわなと震えている。
「仰せられませ。合戦に大事はつきものでござりまする」
「それにしても、何という頼みにならぬ者どもか」
信雄はもう一度キリキリッと歯を鳴らして、
「敵の先鋒が、犬山城に入りました」
「なにッ、犬山城に先鋒が入った……」
「その通りでござる」
「先鋒が入った……と、仰せらるれば、それは落城ではござりませぬか」
「その通りでござる……」
「中将さま！　歯に衣をお着せなされまするな」

数正のあとから、忠次が癇を立てて口をはさむと、
「待て！　……」
と、家康は忠次をおさえた。
「考えていない事ではない。やって来たのは池田勝入でござろうな」
「勝入と森武蔵」
「勝入の随身には、かつて犬山城の町奉行をしていた日置才蔵と申す者が居る筈、才蔵めが、何かと町人に連絡して、城内の様子をさぐらせていたのに違いあるまい」
「無念ながら、そのようでござりまする」
「それゆえ、城主の中川貞成を伊勢へ遣わされたことは、筒抜けに分っていった。城主が留守とあれば今のうちにと……これは勝入ではなく、わしでも同じことであろう、して、犬山城の留守居は誰がして居りました？」
「中川勘左衛門の伯父で、僧の清蔵主と申す者に、油断するなと呉々も申付けて置きましたに……」
「それは仰せられるな。城攻めは相手の最も得意なわざ。それに寄手は人数が遥かに多かろう」
いつかあたりは暮色になずんで、みんなの顔がおぼろに見えだしている。
「これは面白くなって来たの、忠勝」
家康ははじめて、本多平八郎忠勝に声をかけた。
「われ等が戦ぶりは、緒戦に一撃喰うと、はじめて五層倍、十層倍と強くなる。鍋の昔からそちもそうであったな」

「いかにも、五体の肉が、武者震いを始めてござりまする」
「敵の先鋒が、鬼武蔵と異名を取った森長可とあれば無理もない。筑前が家来の鬼が勝つか、この家康の家臣の鬼が勝つか。ハハハ……面白うなって来たのう忠勝」
「御意！　これを野戦に誘うて、目にもの見せてやりまする」
「ハハハ……」
家康はもう一度声をあげて笑ってから、まだまっ蒼になって立っている信雄に言った。
「これで決まりましたの。大丈夫と思われた尾張の土を踏まれたのでは一歩も退けぬ。家康は伊勢路へは参らぬ。まずこの敵を追い落そう」

七

緒戦は家康にとって、決してかんばしいものではなくなった。しかし、これで秀吉の凡その肚は分った気がする。
犬山城を占拠した池田勝入の行動が、そのまま秀吉の作戦を囁きかけて来るのである。
恐らく池田勝入は、こんどの戦で秀吉を感嘆させてやろうと手柄を焦っているのに違いなく、焦る背後には秀吉の命があったと見て差支えなかった。
先ず北伊勢で戦闘開始、その方面に出て行くと見せかけながら、虚に乗じて犬山城を占領し、更にすすんで信雄の本拠清洲城へ殺到する。
城攻めは秀吉の最も得意とするところだ。
そこで、清洲城を囲んでおいて自身は岐阜城まで出張って総指揮を執ってゆく。

そう分れば、家康にも対策はあった。むしろ家康は、秀吉自身に伊勢路へ出て来られることを秘かに怖れていたのである。
伊勢における信雄の地位は、尾張におけるよりも遙かに危いものであったし、水軍も秀吉に多く荷担しそうな危惧があった。
それにもう一つ怖れていたのは緒戦の戦況があまりに順調にすすんでゆくと、信雄の発言権が拡大して、家康の指揮の妨げになりはしまいかと言うことだった。
表面は信雄対秀吉の戦である。が、しかしそれはどこまでも表面のことであって、内実は秀吉対家康の互いに存亡を賭けた一大決戦なのである。
それだけに家康は、むしろ緒戦の困難は心ひそかに喜んでさえいた。
「まずこれへ、お坐りなされ」
思いがけない犬山城の喪失の知らせに、まだわなわな震えながら立っている信雄に、家康は微笑したまま床几を指さした。
そして、さりげない様子で、
「小平太、地図を」
と、ひろげてあった図面を、榊原康政にわが前へ持参させて、それから、
「灯りを」と、静かに言った。
燭台が明々と点じられた。家康は軍扇を膝に立てたまま、しばらく丹念に図面を見ていて、仲仲口を開かない。
本多平八郎忠勝がニヤリとしたのは、敵が犬山城の線に出て来れば、味方はどう対処すべきで

あるかという事は、浜松で再三再四検討済みだからであった。
（仲々、殿も、ずるくなられた……）
「小平太」
しばらくして家康は、そばに信雄が居ることなど忘れたように口を開いた。
「筑前が、いちばん嫌いなことは何であろうかの」
「それは負けることでござりましょう」
「ハハハ……、又、小平太めがおかしなことを。負けることなら、この家康が、筑前以上に嫌いじゃわい。それ以外のことでじゃ」
「されば……」
と、康政は慎重に首をかしげて、
「逆賊という言葉でござりましょうか。光秀を討つ時に、一枚看板にした言葉ゆえ」
「なるほど逆賊か……よかろう。主家を横領したのみか、その遺児を次々に殺害せんとする、これはわが国にも唐土にも前例のない悪虐じゃ」
言い出した康政がキョトンとして、並み居るみんなの顔を見まわした。

八

突然家康の口調が変ったので、信雄だけは刺すような眼で家康の面を見つめていたが、他の者はいずれも笑いたげな表情だった。
「まことにこれは天人ともに許されぬ悪虐、これをそのまま見のがしておいては義が立たぬ」

「なるほど……」と、小平太は改めて嘆息した。
「それでどうなりますので、後は……？」
「知れていることじゃ。このような逆賊を見のがしておいてよいものか。そこで徳川三河守家康、決然と起って義兵を挙げ、故信長公の遺児信雄どののために戦う。日本国にいまだ正義の士があらば直ちに馳せ参じて、この義戦に加わり、天人ともに許さぬ逆賊羽柴筑前を誅罰せよとな……」
「高札でも立てまするか」
「そのことじゃ」
と、家康は再び柔い声音になってうなずいた。
「文章はよく吟味してな。見た者の血の沸くように致せ。立てる場所は、まず、犬山城と、これ、この小牧山の北方に急げ」
「なるほど……」
「多い程よいぞ。そして、このあたりに、ずっと立て終ったらば、遠慮はいらぬゆえ川を越えての、美濃中へもどしどし立てさせよ」
「かしこまりました」
「急げ。すぐに用意にかかれ」
「はッ。では……」
「忠次！」
「はいッ」

「おぬしも出発せよ桑名へ。そして服部半蔵を南伊勢へ急行させよ。さもなくばそっちが危くなろうぞ」
「して、殿は何となされまする」
「今夜中から、小牧山へ陣をすすめる用意にかかる。一刻遅れるとこの清洲城が危くなるわ。急げッ」
　本多平八郎は、またニヤリと唇をゆがめて笑った。
(仲々殿もうまくなった……)
　こういわれると、信雄は口をはさむ隙もなくなる。
「では……徳川どのには小牧山に？」
「他のどこぞに、勝入の進軍をさえぎるところがあれば別でござるがの」
　家康は信雄にかるくそう答えると、
「忠勝！」
と、こんどはせき込んで平八郎に眼を向けた。
「その方も急げよ。勝入と森武蔵、必ず前へ進ませるな」
「その儀ならば……」
　忠勝が胸をたたくと、家康は、再び信雄に眼を向けて、
「かの高札は、逆賊を、少しも早よう美濃へ誘き出す手段でござる」
「なるほど……」
「それればかりではない。これを立てておくと、心の迷うておる領内村民の押えにもなりますの

で」
「領内の村民が迷うておると思われますするか」
「それはのう……何分犬山城を奪われて居る上、北伊勢のこともやがてみなの耳に入ろうで、打つべき手だけは、きちんと打っておかねばなりますまい。戦でござるからの」
「では、殿！　参りまする」
生まじめな顔で忠次が言った。
「おう、早ようせよ」
信雄は完全に浮き上った。しかし、その眼は感動にうるんで赤くしめりだしている……

九

評定は、徳川家の重臣たちが、次々に席を起つに至って終了した。
信雄（のぶかつ）は奥へしりぞき、家康は石川数正と共に信雄のあけてくれてあった表の大書院に引きあげた。引きあげる途中の廊下で家康は数正をかえりみて、
「茶屋は参って居るか」
そう訊いてから、
「やはり、思ったようであったな」
と、微笑してみせた。
「仰せのとおり、人間の思案には、さして違いはないもののようで」
「このまま筑前が、あせって野戦に持込んで来ればよいがの」

「まず、茶屋どのの、ご報告をおききなさるが宜しゅうござりましょう」
「そうしよう。が、今日から当分また茶屋と呼ぶなよ。松本四郎次郎清延は家康の側衆じゃ」
数正は小さくうなずいて、
「その松本四郎次郎が着到しておりまする。大坂付近のことは詳細に分りましょう」
城の内外は、人馬のうごきまであわただしく、窓から見える城内から城外へかけて、幾筋もかがり火が夜空へ焔をのばしていた。
「お館……」
「なんじゃ」
「池田勝入は、小牧山の近くへ出て来て、放火をしませぬかなあ」
家康はフフッと笑った。
「放火をすればどうじゃというのだ」
「いやべつに……」
と数正はそのまま小姓に書院の襖を開かせた。
家康もそれなり何も言わずに書院のうちへ通っていったが、榊原康政に高札を立てるように命じた意味を、どうやら数正も悟ったらしかった。
その第一の目的はむろん秀吉を怒らせるためであったが、第二の目的はたぶんに勝入を昂奮させようとするところにもあった。
秀吉の最も嫌う逆賊の高札を、やたらに占領地の周辺に立てられては勝入ならずとも昂ぶろう。昂ぶることは、そのままその人物の弱点を露呈させることになる。勝入が万一これに腹を立

て的確な進軍の計算を持たずに、尾張の村々を焼きはらいでもして呉れたら、それは家康の思う壺であった。
何といっても侵入軍は、その地の土民の協力を得ることが第一なのだ。情報を得るにも馬糧、食糧を調達するにも、土着民の心を掴まなければならなかった。
しかも秀吉はその妙手を躰で知っている。それに対抗するためには、勝入をして尾張の地を焼き払わせて、土着民の反感を買わせておいて、家康の手でこれを宣撫することであった。
そうなったら、逆賊誅伐の高札はまた、単なる嫌がらせから、欠くべからざる戦略的な意味を持つものに高揚されてゆく。
（数正め、気がついている）
家康は笑いながら座につくと、
「四郎次郎、六ツ半に到着、お待ち申上げて居りました」
と、茶屋が声をかけた。今日の茶屋はなるほど凜々しく胴丸つけて、立派な武士に戻っている……

十

家康は鷹揚にうなずいて、小姓たちに眼くばせした。四人の小姓が同時に立って、縁の外と、次の間に向って見張りについた。
「どうじゃ堺、大坂の空気は？」
茶屋四郎次郎はもう一度きちんと頭を下げて、

「はい、商人衆はいちがいにものを割りきりませぬが、お館さまをよくも申しては居りませぬ」
「再び、世間を混乱させる……と、言うのであろう」
「混乱したら、何とするか……と、いう危惧のようでござりまする。中には問題になるまいと申す者もあるようで」
「問題になるまいか……筑前の方が強くてのう」
「仰せの通りでござりまする。しかし中には、その反対に、いかなる時にも軽挙はなさらぬお館さまゆえ、起つ以上は勝算あってのこと……と、申される人物もござりまする」
「それは誰々じゃの」
「はい。納屋蕉庵の一味でござりまする」
「その他には？」
「その他には、これは、はじめから筑前と、お館さまの間で、打合せ済みの八百長ではあるまいかと申す者がござりまする」
「なに、ヤオチョウとは何のことだ」
「これは恐れ入りました。なれあいのことでござりまする」
「フーム。わしと筑前のなれあいで、信雄を除くために旗挙げしたと申すのか」
「その通りでござりまする。それらの者は——見ていよ。いまに、筑前どのと徳川どのは手を握り、立場を失うて滅んでゆくのは信雄どのじゃと申しまする」
家康は渋い顔になって、あわててあたりを見回した。
そのような噂を撒きちらしているとすれば、それは秀吉自身の策謀にちがいない。

「数正、きいたか」
「はい」
「恐ろしい男だの、筑前は……」
「仰せの通り、ご油断はなりませぬ」
「手痛いところを突く。わしと筑前がかげで手を握るやも知れぬと思うたら、四国勢も一揆の衆も、必ず心がおくれよう。敵ながらあっぱれな……」
そこまで言って、急に家康は声をおとした。
「そのような噂が信雄の耳に入らぬよう、充分注意せねばならぬぞ」
「御意にござりまする。その儀は充分……」
数正がぴたりと眼を据えて答えると、家康はホッと吐息して視線をまた茶屋にうつした。
「何と申しても世評は吟味せねばならぬ。今の噂のように見る者があるは恐ろしいことじゃ」
「それほどお心にかけられる事もござりませぬが……」
「いや、かけねばならぬ。念のために訊ねるのじゃが、その噂を口にしていた者の名を覚えているか」
「はい。鞘師のソロリ新左と申して、いつも世の中のことを、一ひねりも二ひねりもせねば納まらぬ男でござりまする」
「ふーん。鞘師のソロリ……その者は筑前のもとへ出入りしているの。よしよし、それは分った。それで筑前は、堺、大坂の押えに誰を残して来る気配じゃ？」

十一

茶屋……ではなくて、再び松本清延にもどった四郎次郎の、いちばん大切な探索事項は、大坂近辺の秀吉の配備であった。
これに依って、秀吉が、何日頃に、その主力を総動員して家康の前に立ち現われるかということの判断が可能になる。どこまでも位攻めを志す秀吉は、そのあたりの戦況に不安のある間は、決して美濃へはやって来まい。
「されば……」
と、四郎次郎は、いちだんと緊張を見せて、
「岸和田城へは中村一氏を入れましたところを見ますると、大坂城の留守居は、蜂須賀彦右衛門正勝ではないかと存じまするが」
「岸和田城が中村一氏か」
家康はふと眉間に皺をきざんで考えて、
「さすれば、新城の留守居は蜂須賀であろうのう」
「紀州の一揆の動きを、敏感に見ぬいて居りまする。これは止むを得ませぬ。根来、雑賀の衆徒が、時おり堺の街に鉄砲を求めに参りますので隠しきれませぬ」
「そうであろう。誰もが嫌いな戦じゃ。戦がありそうなと分れば、空気で感ずる。そうか留守居は蜂須賀……」
家康はもう一度同じことを呟いて、それからじっと眼を凝して二人を見ている数正に、

「まだ間に合うのう数正」
「間に合うとは……!?」
不意を衝かれて数正はきき返した。
「何をうかつな、その方に頼んであることじゃ」
「それがしに……」
言いかけてふっと数正の顔いろは変った。
家康は二度とそれを言わなかったが、数正にとっては身を切られるよりも辛いことであった。
他でもない。秀吉の策謀に乗ったと見せて、数正から、秀吉に密書を送れということだったのだ……
秀吉の方では、家康側の味方の戦意を失わせるために、秀吉と家康は、なれ合って、信雄を除こうとしているのだという噂を流している。そこでその噂に乗った態にして、
「——たしかに家康には戦意がない。折を見て、秀吉と握手する気でいる」
家康の側近から、そうした密書が届いていたら、充分に秀吉に動揺のお返しが出来るであろう。それがまだ、間に合うという意味であった。
「数正、小牧山は、いちばん高いところでどれだけあったかの」
家康はもうその事には触れず、
「たしか、二百五十尺ほどだと思うたが」
「二百八十尺はござりまする」
「そうか。北西にあたって三井、重吉、小折と、三つの砦を作って犬山の押えにせねばなるまい。

四郎次郎」
「はい」
「犬山城を、池田勝入にとられた。それゆえ、明早暁から備え変えじゃ。そのままでな、疲れたであろう少し休め。わしも一刻半ほどまどろもう」
家康はそう言うと、もう一度数正に、
「これで手落ちはないのう。明日、中将どのと連れ立って小牧にのぼるぞ」
と、軽く言った。

犬山思案

一

池田勝入は、犬山城の物見台に立って、南にひろがる城下から、北に削りおろした十数丈の木曾川の勝景をゆっくりと眺めまわしていた。
傍には息子の元助と、婿の森武蔵守長可が端麗な顔を並べて、陽春の陽の眩しさに眼を細めている。
近侍は少しく離れて控え、三人の話声はみんなの耳には届かなかった。
「尾張へ入ればのう……」
と、勝入は遙かに鵜沼の渡しへ小手をかざしながら、

「われ等、勝三郎時代からの生えぬきの地じゃ。家康にしてやられるようなことはない」

森武蔵守はそれには答えず、

「家康は小牧山へ出て来ると思いまするが」

「出て来てもよい。まさか、自身では来まいからの。自身は清洲城で指揮を取ろう」

「しかし、野戦が得意の三河勢ゆえ、或いは……」

「出て来たら更によい。自身で出て来る程ならば必ず三河の守備は留守になろう。さすればわれら三河に中入りして、後方を攪乱し、一気に敵勢をくじいてみせる」

そう言ったあとで、

「しかし、こなたの斥候を中止せよというのではないぞ。もはや尾張へ足はかけたのだ。充分に働くがよい」

「では、これより早速」

森武蔵守が立ちかけると、

「それがしも」と、元助も立上った。

武蔵守長可は三左衛門の長男で蘭丸の兄である。彼はこの一戦で、舅の勝入以上に功をあせっていた。秀吉を剛愎な実力主義者と見ている彼は、ここで、舅以上の戦功を立て、いちど秀吉にその手腕力量を認めさせておかなければと火の玉のようになっていた。

しかし、犬山城の占領は、何と言っても勝入の大手柄であった。勝入は、城主中川勘左衛門の留守を狙い、先に犬山の町奉行であった日置才蔵を潜入させて、町人から人質を取らしめたのだ。

したがって、家老の伊木忠次と伜の元助の先発隊が夜陰に乗じて鵜沼の渡しへ着いた時には、川面は買収された鵜沼船で埋っていた。

城内ではそれらの船が犬山城の背後に近づき鬨の声をあげて襲いかかるまで何も知らなかったという順調さであった。

(負けてはならぬ舅の手柄に……)

犬山城を勝入の手で占領された上は、次の清洲城には是が非でも一番槍をつけてやりたい。

彼は城を出ると、尖兵三十騎あまりを引き連れて、元助とともに南に下った。羽黒から楽田を経て、小牧に出ると、そこから清洲までは三里十町あまり。そのあたりの何れが陣を張るに適しているかそれを自身で確かめるためにやって来て、

「はてな……?」

と、彼は馬を停めた。前方に見える三百尺ほどの山が小牧山に違いない。と、その山頂に人の姿がチラチラ見える。

「あ、あの旗印は家康!?」

「申上げます」

と、先行した一騎が駆けもどって来て、

「徳川どのと連れだって、山頂より四方を見おろして居るのはまさしく信雄どのでござります る」

「ウーム」

武蔵守は低くうなって、それから馬を元助の方へあわただしく廻していった。

二

「元助どの、あれをご覧ぜられよ」
森武蔵守が声をかけた時には、池田元助もまた眼をこらして山頂を睨んでいた。
十五日の正午すぎで、陽春の陽はなだらかな山裾の緑を、まぶしいほどにかっきりと浮き上らせている。
「敵もさるもの、油断はなりませぬぞ」
元助は応える代りに強く舌打ちして癇性に唇を前歯で噛んだ。
「あの分では本陣をここへ進めるつもりに違いない。それゆえ舅御に、あれほど申したのだが……」
「長可どの、鉄砲は!?」
「生憎、物見のつもりゆえ」
「運の強い人だ。家康は……」
「と、いって、何時までもあのままにはさせてはおかぬ」
「と言われるが、当今、日本でいちばん運強いは筑前どのと家康どの、これは運くらべになるやも知れぬ」
「運ならば、お父上も強かった。犬山城をあのように易々と……」
「長可どの……」
「何かよい思案が浮かばれましたか」

「これは、このままには捨ておけぬ。こっちも犬山の前線へ拠点を作らねば大事になろう」
　元助は早口にそう言ったあとで、
「父に相談する要はあるまい」
　と、首をかしげた。
「相談とは？」
「一刻遅れると、それだけ相手の陣地は強まる。こん夜すぐにこの近くの村々を焼き払おう」
「なに村々を……」
　と、武蔵守は息をつめて、
「秋の刈入れ前ならば、相手に食糧を得さしめないためその要もあろうが、今ごろでは……」
「いや、われ等の手もすでにこの地に及ぶと見たら、土民は怖れて敵方へ味方はすまい」
「と、仰せられるが、万一それが怨嗟の因となっては、筑前どののお考えにもとろうかと……筑前どのは、民心の収攬が第一じゃと仰せられ、すでに諸寺社へ、それぞれ寺社領の安堵など内々に触れさせてござるそうな」
　元助はそれでまた黙った。
　黙ってこんどは山頂から四方へしきりに眼をうごかしている。
　と、その眼に、また一つ、木々の緑を縫って来る味方の一騎が映じ出された。
「あれは後方を見張らせてあった梶村与兵衛じゃな。与兵衛の手にしてい る物は何であろうか。高札のようじゃが……」
「なに高札……」

森武蔵守がいぶかしんで、その方へ馬首をめぐらした時、
「申上げます！」と、その一騎は、山上の人影に気づかぬ様子で大声をあげながら寄って来た。
「この先の村落で、村人たちが、大ぜい集り、立騒いで居りますゆえ、近づいて見ましたところ、このような札が立って居りました」
「見せろ。何と書いてある」
武蔵守は手をのばしてそれを受取り、
「や、や……」
と、頓狂な声をあげて、それを池田元助の方へ差出した。
元助は一眼見るなり、又、猛った唸りで眼を血走らせた。

三

その高札の最初には、
「――それ羽柴秀吉は野人の子」
と、眼を射るように書いてある。
恐らく森武蔵守は、その文字を見ただけで、この高札が、何であるかを直感したのに違いない。それで、いったん池田元助に渡してから、あわてて馬を寄せて来て、元助とともにそれを読んだ。

――それ羽柴秀吉は野人の子、もともと馬前の走卒にすぎず。しかるに、いったん信長公の寵

遇をうけて将師にあげられ、大禄を喰みだすと、天よりも高く海よりも深きその大恩を忘却して、公の没後ついに君位の略奪を企つのみか、亡君の子の信孝公を、その生母や娘と共に虐殺し、今また信雄公に兵を向ける。
その言語に絶した大逆無道を黙視する能わず、わが主君、源家康は、信長公との旧交を思い信義を重んじて信雄公の微弱を助けんとして決起せり。もしかの秀吉が、天人ともに許さぬ悪逆を憤り、義の重きを思うものあらば、父祖の名誉にかけて、この義軍に投じ、以て逆賊を討伐し、海内の人心に快せん……

天正十二歳

榊原小平太康政

読み終って、どちらも暫く言葉を出さず、顔も見合わなかった。
馬前の走卒と言われたことはまだよいとして「天人ともに許さぬ逆賊」に至っては、秀吉の激怒が想われて、うかつに話も出来なかったのだ。
「榊原康政めが……」
しばらくして、武蔵守が馬を離すと、池田元助は、高札をくるりと担いで馬首をめぐらした。
「いずれへ赴かれる元助どの」
「がまんならぬ。父に見せる！」
「見せたがよいと思われるか」
「これが筑前どのの耳に入ろうなら、犬山城占領の功も帳消し……見せる！　そしてすぐにも兵

をすすめさせ、小牧山をわれ等の手中に納めるのだ」
「元助どの」が、その時には元助はもう馬にひと鞭あてて駆け出していた。
このような高札が立つようでは、敵の準備もすすんでいる……そう思うと一刻の猶予も出来ない想いであった。
「元助どの」
森武蔵守も、もう一度声をかけてそれから元助の後を追った。
（ここでは是が非でも武功を樹てねば……）
そう思いあせっている自分が、勝入父子に作戦を決定され、それに従わなければならない破目になってはと、急いで帰城する気になったのだ。
まだ山頂の人々はいぜんとして、右にうごき左に停って下山の様子はない。おそらくここでも、実地についてしきりに作戦を練っているのであろう。武蔵守が駈け出したので、従う者もいっせいに馬を返した。そうなると敵も彼等を認めずにはいない。
土煙りをあげて北方へ駆け出してゆく一隊の背後から、ダダーンと銃声が追いかけた。
しかし、その時にはもう元助も武蔵守も射程をはなれていた。
城へ戻ってみると、ここでもすでに同じ文章の別の高札が持込まれ、父の勝入が渋い顔でそれを読んでいるところであった。

四

「父上、それは、いずれにて……」

元助は半武装の勝入が眉根を寄せて読んでいる高札のわきに、自分の持って来たのを暴々しく抛り出した。
「これは町外れの川辺に立っていたのを鵜飼の者が見つけて持って参ったのだ。それはどこに立ててあったぞ」
「これは、小牧山の近くの村で……うぬっ、犬山の城下まで」
「怒るな」
と、勝入はおさえた。
「これはの、われ等を怒らそうためじゃ。榊原康政という男は、仲々知恵者じゃと聞いている。怒って討って出るのを、どこぞに兵を伏せていて、手柄にしようという考えに相違ない。何の、このような子供だましの高札など」
口では元助を押えながら、しかし勝入の額にも曲りうねった癇筋が立っている。
(秀吉がこれを見たら……)
と、彼にもその不安があるからだった。
傍に控えている家老の伊木忠次が、
「これだけ書くのも容易いことではございませぬ。かようなものまで用意してある上は、よほど用心を致さねばなりますまい」
「戦に用心はつきものじゃ。誰にも首は二つないからの。しかし、このようなものに気を腐らせては相成らぬ。武蔵どのも、眼についたら、直ちに引抜いて焼き払えと布令ておいて下され」
森武蔵守はしきりに汗をふきながら、

「むろんのことで」
そう答えてからすぐに、
「地図を持て」と、小姓に言った。
「いま見て来た模様を書き加えておかねばならぬ。舅御、敵は小牧山を本陣として、あれから犬山を狙うつもりでござりまするぞ」
「やはり小牧か」
「それゆえ、われ等もすぐに犬山と敵陣の間に進出しようかと存じます」
武蔵守が急きこんで、小姓の持って来た絵図をひろげてゆくと、
「わしは一挙に、小牧山をこっちの手で占領せねば必ず悔いが残ると思う」
元助ははっきりと言いきって軍扇で小牧山を指さした。
しかし勝入は答えない。答える代りに首をかしげて、
「みんな若いぞ！」
とでも言いたげな表情だった。
「時遅るるほど敵陣は堅固になりましょう。今夜直ちに夜襲をお許し下さるよう」
「夜襲か……」
勝入は手にしていた高札をはじめて側へおいて、
「木曾川を夜渡ったようなわけには行かぬぞ元助」
「それは心得て居ります。しかし一歩でも清洲に近づいておいて、筑前どのの到着を待つのが……」

「わしは、何度も家康の戦ぶりを見て来ている。姉川でも長篠でもな。野戦となると、三河勢は、雑兵までが猛虎になるからの」
「では、こうして手を拱いて居ようというのですか。まだ筑前どのは仲々ご着到はなさるまいに……」
元助に喰ってかかられて、急に勝入はきびしい顔になっていった。

五

「手を拱いて居れとは言わぬ。ただ、相手の思う壺になるなと言うている」
勝入はそこで一段とさび声を高くして、
「戦は時に辛棒じゃぞ！　ただ進めばよいと言うものではない。仮りに、……ここで犬山城を固めていても、家康はおそらく自分からは仕掛けては来まい。長い城攻めなどは致して居れぬからの。そこで、われ等が、筑前どのの着到を待って大軍を集結する。そうなると対抗上、必ず家康もその正面に出来るだけの兵力を集めねばならぬ。何度も言いきかせているように、そうなれば三河はカラじゃ。そこで、われ等は三河を衝く……よいか。三河を衝かれたと分れば家康は引返すより他にない。家康が引っ返せば、筑前どのの大軍はそのまま尾張をひと舐めにして進んでゆく。それで勝敗は決するのじゃ」
勝入は一気に言って絵図の上から眼をそらし、
「どちらもひどく不服そうじゃの」
と、舌打ちした。

「では、こなた達はどうしようというのじゃ。まず、武蔵どのの意見から訊こう」
「それがしは……」
と武蔵守は身をのり出すようにして軍扇の尖で、犬山と小牧の間にある羽黒を突いた。
「直ちに清洲を衝くと見せかけてここに陣取り、万一小牧に隙あらば、襲いかかろうと存じます」
「なるほど、羽黒か……それならば、犬山の前衛と見てもよいの。忠次」
と、家老の伊木を呼んで、
「この羽黒はここからどれほどの距離じゃ」
「はい、犬山の南一里ばかり、小牧へは約二里でございます」
「二里と一里か。よかろう。向うがやって来るまでに、万一の時にはこの城へ入り得る。ではおやりなされ」
勝入は伜の元助よりも婿の武蔵守には遠慮しているようであった。
「お許しが出ましたゆえ、早速手配にかかりまする」
「それで元助はどうすると申すのじゃ。やはり夜襲か」
「その通り！」
元助は昂然として答えた。
「手を拱いていると分らせぬため……父上の作戦を相手に感づかれないためにも、出でては戦い、出でては戦いしなければなりませぬ」
「ふーむ。手の内を読まれぬためにか」

「そうなれば、彼等とて一時も気は許せず、気疲れ致すは必定で、あとのためにも充分に役立ちます。又、筑前どのとて、犬山城をとったあと、何の手も打たずにいたとあっては、やがてわれ等を軽んじましょう。絶えず敵を駈け悩ましていてこそ、われ等の士道も立派に立つ道理で」
「ふーむ」と、勝入は眼を閉じて考えだした。彼はやはり三河勢の野戦の強さが気になるのだ。
「元助」
「はいッ」
「約束出来るか」
「何をでござりまする」
「いかなる事があっても深追いせず、また、いかなる時にも大きな衝突は避けて、敵に一泡吹かせたら、直ちにかわして城へ引っ返すと……」
「それは出来ます。出来ればお許し下されますか」
元助は眼を光らせてきき返した。

六

「いつにても引返せる……と、約束したら許してやろう」
勝入にしても別に手を拱いていた訳ではなく、敵を狼狽させてみたい心に変りはなかった。
それにここで、元助も武蔵守も押えたのでは或いは士気にかかわるかも知れないとの危惧もあった。
（何しろ家康側では、このような高札まで立てて挑発して来ているのだから……）

「お許しが出た！　では、早速われ等も支度にかかろう」
　元助も武蔵守も張りきって座を立とうとするので、
「呉々も油断はするな。よくこの勝入が言葉を味おうての」
　勝入はもう一度念をおして、森武蔵守の羽黒進出と、元助の遊撃とを許してやった。
　その夜のことだった。秀吉のもとから、一柳末安が、秘命を奉じてやって来たのは……
「筑前さまには、ご貴殿の犬山奪取を、でかした！　でかした！　と躍りあがってお喜びなされました」
「いや、それほど過賞されても困るが」
「これほどの大手柄を立てた勝入どのに、万一のことがあっては一大事ゆえ、二十日までには、必ず近畿を納め、大軍を引連れて出て行こう。出て行けば戦は七日ほどで勝ってみせる。その旨呉々も申伝えよとの仰せにござりまする」
　勝入は何度も続けざまに頷いた。
　ここで秀吉に、池田家のもつ実力を示しておくことは、子孫のために最も大切なことだと勝入は思っている。
　もはや秀吉の天下は動くまい……と、すれば、信雄亡き後の美濃、尾張から、あわよくば伊勢、三河と、その勢力を伸展させる絶好の機会なのだ。その夜のうちにすぐに立戻らなければならぬという末安を無理に城にとどめ、翌早暁船で岐阜へ渡すように計ろうてから、わざわざ城の内外を自身で見回って、それから勝入は寝所に入った。
　仲々寝つかれなかった、万一夜襲などのことがあれば前線の羽黒に婿が控えているのだし、今

のうちぐっすり眠っておかなければと思うのだが、勝入ほどの、百戦練磨の老雄にもやはり感傷じみた感慨はあるものだった。
勝三郎の昔から信長について暴れまわった尾張の土地であった。その信長が、田楽狭間で今川義元を討った時の興奮……いや、信長が本能寺で討たれたと知った時の狼狽……
（――いったいこれはどうなるのか……）
そう思って弔い合戦では死ぬ気であった。
それが、秀吉と共に大勝を博して、いまは再び尾張で戦旅の夢を結ぼうとしている。
しかもこんどは、勝てば尾張の太守であり得るのだ。
眠られぬままに、何度か寝がえりを打っている間に、勝入は、ふと、城の庭で見張りの者の立騒ぐ声を耳にした。
（何ごとか起ったなッ）
パッと布団を蹴って高縁へ出て、ふーむと勝三郎は呻いた。
南の空がまっ赤になっている。
火事だ……
「誰ぞある。あの空の赤さは何ごとぞ」
勝入は高縁から庭にうごく雑兵の人影に大声で問いかけた。

七

勝入は自分のそばに駈けよって来る近侍の足音を意識しながら、物見やぐらにはせのぼった。

何故か胸があやしく騒ぐ。戦場での火事ゆえ放火であるのは知れていたが、それが敵であるという予感よりも味方ではないかという怖れが胸を波立たせた。

尾張の民心は、信長以来、きわめて自意識が高く、その愛郷心は強烈に育っている。

信長の手によってまず関所が取払われ、出入り自由でありながらしかも盗賊が姿を消したという誇りは、彼等の胸に今でも脈々と活きている。

したがって、この地でひとたび民心を失うたら、たとえ無言にしろその抵抗はおそろしい。

彼等はおそらくその放火の主を、統治の才能のないものとして、長く軽侮しながら怨んでゆくに違いなかった。

勝入は物見やぐらに駈けあがると、南の空へ小手をかざして暫く無言で火勢に見入った。

放火は一ヵ所ではなかった。点々とした火焔の集団が五指にあまる。それらが水蒸気を強くふくんだ空の雲に映えて、中天まで赤く染めている。

戦場を馳駆したものにはみなその覚えはあることだったが、火をつけて廻る者の心理と、焼け出される百姓町人の心理とは恐ろしすぎる対照だった。

一方は狂った悪鬼であり、一方は踏みつぶされ、焼き殺される誘蛾灯の蛾に似ていた。

それだけに、一度戦火に会うたものは、生涯相手を呪いつづける。

勝入は放火の火勢の並々ならぬのを見てとると、

(これが敵のやったことならば……)

と、ふと思った。

(これだけでも、わしは勝てるが……)

「まだ、誰も知らせて来ぬか。火を放ったはいずれじゃ。敵か味方か、分り次第に知らせよと申して来い」
「はッ」
すぐに一人がやぐらを駈けおりていったが、仲々それは戻って来なかった。
夜の火災は近く見える。これは、或いは武蔵守の陣をすすめた羽黒よりも、はるかに先かも知れぬ……
「申上げます！」
近侍が再びかけあがって来たときに、勝入は闇の中をあわただしく城に近づく騎乗の一隊のあるのに気付いた。
いずれも無灯であったが、雲の上の月と火災の照返しとで黒く小さな線の伸びに見えてくる。
（敵ではあるまい。誰もさえぎるものはないゆえ……）
「申上げます。夜襲の味方、ただいま無事に城に戻ってござりまする」
「それは見届けた。火を放ったは、敵か味方かまだわからぬか」
「むろん味方でござりまする！」
その若侍は得々として答えた。
「敵が砦を築いている小牧の周辺を焼き払い、みごと度肝を抜いて来たよし、これで土民も徳川勢にうかと協力は致さぬことと存じまする」
「たわけめッ！」
勝入は全身をふるわせて怒号した。

八

勝入にとって夢の半ばを突き崩された感じであった。
(念が足りなかった!)
怒りの裏でその後悔も胸を嚙んだ。
信長のこの地での成功は、土民とのふしぎな和親にあったと言ってよい。吉法師の少年時代から、彼は村から村をめぐり歩いた。村人たちと裸で相撲もとったし、一緒に踊の輪にも入った。
そして、この地をがっしりと固め得たのが、その後の大をなす底の支えになっていた。
しかも勝入は、その信長とともに、影の形に添うような、つねに側にあって育った身ではなかったか……
それだけに、
(おお、勝三郎さまがこの地に戻らっしゃったのじゃ!)
村々の故老から、そう懐しがられる国守の夢を抱いて来たのだ。
ところが、今夜の放火はその懐しがられる筈の勝三郎を、村々を焼き払う暴王に一変させてしまったのだ。
「呼べ!　呼べっ元助を」
言いながら勝入は櫓をかけおりた。途中で何度か足をふみはずしそうになったのは、夢を打砕かれた打撃が、どのように大きかったかを証明してあまりある。
広庭へ出ると、味方は雑兵どもまで、異常な昂奮でわき立っていた。

「焚け、かがり火を。若大将が、敵の荒胆をとりひしいで戻って来たのだ！」
「これで胸がすーっとしたの」
「見ろ、まだ空の色が少しもさめぬぞ」
こうした会話の中を、勝入は、眼をつりあげて通りぬけ、追手門の前にひらけた庭の幕舎に入っていった。
「元助を呼べッ！　早く……あ奴何のつもりでこのような、たわけたことをしてのけたか」
床几にかけて、もう一度怒鳴って、しかし、勝入はゾーッとした。
（いったいわしは元助を皆の前で呼びつけて、どうする気なのだろう）
ふと、それを想ったのだ。
武勇も器量も、人に劣らぬ元助を、斬らねばならぬというのだろうか……？
「忠次を呼べ。忠次にせよ」
うかつに元助を呼んで、悔いても及ばぬ結果を招いてはと、あわてて家老の伊木忠次の名を呼んだが、その時にはもう近侍に呼ばれて、元助の方が先に幔幕の中に入って来てしまった。
「父上！」
と、元助は立ちはだかったまま、勝入を直視して、
「お叱りは覚悟の上で火を放ちました」
「な、なにっ、その方ではあるまい。家来の中にその方の命に服さぬ奴があったに違いあるまい。むろんそれはその方の責任じゃ。したが、大切な戦の前ゆえ、直接手を下して軍律を破った奴、わしがここで成敗する。出せ、そ奴を！」

勝入が憤怒と狼狽（ろうばい）でいきなり刀を、抜き放つと、元助は笑いもせずに、父の白刃をじろりと見やってその前にどっかと大きく胡坐（あぐら）をかいた。

「他に手を下した者はない。斬られませ」

かがり火の焔に照し出されたその横顔は、父の勝入以上に不敵に落着いた面魂だった。

九

勝入は狼狽した。いちばん怖れていた事態が、とっさに眼の前で重なりあった。

放火の罪を、やはり元助は身一つに引受ける覚悟だったのだ。

「この元助が命を下さず、誰が、あのような事をするものか。さ、斬られませえ」

「たわけめ！　こなた、この勝入を盲にする気かッ」

「これはしたり、父上と話し合うても分らぬこと……というより、筑前さまに堅くとめられていることを、わざわざ相談するほど元助は血迷うては居りませぬ。さ、斬って軍律を正したうえ、この戦、並の戦ではないことを、しかとお悟りなされませ」

「な、な、なんと言う！」

勝入は白刃を持ったまま躍りあがって伊木忠次の名を呼んだ。

「忠次！　この逆上者を引立てよ。この臍（へそ）曲りめは、いったん言い出すと理も非もなくなる痴（し）れ者じゃ。早く引っ摑んで謹慎（きんしん）させよ」

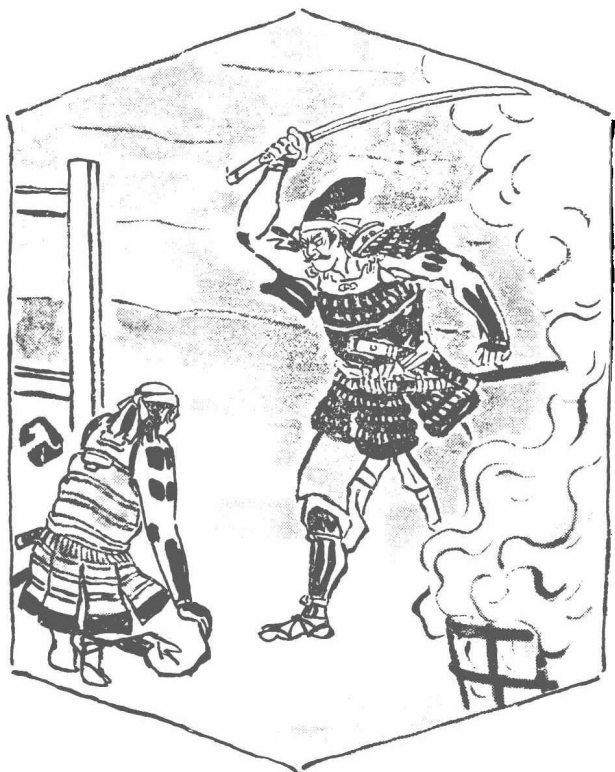
その声の終らぬうちに、

「忠次、只今それへ……」

幔幕の外で答えて、
「起てッ！」
と、誰かを引立てて来る気配であった。
元助もきっと顔をあげてその方を見やってゆく。幕舎の中へ入って来たのは、伊木忠次と、その家来にうしろ手に縛られている、二十三、四の見知らぬ武者であった。
「立てッ、不埒者め！」
伊木はもう一度その武者を叱りつけて、それから勝入に向き直った。
「小牧周辺の村々に火を放った不届者、引っ捕えて召連れました。ご油断はなりませぬ。若殿元助どのが仕業と見せて、こやつは敵の廻し者にござりまする」
「なに!?　敵の廻し者じゃと」
「されば、その名までついに白状致しました。榊原康政が手の者にて為井助五郎と申す奴」
伊木忠次は威猛高にそう言うと、
「この場でお手討下されませ。さもないと、どのような小細工を、向後も続けるか分りませぬ。あの高札と言い、放火と言い……」
「よしッ……」
勝入は、忠次が縄を解いて、茫然としている武者を足許に引きすえると、さっと白刃をふりかぶった。
「あっ！」
と、人々は息をのんだ。

あまりに勝入の斬り方が早かったのだ。
自慢の太刀の下には、すでに武者の首がころがり、伊木忠次は、遮二無二元助を幕舎の外へ引立てている。
小姓が走り寄って勝入の太刀を拭き終った時には、忠次の他の家臣が、斬り捨てられた武者の遺骸と首をもう取り片付けにかかっていた。
勝入はその間、一言も口を利かなかった。
ホッとするより、心に残った幾つかの、後味のわるい疑問のために、口も利く気になれなかったのだ。
勝入は黙って床几に腰をおろすと、
「みんな、遠慮せよ。わしはここで一眠りする」
ぐっと腕を組み、傲然と両脚をふみ開いたまま眼を閉じた。

十

勝入はひとしきり、身動きもせずにおのが呼吸を数えていた。
脈搏も息も乱れてはいない。が次第に気が静まる迄は、疑問が幾つ重なりあっているのかよく分らなかった。
何故、元助は秀吉からまで厳禁されている尾張での放火をやってのけたのか?
とっさに伊木忠次が曳き出して来た武者は何者であったのか?
まこと徳川家の部将、榊原康政の家臣であったのかどうか?

（或いは、元助も放火し、徳川方の者もまた、罪をわれ等になすりつけようとして、別に放火していたのではなかろうか……？）
元助が全然身に覚えのないことで、自分を斬れなどと言う筈はなかった。さすれば、元助もまた放火して廻ったことは疑う余地がない。
（そうじゃ、これは忠次を呼んで訊ねてみねばならぬ……）
が、まずどこから訊き出すかで、又しばらく勝入は迷った。
「誰ぞある、忠次を呼んで来い」
腰かけたままひと眠りし、眼がさめた態にして近侍を呼んだ時には、すでにあたりは夜明けの気配を漂わしはじめていた。
伊木忠次は、やがて勝入が呼びに寄こすのを待ちうけていたと見え、昨夜のままの具足姿でやって来た。
「二人だけで話がある。みなは暫く来るに及ばぬ」
勝入は忠次の到着をつげて来た近侍に言って、はじめてあたりを見回した。
「忠次、さっきわしが首討ったは何者じゃ」
伊木忠次は、ひどくムッとした表情で、
「それがしの家臣にござりまする」
「なに、その方の家臣じゃと!?　では、榊原康政が廻し者だと申したのは……」
そこまで言って勝入は語尾を切った。訊くまでもないことだった。伊木の家臣が康政の廻し者である筈はない。

「忠次、いったい元助は、何を考えて火など放ったのであろうかの」
「それを、先に若殿にお訊ねなされば、あのような哀れな者を失わずに済みました。殿ももう少し前後をお考えなされて太刀をお抜き下されませ」
「悪かった!」
勝入はあっさりと謝った。
「では、あの者に、身代りになるよう、その方から申聞かせて呉れたのか……悪かった! 遺族などのこと、この勝入も手厚く扱おう」
忠次はまだそれでもムッとした様子で、
「若殿は、殿をご軽率なお方と、私に評されました」
「なに軽率じゃと……」
「人が好すぎるのだとも申しました。羽柴筑前どのを未だに朋友と父の方では思うて居るが、先方ではただの家臣と思うて居ろう。それゆえ、どのような戦功を立てたからとて、決して美濃、尾張、伊勢、三河など、そっくり下さる筈はない。それどころか、うっかりすると、徳川どのの直前に晒され、全滅させられるやも計られぬ。その甘さをまず打砕いておかなければわが家の末と——言わば殿への警鐘のつもりでござりましょう」
勝入は、一瞬、カッと頬を赤くし、しかし、すぐ口を開かなかった。

十一

(怒ってはならぬ!)

と、勝入は自分を押えた。勝入と秀吉の間にある友情は元助にはもう分らないのかも知れない。それが分らなければ元助の危惧は、父を想い、わが家を想う心のあらわれで、少しも責めるに当らないことなのだ。

が、それにしても、放火してのけた意味は納得出来なかった。

（そうすることで、いったい何の利益があるというのか……？）

「忠次……」

「はい」

「とにかく元助を呼んで呉れ。いや、わしは怒らぬ。わしは元助の考え方を訊きたいのじゃ。わしが筑前どのを見る眼は、或いは甘いかも知れぬ。が、腑におちかねるところもある。怒らぬゆえ呼んでくれ」

伊木忠次はしばらく考えていたが、

「ではお呼び致しましょう」

うなずいて出ていって、すぐに元助を連れて来た。元助は前よりも一層きびしい無表情さで、入って来ると立ったままで父に言った。

「お呼びだそうで」

「立って居らずに掛けなされ」

元助はしかし、床几へかけずその場へ大きく胡坐していった。

「火を放ったのはその方か」

「分っていながら、父上は、他の者をお斬りなされた」

「それがその方には不服なのだな」
「不服とは申しませぬが、元助とて考えあってした事でございます」
「その考えを申してみよ。火を放って、われ等に何程の得があるのだ」
「父上は、こんどの敵を、光秀や柴田修理の場合と同じに考えておいでなさる」
「光秀や修理より弱いとは思うて居らぬが。強いと思う心は戦に禁物じゃ。それを臆病風とわれ等は言うぞ」
「これはしたり、われらが軍略では、敵の強さを知ることは、臆病風ではなくて、用意のもとでござりまする。今まではいつも筑前どのは位攻めで勝たれた。しかし今度はそうは行かぬ。しかも、筑前どのもまた敵を甘く見てござる」
「筑前どのが甘く見ていたら、その方意見を具申したらよいではないか。火を放って土民の心を失う必要がどこにあるのだ」
　勝入は冷静に理詰めでいったつもりであったが、元助は、それだから話にならぬと言う風に頭を振った。
「こちらから意見を上申して訊き入れる筑前どのと思ぼされまするか。それこそ却って鼻の先で笑われて、すぐにも撃破せよなどと仰せられる。そうなったら、池田勢は敵の餌食じゃ」
「それゆえ火を放ったか……分らぬ。そのような言い方では」
「分らぬお父上じゃ」
「何じゃと元助！」
「わしはお父上に背水の陣を布かせたいのじゃ。いや、それが事実いまの池田勢のおかれている

位置なのじゃ。うしろには負け戦を知らぬ筑前どの、前にはそれ以上に冷やかな徳川どの。その両者にはさまれて、土民の味方など恃んでいてどうなるものか。四周すべてこれ敵！　その覚悟をうながすためにすすんで火を放った。悪いかお父上……」

十二

勝入はしばらく呼吸をつめて元助を睨んでいた。まだ怒りの渦は胸にあったが、いまそれを元助に見せてはならぬという自制もあった。

冷静に聞いていたら、元助の言葉には一理も二理もあるような気がする。たしかに秀吉は負け戦を知らぬゆえ、他人には冷酷なところがあった。家康の戦上手は充分に知っていたし、先陣して来たわが勢が、そう易々と勝てるとは思っていなかった。

それにしても、元助が言うような、放火までしてわざわざ局面を悪くしてゆく必要がどこにあろう。

「納得出来ぬ」しばらくして勝入は吐き出すように、

「放火の得は、味方の心を引緊める。ただそれだけのためか元助」

「これはしたり……敵を強くするのじゃ。わしは……」

「なに、敵を強くする。元助！　敵が強いゆえ、その方は心を砕いているのではないか」

「強いうえにも強くするのじゃ！」

と、元助は言い返した。

「そして、われ等が手ではどうにもならぬ……と、これを筑前どのに引渡してやるのじゃ。さす

れば筑前どのは、はじめて、高慢の鼻を折って自省するわい」
「高慢の鼻……」
「さよう。この事は、筑前どのが天下を取る人ならば尚更のこと、一度は骨身にしみて知らせておくべきことじゃ。その上で勝ったら、はじめて勝入、ようやって呉れたと、言葉と肚がひとつになる。それを体験せずに勝ったら、褒められても口先ばかりのカラ褒めじゃ」
「ウーム」と、勝入はうなった。
年齢の差というものは恐ろしい。
そう言えば、勝入の時代の人間にはどこかに気のいい甘さがあった。おだてられると、おだてていると分っていながらそれに乗る、小児のようなところが……
ところが元助の計算はもっと人が悪くて、きびしく急所を突いている。
敵を強くさせておいて、ほんとうに筑前を困らせ、それで自分の骨折りも分らせて行こうとは、何という油断のならぬ算盤高さであろうか。
「では、その方は、筑前どのの援軍がやって来るまで、徳川勢には勝たぬというのか」
「また始まった……」
元助は傍若無人に舌打ちした。
「援軍の来ないうちに勝てるような敵ではない。それより、あまり安易に勝利などを考えず、わが家の将来をぐんと深くご思案あるよう、そのために元助の首を打たれてもよいと考えて火を放った……と、こう申上げているのがお分りないのか」
勝入はまた黙った。

こんどは前よりもぐんと腹立ちが減っている。

（なるほど、そこに元助のいら立ちがあったのか。そう言えば、わしは少し甘かったかも知れぬ）

「では、万一筑前どのが放火のことで、われ等を責められた時には何というのじゃ」

「あの、逆賊の高札を見せてやるのだ。あれを読んだ土民どもが手きびしく敵対するゆえやむなく焼いたと言えばよい。あの高札とて、満更嘘ではない。事実は事実と、筑前どのにも知らせてやる必要がある」

元助はひびきのものに応ずるように答えていった。

十三

勝入はピクリと肩をうごかして、

「分った！」

と、低く言った。

「分ったゆえ、退って休め」

語尾がかすかに震えているのは分ったというよりも恐ろしいからであった。

（何を言い出すか分らぬ奴！）

弟の輝政はまだ二十一歳だったが、これほど激しくはない。こんども勝入の言うことには、充分、父と子の距離をおいて従って来ている。しかし二十六歳の元助は平素は無口でありながら、言い出すと何も彼も一刀両断と言った論法でやって来る。

高札の文面も満更嘘ではないと言われると、秀吉だけではなく、勝入もまた胸を刺される想い

がするのだが、これが若し秀吉の耳に入ったらどうする気なのか。
信長の乳母の子に産れて、信長とともに育った勝入だった。父の紀伊守恒利以来織田家に仕えて、その関係は元助ですでに三代にわたっている。
かつて勝三郎時代に、信長の弟武蔵守信行を手にかけたのも彼であったが、その時と同じ後味わるい不快さが、実はこんども無くはなかった。
山崎の合戦に明智の部将、松田太郎左衛門や、斎藤内蔵介の軍勢を駆け散らしている時のような爽快さは、敵が信長の子の信雄だと思うだけで、ありようが無かったのだ。
その急所を、わが子の元助に刳られた気がする。と言って、みずから天下に号令出来るほどの実力を持たない以上、勝つと目される方に味方して、とにかく生き残ることを考えるより他にないのが今の大名の運命ではなかったか。
（やむを得ぬではないか……）
そう考えたあとで、又腹立たしくなって来たのは、自分に子供がなかったら、果して秀吉に味方したであろうかと……ふっと考えたからであった。
勝入には勝九郎元助、三左衛門輝政、藤三郎長吉、橘左衛門長政の他に四人の女子がある。それ等の子たちの将来を、考えまいとしても考えさせられるのが人の子の親であった。
勝入はあわてて首を振って妄想をふり払った。子供がなければ信雄や家康の側に立って、あの高札を彼の手で立てていたかも知れないと思うことは、何ともやり切れないことであった。
眼の前にはもう元助はいなかった。あたりはすっかり明るくなり、家老の伊木忠次ひとりが、じっと自分に視線を向けていた。

「忠次」
「はい」
「元助は恐ろしいことを申す奴だの」
「お怒りなされずに済んで何よりに存じます」
「わしはあれの申すことを聞いているうちに妙な気持になって来た」
「妙な気持……と仰せられると」
「もともと信雄どのは憎くはなかった。が、家康もまた憎めぬような……妙な気持じゃ」
忠次は応える代りに、消えかけたかがり火に黙って柴を添えだした。
「わしはここらで討死したがよいかも知れぬ」
「何と仰せられます」
「いや、冗談じゃ。これは冗談じゃが……さて」
すっと床几を立って、しかし勝入は自分が何のために立上ったのか、それがよく分らなかった。
気がつくと、小鳥の囀りがはじけるように聞えだしている。

龍虎の駈引

一

十七日の早朝だった。

家康は、いったん桑名にやってあった酒井左衛門尉忠次を呼び返し、くつわを並べて小牧山の陣地へのぼって来ると、すぐ幕僚をあつめて戦評定をひらいていった。
小牧山の南麓を固めていた本多平八郎忠勝。小牧山にあった石川伯耆守数正。北方に出て敵の動勢をさぐっていた榊原小平太康政。それに東北方の根小屋にあった奥平信昌、井伊万千代直政の他に、信雄の部将天野景利など、汗をふきながら集った。
家康は、ひとわたり陣地構築の模様を見てまわってから、可も不可も言わずに幕舎に入り、絵図面をひろげて見入っていたが、
「やらねばならぬの」
と誰にともなくぼそりと言った。
「勝入の放火のおかげで、土民はみなわれ等に味方してくれた。小折には、信雄どのやわれ等の親類もあったからであろうが西南方の三井、重吉、小折とみなすっかり砦は出来あがった」
小折の親類というのは、家康の長子信康の妻徳姫や信雄の生母の兄、生駒八郎右衛門親正のことであった。
「これらの準備が完了したゆえ、いつ筑前がやって来ても、筑前の不得手な野戦に誘い入れられる。そうなると、そろそろ手合せをやっておかねばならぬで」
「いかにも」と、酒井忠次があとを引取って、
「みな、うずうずしているのであろう、犬山城に腹が立って」
しかし誰も答えなかった。家康が何を考え、何を命じるのかと固唾をのんでいる。
「戦というは潮どきがある。このあたりで、一度出鼻を叩いて見せぬと、土民も心細がろうし、

敵も図に乗ろう。そこでこの羽黒へ出て来ている森武蔵守だけは犬山城へ叩き返しておかねばならぬが、誰がよいかの」
　酒井忠次はニヤニヤしながら、みんなを見回している。しかも誰も口を開かない。こんなことを言う時の家康は、もう肚で、何も彼も決めていると、よく分っているからだった。と、案のごとく、
「平八」と、家康は本多忠勝をかえりみた。
「あ、やっぱりこの忠勝か」
「違う違う、早まるな。森の軍勢も功を狙って気負い立っている。事によると勝入がこれに援軍を出すやも知れぬ、その方は万一勝入が出て来た場合に備えて、しかと山麓を固めておくよう」
　忠勝はちょっと頬をふくらましかけて、
「委細！」
　と、承知を略して一諾(いちだく)した。
「小平太」
「はッ」
　榊原康政はぐいっと身をのり出して、
「それがしでござりまするか」
「その方の立てた高札は利(き)き目があった。その方まず森勢に誘いかけよ」
「誘いかける……と、仰せられるは？」
「敵を引出せばそれでよい。出て来たらすぐに引け」

「引くのでござりまするか」
「引くも攻めるも駈け引きじゃ」
家康はあっさりと言って、それから剛直で聞えた奥平信昌をふりかえり、
「信昌、おぬしはわしの婿、勝入が婿に立向うて婿くらべを試みよ」
とろりとした声で言った。

二

婿比べとはうまく考えたと、忠次と数正とは思わず顔を見合せた。
いかに戦が日常茶飯事のごとく繰返されている時代であるとは言え、いざ合戦となるとそれはそのたび生命にかかわることなのだ。
それだけに、作戦評定の最後はいつも煽動の巧拙にかかって来る。何彼と言えば幸先がよいとか縁起がよいとか、もう勝ったとかさまざまな事象を捉えて、それを暗示とし、臆する心を封じてゆくのである。
言葉を変えて言えば、それは理性の計算を尽したのち、やがて理性を超えた熱狂に人間を駆り立てなければならないからであった。
家康は、ぎくりと体を固くして顔をあげた奥平信昌に、
「小平太が森勢を誘いだしたら、そなたはこれを駆け散らせ」
事もなげに命じておいて、
「こなたの手勢、いくらであったかのう」

と、とぼけた顔できき返した。
「千あまりでござります」
「そうか。森勢はせいぜい三千じゃ。千あれば充分。筑前の位攻めとは違うからの。信昌」
「はッ」
「相手がこなたと知ると、武蔵守はふるい立とうぞ」
「心得てござりまする」
「向うでも、家康が婿。負けてはならぬと思うに違いない。家康が婿と勝入が婿、その優劣をはっきりと敵味方に見せてやるがよい」
信昌は、ぐっと唇を一文字に結んだまま、こくりと頷いて微かに笑った。
「緒戦の勝敗は全軍の士気にかかわる。勝たねばならぬぞ」
「仰せまでもないこと」
「小平太や、忠勝がこなたを羨ましがるであろうが、先方が勝入の婿ゆえこなたに命ずる。勝入と家康の差、それをこなたと武蔵守の差で見せてやれ。こっちの士気はあがるが、向うは、それで打悄れよう……」
そう言ってから家康は、思い出したようにフフフと笑った。
「長篠籠城のおりのことを思えば、こんどの戦など楽なものであろう信昌」
信昌はそう言われると、じろりと家康を見返しただけで黙っていた。
婿と婿……その言葉の裏で、勝てぬようなら死ねという、きびしい覚悟を促されている気がするのである。

家康に言われるまでもなく、こんどは絶対に敗退出来ない戦だと信昌は思っていた。緒戦ではすでに信雄が伊勢でも犬山でも敗けている。わざわざ家康が出て来て、これも同じく敗退したとあってはかなえの軽重を問われることになろう。

「忠次」

と、家康は、信昌から視線を酒井左衛門尉にうつして、

「おこと、遊軍で、信昌が後見をしてやって呉れ、さしたることもあるまいと思うが」

「かしこまってござりまする」

「それでよいの。一度武蔵守を犬山城へ追い込んで、あとは筑前の来るのを待つ……そうじゃ、天野景利は、道案内をして貰おうか」

「かしこまりました。して、いつから行動を」

信雄の部将景利がたずねると、

「即刻」

と、家康はきびしく答えた。

「日暮れまでに追い戻せ」

三

敵は行動を起すとすれば夜の明けきらぬうちに、霧の幕を利用して動いて来るに違いない。

その気配のないのを見きわめて、こちらから即座に行動を起せと言うのであった。

今から腹ごしらえをして、出て行くと、丁度敵はホッと心をゆるめて昼の炊さんにかかってい

る。そこへ堂々と押し寄せていって、まず小さな虚を突こうというのだ。
人々は家康の命を受けて、それぞれの陣所へ戻って行動に移った。
山上の本陣は石川数正。
南山麓の本多忠勝はしずかに兵を東から二重堀の近くへまわして、事あらば一挙に戦場へ駆けつけられる態勢をとり、酒井忠次はその本多勢の先にすすんだ。
最前線の榊原康政は、殆んど羽黒の森武蔵守長可と相対していたので、これは楽田、八幡の線にすすんで、榊原勢の左へ出て来る奥平信昌の隊形を見まもっている。
家康は、みなが行動を開始すると、あとを石川数正に任せて山を下り、さっさと清洲へ引きあげていってしまった。
すでに桜も桃も散りうせて、どこもかしこも柔い緑の新芽でうずまっている。
「今日はばかに鶯が鳴くぞ」
敵を誘い出せと言われた榊原康政は、照りもせず、曇りも果てぬという空を見上げて、
「婿と婿か……」
羽黒の丘陵に立ちならぶ森勢の旗差物をのぞみながらつぶやいた。
「こんどは信昌に手柄させねばならぬが、さて、どうしておびき出そうか」
まず正面から羽黒を襲うと見せて行動を起し、一歩しりぞいて機をうかがう。その上で奥平勢との衝突の様子を見るより他にない。
奥平勢の先頭が、榊原勢の前線と並行しだした頃になると急に敵はざわめきだした。
恐らく、かかる真昼の挑戦は思いがけなかったに違いない。が、それにしては思いのほかに迅

速(そく)だった。すぐに一筋、先鋒隊が康政の陣をめざしてまっ白に乾いた道を伸びて来る。
（これでわざわざ誘い出すにも及ばぬようだぞ）
康政は、すぐに使番を呼んだ。
「あのまっ先の侍大将めがけて打(ぶ)っぱなせと、鉄砲隊に伝えよ。それを合図にして、味方も進むのだ」
使番は第二線に伏せた鉄砲隊にそれを告げた。
まだしきりに鶯は鳴いている。薄れ陽だったが風はなく、胴丸の中へはぐっしょりと汗がふき出ていた。
ダダダーンと銃声が、丘から林にこだまして、ぐんぐんせり出していた森勢の前進がとまった。真先に出て来ていた森武蔵守の先鋒(せんぽう)、鍋田内蔵允(くらのすけ)が、狙いうちを喰って馬上から転落したのだ。と、同時に、
「ワーッ」と、榊原勢がときの声をあげて羽黒めざしてうごきだし、ダダダーンと次にあたりをゆすった銃声は森勢からだった。
方々の森や林からパッと小鳥が群をなして大空へまい上り、そこかしこからの鬨(とき)の声がこれにつづいた。
それだけでもはやこの辺(あた)りの天地は完全に戦場の、あの、狂暴な空気に一変していた。

四

鍋田内蔵允が鉄砲で射たれたことは、森武蔵守長可(ながよし)の血を逆流させた。

「なに、内蔵允が討たれたと……」
彼は八幡林の本陣にあって、味方を三方に分け、一挙に敵を小牧の線まで追い払おうと、その指図にかかっていた時だったが、これで作戦を変えてしまった。
「よし、榊原康政め！」
花のまだ散り残った八重桜の梢を睨んで、ひきつるように笑っていった。
この時すでに羽黒城へは、堀尾茂助、山内伊右衛門の二人が秀吉の命によって進出して来る旨の知らせを受けていた。
若い武蔵守にはそれもひどく不満だったのだ。森兄弟は、長可も蘭丸も、父を失っているせいで、競争心が人一倍強かった。
それだけに、堀尾や山内が来る前に、彼自身はもっと前線へ進出し、どこまでも勝利の端緒をわが手に納めようとしてあせり気味だった。
「助左衛門を呼べ！　この鬼武蔵を、康政めが侮り居ったわ」
三手に分けて右翼の指揮を命じてあった野呂助左衛門を呼び戻させて、
「鍋田内蔵允が討たれた。弔合戦じゃ。総勢三千、一団となってまず榊原勢蹴散らしてしまえ！」
野呂助左衛門は、ちょっと小首をかしげたが、
「かしこまって候」
すぐに陣幕を出ていって、命のままに総勢を一つにまとめだした。
爛春の空気を破る貝の音。
道の両側に鶴翼を張ってひろがる旗差物。

畠から森、森から丘と分厚い縦隊で押し出した森勢を見ると、榊原康政は、サッと先頭を右へかわして、退き出した。
恐らく敵の眼には、鬼武蔵の名におそれて、尻込みしだしたと見えたに違いない。
「それッ、今じゃ」
「追い崩せ！」
康政のそれた方向へ、森勢の隊形が向き直ろうとした時に、左手の森の中で、ふしぎな鬨の声があがった。
「エイトウ、エイッ！」
「エイトウ、エイッ！」
婿くらべを命じられた奥平信昌の軍が、家康の命のままに挙げるこんどの戦の最初の鬨であった。
「――エイトウ！」
とだけでは心が緊らぬ。最後にもう一つ「エイッ！」と結んで、それから突っこめと……
この鬨の声は、しかし、さして森勢を狼狽はさせなかった。
「おお、奥平が指物ぞ。榊原勢を追うな」
陣頭に立って野呂助左衛門父子は、直ちにこれを迎え討つ態勢をとってそのまま歩速をゆるめなかった。
と、ひた押しに押して来る森勢の中へ、その時一筋、三間柄の槍が伸びるような速さで馬を駆って突き込んだものがある。

「雑兵に眼をくれるなッ。池田勝入が婿、森武蔵守はいずれにある。奥平九八郎信昌、武蔵守に見参せん！」

それは森武蔵守以上に、気負い立った奥平信昌であった。

森勢はサッと道をひらき、あわてて又それを閉じた。

五

奥平九八郎信昌は、全然うしろを見ようとしなかった。

黒糸おどしの具足に、三間柄の槍を舞わして、突くというより薙ぎ立てる感じであった。

馬もしっ黒の肌を汗にぬらして、癇立ったいななきと共に、逡巡なく相手の上へのしかかってゆく。そうなると敵勢はやりすごして、背後から討取ろうと、槍や刀を構え直してみるのだが、その時にはもう信昌は彼等の手の届かぬ所へすすんでいた。

「大将を討たすなッ」

「続けや者ども……」

信昌に続く家臣の距離は、二、三十間もひらいている。しかし敵の中へ躍りこんでしまった信昌を、そのままに捨てておくことなど思いも寄らない。

続く者もまた、狂風のように森勢の中へ突き入るより他になかった。

「森武蔵守はいずれぞ。奥平信昌見参せん！」

その声を武蔵守は、本陣から八幡林の丘を下った竹藪のかげで聞いた。

「何と言ったのだ。今の声は……味方の足が止ったのではないか」

しかし、誰もまだ身近に、敵将がまぎれ込んで来ていようとは思いも寄らず、

「はて、何でござりましょう？」

馬のくつわを取ったまま首をかしげている。

と、その藪のわきへ、疾風のように駆け出して、更にいま出てきたばかりの本陣の方へ駆け去った者がある。

「あれは誰じゃ。味方ではないぞ」

武蔵守は鞍（くら）の上で背のびをした。

と、その耳にこんどはハッキリと、

「森武蔵守はいずれにありや。家康が婿、奥平九八郎信昌、見参せん！」

追い風に乗って信昌の声が聞えて来たのだ。

これは、おかしい。背後で信昌の声が……

くるりと馬首をめぐらした時に、続いて駆けつけた奥平勢のため、ワーッと道を開いた味方のどよめきだった。

「敵はうしろに廻ったぞ」

「油断するな」

「引っ包んで討ってとれ」

武蔵守は再び馬首をめぐらすより他になかった。そして、その刹那（せつな）、はじめて味方がすでに隊形を幾つかに断ち切られようとしているのに気が付いた。

「助左衛門！　助左衛門はどうしたのだ。左に避けよ。左に避けて隊伍を崩すな」

と、その時、また別の鬨の声が、羽黒と犬山の間の丘のあたりでわき上った。
「エイトウ、エイッ！」
「エイトウ、エイッ！」
それは、奥平信昌が、森勢の中へ脇目もふらずに突き入ったと知って、戦い馴れた酒井左衛門尉忠次の声援であった。
「殿ッ！」
森武蔵守の前へ、野呂助左衛門が馬を降りてころがるように片膝ついた。
「敵に取りかこまれました。後はそれがし……殿には、すぐに犬山城へ！」
「なに取囲まれたと。退かぬ。退けるものか」
その耳に又、藪の向うの信昌の声だった。
「勝入が婿の武蔵はいずれにある。家康が婿奥平九八郎、臆せずば出て来て勝負せよ。森武蔵守はいずれにある……」

六

犬山城の池田勝入のもとへ、羽黒が襲われたという知らせがあったのは、奥平信昌が、森勢三千のまったただ中に、面もふらずに斬り込んだころであった。
「なに、武蔵守が襲われたと……」
勝入は一瞬ギョッとしたようであったが、すぐに不敵な笑いをうかべて、
「案ずることはない。そうした場合のことは、よく相談済みなのじゃ」

ひとまず注進を退らせて、それから勝九郎元助と三左衛門輝政の二子を呼びにやった。
そして元助よりも先にやって来た輝政に、
「羽黒が攻められているそうな。こなた達、援けに参って無事にこの城へ退らせるがよい」
そう言うと、二十一歳の輝政は、
「心得ました！　すぐに駆けつけ、敵に一泡ふかせて退らせましょう」
勢いこんで幔幕を出ようとする。
と、そこへ長男の元助がやって来た。
「待て弟！」
元助はまず輝政を押えておいて、
「武蔵守は、捨ておいても城に退りましょう。ここでの出撃はなりませぬ」
きびしい表情で父に言った。
「なに、出撃ならぬと申すか」
「仰せまでもないこと！　伊木清兵衛にさぐらせましたるところ、出て来て居るのは酒井忠次と奥平信昌のみ。うしろには井伊直政と本多忠勝が精鋭、手具脛ひいて待ちうけてござりまする」
「それゆえ、援けに行くがよいと申すのじゃ。ここで武蔵守を討死させるようなことがあっては、それこそ向後の士気にひびく」
「なりませぬ！」
元助は頑強に押し返した。
「万一本隊が城を出て、本多勢に退路を断たれるようなことがあったら何となさります。すでに

川を渡っているわれ等、退く場所も、落合う所もなくなりましょう」
そう言われると勝入も不安になった。徳川勢の中では、戦上手は酒井忠次、勇猛無比は本多忠勝と、足軽小者にまで知れ渡っている。その酒井勢は出て来ているが、本多勢はまだ動いていない……とすれば、これは、勝入自身の動くのを待ち構えているとしか思えなかった。
「そうか……では武蔵守、敢て援兵は送らずとも引退って来ると申すのじゃな」
「それが約束でござりまする。その約束を破って自滅するほど愚かではござりますまい」
「よし、では、充分に城の固めをし、門を開いて待ちうけよ」
いざと言えば城に入れと命じてあるので、ついに援兵は断念した。
戦場で、その頃から森勢は崩れだした。
奥平勢の中央突破と、酒井勢の思いがけない背面への出現が原因だった。
信昌の雄叫びを耳にして、歯がみをしながら、立向おうとする武蔵守の馬のくつわを、野呂助左衛門は放さなかった。
「城へ！　少しも早く城へ！　さもなくば犠牲はかさむばかり……ええッ、面倒なッ」
言うなり助左衛門は手にした槍で武蔵守の乗馬の尻を力任せに叩きまくった。
馬は、狂奔して犬山めざして走りだした。
そうなるともはや浮足立った森勢は、先を争う敗走に移ってゆく……

七

池田勝九郎元助の考えでは、必ずしも本多勢や、井伊勢を恐れて援軍を出さなかったのではな

かった。
彼は秀吉の出て来ぬうちの衝突を無意味だと思ったのだ。
敵の油断を見すまして、相手を攪乱するのはよいが、出来るだけ大部隊の衝突は避け、兵力を無傷のままで保っておかなければと考えたのだ。
こうすることで、充分に徳川勢の頑強さを秀吉に印象づけられる。
さもないと、秀吉は勝利を池田勢の手柄と認めるよりも、徳川勢の弱さと受取るおそれがある。
しかし、一度敵と衝突した森武蔵守の感情は全く別になってしまった。始めには充分計算してあった筈の駈け引きが、惨めに敗走しだした味方を見ると、口惜しさでケシ飛んだ。
彼は城の七、八丁手前へ来ると、再び馬首を敵に向けて狂気のようにわめきだした。
「止まれッ。止まって反撃に移るのだ。もはや城から援軍が出ている筈、引返して敵を蹴散らせ」
その声で止まる者と、遁げる者とが入りまじった。
いつか日は落ちて、十七日の月が東の山脈の上に顔を出している。かがり火があちこちで眼を射だした。
「退くなッ。退く者は……」
と、その時、血刀をひっさげ、徒士立ちで走って来た一人の若侍が、
「申上げます！」
と、武蔵守の馬の前に片膝ついた。
「殿をご無事に城へ送り参らすよう遺言して、野呂助左衛門父子、松平又七郎家信どののとわたり

合って、見事に討死なされました。殿には少しも早よう……」
「なに、野呂父子が討死したと⁉」
「はい。殿のお身代りゆえ、喜んでと申されました。今は一兵も多く城内へ！」
「ウーム」
さすがの鬼武蔵も、この重臣の討死はよほど胸にこたえたらしい。きっと虚空を睨んで、
「助左！」
と、叫ぶと、子供のように身もだえした。
「このまま帰れと言うのかうぬは……」
「さようでござりまする。少しも早く……さもないと、奥平信昌、すぐにこの場へ追いつきまする。何とぞ馬を……」
その言葉を裏書きするように、道の曲った雑木林のかげから、一団の騎馬武者があらわれた。
あたりは月の光でだんだん明るくなり、追いせまる武者の兜の前立がキラキラしながら距離をちぢめる。
「えいッ、してやられたか今日の戦は……」
歯がみをしながら、武蔵守はついに三度び馬首を北に向け変えた。
向け変えると、もう背後は見なかった。
「敗将」の烙印は、いつか消し得る機会があろう。
（これはまだ緒戦なのだ……）
自分自身に言いきかせて、城門を開き、槍襖を作って待っている三左衛門輝政の手勢の間を、

疾風のように城へ入った。
ドドドッと、城内から、寄手への威嚇の射撃がはじまった。

八

敗走して来た森勢のうち、約千五百ほどが城内になだれ込むと、あとは追いかけて来た奥平勢と酒井勢であった。
そうなっては城方でももはや門を閉ざすより他にない。入城しそこなった雑兵は、声高に開門を求めたり、怨めしそうに敵に向って引返したりした。引返した者のうち大半は降参したのに違いない。
寄手は城の近くまで進んで来て、城内からの発砲を知ると、何の未練気もなく、さっさと兵をまとめて引揚げだした。
したがって、これは家康や酒井忠次の思うたとおりの戦になったと言える。ただ奥平信昌だけが、森武蔵守長可を討ちもらしたのが不満そうであったが、しかし、城へ入ってしまった敵を無謀に攻め立てるようなことはなかった。
「敵は残らず、引きあげました」
櫓を降りて来た物見の者が、池田元助の幕舎に知らせて来た時、元助と武蔵守とは、何れも床几にかけて、血走った眼で睨みあっていた。
かがり火の焔は細く、だんだん明るさを増して来た月光が、しだいに大地へ滲み入るように見えた。

「では元助どのが、救援無用と、舅御にご進言なされたのか」
森武蔵守に詰め寄られて、元助は舌打ちした。
「始めからの約束だった。それが……」
「これは心得ぬことを言われる。約束したは、無断で前進はせぬとの意。今日のは、敵からわれ等に挑みかかって来た戦じゃ」
「挑まれたら退くがよい……と、これも確かに申してあった筈。無事に引きあげ得たゆえ、よいではないか」
「お身はよいかも知れぬ。が、あたら家臣を失うて……」
武蔵守は歯がみをしながら、
「この長可、心外でならぬ」
「武蔵守どの」
「なんでござる」
「お身は今日の戦を負けたと思われている」
「元助どのは、味方の大半を失うた戦を、勝ったと曲言なさるのか」
「いかにも。勝たぬまでも負けではない。これでよいのじゃ。われ等は先ず、尾張に攻め入ってこの城を手に入れた。すると敵がこれを取戻そうとして押し寄せた。その敵を巧みに森勢が防ぎ、敵は城をあきらめて引退った……どこに敗戦がござる。こんどの戦には、そのような波瀾は当然すぎるほど当然なことじゃ」
「というて、みすみす近づく敵を撃っても出ず……」

「お控えなされ。万一池田勢が討って出て、酒井、奥平の両勢と戦うている間に、本多、井伊等に城をめざして攻め掛られたら、何とする。今日の戦は勝ちではないが断じて負けではない！それほど苦しい戦と、筑前どのに分らせておかねばならぬ」
元助に言いきられて、武蔵守は、じっと相手を睨んだままわなわなと震えだした。
そう言えば、元助の言葉にも道理があるので押し返せない。といって、自分が功を立てたとは思えず、
（家康めは勝ち、勝入父子も勝った戦に、自分だけが負けたのだろうか……）
武蔵守は割切れなさでいっぱいだった。

筑前旋風

一

秀吉は、まだ木の香の新しい城内を、あわただしく歩きまわっていた。
彼が、無言のうちに「天下人」の威厳を誇示しようとして建てた大坂城は、いざ戦となって、あちこちの指図に歩きまわって見ると、いささか広大にすぎる感じであった。
天下の諸大名がやって来たら、自分で案内してやって、
「――どうじゃな、この百間廊下は」
表と奥の広さを示すつもりでわざわざ長く建てさせた廊下だったが、いまそこを往復すると、

た。
すぐさっき表から奥へ戻って、信長の妹、お市の方が残していった浅井長政の忘れ形見、三人の姫たちに、こんどの戦の話を面白おかしく語りきかせていると、すぐ又表から使いがやってきた。
一時も早く根来、雑賀の一揆の徒を追払うようにと命じてあった中村一氏から、密使が来たという知らせであった。
「――なに、一氏から知らせが、では、岸和田の勝利も決ったか。そうなるといよいよわしも姫たちと、しばしのお別れじゃの」
秀吉は、三人の姫の中では、末の達姫が、いちばん母のお市の方に姿も心も似ている気がして好きであったが、まだ余りに子供なので、言うことはいつも上の二人を相手にする形になった。
「――なに、家康などと言うのは、何も知らぬ田舎者での。わしが行くまでもないところじゃが、そうかと言って捨ててもおけぬ。少し眼の覚めるように頰げたを叩いて来ねばのう」
そう言う秀吉の言葉尻をとらえて、
「――叩きに行って、叩かれませぬよう、お気をつけなされませ」
と、姉の茶々姫が皮肉を言った。
無理もないと思う。育ちが波瀾に富みすぎている。小意地がわるくて、皮肉好きで、その上どこかに自暴自棄の匂いをたたえている。
秀吉はグーッと腹の立ちかけたのを笑いにまぎらせて、

「——そうじゃ。油断は大敵というから、やはり気をつけて行くとしようかの」
そう答えて姫たちの部屋を出て来たのだが、長い廊下を歩いているうちに、妙に、その茶々姫の言葉が癇にさわって来るのだった。
もはや自分に、向うから挑みかかって来るほど、思いあがった者は本州内には居まいと思っていた。ところが無計算な信雄の尻馬に乗って、いちばん計算高いと思っていた家康が、おこがましくも挑戦して来たではないか。
(この浅井の小娘めと同じような奴だ家康は……)
家康などとはさし当り争う気はなかった。いつか自然に自分の掌中へまるめ込んで、せいぜい二、三ヵ国の大名で有無を言わさぬつもりであったのが、向うからすすんで挑みかかって来たとすれば捨ててはおけない。
(もう少し、悧巧な男と思うていたが、わしを怒らせるとはのう……)
怒った！　と、自分で思えるのだから、その作戦にぬかりのある筈はなかった。
秀吉は長い廊下を渡り終ると、これも大名おどしを意識して造らせた八十畳敷きの接見の間へ、小さな躰をせかせかと運んでいった。

二

部屋構えまでがすべて信長のやり方の踏襲であった。塗柱に塗長押、ところどころに金色さんらんとした金具が威圧するように光っている。一間襖には大きな朱房がついて、秀吉がその前に立つと左右から四人の小姓がこれを持って引きあける。「おう」と、秀吉が声をかけると、一段

下に坐らせられている使者は、押しつぶされたように平伏した。というと、いかにも秀吉は、成上り者らしい尊大さを身につけたように見えるが、それからの演出が意表外に出るのである。
「おうおう、下村主膳ではないか。そなたがわざわざ使者に来たか。いや大儀大儀。そなたならばわしが偉らそうに上段へ控えることもあるまい。そばで話そう」
上段の間のしとねや脇息はそのままにして、このこと相手に近づき、肩を叩かんばかりの位置に坐ってゆくのである。
小姓たちが、あわてて、しとねと脇息をささげて来た。
これだけで真ッ正直な武骨者は、
(何という、昔忘れぬ情誼の厚さ！)と、涙ぐんでゆくのである。
ところが、今日の使者は平伏はしていったが、べつに表情は変えなかった。或いは、この位の世辞に甘えて、嬉しがって見せたりすると、逆にさげすまれる事を知っているのかも知れない。
「主人一氏の口上を申上げまする」
「聞こう。もはや、一揆の暴徒は撃退したのであろうな。わしは、尾張のことが気にかかるゆえ、明日大坂を発とうと思っていたが」
「恐れながら、まだ撃退は致しかねて居りまする」
「なに、まだ手間どっているのか」
「根来、雑賀の暴徒は、岸和田の城近くへ進みより、保田、寒川等の采配にて、寄せては返し、返したと見せては寄せ、仲々もって手強い相手にござりまする」
「では主膳に訊ねるが、その方、援兵でも乞いに来たのか」

「仲々もって！」

相手は強くかぶりを振って眼を光らした。

「只今はさようの時ではない。上様には一人でも多くの兵がご入用な時……それゆえ、こなた参って、岸和田のことはお案じなされませぬよう申上げよと……」

「これこれ」秀吉はとぼけた表情で、

「こなた、わざわざそれを言いに参ったのか」

「仲々もって！」

と、又相手は同じことを言ってかぶりを振った。

「そうであろう。この大切な戦の最中に、こなたのような勇士を、使者に寄こす筈はない。すると何か耳よりな情報でも入ったのだな」

「それが、仲々もって！」

「また仲々もってか。では何用じゃ」

「悲報にござりまする」

「悲報……と言えば、よくない知らせのことじゃぞ主膳」

「仰せの通り。桑名より堺へ到着しました船の者が、一揆の衆徒に尾張で森武蔵守長可どの、言語に絶した大敗を喫したる由、しきりに吹聴致してござりまする。依ってこの儀即座にお耳に入れ置くようとの主命……」

「な、なんと言う!?」

秀吉は、一瞬ごくりと唾をのんで、身を乗り出した。

三

「なに、森武蔵守が大敗を喫したと!?」
　秀吉の語気が、低く凄んだ感じだったので使者の表情も硬直した。
「仰せの通り、犬山城より清洲をめざして進撃、羽黒と申すところへ在陣のおり、徳川勢に襲われました由にござります」
「して武蔵守の安否は?」
「生命からがら犬山城へ遁げこんだとの噂」
「噂じゃの」
　秀吉は、そこではじめて頬を崩して、
「ハハハ……、家康めも、なかなか味な噂を流す。が、案ずることはない。わしの方へも、家康の重臣どもから、あれこれ内報も参って居るでの」
「え!?」
　と、相手は聞きとがめて、
「徳川どのの重臣から……」
「さればさ。これは内証……いや、もう内証にするにも及ぶまい。そのような噂を立てて喜んでいる者共に言うてやるがよいかも知れぬ。内応者は石川伯耆守数正じゃが……」
「あの石川数正どのが……」
「ハハハ……、こっちも手を拱いていなければならぬいわれはないでの。して、一氏の口上は、

そのことを知らせおくと言うだけか」
「はい。お知らせ申上ぐれば、上様に、よいご思案があろう……と、申されました」
「大儀であった。早々に立帰って、案ずるな、と申せ。わしの方は自信満々、動けば直ちに勝って見せるゆえ、そちらは早く一揆を蹴散らすようにと言え」
「かしこまってござりまする」
「そうそう、こなたにこれを取らそう。よいか、こんどでこの秀吉の地歩も固まる。信雄、家康と寄ってたかって、この秀吉を天下人の地位へ無理に押しあげている戦じゃ。精出せよ」
秀吉はそう言うと帯していた短刀をとって無造作に使者の手に握らせると、もう一度大きな声で笑って立上った。
出て来た時と同じ悠揚さで接見の間を出て、再び自慢の百間廊下へかかると、
「佐吉……」
うしろに従っている石田三成をふり返り、
「秀正を呼んで呉れ。奥のわしの居間へな」
そう言った時には眉間に深い竪皺がよっていた。
中村一氏の使者の言葉は、相当強く秀吉の心にひびいているのに違いない。
「かしこまりました」
「内々に話したいことがあると申して、急いでな」
佐吉は心得て廊下から表へ引返した。
秀正というのは秀吉の末の妹、朝日姫の良人の佐治日向のことであった。

佐治日向守は、いまこの広大な新城の納戸を預けられている実直無類の正直者であった。

秀吉は、その佐治日向守に妹をめあわすため、姫の前夫の福田与左衛門吉成と別れさせている。それにはいろいろ複雑な理由があったが、とにかく今の秀吉は、実直一筋な秀正を、口では「沈香も焚かず、屁もひらぬ男」などとからかいながら、わがいみ名の「秀」の一字に、正直者の「正」の字をつけて名乗らせ、ひどく信用しているようだった。

秀吉は、きびしい表情のまま、百間廊下を渡り終ると、方一丁の中庭に面した、わが居間へ足早に入っていった。

四

秀吉は石田佐吉が、佐治秀正を案内して来ると、佐吉も、幽古もしりぞけて、広い書院に二人きりで相対した。

その癖話は相変らずの飛躍ぶりで、

「どうじゃ、お嬶どののご機嫌は」

幽古が出していった茶をすすりながら、とぼけた顔で言い出した。

「こなた達夫婦に子がないのは、あまり仲が好すぎるせいじゃという噂じゃが」

秀正は固く坐ったまま、

「お戯ればかり……して、内々のお話とは」

「しかし、わしにも子供はない。わしの方は、あまり忙しくて、ゆっくり馬をあやつる暇もないからじゃ。わしの真似はせずと、産ませて見よや」

「は、しかしそれは……」
「努めているが思いのままにならぬというのか。子供というのはよいものらしいぞ。産んでおけばのう……姉の子の秀次を見よ。もういっぱしの若大将で働いて居る」
そこまで言ってから秀吉は、思い出したように笑った。
「そうも言えぬかの。故右府さまのように、千万人にすぐれさせられたお方に、信孝、信雄のような者も出来るからの」
「ご用を仰せ聞け下さりませ」
「ご用か、ご用は他でもないが、わしは明後二十一日、この城を出発する」
「二十一日に……」
「そうじゃ。急がねばならなくなった。というのは少々腑に落ちぬことが出来ての」
「それはご心配な……何事でござりまする」
「勝入のこもる犬山城へは、もはや稲葉一鉄も出向いている筈、その勝入、一鉄がありながら、森武蔵守を敗退させたとは心得ぬことじゃ。わしが出向かぬと、みなそれぞれが、小さなふところ勘定で動くおそれが出て参った。何分相手を、織田家……と思うているからの」
佐治秀正は、その一語一語に几帳面にうなずきながら、
「して、それがしにご用は」
と、またきき返した。
秀吉は苦笑した。この律義な正直者は、大局を見て、相手の肚を読もうとせず、命ぜられることだけを急いでいる。

無理もないと秀吉は思う。秀吉が秀正を妹の婿にしたのは、ある意味では罪ほろぼしのつもりであった。
朝日姫の最初の婿は副田甚兵衛という硬骨の尾張武士。まだ秀吉が長浜でようよう四万石貰ったばかりの頃だったので、相手も具足一領の貧しさ。それを秀吉は離別させ、改めて前夫の福田与左衛門に嫁がせたのだ。
ところが、その朝日姫は、最初の良人甚兵衛が忘れられず、器量才覚では比較にならぬ、第二の良人に少しも睦もうとしなかった。
「――これはやり損うた。女子の好く男と、男の好く男とは違うらしい」
そこで、更に第三の良人、佐治日向をこんどは、妹の仕合せを中心に考えて持たせたのだ。
その結果、今では姫もすっかり満足しているらしい。相手は秀吉の命令を待つように、女房の命令にも従順なのであろうと思うとおかしくなった。
「用か。用はな、重大なことじゃ。こなたの嬶どのを人質に出して貰いたい」
秀吉は、笑いをおさえて生まじめな顔でいった。

五

「なんと仰せられまする」
佐治日向守は、顔いろを変えてきき返した。
「女房を人質に出せと仰せられまするか」
「そうじゃ。人質に出すのじゃ。この城へ」

秀吉はおかしさを耐えた意地わるそうな眼ざしで、
「おぬしを思いのままに使うためには、女房を人質にとっておくが一番よい」
「と仰せられますると、それがしは、ご一緒に出陣出来まするので」
「いや、出陣はせぬでよい。出陣以上に大切な用がおぬしにはある」
「はて……？　それは何でござりましょう」
律義な瓜実顔が、可笑しいほど真剣に引緊って、思わず秀吉は失笑しそうになった。
狂言の舞台に出て来る賢しからざる大名の姿をふと思い出したからである。
と言って、この場合笑うことは、彼自身を傷つけることであった。とにかく相手は妹婿なのだ。
（老母を安堵させようと思うて持たせた亭主じゃからの……）
佐治日向守の妻の朝日姫は、秀吉の母にとっては眼の中に入れても痛くない末ッ子だった。
そして、母も、朝日姫も、秀吉とは凡そ違った平凡な世界に生きている。希いは天下や国家とは程遠い、安穏なその日、その日の中にある。
その朝日姫がわが意に叶った良人を持って、睦まじく暮せるようにと、老母はそれを秀吉に求めつづけた。
したがって秀吉の内心では、佐治日向守を、妹のために購ってやった無難な「玩具」だと思っている。
禄高は四千七百石、屋敷は大手外に与えてあったが、几帳面な出仕はしても、今までさして当にしたこともない。

が、こんどはその佐治秀正の用途を思いついたのだ。むろんこれも、わが妹が可愛いからのことではあったが……

「秀正」
「はいッ」
「こんどの戦は並の戦ではない。まだこの新城の近くに敵を残して、わが身は尾張へ出陣せねば相ならぬ」
「ご心労、お察し申上げまする」
「留守居は、蜂須賀正勝じゃが、おぬしにも留守居以上の大切な役目を申付けてゆく」
「ははッ」
「他でもない人質の監視じゃ。よいか。こなたの女房をまずこの城の帯曲輪に移し、それから、生駒親正、山内一豊はむろんのこと、堀、長谷川（秀一）、日根野、滝川、筒井、稲葉、蒲生、細川等が老臣どもの人質、みな同じ曲輪に押しこめておいて、主人万一戦場にて怯懦の振舞いあるときには、有無を言わず斬って捨てると申渡せ」
「あの、味方の大将が老臣どもの人質を」
「おう、それぞれ差出すようにと命じてある。本明日中には続々と、その妻子どもが城に入ろう。こなたも女房を出せ！　出してわが心中に、あやしいふしがあったら、そなたも討て」
「あのう、それがしにあやしいふしが……」
「あったら、女房の首を討つのじゃ」
生まじめに言って、又、秀吉は笑いをこらえた。

六

秀吉は律義一途な佐治日向守に彼の決意を悟らせて、人質から各自の肉親を激励させようというのであった。

むろん、これには、理由がある。

秀吉自身、柴田勝家との戦で充分経験して来たところであったが、人質は、その大将からだけ徴したのでは意味がなかった。家老重臣の心が動き、これが内応すると相手は全く無力化する。

それが今度は、信孝亡き後の信雄が敵なのだ。万一諸大名の重臣等が、その主君に織田家の「恩義」を説いたりすると、少なからず動揺する。

そこで、出征してゆく大名の他に、家老重臣からもそれぞれ人質を取った上、その監視と扱いを、妹婿の佐治日向守に命じて行こうというのであった。

佐治秀正の愚直に近い律義さはすでに世間へ聞えわたっている。

その日向守が、自分の女房、秀吉の妹までを城内に呼び入れて、怪しい節があったら、首をはねると言い渡したら、人質どもは、可笑しさと戦慄とを同時に感じて、秀吉の意に副うように行動するに違いなかった。

そのあたりの計算は、苛烈一点張りを避け、二心ない者には、どこかとぼけた可笑しみを覚えさせようという、いかにも秀吉らしい思慮からであった。

「どうじゃ、分ったか、この秀吉の決心が」

「は……はいッ」

秀正は、額にじっとりと膏をにじませて、ま四角に胸を開いて返事をした。
「よいか。ここに人質帳がある。これ等の者をしかと見張れ。万一、この人質の連れあいの中から、敵への内応者などを出した節は、その方はむろんのこと、女房の朝日も無事には済まぬぞ」
「しかと……心に刻んでござりまする」
「それから人質の遅れ居る者は、どしどしおぬしの手で急がせよ。この役目、留守居に次ぐ大役じゃぞ」
そこまで言って、相手が余り固くなっているので秀吉はついに笑いだした。
「これは役得じゃがのう秀正、折角の好機ゆえ、どこの誰の内儀は、どのような器量の女子か、又、どこにどのような娘があるかなど、仔細に調べておくがよいぞ。そして、後でこなた達夫婦が見どころある若者を見立てて媒酌してやる手づるとせよ。さすれば、こんどのきびしい扱いも、いつか感謝のもとになろうでなあ」
「かしこまってござりまする」
「よし、それだけじゃ。すぐにかかれ」
こうして、秀吉側には、今までと全く違った風が吹きだした。
八層摩天の新城へ、具足姿の入城者にまじって、おびただしい人質の女乗物が続々と入って来るのである。中には、子供連れで徒歩の者もあったが、それ等がみな、新城を見上げて、今更のように、その偉容に三嘆するのである。
恐らく秀吉は、これ等の人々を、ただの人質として利用するだけではなく、やがて、自分の威力を喧伝させる宣伝係ともする下心なのであろう。

つねに一石二鳥三鳥を狙ってやまぬ秀吉なのだ。
それ等の人質と入れ違いに、秀吉が、自信満々、千成ひさごの馬印をかざして大坂城を発したのは三月二十一日の朝だった。

七

秀吉は家康が油断出来ない敵であることはよく知っていた。
おそらく現在の武将の中で、彼にまさる戦略家はあるまいと思われる。
それだけに、家康もまた秀吉の実力を知悉して決して柴田勝家のように強引、無謀な戦はしないものと信じていた。
その判断の中には、或いは石川数正からの密書の影響もいくぶんはあったかも知れない……
（――家康は、右府さまにさえついに隙を見せなんだ男だからのう）
したがって、家康が本気で信雄と心中する気のないことなどは、はじめから見抜いていた。
（――勝てる戦ではないと分っていながら信雄の後楯をする。家康もやはりわが目で天下を見得ぬ男であったか……）
秀吉の考えでは、家康が、その胸中にはさまざまな謀計を蔵しながら、ついに信雄との情誼にこだわり、感情に負けて動かなければならなくなったものと思っている。
それだけに、一度手ひどく連合軍を叩くことで、すぐに大勢は決してゆく。恐らく家康は、自慢の将士の温存をはかって、不利と見れば、早々に三河へ引きあげ、そこで改めて和議を申入れて来るに違いないと判断していた。

（――今度こそは位攻めの最も大きく物言うとき……）

この一戦を鮮かに勝ち得たら、上杉、北条はむろんのこと、中国の毛利も、四国の長曾我部も、自然に秀吉へなびいて来るのは知れきっていた。

それほどの家康ゆえ、池田勝入や森長可だけでは、どうなるものでもないと、はじめから計算していただけに、その陣備えの仰々しさはかつて無いものであった。

第一陣へは、木村重茲、加藤光泰、神子田正治、日根野弘就、同常陸、山田堅家、池田景家、多賀常則の合計六千を先発させ……

第二陣へは、長谷川秀一、細川忠興、高山右近の五千三百。

第三陣へは中川秀政、長浜衆、木下利久、徳永寿昌、小川祐忠の六千二百。

第四陣へは高畠孫次郎、蜂屋頼隆、金森長近の四千五百。

第五陣は、丹羽長秀の三千。

第六陣が秀吉の本隊で、これを六段に分ち、まっ先は蒲生氏郷の二千に甲賀衆の千名を附して右に備え、左には、前野長康、生駒親正、黒田孝高、蜂須賀、明石、赤松の諸隊を合せて四千をおき、次に堀秀政と越中衆、稲葉貞通の五千五百。三段が筒井定次の七千。四段が羽柴秀長の七千。五段には自慢の荒小姓と鉄砲衆の合計四千八百五十をおいて、次に旗下四千の中央に秀吉は馬をすすめ……

第七陣の後備えが浅野長政と、福島正則の千八百。

総勢六万二千百五十という大軍を、八万と称して近江から美濃路へひたおしに押し出した。

そして、大坂を出発して四日目の二十四日に、本陣は岐阜城に到着し、その日のうちに第一陣

は木曾川を渡って犬山城と、その南方二十五町の五郎丸へ先行して、まずその威風で東軍を圧倒しようとしたのである。

八

岐阜城へ入ると秀吉は直ちに池田勝入のもとから報告に出向いて来ていた伊木忠次を召出して、森武蔵守長可の羽黒敗戦の模様をきいた。

「森武蔵守は、池田家の婿、その婿に勝入どのは援兵を送らなかったのか」

秀吉は、城へ入るとさっさと武装を解いて寛いでいたが、伊木忠次にはひどく不機嫌な顔に見えた。

「はい、その儀につき、わが主君から、特に言上せよと申付けが……」

「何じゃ、申してみよ」

「むろん援兵は差出すつもりの所、敵方の本多忠勝が備えきびしく、万一討って出て、犬山城を狙われてはと私情をおさえてござりまする」

「なに、本多忠勝が……」

ぎろりと大きく眼を剝かれて、伊木忠次は、

「は……はいッ」と、小さくなって平伏した。

当然ひと雷落ちるものと予期していたらしい。

「そうか。それはでかした！」

「は……？　何と仰せられましたので」

「でかした。よく城を出なかったと褒めたのじゃ」
「は……」
「これからもあることゆえ心せよ。勝入どのは無類の忠義者。じゃが、時々強引な動きが難じゃ。戦には勝ばかりがあるものではない、不利なときにじっと耐えて機を見る堪忍がなければならぬ。よく堪忍したと申伝えよ。こんどの敵は、これまでにない大敵ぞ。よし、急いで、犬山へ戻れ」
伊木忠次はポカンとして、それから慌てて頭を下げた。相手が叱られると思えば褒め、褒められると思うて出て来ると叱りつける。
「ハハ……、勝入が家老め、狐につままれたような顔して出ていったわ。佐吉ッ！」
「はっ」
「その方、申付けてあるように、このあたりの寺社へ直ちに禁制やら、安堵状やら送り届ける手配をせよ」
石田三成に命じておいて、
「幽古」と、間断ない指図であった。
「茶などは今たてずともよい。紙と筆、紙と筆」
記録係の大村幽古は、かしこまって、あたふたと炉をはなれ、窓ぎわの机上から筆紙をとって秀吉のわきへ坐った。
「手紙じゃよいか」
「はい。宜しゅうござりまする」

「宛名は常陸太田の城主佐竹次郎義重」
「常陸の佐竹さま……」
「文言を言うぞ。そのまま認めよ。よいか。——家康このたび表裏を構え、若輩信雄を欺いて薬籠中のものとし、いわれなく老臣両三人を長島に誅す。仍って秀吉、伊賀、伊勢に出兵し、峯、神戸、楠の諸城を攻め落して一国を平均致し、尾州表においては、池田紀伊守、森武蔵守、去る十三日に犬山城その他数ヵ所を攻め崩し、尚お、去る二十二日……二十二日と申すと一昨日じゃな……去る二十二日には、根来、雑賀の一揆三万ばかり攻め出でたれど、これまた首五千を討ちとり紀州表まで存分に任せ候……」
「もし！」と、筆を走らせていた幽古が、びくりと訊き返した。
「あの、雑賀、根来の一揆の衆は、まこと首五千を失うて、片付いたのでござりまするか」
「知るものかそのような事を！」
秀吉は興をそがれて舌打ちした。

九

「つまらぬことを訊く幽古じゃ。わしはいま、終ったことの記録を口述しているのではない。佐竹義重への手紙を認めさせておるのじゃ」
秀吉に叱られて幽古は、
「恐れ入りました」
と、かすかに笑った。

「笑ったなそちは」
「ご免なさりませ。これは戦略でござりました」
「戦略ではない。そうなってゆくに決っているのじゃ。二十一日にわれ等は大坂を出発した。われ等が出発したと知ると一揆の者は時節到来とばかりに岸和田城に押しよせる。そこで中村一氏、生駒親正、それに蜂須賀の伜家政などがこれを蹴散らすは二十二日じゃ」
「ホホ……」
と、また幽古は口を蔽って笑った。
「すると、首級五千も、そうなる……筈のものでござりまするか」
「知れたことじゃ。三万の僧兵と地侍から成る一揆の衆徒、五千は討たれねば退くものか。退けば五千とそろばんおくは兵家の定法、こなたも、しかと覚えさっしゃい」
「これは……恐れ入りました」
「さ、次じゃ。首五千を討取り紀州表まで存分に任せ候ところ、家康清洲に在陣するをもって、明日は河を相越え、清洲まで押し寄せ申すべく、家康に対しては、向後いかようの儀ありとも、一切これを許容せず、徹底的にうち懲さんとす。この際東国相謀り、計策をめぐらさるべく、木曾義昌、上杉景勝は、みなこの秀吉が無二の味方なるをもって、これまた相謀り手立に及ばるる事肝要なり。先は取急ぎ、近況報知に及び候。三月二十五日、岐阜に於て秀吉……」
幽古は言われるままに筆を走らせながら、時々そっと秀吉を見あげてゆく。
秀吉は半ば恍惚とした表情で、流れるように口述してゆくのだが、それが近ごろでは一種独得の気魄にみちた名文となり、殆んど一字も加除の出来ない風格をそなえだしている。

「認めましてござりまする」
「よし、では次に、木曾川と長良川の間にある竹ケ鼻城の不破源六広綱へ勧降状じゃ」
「不破広綱どのでござりまするか」
「さよう、あやつの所への手紙は文字も筆太に致せ。木曾川の西にありながら、この秀吉に楯つくは不届至極じゃ。よいか、――このたび秀吉、八万の大軍を率いて岐阜表に着陣、これより河を押し渡りて、尾州ひと撫でに致すべく……」
そこまで言った時に、石田三成が、手に、一本の高札をさげて戻って来た。
秀吉はそれを認めて口述をやめ、
「佐吉、それは何じゃ」
三成はちょっとあたりへ眼を泳がせて、
「不届至極な高札を、榊原康政めが、川の西まで立てまわしてござりまする」
「榊原康政じゃと」
「はい。家康が大小姓、榊原小平太、小癪なことを……」
「ひとりで怒るな。たわけめ。読んで見よそこで。何と書いてある」
「読んでも宜しゅうござりますか。この不埒な文言を」
秀吉は声を立てて笑った。
「そちが腹を立てることはあるまい。おかしな奴じゃ。早う読め」

十

「では読みまする」
再度秀吉に促されて、石田佐吉三成は、高札の表を秀吉にも見えるように持直して、あらい息づかいのまま読みだした。
「――それ秀吉は野人の子、もともと馬前の走卒にすぎず……」
「なんじゃと佐吉！　何と申した」
案のごとく秀吉の顔は一瞬にして蒼ざめた。彼のもっとも嫌う言葉が、その最初に読みあげられたのだ。
「いったい、それはどこに立ててあったのだ。持参したのは何者じゃ」
「はい。場所は岐阜と竹ケ鼻の間にある笠松の村外れ。不届なりと引抜いて参ったのは一柳末安にござりまする」
「なに、末安が引抜いて参ったと。よし、末安をこれへ呼べ！」
「かしこまりました。これ、誰ぞ控えの間へ参って一柳どのを……」
三成が言いかけると、
「人を使うな。そちが参って呼んで来いッ」
秀吉は不機嫌に三成を叱りつけた。
「かしこまりました。では、すぐに……」
高札をその場に置いて三成は出ていった。

「幽古」
「はいッ」
「ぐずぐずして居らずと、その高札を」
「はい。読むのでござりまするか」
「持って参れというて居るのじゃ」
「かしこまりました」
俄かに空気が一変したので、大村幽古はうやうやしく高札を取って来て、わざと文面を見ないようにして秀吉に差出した。
「幽古！」
「は……はいッ」
「その方、この高札からなぜ眼をそらすのだ。読んで見よ」
「かようのものは、わざわざお読みにならずとも……」
「読めば腹が立つばかりじゃと言うのか。それとも読まずとも内容は分っていると申すのか」
「は……はいッ」
幽古は答えに窮して、あわてて膝で手をすりあわせた。
「これは、わざわざ敵が、御大将を立腹させようとして、あらぬことを書き記したものかと存じまする……さればご覧なされてご気分を損じられるは、敵の思う壺、笑うて捨てられるが宜しかろうと……」
「黙れッ幽古！」

「はッ」
「その方、小癪なことを申したの。この高札が、われを怒らせるための雑言とわからぬほどの秀吉と思うて居るのか」
「恐れ入ってござりまする」
「わしが読めと申したは、相手の雑言に、わが身がどれだけ耐えられるかを試そうためじゃ。読めと申したらさっさと読め」
「では、あの、どうあっても」
「読めッ、たかが家康の旗下ずれが……」
「では……」
幽古は、困りきった表情で、高札をとりあげて、やはり生まじめには読まなかった。
「やれやれ、何と言うことを……上様の、言語に絶した大逆無道を黙視する能わず、わが主君源家康は、信長公との信義のために蹶起したとござりまする」

十一

「そう書くに決っているわ」
秀吉は吐きすてるように、
「それだけではあるまい。わしがカーッと逆上するようなことが書いてあろう」
「と、お分りなされていながら、上様もお意地の悪い。幽古じゃとて、かようなものを見ますると、石田どの以上に胸がわるくなりまする」

「どのくだりが胸がわるい。胸のわるくなるくだりを読め」
「やれやれ、これは悪いところに居合せました。馬前の走卒が、信長公の寵遇をうけ、大禄を喰みだすと、大恩を忘れて君位の略奪を企てたとござりまする」
「そのようなことも書くに決っている。信孝がことが書いてあろう」
「あ、ござりました。亡君の子の信孝公を、その生母や娘とともに虐殺し、今また信雄どのに兵を向ける、言語に絶した大逆無道と……」
「やはり書いてあるか」
「それゆえ、かようなものは……」
「ハッハハッハハ、やはり壺ははずして居らぬぞ」
「な、なんと仰せられまするる」
「書くべきことは書いてあると申したのじゃ。その一条が抜けていたのでは、高札の意味はない。榊原康政と申す奴、見どころのある男じゃ」
　幽古はホッとした顔になって、
「やはり上様は大腹無類、今のお言葉を承わって安堵致しました」
「よし、一柳末安がやって来よう。その高札をここへ持て」
「何となされまする」
「刀架のそばに立てかけて、来る者みなに見せてやる。秀吉が、かようなもので怒ってたまるか、またとない陣中の慰みじゃ」
　そこへ石田三成が、半武装の一柳末安をともなってやって来た。

三成の血相も、まだ変ったままだったが、連れて来られた一柳末安は、それ以上に昂ぶっている。

「お呼出しにあずかり、まかり出ましてござりまする」

そう言った末安は、畳に突いた右腕にべっとり血のりをつけていた。

「末安！」

「はっ」

「その方、この高札を眺めていた者を斬って参ったな」

「こ……これは……はい、あの、声高に百姓どもに読み聞かせて居りましたゆえ」

「その者は、武士か町人か」

「僧侶でござりました」

「たわけめっ！」

「はっ」

「なぜその時に笑うてやれぬ。徳川勢は槍や太刀では叶わぬと見てとって、悪口で勝とうとする。憐れなものじゃの……そう言うて、悠然と眼の前で取捨ててやるものじゃ」

「はいっ」

「それをわざわざこうして持って来る……これを予に見せてどうする気か。さ、それから聞こう」

いったん納まったかに見えた秀吉の怒りは、一柳末安めざして又爆発した感じであった。

大村幽古は、そっと石田三成を見やってかすかに首を振ってみせている。

十二

「なぜ黙っているのじゃ。こなたももはや一方の大将。この高札を持って来るからには、持って来るだけの思案があってのことであろう。その存念をありていに申してみよ」
秀吉にたたみかけられて、一柳末安はびっくりして三成を見やった。
なるほど言われてみると理窟だったが、このような言い方で、怒りの飛沫(ひまつ)が、自分の身へはね返って来るとは思いも寄らなかったのに違いない。
末安が答えられずに黙っていると、秀吉の鋭鋒は三成に向けられた。
「佐吉ッ！」
「はいッ」
「その方も、カンカンになって、これを予の前に持って参ったぞ」
「いかにも持参致しました」
「何故に持参した。そなたを側近く召使うは、見どころあればと思うてのことじゃ」
「ありがたく存じて居りまする」
「その札はまだ早いわ。家康が家臣の榊原康政には、とにかく、この高札を立てるだけの思案があった。それを見て末安のたわけが、百姓の見ている前で僧侶を斬ったわ。これは充分に高札を立てた効(ききめ)があったというものじゃ」
三成の顔から次第に怒りの色が消えた。
「その家康が家臣の立てた高札に対して、この秀吉が家臣のその方には、どのような思案がある

か申してみよ」
「はッ」
「もし何の思案もなくば、その方は康政に遠く及ばぬ不肖の家来じゃ！」
「恐れながら……」
三成は喰いつくような眼を秀吉に据えたまま、
「その対策、むろん胸にあればこそ上様にお目にかけてござりまする」
「なに……苦しまぎれに、たわ言申すと許さぬぞ」
「これは思いも寄らぬご不興、存念申上げまする」
「よし、聞こう、聞いた上で抜かりがあらば側には置かぬ」
「上様、榊原康政が首に、十万石お賭け下さりませ」
「な……なんじゃと!?」
「康政が首に十万石、その値打ちは充分にござりまする」
「わけを申せ。わしは笑って取捨てよと申しているのじゃぞ」
「それはいけませぬ。第一上様が激怒なされた。そのようにお怒りなされた上様を、われ等はいまだ見たこともござりません」
「フーム」
「怒らすべくして怒らせた。康政めはあっぱれな者にござりまする。それゆえ、その首に十万石賭けて、これが、秀吉の怒りじゃと、ハッキリ敵味方にお示し下さるよう、これがわれ等の対策にござりまする」

「すると……うぬは、この秀吉に、怒りを隠すなと申すのか」
「怒りをかくす……上様が、そのような小細工なさるお方と思われるのは心外千万……怒る時には百雷の落つるがごとくにお怒りなされませ。持参した末安どのを叱るなど、もっての他と存じまする」
聞いていた大村幽古が、びっくりして眼を丸くした。

十三

「なに、わしが末安を叱ったと!?」
秀吉は射ぬくような眼で三成を見据えたまま、
「わしが末安などを叱るものか。あの高札を見せて、わしに何をさせるつもりなのかと訊いたのじゃ。余計な口は利くなたわけめ」
三成はもう一度身を乗り出すようにして、
「それゆえ、榊原康政の首に十万石賭けて下さるようにとお願い申上げました」
「佐吉ッ！」
「はい」
「するとそれは、末安の意見か」
「一柳どのの意見でもあり、それがしの意見でもござりまする。上様はお怒りなされた。お怒りなされたら、この儀、お願い申上げようと、ただいま控えの間で、両人相談して来たところでございます。なあ、一柳どの」

一柳末安はどぎまぎして、
「い……いかにも、さようでござりました」
秀吉は舌打ちした。
(小癪な、佐吉めが才に任せて末安をかばっていくさる)
が、それはふしぎに秀吉の憤怒をなだめる力をもっていた。地位も門閥もない上に才覚もないのでは、首のないのも同じことだ。
が、その点佐吉三成の頭脳は憎いほどによく働く。
とっさの間に思案を立て直し、逆に秀吉をたしなめようとさえして来たのだ。
(怒った時には、百雷の落ちるように怒れとは、何という心憎い斬返しであろうか)
しばらく二人を交互に睨んでいて、とつぜん秀吉は大口あいて笑いだした。
「佐吉」
「はい」
「その方は、よほど心せぬと自分の才に溺れて身を誤ることがあろうぞ」
「は……こころ致しまする」
「今のことは、こなたの腹でこなた自身に分っている筈。人間はとっさの機転の時には機転のように申すものだ。前々から思案していたように見せかけるのは嘘いつわりじゃ……」
「………」
「が、今日は叱るまい。とっさの機転ではあったが、そなたの機鋒の鋭さに免じて許してやる。いかにもこの秀吉は、今日は、カーッと激怒した!」

「恐れ入ってござりまする」
「激怒したゆえ、こなたの言うとおり、百雷の落つるが如くに振舞おう。幽古！」
「はいッ」
大村幽古は、ふいに大声で名を呼ばれて、びくりと大きく躰で応えた。
「紙！　筆！」
「は……はいッ。何と認めまするので」
「高札の文案じゃ。よいかッ」
「心得ました。はい、何とぞ……」
「ひとつ、榊原小平太康政」
「ひとつ、榊原小平太康政……」
「右の者、若輩者とは言え理非を弁えず、秀吉の悪声を放つ段不届至極の奸物なり、その首級討取り持参候者に敵味方身分の上下を問わず、十万石の恩賞をあて行うものなり。羽柴筑前守秀吉」
「はい、そのままで、立派なご文章にござりまする」
秀吉はそれには答えず、
「末安！」
と、また途方もない大声で、どうなることかと固唾をのんでいる一柳末安の名を呼んだ。

十四

「はッ」
　末安は相手にさそわれて、飛び上るような高声で答えた。
　秀吉は斬り込むような鋭さで、
「予は怒っている。烈火のごとく怒っているぞ」
「はッ」
「いま幽古が書き渡す、その文言を認めて、川の西はむろんのこと川の東、徳川勢の鼻尖まで、数をいとわず高札を立てさせよ」
「あの康政が首に、まこと十万石を賭けさせられますので」
「たわけ！」
「はッ」
「この秀吉が嘘を申すか。しかもその方、それが最上策と、佐吉と相談の上、わざわざわれ等に見せたのであろうが」
「かしこまってござりまする」
「池田勝入が眼の前にも立てよ。森武蔵守が陣屋のそばにも立てさせよ。とぼけた奴等じゃ。予の着到する前に、ぶざまな負け方など致し居って。急げッ。明日わしは川を渡ってすぐに味方の陣地を見回る。そのおり高札が見えなんだら、その方の上にもう一度、三十雷か五十雷が落ちると思え！」

「委細承知仕ってござりまする。では、ご免」
　一柳末安が、顔中を硬直させて出てゆくと、秀吉はすぐ又三成に向き直った。
「まだ怒りは納まらぬぞ佐吉！」
「は……」
「雷がまだまだ落ち足りぬのじゃ。まだ二、三百は残って居ると申すのじゃ」
「これは恐れ入りました。では、一度に、ここでお落し下され、もう青空をお見せ下さりまするよう」
「たわけめ、そう雷が思うままになるものか」
「と、仰せられまするが、もうお眼の中はだいぶ晴れて参りましたようで」
　三成がうやうやしく一礼すると、秀吉はついにプーッと口を押えて吹き出した。
「佐吉」
「は……はいッ」
「当分、わしは怒りつづけて居るぞ。こんどの夕立は続くと思えよ」
「それでは、木曾川の水かさが増しまするこ とで」
「明早朝川を渡る。一応は犬山城へ落雷して、その足ですぐに前線廻りじゃ。準備に手ぬかりがあると、そちの臍も引抜くぞ」
「かしこまりました。では早速にその手筈、整えて置きまする」
「待てッ佐吉」
「はい」

「その方、いま、立ちぎわにクスリと笑ったな」
「恐れ入りました。ホッと致しましたのが、笑いになったのかも知れませぬ」
「笑う時にはな、人にかくしたような笑い方はするな。笑う時にはこう笑え！　アッハッハッハッハ……」
「かしこまりました。こんどからはそう笑いまする」
「よし、行けッ」
「ではご免下さりませ」
「待てッ」
「はいッ。まだ何かお心に障りますことが」
「気になる奴だ。うぬの才気は鼻から唇辺に見えすぎている。よしッ、秀次を呼べ」
秀吉はそう言うと、三度び幽古に、
「筆！」と、言った。

十五

幽古が再び筆をとって構えたところへ、三成に呼ばれて、甥の秀次が入って来たが、秀吉はもはや何か考えだしていると見えて、その方はじろりと一瞥しただけだった。
「よいか幽古、もう一本大事な手紙じゃ」
「用意充分にござりまする」
「これはのう、内心では揶揄するのじゃが、表面はどこまでも、ものものしい密書の態じゃ」

「宛名はどなたでござりましょうか」
「よし、文案はその方致せ。わしの言うままでない方が面白い。わしはこんどは大意だけを言うことにしよう」
「かしこまりました。では大意だけ伺って、それがし文案仕りまする」
「よいか。家康は、思うたよりもたわけではあるまいかと……」
「なるほど」
「宛名はあとで申すぞ。宛名のことは考えずに、大意をよく摂れよ。――秀吉岐阜に到着と聞かば、すでに何程かの手を打つべきなのに、いまもって密使がないのは如何なものか。かくては秀吉、面目にかけて家康に鉄槌を加えねば相成るまい。とにかく、明早朝川を渡って家康が手の内拝見するとしよう。その場に到ってなお改むる色見えずば是非もなし。秀吉もいよいよ一大決心を致すであろう。老臣どものうち、家康が不覚に目覚めたるものはとがめず、さりながら、家康自身は天下の手前も容赦ならぬことと相なろう。この辺熟考の上、家康をしてこの上誤らしむること勿れと……」
　幽古は要点をすらすらと書きとめながら、
「で……宛名は」
「家康が家老、石川伯耆守数正じゃが、書面の上へは石数どのと致しおけ」
「分りましてござりまする」
「由々しげに書けよ」
「ははッ」

幽古が慎重な表情で、改めて硯を引寄せてゆくと、秀吉はもう甥の秀次に向き直っていた。
「秀次」
「はい」
「そなた幾つであったかの」
「はい、十九歳でござりまする」
「十九歳ならば申聞かそう。そなたわが身に実子のないことを存じ居ろう」
「存じて居りまする」
「さらば、秀吉天下掌握のあかつきには、わが血筋の中より改めて嗣子を選び出さねば相ならぬ。そなたもその候補の一人じゃ」
「は……!?」
「何をキョロキョロ眼を動かす。こなたは三好が伜ながら、わが姉の子じゃ。それゆえ、今度は、そなたにその実力ありや否やを見分けられる戦と知れ。果して天下の大将軍の器か。それとも二万石三万石が分相応か。或いは五、六十万石の補佐役か」
「は……」
「ハハハ……実力次第、腕次第の世は楽しいものじゃ。戦ぶりにも前に申した分相応の仕方がある。充分に働いて見せるがよいぞ」
「かしこまりました」
「よし退れ。秀吉はいま、天下人の思案を練らねばならぬ。忙しいものじゃ人の一生は」
そう言うと、再びくるりと幽古に向き直って、

「まだ思案中か。やれやれ」
聞えよがしに言って、ぐっと虚空へ両手をのばした。幽古は固くなって文案を練っている……

長久手（ながくて）

一

明けて三月二十七日。
池田勝入と森武蔵守が金山より犬山までの船の殆んどすべてを集めて待つところへ秀吉はやって来た。
その日はからりと晴れわたっていたが、十九日以来の度々の降雨で、木曾川の水は、まだ濁っていた。この降雨がなければ、勝入も武蔵守も、秀吉を池尻まで出迎え、そこでその後の協議をする筈だったが、出水の節は来るに及ばぬと言う秀吉からの知らせで差控えていた。
それだけに、川を埋めた船の中から千成瓢（せんなりひさご）の馬印が尾張の岸に横づけられると、勝入も武蔵守もいそいそと秀吉を出迎えた。
すぐ犬山城へ案内し、そこで当然今後の戦略戦術の大評定があるであろうと思っていたのである。
秀吉は鎧（よろい）をつけていなかった。
愛用の唐冠の兜（かぶと）に陣羽織姿で、二人に会うとすぐに、

「まず、家康が陣地を見ておこう」
と、いつにない厳(いか)つい表情で言い出した。
「前線の味方の陣地に手ぬかりもあるまいが、家康の構えを見ておかねば、あとの策を立てがたい」
「と仰せられますと、犬山城へは入らせずに、このまますぐ……」
勝入よりも先に伜の紀伊守元助が、突っかかる口調で言った。
秀吉はじろりとその方へ眼を移して、
「家康が陣地を観望したい。用意はしてあろうな」
「仰せまでもございませぬ。それではすぐに二宮山へご案内致しましょう」
「そうか……」
秀吉は鹿爪らしく首をかしげて、
「では、いったん犬山城で湯づけでも摂(と)って参ろう」
おそらく用意が出来ていなかったら、ここで一喝(いっかつ)する気だったに違いない。勝入はそうっと婿の武蔵守を見やって、秀吉のうしろに従った。
「勝入どの」
「はい」
「この尾張は、そこ許(もと)の一族に献じる気ゆえ、秀吉も随分と骨を折ろうぞ」
「は……、いや、何とも、かたじけない、儀でござる」
勝入は面喰(めんくら)って答えた。これでは合戦の主体は勝入父子で、秀吉はこれを援(たす)けに来たことにな

る。
城に入っても秀吉はなぜか笑顔を見せなかった。半刻あまり小憩すると、すぐに二宮山へのぼると言い出し、さっさと又城を出た。
「どうも機嫌は斜めのようだの」
城へ残るように命じられて勝入がふっと伜に囁くと、紀伊守元助は、ぷりっとわきを向いてしまった。うかつに何かいうと、
「――このようによく晴れた見透しの利く天候を無駄にする気か」
そんな皮肉を言われそうな気がしたのだ。
その秀吉も二宮山へのぼって、南に小牧の敵陣をのぞむとはじめて例の豪快な笑いをひびかせた。
「ハッハッハ……これはよい眺めじゃ。家康め、自分では陣地により、わしに野戦を強いようという……読めたぞ紀伊守」
しかしそのあとはやはり勝入父子にとって、ぴりりと痛い一言だった。
「あの小山を先取しあれば、清洲の城攻めで済んだものをのう」

二

二宮山からひとわたり、小牧山とその周辺の地形、道路、村落と見てゆくと、すぐに秀吉は前線陣地の巡検に向った。
「小牧山の敵陣に、いちばん近いところはどこじゃ」

「二重堀にござりまする」
「よし、そこからまっ先に案内せよ」
　すると傍から、石田佐吉が、
「鎧も召されずにそのお身なりでは」
「なにッ」
　と、秀吉は三成よりも紀伊守元助や、武蔵守長可を意識した身ぶりで、
「わしの躰に、敵の矢弾がとおると思うか。その方たちの眼には見えまい。小牧山には、まだ家康は出て来て居らぬわ。家康の留守にわしを見かけて戦の挑める者などあると思うか」
　傲然と一笑に附して馬に乗った。
　秀吉のその観察は当っていた。
　小牧山の東北側、二重堀に来てみると、なるほど山頂に家康の馬印はなく、榊原小平太康政の車の紋の旗だけが、いかにものどかに春風になびいていた。
「ふーむ。あれに留守しているは何者じゃ」
「榊原小平太にござりまする」
　森武蔵守が答えると、充分に知っていると分る応じ方で、秀吉は笑った。
「ハハ……あれが小平太か。わしを右府さま馬前の走卒と罵った男じゃのう」
　この時も、元助はひやりとした。森武蔵守は、その以前から蒼ざめた昂ぶり方で、
「されば、御大将には、もはやあの高札を……」
「高札ばかりか、廻文も出ているわ」

秀吉は軽く言い放って、さっさと敵の柵門ぎわに馬を寄せてゆく。
「そのように近よられましては……」
こんどは元助があわてて言った。
「鉄砲玉が届くというのか」
「敵ももはや、御大将と気付いて居りまする」
「気付かいでか」
秀吉は憎いほどの不逞不逞しさで、
「気付かせるため、天が下に鳴りひびいた千成瓢を立てているのだ」
「万一のことがござりましては……」
「紀伊守」
「はッ」
「万一のことがあったら、おこと等父子に天下をそのまま進ぜよう。ハハ……小平太ずれの放つ鉄砲玉に当って死ぬような秀吉ならば、さっさと死ぬるがよいのじゃ」
そう言うと、秀吉はまるで悪戯ずきの童のように、到頭敵の柵門にぴたりと馬をつけ、わざわざ中をのぞき込むのであった。
これには元助や武蔵守よりも、従って来ている日根野備中守父子や堀秀政の方がびっくりして、
「お危うござりまする」
あわてて、馬を寄せていってさえぎった。

と、そのとたんだった。山頂から、ドドドッと一度に銃声がとどろき渡った。
人々は、われを忘れて秀吉をかばった。
ただ池田紀伊守元助だけが、意地わるい眼をして、とっさに秀吉の顔いろをうかがっていた。
(大将のすまじきことを……)
この狡猾なホラ吹きが、どのように見苦しく仰天するかと、それを楽しむ気持でだった。

三

おそらく、この瞬間に秀吉の顔いろをうかがった者は、紀伊守元助だけではなかったに違いない。
秀吉の馬を囲んだ人々までが、一瞬だったが血の気を失くしてしまっていた。
「ハッハッハッハッハ……」
秀吉はあろうことか、大声で笑いだすと、馬上でさっと軍扇をひらいた。
「撃て撃て。秀吉はここじゃここじゃ」
その顔いろにはみじんの変化もない……
池田紀伊守元助はゾーッと背筋が寒くなった。
信仰に近い父勝入の秀吉崇拝に、少なからず反撥をおぼえて来ている元助だった。
(人間の実力に大した開きがあるものか。ただ秀吉は、並の者より運強く、並の者より狡猾さで立ちまさっているだけなのだ……)
そんな気持で、ともすれば白い眼を向けて来ている元助だったが、今の秀吉は超人と言ってよ

かった。
全然恐怖のいろは見せず、平然として悪童のように扇をひらいて振ってみせようとは……
たしかに山上からここまでは、百発百中の距離ではなかった。それにしても、みながみな、さっと蒼ざめてゆく中で、秀吉だけは……
「備中備中」
いぜん柵門とすれすれに歩きながら、秀吉が日根野備中守弘就を呼んだ時に、第二の斉射がとどろきわたった。
こんどは弾道の近さが空気を裂いて感じとれた。
「お呼びでござりますか」
「この陣地は、その方父子の手で固めよ」
「かしこまってござりまする」
「よいか、敵はあのように陣地戦の覚悟ゆえこっちも急いでは相成らぬ。ここから東へかけて、五十五間、南北四十間の高い土塁をきずきあげよ」
「は……ここより東へ……つまり東西に五十五間……」
「そうじゃ。南北に四十間。こっちもここを動くものかと固めて見せるのじゃ」
「かしこまってござりまする」
「では、すぐにその方は、この地へ陣を移すがよい。次はどこじゃ紀伊守」
言われた時に元助は、べったりと額に汗の玉であった。
（あの銃声の中で、ちゃんと陣地の構築を考えていた……）

それは気取りや見栄で出来ることではなかった。
（これは、やはり並の人間ではない！）
そう思うと、今度は声が震えそうであった。
「はい。次は田中の砦でござりまする」
「行こう案内せよ」
「はッ」
「紀伊守、どうじゃ、小平太ずれの鉄砲などわしの体はよけて通るであろうが」
「は……恐れ入ってござりまする」
「秀政！」
「はいッ」
堀秀政が呼ばれて馬を寄せて来ると、
「この二重堀と次の田中の砦は大切な急所じゃ。その方たちに固めて貰おう。事によると決戦はこのあたりじゃぞ」
森武蔵守は、自分の名が、ここらで出ぬものかと、伸びあがるようにして耳を澄している。

四

二重堀から田中までは、十数町しか離れていない。そこへはいま森武蔵守が一隊の兵を出して敵の見張りにつけてある。
したがって武蔵守も、当然ここへ進出を命ぜられるものと思っていた。

それだけに、呼ばれぬうちから、馬の手綱に力をこめて耳を澄しているのだが、堀秀政に話しかける秀吉の言葉の中には、仲々彼の名は出て来なかった。
「秀政……」
「はい」
「その方、いちばん東に構えて、充分に備中父子を助けるようにな」
「かしこまりました。して、われ等が右手は誰でござりまする」
「されば、ここは一番、細川越中（忠興）を置かずばなるまい。越中は思慮も勇気も中分はないからの。どうじゃ、その方の考えは」
「越中どのならばわれらも競う甲斐があると言うもの」
「そして、その右へは長谷川秀一、その右に誰を置こうかの」
「加藤作内光泰では」
「いや、作内ではならぬ。そうじゃ、忠三郎がよい。忠三郎に致そう」
忠三郎とは蒲生氏郷のことであった。
「忠三郎をおいて、その右に高山右近、それから作内じゃ」
森武蔵守は、いよいよ馬を秀吉のうしろにつけた。
ここが決戦場になろうという大切な敵の正面に、まだ自分の名が出て来ない。
この頃から池田紀伊守元助も、同じ想いにかられ出したと見え、時々、ちかり、ちかりと、秀吉を見やり、武蔵守をうかがった。
「すると、作内光泰が、この陣地の右翼になりますか」

「右翼は作内ではない。右翼は木村隼人じゃ。それで田中の砦へは約一万。日根野父子を合せて約一万二千じゃ」
言っているうちに、すでに田中の砦であった。
ここでは秀吉の巡検は入念をきわめた。
真正面に東西十六間、南北三十間の柵門を構え、それを中央にして魚鱗の形に、堀、細川、長谷川、蒲生、高山、加藤、木村と、功を競わす意志と見えた。
むろんここが、この地の後方になるであろう秀吉の本陣の先備えになってゆく。
それにしても犬山城で評定を開かず、いちいち現地で部署を決定するというのはかつてないことであった。
考えようによれば、こうする肚があったので、犬山城に立寄るのを逡巡したのだとも言える。
田中の砦に外久保山、内久保山から山崎山の砦を見ていって、それぞれ秀吉は守将の名をあげ、土塁、柵門の長さまで指図した。
外久保山は丹羽五郎左衛門の三千。
内久保山は森長近と蜂屋頼隆の三千五百。
山崎山は稲葉一鉄とその子の右京亮貞通の三千八百。
山崎山の指図を終って、王塚（青塚）の砦に着いた時には、森武蔵守はもう悄然と肩をおとしていた。
秀吉は羽黒の敗戦を怒って森武蔵守を要所に置かぬ心と見るより他になかったのだ……

五

王塚についた時には、もう陽は傾いていた。秀吉はここでもゆっくりと、細い農道や、立木の名まで尋ね、何度か小手をかざして南の小牧山を眺めやった。
そして、顔のいろを変えている森武蔵守をちらりと見やって、
「どこぞ躰でもわるいのか」
ちくりと皮肉を言ってから、
「躰が悪いのではこの大切な砦は任せぬが」
「いいえ、躰など、少しも悪くは……」
「そうか、それはよかった。この砦は最右翼の押えじゃ。最右翼の小口には、筒井伊賀守（定次）と伊東掃部助祐時の七千余をおくが、それを充分に助けなければならぬ。分っていような」
「では……この王塚は、それがしに」
「頼もう、しかとその方に」
「心得ました。かたじけのう存じまする」
声をはずませて答えたのだが、しかし、その昂奮も犬山城へ帰りつくまでに、次第に消えていった。
やはり秀吉は、羽黒での武蔵守の敗戦を計算に入れ、その実力を過小評価している気がしてならない。
最右翼の小口の砦にある筒井、伊東の大軍と、小口の左におかれる稲葉一鉄父子にはさまれ、

森勢は有ってよし、無くてよい存在のように思われる。

この不安と不満は、勝入父子にもあった。

彼等もまた当然最前線に出されて、家康の主力と対峙（たいじ）させられるものと思っていた。ところが犬山城に戻って、改めて認められた陣立書を見ても、勝入父子はそのまま犬山城にとどまることになっていた。

犬山は以前は最前線であった。その最前線の拠点をおとし入れたのは勝入父子である。それが秀吉の後備えのそのまたあとに取残されたことになる。

わけても秀吉の狡猾さに疑惑をもち、しきりに敵の強大さを主張して来た紀伊守元助は、この陣立を見てギクリとするものがあった。

（或いは秀吉は、わが心を見抜いているのではなかろうか……？）

新鋭部隊がやって来たので、それと交替させたのだと考えれば何でもないことであったが、最後尾へ取残されたのでは、手柄を立てる機会もない。

しかし秀吉は、その夜、勝入と共に食事をとりながら、

「何と言っても、この城を手に入れたは、おことの大手柄……」

聞きようによれば歯の浮くような褒め方を敢（あえ）てした。

「家康の肚はもう読めた。これからは、わしが本陣を楽田にすすめ、敵の討って出るのを悠々と待ち受ける。おことは、安心してしばらく骨を休めていて呉れ」

そう言われると、人の好い勝入は、眼のふちを赤くして秀吉の友情に感動していたが、これも翌日になってみると、息子や婿と同じ不安に通じてゆくのだった。

「――勝入父子では、どうにもならぬゆえわしがやって来た。わしが出て来た以上、もはや、勝入などは……」

その不安が、期せずして池田父子に何等かの手を打たせずにおかないことになってゆく。

父子が重臣をあつめて、重大な評定をはじめたのは翌二十八日の夜からであった。

六

二十八日になると、両軍の動きは活潑をきわめた。

秀吉の考えていたとおり、彼が前線を廻り終るとすぐに小雨になり、二十八日の早朝には、かなりはげしい本降りになっていた。

その雨の中を、秀吉勢も続々と配備についていったし、徳川方でも、家康自身、清洲の城を出発して小牧へ陣替えをしていった。

信雄も、秀吉の着陣を知らされて、急いで長島を発し、小牧へ陣を移しにかかっている。

どの砦も、鎚と手斧の音がひびき、馬と人とが、ごった返している。

その中へ、またしても、榊原康政の、

「――それ、羽柴秀吉は野人の子……」

と、例の逆賊宣伝の高札の文章が、こんどはいかめしい漢文に書き直されて、廻文となって秀吉方の諸将のもとに届けられた。

「――いつでも来い」

という挑戦で、戦機は刻々に両雄の間に熟してゆく。

池田勝入は、本丸の大書院を秀吉に明け渡し、みずから二の丸の書院にしりぞいて、そこへ一族老臣を呼び集めると、
「わしは、筑前どのの友情に応えねばならぬ」
事実、腹からそう信じている言い方で口を開いた。
「筑前どのは、わしに疲れたであろうゆえ、しばらく休養せよと仰せられた。又、この尾張は貴公に進ぜるものゆえ、秀吉、大いに骨を折ろうとも言われた。そのようなお言葉を聞いて、それに甘え、腕を拱いていることなど思いも寄らぬ。われ等もまた秘策を以って、この一戦に筑前どのあっぱれの名を天下に轟かせてやらねば義理が立たぬ」
その言い方はおかしかったが、もはや、元助はそれにさからうことはしなかった。
人の好すぎる父が、秀吉崇拝に凝りかたまっているのは、それだけ秀吉に、実力があり魅力があるからだと、今の彼は納得している。
ところが、こんどは弟の三左衛門輝政が小首を傾けて口をはさんだ。
「父上が仰せられるほどであろうか。われ等はちと頷きかねる節がある」
「なに、何が頷きかねるのだ。筑前どのは決してわれ等を疎んぜられるようなお方ではない。この事は、この父が多年の交誼でよく存じて居る。いったいその方、何がうなずけぬと言うのだ」
「うなずけませぬ。父上もいま仰せられた。決してわれ等を疎んぜられるお方ではないと。それは疎んぜられていはせぬかと、父上ご自身思われているから出るお言葉じゃ」
「なに、持ってまわるな。武将はもっと分り易く申せ。疎んじられる方ではないと申したは、疎んじられると思うている……ええッ、面倒な、不審があらばそのような舌を噛みそうなことを言

わず、ずばりと申せ！」
「ずばりと申しましょう。ここで、何か手柄を立てねば、父上も、それから森武蔵守も、武士の一分が立たぬのでしょう」
「な……なんじゃと」
「父上は、筑前どののご機嫌を取ろうとする。そんな気持で働きとうはない」
弟のはげしい言葉を、元助は笑いながらさえぎった。
「まあ待て弟！」

七

「待て待て……」
元助は三左衛門輝政の袖をたたいて、
「父上は、筑前どのの機嫌を取ろうとしているのではない。すぐなお心で奉仕がしたいのじゃ」
「奉仕……？」
「そうじゃ奉公とは違う。惚れている女子に尽すような、あの気持ゆえ奉仕じゃな」
「黙れッ、この倅どもめが」
勝入は苦りきって舌打ちした。
「其方たちは合戦を何と心得て居るのだ。つつしめ。惚れている女子……たわけた例を引くと許さぬぞ。一言にして言え！　一言に、よいか、これは士は自らを知る者のために死するの気概じゃ」

「父上」
　と元助は笑いながら、
「近ごろの士は、仲々おのれを知る者のためにばかりは死にませぬ。それぞれのそのうしろに胸算用がある。のう武蔵どの」
　話しかけられて、そっと陣営をぬけて来ていた武蔵守はムッとした。
「何の評定じゃ今宵は。まず舅御のご意見を承わりましょう」
「そうじゃ。そのことじゃ。それについて、この勝入に必勝の意見がある」
「父上……」
　と、また弟の三左衛門がさえぎろうとするのを兄の元助がおさえた。
「弟、よいではないか。父上の惚れた筑前どのに、われらも惚れよう。筑前どのは、それだけの値打のあるお人なのじゃ」
「そうとも。まだ、元助も輝政も若い。父が信じるほどの人物に、見誤りはあるものか」
「では、お話の要点、それがし、ここに書きとめまする」
　家老の伊木忠次が、巧みに話の焦点をとらえ、筆をとって勝入を促した。
「以前にも、ちと話したことがあるが、昨日から今日への様子を見ていると、わしの思うた通り、家康は三河から続々と兵を呼び寄せて居る」
「たしかに、仰せの通りにござりまする」
「ここで何よりも大切なことは、対陣を長びかせぬこと。七万近い大軍を引きつれて、長滞陣になっては食糧だけでも並大抵のものではない。それゆえ、われ等は筑前どのに乞うて岡崎へ中入

れするのじゃ」
「岡崎まで出向かれまするか」
「そうじゃ。三河はやがて空になろうゆえ、機を見て中入れすると、家康はいやでも三河へ引きあげねばなるまい」
元助はもはや、その案を何度も訊いているので軽くうなずくばかりだったが、武蔵守は身をのり出して来た。
彼はおそらく、勝入のこの作戦に加わって、羽黒の不名誉をそそがねばならぬと必死なのに違いない。
「それで……それでその策戦を、筑前どのはお許しなさりましょうか」
「わしが願えば許すも許さぬもない」
勝入は自信にみちた様子で、
「筑前どのの肚は、それ、長滞陣がいちばん困るのじゃからの。われ等に秘策ありと知れば、頼む！　と仰せられるに違いないのじゃ。よいか、われ等が岡崎を衝く。家康が狼狽して引っ返す。すると信雄どの一人になる……これは筑前どのがすぐに叩こう。さすれば戦はいっぺんに終りになるわ」

八

「父上――」
と、元助は言った。

「その案は、案としては中分ござりませぬが」
「なに、案としては……」
勝入は話の腰を折られて又癇性に舌打ちした。
「案から話さねば順序がつくまい。控えて居れ」
「いかにも、で、それを実行します陣立ては」
森武蔵は眼をきらめかせて勝入に声援した。
「そのことじゃ相談は……家康が引っ返すと、われ等はこれと三河で戦わねばならなくなる。全部たたきつぶす要はないが、無事に引揚げるだけの用意は必要じゃ。これにどれほどの兵力がいるかが問題じゃ」
「池田勢の六千に、われらの三千、合計九千では足りませぬか」
「武蔵どの、九千で足るわけはござるまい」
と、元助はさえぎった。
「家康が万一総勢を連れて引返したら、どれほどの兵数になると計算なさるのじゃ」
「されば……」
「敵地で戦うには、家康の総勢の倍はなければならぬ。とすれば、家康勢を一万五千と見ても三万……それゆえ、それがしも考えながら足ぶみするのじゃ。約半数の軍勢を、筑前どのが割くか割かぬか……また、三万以上の大軍を割いて、家康に悟られぬように隠密に行動出来るかどうか。問題はこの点にかかっているのだ」
元助が説明すると三左衛門はけげんそうに、

「三万など、そのような大軍はいりますまい」
「なぜいらぬと思うのじゃ弟は」
「奇襲は大軍を要しませぬ。せいぜい引返して来る敵と同数、敵が一万五千ならば一万五千で充分に用は足りるかと存じます」
「万一、進軍の途中で敵に気付かれ、岡崎城へたどり着く前に襲撃されてもか」
「いかにも」
と、三左衛門も譲らなかった。
「いったん奇襲を受くると、敵は、狼狽して居ります。狼狽した一万五千と、枚をふくんで進む一万五千とは、数の上では同じながら、その力の比較は三万対一万五千と同じことになりましょう」
「そうじゃ！」
勝入は輝政の言葉に膝をたたいて、
「奇襲すれば一万五千は充分に三万にも見えるものじゃ」
「しかし、事実三万あれば、相手は戦意を失います。戦意を失わせるが最上策かと……」
そこまで言って元助は、自分で自分の言葉の矛盾に気付いた。
秀吉が三万の大軍を割く筈はなく、割いても隠密には動かし得ないと言ったのは自分だったのだ。
「では、どれだけの兵数を、また、誰をこの作戦にお加えなさるお考えか、それから先に殿のご意見を伺いましょう」

今度は家臣日置才蔵が促した。
「それじゃ。わしはここで、筑前どのに、三好孫七郎秀次どのを、その中入軍の総大将に仰ぎたいと申入れてみるつもりなのじゃ」
「あの、総大将は別に頂くので……」
森武蔵守ががっかりしたように口をはさんだが、勝入はそれを無視して、
「秀次どのは筑前どのの甥、筑前どのにとっては眼の中へ入れても痛くないお方じゃ。これに手柄を立てさせて義理を果さねばならぬところじゃからの」
勝入は眼を細めて秘策の開陳にとりかかった。

九

秀次の名が出ると森武蔵守も若い三左衛門輝政も露骨にいやな顔をした。
「秀次どのはまだ十九歳でござりましょう。総大将に頂くほど、戦になれて居りましょうか」
三左衛門が口をはさんだが、その時にはもう勝入は伜どもの感情など問題にしていなかった。
或いはこのあたりが最も秘策中の秘策であったのかも知れない。
「たわけたことを……」
勝入は三左衛門を押えて、
「総ての指揮はむろんわしが取る。が、名目は秀次どのを総大将とし、秀次どのに手柄を立てさせて筑前どのへ義理を果すのじゃ」
「そのようなところへ、又義理では……」

「おう、義理を忘れては武将ではない。武将は義に生き義に死ぬのが本懐じゃ。というがな、実は筑前どの、ここらで秀次どのに手柄を立てさせ、出来れば養子にしたいところなのじゃ。わしにはその肚がよく分っている。分っているゆえ、秀次どのをと申し出るのじゃ」
「と仰せられると、それも策戦の中でござりまするなあ」
と伊木忠次。
勝入はもはやさっきの「義」などと言ったのを忘れたもののように、
「秀次どのを総大将にと言えば、筑前どのは、必ずわれ等の願いをきき容れ、必要だけの軍勢は割いて呉れる……そうそう、さっきの兵数じゃが、池田勢と森勢ではむろん足らん。これに秀次どのに附けて八千。更に、監軍として堀秀政の三千を乞い総勢二万で陣立てしたら申分はあるまい。どうじゃ異存はあるか」
「異存はござりませぬが、それを筑前どのはお許しなさりまするか」
「自信がある。任せておけ！」
「お伺い致しまする」
「なんじゃ武蔵どの、何が不審じゃ」
「すると、総大将は三好孫七郎秀次どの、監軍は堀久太郎秀政どの、それでいったいわれ等はどうなりますので」
「これはしたり、名は他に譲って、実は、われ等が合戦ではないか。どうするとは心細い。この勝入と紀伊守とで先鋒をつとめる。第二軍はむろん武蔵守、おことじゃ！　三軍は堀秀政をおき、四軍に秀次どのをおく。総大将はうしろのものじゃからの、このあたりに勝入の陣立ての妙

があるのじゃ」
勝入はそう言うと、すでに事の成った日へ思いを馳せているらしく、
「先鋒、二軍というが、岡崎城へ入る時にはわれ等で並んで入ろうのう武蔵どの」
森武蔵守は、ようやく納得したように、
「は……是非とも！」
と、頭を下げたが、三左衛門輝政はまだしきりに首を傾げている。彼はまだ秀次の総大将にこだわっているのだった。
（奇襲に妙な義理など考え、戦いなれぬ総大将を伴ってよいであろうか……？）
元助はもはや父の考えを動かすことは出来まいと思った。これを実行させなければ、森武蔵守もクサって行くし、父の立場も無くなりそうな気がする。
「父上、この案はしばらく筑前どのに内密になされませ。まだまだ家康の軍勢は続々三河からやって来る。三河が空になった……と、思われる所まで待って、切り出すがよい。それ以外では、元助に異存はござりませぬ」
この一言で、事は決った。

十

池田一族が、度々評議を重ねた上で、三河侵入を秀吉に申出たのは四月の四日であった。
この時には勝入はむろんのこと元助も三左衛門も森武蔵守も、もはや全部が納得しそのために全力を賭ける気になりきっていた。

進路も図上で検討し尽した上、実地に密使を放ってこまかく探らせた。
——それまでに前線での小ぜり合いは何度かあり、表面秀吉は、どっかとここに腰を据えて戦うという意志を見せるため、岩崎から二重堀へかけて一夜にして高さ二間半、根敷十五間、馬踏八尺の大土居を作りあげてあっと言わせたりしているが、その内心にはおだやかならぬものがあった。
家康は三河との通路を確保していて自在に近距離を往来しているが、大坂から出て来ている秀吉の補給はそう容易なものではなかった。
二重堀の土居を作る時でも、鍬が足りずにわざわざ近江の長浜から二百梃取りよせたりしなければならなかった。
したがって、何とかして、これを持久戦に持込まずに済ます方法はないものかと、心中しきりに考慮している。
そのあせりを充分に知っていて、勝入は秀吉を犬山城の本丸にたずねていった。秀吉はその時、腰に灸を据えさせていたが勝入がやって来て、ふところから絵図を取出すと、笑いながら坐っていった。
「勝入があせりだしたぞ。あせると家康が喜ぶぞ」
「これはしたり、筑前どのはおあせりでござりませぬか」
「あせらぬのう。わしはここで悠々と休養をとっている。尾張は生れ故郷じゃ。故郷の風は躰にきくぞ」
「相変らずの負け惜しみ、恐れ入りましたなあ」

「負け惜しみではない。わしはそのうち一度中村へそっと行って見ようかと思うて居る。あの村にな、千鶴と申して、幼友達の愛くるしい娘がいた。ちょっと会って見たい気がする」
「おかせられませ。その頃の娘ならば、もう三十の婆あじゃわい」
「時に、その絵図面は何んじゃ。三河へ中入れでもしようというのか」
「えっ、やっぱりこなた様も、それを思うてござったと見える。いかにも、ここは中入れして、家康を三河へ引っ返させる他に手はござりませぬぞ」
「なるほどのう……こう行くのか。これは柏井まで南下して川を渡り、小幡、印場の間で三河への通路を断ち、それから長久手の東の岩崎の城を取るものじゃな」
「その通りで……しかし、この城を足場にしてあとは一気に岡崎を衝きまする」
「ふーん、それは大した中入りじゃ」
「ご賛成下さりますか。われ等が岡崎を衝けば家康めは尾張で戦う口実がなくなりまする。遅くて半月、早ければ十日で戦は片付きましょう」
「なるほど悪い事ではない」
「賛成下さるでござろうなあ」
「いや、しかし、不賛成にしよう。わしは、おぬしを殺しとうない。話し相手は生かしておきたい。古い朋友はの……」
　そう言うと秀吉は、屈托なげに笑い出した。

十一

「筑前どの、ご貴殿にそう仰せられると、この勝入はいよいよ黙って居られませぬ」
勝入はどこまでも生まじめに秀吉を信じて、
「ご貴殿が、何かとわれ等を労り下さる。そのお情が身にしみるゆえ、われ等一族感泣して立てたこの秘策でござる。もはやお労りはご無用になされたい」
「ほう……」
秀吉は眼を丸くした。これほど手ばなしで信じられると、笑うことも出来なくなる。
「この勝入が、ご貴殿の信義に応えて、最後のお役に立とうとせしもの、お願いでござる。まげてお役に立たせられたい！」
「これは、おどろいた。かかる対陣のおりの中入れと申すは、並々ならぬ危険の伴うもの……」
「覚悟の上でござる！　その危険を冒さずば、みすみす家康が思う壺。家康は、この長滞陣に飽きて、われらが引揚げる時を狙っているに違いござらぬ。野戦での追撃は家康が最も得手とするところ、むろんそれはお気付きではござろうが……」
「分っている。分っているがのう……」
そこ許では心もとないのだ……そう言おうとして、秀吉はあわててあとの言葉をのみこんだ。
あまりに相手が生一本なので、秀吉ほどの男でも、思うままは口に出来ない。相手はどこまでも表裏ない誠実さでいっぱいなのだ。
「わしは、ご貴殿が……勝入！　よくぞ言われた……そう仰せられてお許し下されば、何より嬉

しい。もはやお労りは心苦しい。まげてお許し願いたい」
「なるほど、これは思いつめたものじゃ」
「士はおのれを知る者のために死す……筑前どの、とにかく、われ等が策戦をお聞き下され」
「それは承わろうが……」
「これはの、ご貴殿が、われらをお労り下されば下さるほど、後へは退けぬ儀とご承知下され」
勝入はどこまでも秀吉が、自分の身を案じて逡巡しているものと割切って、
「この中入れの、総大将には、三好孫七郎秀次どのを乞い受けたい」
「なに秀次を総大将に⁉」
「さよう、それで先鋒はこの勝入と伜紀伊守とで仕る。第二軍は婿の森武蔵守長可、わが二男の三左衛門輝政もこれに加えるが、これだけにては、みな一族ゆえ競いが足りぬおそれがある。よって第三軍は堀秀政に仰せつけられたい」
「考えたのう勝入は……」
「むろん、必勝の備えでなければ意味はござらぬ。この堀秀政は第三軍の大将で、同時に全部の戦目付、決して伜どもに自儘な戦はさせませぬ。そして第四軍に総大将の三好秀次どのをおき、総勢二万で押出したら、いかに剛愎な家康とても捨ておけまい。小牧山に出張っていて、岡崎で後方との連絡を断たれたのでは、駿、遠、甲の三ヵ国が暴れ出そう。いや、仰せとあれば、岡崎を衝くだけで、あとはすぐに引返してもよい。しかもこれには、三河でわれ等に内応する者の目あてもつけてあるのでござる」
「なに三河で内応する者が……」

「ございまする。われ等の手引きをする者が……」
勝入は、じっと眉をあげて詰め寄るように膝をのり出した。

十二

秀吉はまだウンとは言わなかった。
というのは勝入の見るとおり、秀吉自身、内心ではこの戦局に困却しきっているからであった。
表面はどこまでも悠然としていたが、家康から大きく仕掛けて来る気配はなく対峙のまま日を過していたのでは、家康の損失と、秀吉のそれとは比較にならなかった。
（何とか局面を打開せねば……）
したがって、秀吉もまた、勝入と同じ作戦をあれこれと考えてみていたのだ。
しかし、それには適当な人物が見当らなかった。
相対している戦場で戦わず、敵の領地へ中入れする。入ってゆく迄隠密を要することは言う迄もないが、敵の気付いた時期によってその指揮には千変万化の要があった。もしその指揮を誤ると、敵領内に孤立の兵を残して、救援その他のために言い知れない手数がかかる。
見殺しに出来なくなって再び兵を割くようなことがあると、正面兵力の均衡は大きくやぶれ、味方大敗の因ともなろう……
それで思案を決しかねているところへ、勝入の今日の、ひた向きな申出だったのだ。
（思いきってやらそうか……）

秀吉はふとそれを思った。
万一やり損うて、敵中へ残った時は見殺しにする……その覚悟ならば許してやってもよいのだが……そこまで考えて、しかし秀吉は自分を叱った。
それでは余りにこの正直者が哀れすぎる。見よ！　自分を信じきって、息をつめて返事を待つ勝入の仏顔を……
「勝入……」
「お許し下さるか」
「おあきらめなされ……いや、もしやってももう少しあとのことじゃ」
「いや、あきらめぬ！」
勝入は言い返した。
「この手をあきらめては、味方は動きがつかぬ筈じゃ」
「勝入……」
「なんでござる」
「戦はのう、時には我慢競べじゃ。われらが何年でもここは動かぬ……となったら、いかな家康でもあせり出そう。わしは今、二つのことを考えている。その一つは、上杉景勝を、信州でそろそろ動かすこと。もう一つは、わしが平気で大坂へ赴いたり、京へ赴いたり一向この場に釘付けされず、自在にこの戦を指揮してゆくこと。そうなると、彼我のあせりはがらりと所をかえて来る。わしにはその位の力はあるのじゃ。しかし家康にはそれはない。上杉景勝が動きだしたら、心はここになくなるわ」

勝入はしかし、それをよく聞いてはいなかった。
「これはわしの思案が悪かったかの」
「悪いと気付いたか」
「わしは必ず勝てると思うているゆえ、ご貴殿の甥御、三好秀次どのを総大将にと申出た。が、ご貴殿は万一の場合の事のみ案じられる。宜しい。秀次どのをと言うたはわしの誤り、それはこの場で取消し申そう」
「なに!?　わしが秀次を殺すのを怖れて、許さぬと思われるか……」
「わしは勝って、手柄にさせてあげたいと考えた。が、これは考え足りなかった。取消そう」
「勝入！」
こんどはほんとうに秀吉の顔が赤くなった。

十三

「おぬしは、わしが秀次を惜しんで、この中入れを許さぬものと思うているのかッ」
秀吉は、相手の単純な一途さに、つい自分もまき込まれていった。
「心外なことを言う男だおぬしは！　わしは、年来の朋友のおぬしを失いたくはない。いや、もし仕損じると、おぬしばかりか紀伊守も、輝政も、婿の武蔵守もともに失うおそれがある。それゆえ待てと言っているのが、おぬしには分らぬのか」
詰め寄られて、勝入はポロポロと涙をこぼした。
「それならば尚おのこと許して下され。その言葉を聞かされて、われ等いよいよこのままは引き

さがれぬ。われ等若し仕損じたる節は、救援もいらぬ。愚痴もこぼさぬ。この通りじゃ。われ等に信義を貫かせて下され……」
秀吉は一瞬ポカンとして勝入を見おろした。
(何という底抜けの善良さであろうか……)
これほど信頼しきっている人間の姿を見たことはない。
「勝入……」
「お許し下さるか筑前どの」
「おことは、今どき、珍らしい大人物じゃ！」
「そう言われるゆえ切(せつ)ないのじゃ。ここでひとつ、わが、まごころを受けて下され」
秀吉は泣きたくなった。泣きたくなった感情のうらで、しかし、すぐに彼らしい打算もうごいているようだった。
(これほど思いつめているもの、苦労をさせてもよいではないか)
「よしッ！」
と秀吉は丹田(たんでん)に力をこめて一諾(いちだく)した。
「その、おことに内応するという男、その男を連れて来い。その男と会うた上、おことの作戦に、この秀吉の意見を添えて許すとしよう」
「許して下さるか！」
「して、その内応者は？」
「この先の大草村で一揆(いっき)を企て、西尾街道の栄屋敷に立てこもっている森川権右衛門と申す者。

この者は鉄砲六百梃を持ち、附近の者大ぜいを味方として、われ等に加担の上案内役を引受くる約束でござる。これに筑前どののご朱印を下さらば、喜び勇んで三河攪乱に働きまする」
「よし、その者を連れて来られい。総大将はむろん秀次でよい。海上から水軍も動員しよう。出発の前には、われらも本陣を楽田にすすめ、いよいよ秀吉が正面から挑むとみせかけて、おことの行動を掩護もしよう。が、勝入、これが事前に洩れるようなことはあるまいの」
「もってのほか！」
勝入ははげしく首を振って、襟元をたたいて見せた。
「われら父子の首にかかわること。それゆえ、今日までこなた様にも分らぬよう、隠密にはかりごとを進めてござるのじゃ」
「よし、この上とも充分心を配られよ」
「仰せまでもないこと！」
「それから、軍目付には秀政を……これも、おことの言うとおり附くるとしよう。その代り、よく秀政と連絡を保つよう……」
ついに秀吉は、勝入の善良さに動かされ、三河中入れの策戦を採用した。
採用すると、もはや脇目もふらず、その成功に智嚢をかたむける秀吉だった。
勝入は、はじめて晴ればれとほほ笑んだ。

勝入戦法

一

雨は降ったりやんだりした。

そして、そのたびに霧がはれたりかかったりする。

晴れると家康は仮屋を出て、敵陣の変化をしさいに観察した。観察するたびに敵の陣地は、蟻の塔を見るような急速さで半永久の備えに変ってゆく。

家康はその都度唇辺に笑いがうかんだ。

秀吉の性格から判断すると、半永久的に、動かぬぞと見せかけることは、動きたくて堪らぬのだと分るからだった。

四月二日に、いちど敵は山麓の姥ケ懐まで誘いに出て来た。しかし、それをあっさり追い払っただけで家康は長追いはさせなかった。

又、二重堀の日根野備中父子が、味方の陣地すれすれに出て来た時も、酒井忠次と顔を見合せて反撃をおさえた。

「――誘いじゃ誘いじゃ。誘いに乗るな。こうしている限り、味方の勝味じゃ」

忠次も笑いながら合槌を打った。

「――この山ひとつがこれほど役に立とうとは……筑前も歯がゆがって居りましょうな」

「――そのことじゃ。勝入はなぜ取っておかなんだと叱られたことであろう」
「――それにしても、このままでは退屈でならぬ。何とか仕掛ける手段も考えねば」
「――急くな。これは退屈くらべじゃ。そのうち退屈に耐えかねて、必ず筑前は岐阜か坂本に引揚げる時があろう。筑前が引きあげたらその時少々揶揄しよう」
「――すると、これは、いつごろ勝負がつきますので」
「――知らぬ。それは相手に訊くがよい」
「――妙な戦になりましたなあ。これでは先のめどがつかぬ」
「忠次――」
「――はい。戦わずに勝てる戦は、わざわざあせって仕掛けることはあるまい。まあ、見ていよ。そのうちきっと敵の方から仕掛ける隙を作って呉れよう」
「――と仰せられるが、敵もああして陣地をせっせと固めている。長滞陣は覚悟の前でございましょう」
「――ハハハ……もう少しで陣地のことも片がつく。片がつくと仕事がなくなる。無くなった時が見ものじゃ。人間じっとしているのは辛いものじゃぞ」
こうした問答は、ひとり忠次だけではなかった。榊原康政だけはニヤニヤ笑いながら落着きはらっていたが、井伊直政も本多忠勝も奥平信昌も、みな同じようなことを家康に言いに来て、同じようなさとされ方をして戻った。
今日は四月七日であった。
この日は朝から敵のうごきがあった。

北正面の内久保、岩崎、外久保のあたりから、足軽隊が進出して来て、榊原康政の隊とこぜりあいをやっていた。
（いったい何のために動いたのか……）
家康は仮屋を出ると北側の敵陣に小手をかざしてしばらくじっと立っていた。
すでに陽は傾きかけて、若葉の緑が道をさえぎり、見える限りでは、又ひっそりと静まったまま暮れかけてゆく気配だった。と、そこへ、鉄砲隊の指揮を命じてあった茶屋四郎次郎が、一人の百姓を伴って血相変えてやって来た。
「申上げます。敵が、昨夜来より小松寺の北より二の宮村、本庄村の北を経て、池ノ内から三河街道（かいどう）の方へ続々南下中の由にございまする」

二

「なに、敵が南下していると……」
一瞬だったが、家康の面を狼狽のいろがかすめ去った。
「たわけたことをいうな清延、そのような愚かな手を打つものか秀吉が」
そうは言ったが、すぐ思い直したように、
「来い、仮屋へ」
先に立って小雨の中を歩きだした。
茶屋四郎次郎――今は、近侍の松本四郎次郎清延は、眼顔で、百姓をうながしてそのあとに従った。

清延の考えでも、敵勢の南下は意外であった。彼はあらゆる面から秀吉の性格を検討して、秀吉は、もはや家康と決戦はすまいと思いだしていた。
堅固な砦を築いて長滞陣の用意をととのえ、そのまま何か政治的な手を打って和平の条件を出して来る。その条件がどのようなものであるか？　そこに両者の今後の駈け引きが展開されるであろうと見透していた。
この清延の考えに、直接小牧山の守備に任じている石川伯耆守数正も同意見であった。
「――ここでは、先に仕掛けた側の犠牲が大きくなるからの。その位のことの分らぬ筑前ではあるまい」
ところが、その秀吉勢が、昨夜から、秘かに南下しだしているという百姓の密告なのだ。それも身許の知れない百姓ではなかった。柏井村の長左衛門と言い、これはかねてから信長が、一揆その他の事故に備えて、ひそかにかくし手当を与えて領民の中に養っていた三十六人衆の中の一人であったのだ……
家康はせかせかと二重に廻した柵門をくぐって、わが仮屋の庭に来ると、そのまま家へ入らず、清延と百姓をふり返った。
ゆっくりと建物の中に入っていられなかったのであろう。
「清延、して、その情報を持って来たのは、それなる百姓か」
「はい」と、清延は家康に答えておいて百姓をふり返った。
「御大将じゃ。長左衛門とやら、もう一度見聞のままを申してみよ」
「はい。しかし……」

百姓は何故か口ごもって、
「私は、あのう、清洲のお館さまをお訪ね致したのでござりまするが」
「案ずるな。清洲の信雄さまを、お助けに来ている徳川さまじゃ」
「しかし……われ等は、故右府さまから食禄を頂戴致して居ります者の伜にて……」
「相分った！　それゆえ、その旨、御大将に告げた後、われ等から改めて清洲の殿に言上する」
「それでは、順序が違いまするようで……」
家康は、そうした二人の問答を聞いているうち、
（これは信じられる！）と、直感した。
「よし、信雄どのをこれへお伴い申せ」
家康はそう言ってから悠りと仮屋の縁に腰をおろして、
「ふーむ。すると只今も敵は、われ等の背後をおびやかして進んで居るのか。これ百姓」
「はい……はい」
「こなたの忠は忠に似て手ぬるいぞ、時遅れてはこなたの知らせも役に立たぬやも知れぬ」
百姓はハッとしたように家康を見上げて、
「申上げます！」
と、声を張った。

三

「申上げます！　一刻を争う時と分りました。申上げます！」

百姓が急き込んで身を乗出すと、家康は大きく頷いた。
「直答してよい。そなたは見たか敵勢を」
「はい。たしかにこの眼で見ました。旗印は、池田勢、つづいて森武蔵守と見受けました」
「して、直ちに、知らせに馳せつけたか」
「いいえ、若しも敵の陽動に乗せられてはと、それからあちこち探りましてござりまする」
「あちこちとは……？」
「はい。大草村の森川権右衛門、村瀬作右衛門など、一揆を企て、しきりに三河をうかがって居りましたゆえ、それと心易い向きに探りを入れてござります」
「森川権右衛門、村瀬作右衛門……」
「はい。すると森川方へ親しく出入りする北野彦四郎なる者が、私めにこう告げました」
「森川方へ出入りする北野彦四郎……いずれも牢人じゃな」
「仰せのとおりにござりまする」
三十二、三歳の百姓は陽にやけた実直そうな面に、せいいっぱいの気負いを見せて、続けざまに唾をのみこんだ。
「この度び、森川どのは、仲間をあげて羽柴勢に味方して三河へ討入りと話は決った。羽柴筑前どのは大変お喜びなされて、森川どのに三河で五万石下さる旨のお墨附を渡された。われ等もそれを見て来たゆえ、こなたも村人を語らってお味方するがよい。わしも方々説きまわると……」
「ほう、五万石の約束で三河へのう」
「は……はい。それだけではござりませぬ。この由を村人たちに知らせて廻れ。そして、われ等

に味方せぬと申す者があったら、用捨はいらぬ斬り捨てよ。いや、自身で斬ることがならずば、この北野彦四郎に申出よ。それがしが片っぱしから首をはねてやる……そのように申して、近村を強談して廻りだしてござりまする」

家康は、その間、瞬きを忘れたように百姓を見つめていた。

これが事実ならば、ついに敵は業を煮やして挑んで来たことになる。しかもそれは、家康が何度か、「あり得る場合」を考えた三河中入りの手であった。

(敵が大中入りを企てて来るならば、味方も小中入りをするまでのこと……)

そこへ、信雄が、清延に案内されてやって来た。

「その方か、敵勢南下の知らせをもたらして参ったというは!?」

信雄は、家康とは違った意味で狼狽していた。彼はすでに、家康の協力なくして勝利のないことを身にしみて知っている。

それだけにここで、家康に三河へひきあげると言われることは何よりも怖ろしいことであった。

「たわけた事を申して来て、みなをたぶらかすと許さぬぞ」

家康はその時、もう清延をさし招いて、次の手配を命じていた。

「丹羽氏次と、水野忠重を呼んで呉れ。それから、この山にある賦役の領民は、すべて山を下させるよう」

長久手（長湫）にある岩崎城の丹羽氏次と刈谷城の水野忠重とは、このあたりの地理人情に最もくわしい者であった。領民の下山は言うまでもなく秘密保持のためであろう。

四

清延が諸将を呼びに行っている間に、更に一人、山を下ってゆく人夫たちと逆行して、仮屋にたどり着いた足軽風、三十がらみの男があった。
「それがしは服部平六と申す伊賀の者、お館さまに直々申上げたい儀があって駆けつけました」
柵門を固めていた石川数正の手の者が、その旨を直ちに数正に取次ぐと、数正は自身で、その男を家康の前へ連れていった。
「かねて、森武蔵守の陣中に忍ばせてあった服部平六、火急言上したきことあり、只今、馳せつけてござりまする」
数正がそう言うと、家康は、戦評定の用意のととのった仮屋の広間で、
「待っていた。近う」
と、自身で手招いた。
「勝入が戦法、ほぼ察してはいたが、動き出したようじゃの」
「仰せの通り、昨日筑前どのよりお許しあり、夜に入って秘かに南下、三河への通路遮断をめざして居りまする」
「して、勝入、武蔵が、第一の目標は？」
「隠密に決しましたことなれば、詳細には知り得ませぬが、まっ先に、岩崎の南岩崎城をめざし、これを攻略して長久手より三河に入るものと心得まする」
「すると、総大将は勝入か、それとも堀秀政か？」

「それが、三好孫七郎秀次どのにござりまする」
「なに三好秀次……と、申せば、筑前が殊に愛して居る甥御じゃが……」
「はい。その孫七郎どのが、総師で殿軍にござりまする」
「フーム」
家康は、傍に控えている石川数正を見やって、ふっと唇辺に笑いをうかべた。
「そうか。そう聞けば、もはや疑う余地はない。よくぞ知らせた。退って休め」
服部平六は、しかしすぐには立とうとせず、
「領民どもは、みな、当方に味方してござりまする。と、申すは、恩賞狙って敵に通じた牢人どもが、われ等に従わねばそのままにはさしおかぬなどと、刃物三昧で脅しまわったため、領民はひどく怒って居りまする」
「分っている」と、家康はうなずいた。
「森川権右衛門と申す者の同類で、北野彦四郎という牢人であろう」
「それを、あの、お館さまはご存知で……」
「知らいで戦がなるものか。今後とも、よく探れ」
そして、服部平六がびっくりして去っていくと、家康はもう一度数正と顔を見合って、フフフと笑った。
「これは小さな誘いではないようだの数正」
「仰せの通り、総師が秀次どのとあれば、戦況如何では、必ず筑前みずから出て参るに違いございませぬ」

「とすると、いよいよ、この家康と筑前が、相見る時が来たわけじゃ」
「殿!」
「なんじゃ数正」
「くれぐれもご軽挙なさらぬよう……」
「たわけめ、戦場でこの家康が、うぬの指図を受けるものか」
「……でもござりましょうが、ご用心の上にも用心を」
　そこへ、水野忠重を先登にして、丹羽氏次、酒井忠次、井伊直政、大須賀康高、本多平八郎の順で、庭先からやって来た。

五

　家康は、慎重派の石川数正に、事もなげに笑ってみせたが、しかし、内心では決してこの戦を楽観してはいなかった。
　楽観どころか、曾つての日の三方ケ原以上に考えぬいた対陣の、これは勝敗を決する鍵になりそうだと思っている。
　すでに不惑を越えているので、表面はどこまでも穏かに衆議採用と見せかけてゆきながら、評定を開く前から自分の肚はしっかりと決っていた。
　彼は、ずらりと並んだ部将の、それぞれに昂ぶった表情を見わたして、
「いよいよ動きだしたが、どうしたものかの」
と、探るように言った。

「敵の先鋒、丹羽氏次が留守をねらって、岩崎城に攻めかかるに違いない。まずこれを救援せずばなるまいかのう氏次」

するると、当の丹羽氏次よりも先に、

「それでは後手になりまする」

と、刈谷の水野忠重がさえぎった。

「この場合に丹羽どのには気の毒ながら、岩崎城は見捨てて、敵のしんがり、三好秀次が軍を追尾するが上策かと心得まする」

家康はそれには応えず、

「氏次、こなたの城には、いまどれほどの人数が残って居たかの」

「はい。弟、氏重以下、約三百にござりまする」

「三百か……先鋒の池田勢は六千はあろう。六千と三百か……」

「御大将！」

「見殺しにはなるまい。それでは不実じゃ」

「御大将！　そのお言葉だけで、氏次、充分にござりまする」

丹羽氏次は、その場の空気に煽られて、憑かれたように言ってのけた。

「あのような小城など、いつでも取返せまする。それよりは、水野どのの仰せの如く、この場合は戦に馴れぬ三好秀次が軍に追いつき、これを叩いて、敵の前進を喰いとめるが焦眉の急かと心得まする」

「なるほど、秀次が軍を叩けば、勝入も武蔵もそのままは進めぬ。ぜひなく引っ返して助けよう

とするであろうな」
「その通りでござりまする。そうして、引返すを取っておさえて、一気にこれを蹴散らすが上策にござりまする」
「そうか。なるほどのう……康政はどう思うぞ」
「先陣、承わりとう存じまする」
「先陣……何の先陣じゃ。気の早い」
「秀次が追尾、まっ先にこの小平太を」
康政は家康の肚を見ぬいていて、話を早く岩崎城のことからそらそうとするのである。するとこんどは大須賀康高が、身をのり出した。
「先陣はそれがしに！」
「いや、この小平太が」
「あいや、ご両所ともお待ち下され。この先鋒は、この地の案内に明るい水野忠重が承わりとう存じまする」
家康は、わざと眼を閉じて、
「そう性急に申すな、思案がみだれる」
「その事じゃ！」
すかさず本多忠勝が口をはさんだ。
「秀次を追いかけたら更に後から筑前もわれ等を追って出よう。その辺のことを充分にご思案あって、殿の裁断を仰ぐばかりじゃ」

家康は、眼を閉じたまま頷いた。心憎いほど、彼の意志のよく通ずる家臣たちであった。

六

「よし、みなの思案はよく分った！」
しばらくして家康は口を開いた。
誰あって、彼の心にさからう者はない。その意味では、家康は世にも仕合せな大将だった。
「思案が決れば急がねばならぬ。よいかの、敵は二万に近い大軍、味方はその半ばじゃ。よって岩崎城の救援はしばらく先のこととして、まず、秀次が軍勢を追尾する」
一座はシーンとして、しばらく呼吸の音も聞えなかった。
「この追尾は決して長びいては相成らぬ。われ等が秀次を追って出たと分れば、筑前もまた、すぐに決戦を挑んで、われ等のあとを追いかけよう」
「…………」
「したがって、追尾の途中で臨機応変、三河武士の野戦の妙味を、思うさまご馳走してやるのじゃが……さて」
と、もう一度改めて一座を見回してから、
「先鋒の右備えは大須賀康高、その方に命じよう」
「は……それがしに先鋒を!?　ありがたく存じまする」
「よいか、右備えじゃぞ。左備えの先鋒は榊原小平太康政」
「はッ。心得ました」

「水野忠重は、伜藤十郎勝成と共にこの先鋒に先だって支隊の総大将。支隊の案内は丹羽氏次。その方、充分に領民の去就に心を配りながら致せ」

水野忠重はこのふしぎな言葉のアヤにびっくりして、

「あの先鋒に、先んじて……で、ござりまするか？」

「知れたことじゃ。その方父子と丹羽氏次にて四千五百。その後へ、康政と康高じゃ」

「殿！」と、本多忠勝は少しせき込んで、

「すると、この追尾軍の総大将は……総大将は、誰でござりまする」

「なに、総大将……知れたことを訊くな忠勝。言うまでもなく、この家康と、信雄どのじゃ」

「えっ!? 殿、おんみずから山を下って」

家康はわざとそれには取合わなかった。はじめは彼自身も、この出撃軍の総大将は酒井忠次か、本多忠勝に命じようと思っていたのだが、途中から考え方が変っていった。

家康が小牧山にあると知れば、恐らく秀吉も楽田をうごくまい。ここでは一度秀吉を野戦に誘い出し、疾風迅雷を誇る秀吉と、機動の妙を競ってみる気になったのだ。

「わしのもとへは、松平家忠、本多康重、岡部長盛、それに甲州の穴山衆を引きつれる」

「では、この小牧の本陣へは!?」

「忠勝、その方は忠次、数正、定盈等と共に、ここでしかと筑前が動きを見張れ。これも臨機応変、もし筑前が動いた節は、誰がその後を追おうと指図はせぬぞ。相分ったか」

再び一座はシーンとなった。

家康自身が、陣頭に立とうという……そのはげしい決意が、みなの心に稲妻のように緊張をも

たらしていったのだ。
「ハハ……」と家康は笑った。
「こんどの戦は、のるかそるかじゃのう。久しぶりに……わしが出たと知ったら、筑前もじっとはしていまい。派手好きな気性だからのう」
「フーム」
と、数正が吐息をした。彼だけは家康が、何を考えているのか察したらしい。

七

家康の笑いを聞くと、みんなも思い出したように私語しだした。いずれもすでに退屈気味だったので、士気は上乗だった。
「では、早速に引取ってそれぞれ用意に取りかかれ。進発は五ツ（午後八時）、秘かにこの山を下り、夜の明けぬうちに庄内川を渡って小幡の城へ入ること」
家康はそう言ってから忠勝をさし招いて、信雄にこのことを告げさせた。
信雄を軍議に列させなかったのは、家康の労りでもあり警戒でもあった。同伴しても、さして力になるとは思っていなかったが、しかし彼を小牧山へ残すことはしなかった。
若し残していったら、信雄は心細さと疑心とで、大事な時に妄動しそうな懸念があるからだった。
みなが張りきって仮屋を出て行くと、そこで家康は改めて、忠次、忠勝、数正の三重臣に、秀吉の動きを充分に監視するよう密命を伝えていった。

「こんどの戦は勝入戦法に始まるが、あとは秀吉と家康が腕競べ、運競べじゃ。しかと、この山は頼んだぞ」

夕方から、霧のような雨がおちだし、視界は殆んどきかなくなった。昼間、勝入勢の南下を気取られまいとして陽動した北正面の小ぜりあいも止んで、夜の幕がおろされると、敵味方の陣営で焚くかがり火までがボーッと小さくかすんで見えた。

進発はどこまでも隠密に。

山からは前もって賦役の領民を下山させてあったので、どれだけの軍勢が、どの方向へ動き出したのか、部将以外には味方にも分らなかった。

が、その総勢は、いま、家康が現地で動かし得る最大のものであった。

小牧とその周辺に残した軍勢は約六千五百。残りの一万三千余りは総動員されている。

したがって、この一戦、もし秀吉に縦横の活躍を許さんか、家康にとってはその生涯の努力の大半を失うことは明らかだった。

敵もまだ、続々と南下中に違いない。

先発の水野忠重と丹羽氏次は、道を春日井原にとり、小幡城をめざしながら、途中で出あった土民はそのまま放つことをせず、案内を命ずるという口実で同行していった。

そして、南外山勝川を経て庄内川をわたり、川村からまず小幡城に入って、家康の到着を待った。

家康は信雄とともに約九千の兵をひきい、井伊直政に前衛を命じて、市之久田、青山、豊場、如意等の諸部落をすぎ、龍源寺に少憩して兜を着し、勝山から牛牧を経て城に入った。

一方――

ひそかに、篠木、柏井に進出していた池田勝入以下の西軍は、八日夜の四ツ（午後十時）に、再び行動を起して三河をめざした。

彼等は前面の庄内川を上手、中手、下手の三段に分けて渡ることとし、池田父子と森武蔵守とは大留村の大日堂渡しを越えて南方印場、荒井に出でて、三河路をめざし、堀秀政は野田の渡しを越えて長久手(ながくて)に向い、三好秀次は松戸の渡しをわたって南進し、猪子石(いのこ)の白山林に陣した。

むろん彼等は、まだ家康が、彼等と前後して小幡城に入ったことは知らなかった。

八

暦の上ではすでに四月九日だったが、夜にまぎれて進む池田勢にとってはまだ八日の続きであった。

こまかい霧雨の中を粛々(しゅくしゅく)と馬を駆りながら、池田勝入はさっきから何度もクシャミをした。

「風邪(かぜ)をひかれたのではござりませぬか」

馬を並べている二男の輝政が声をかけると、勝入は笑いながら舌打ちした。

「たわけたことを言うな。夜行軍でクシャミが出るのは夜明けが近づいたということじゃ」

「夜明けに風邪をひくものときいて居りますゆえ、心にかかりましたので」

「余計なことじゃ。鍛え方が違う。このあたりはな、その昔、右府(うふ)さまのお供をして、さんざん夜遊びをして歩いた村じゃ。フフフフ」

「何がおかしいのです妙な笑い方で」

「う……想い出したのじゃ。右府さまや、筑前どのと、村々を踊り歩いた昔のことをな」
勝入はそこで、もう一つ思いきり大きくクシャミをしてから、
「噂している者があるらしい」
「誰が……でござります」
「村人たちよ。おもしろいものだ……」
勝入はひどく上機嫌で、
「わしは、前例のない、よい領主になってやるぞ」
「は……何と仰せられましたので」
「その昔と同じようにな、戦が済んだら、村人たちと踊ってやろう。領主と領民がひとつになって踊りまくる……愉快なものじゃ。今でも眼に見える」
「父上……」
「何じゃ」
「勝ってからの話、まだ早うござりましょう」
「ハハハ……ここまで来ればもう早くはない。われ等の馬は三河へ向ってすすんで居るわ」
勝入はそう言ってから、又、思い出したように、
「しかし、筑前どのは、よくわれ等の意見を容れたものじゃ。この分だと、家康は岡崎へ仕掛けるまで、われ等の中入りには気付かぬかも知れぬ」
二男の三左衛門輝政は答えなかった。父の言うとおり、すでに道は三河街道。折角上機嫌の父にあらごうこともあるまいと思ったのだ。

しばらく父子は黙ってまた闇の中をすすんだ。たしかに夜明けが近いと見えて、冷えた頭上の空のあたりが白みかけたような気がする。
「雨がやんでいる……」
ふと、手を出してつぶやいた時、先方から一騎、戦列と逆行して父の前へやって来る者がある。
「申上げます」
「なんだ」
「夜があけかけました。丹羽氏次の岩崎城が見えまするが、いかが致しましょう」
まだよく顔は見えなかったが、声は家老の片桐半右衛門だった。
「いかが……とは、何のことだ半右衛」
「夜明けの血祭りに、踏み潰して通った方が、あとの為ではございますまいか」
「何に……血祭りは岡崎城じゃ。捨てておけ捨てておけ。そんな小城などに眼をくれるな」
勝入は笑いとばして馬も停めなかった。

九

「申上げます」
勝入が立ちどまりもせずに行きすぎようとするのを見ると、こんどは伊木忠次が声をかけた。
「何んだ清兵衛、おぬしも、岩崎城を血祭りにせよというのか」
「そうは申しませぬが、片桐どのの申し条、よく殿に通じて居らぬように受取りましたので」
「なに、通じて居らぬとは、何のことだ。わしの耳はまだ遠くはないぞ」

言いながら馬をとめて、
「雨ははれたの、幸先がよい」
伊木忠次は、片桐半右衛門の言葉をおぎなうつもりで、
「殿、当方では、歯牙にもかけず行過ぎるつもりでも、万一城兵の方から仕掛けて来た場合はうるさかろう……こう、片桐どのは申したものと存じまするが」
「向うから仕掛けて来る……!?」
「はい。土民の知らせに依れば、丹羽氏次は小牧にあって、この城は弟氏重が留守して居る由、その氏重め、仲々もって利かぬ気の男にござりまする」
「人数はどれほどじゃ」
「約三百……」
「ハハハ……たかが三百では、いかに気の勝った男でも、われ等の前には立ちふさがれまい、捨ておけ」
「ご命令とあれば、むろん……しかし、本隊をこのまま進めるためには、少数の兵なり割いて参るが後のためかと心得まするが」
すると、はじめに口をきった片桐半右衛門がまた身をのり出した。
「そのことにござりまする。それがしのもとにて捕えた土民の言葉によれば、丹羽氏重、すでにわれ等の動きを察して、息あるうちは城下を通すものかと、気負い立って居る由にてござりまする」
「フーム。そのような小癪なことを申して居るのか……しかし……」

と、言って勝入は馬上で大きく首を傾げた。
この作戦で何よりも大切なのは進撃の速度であった。敵の気付かぬ間に岡崎城へ近づいて、城に詰めている本多作左衛門と家康との連絡を断ち切ること……それゆえ秀吉からも、呉々も道草喰わぬようにと注意されて来ているのだ。
「では、このままは向うが通すまいと言うのか半右衛は」
「通さぬ時の用意がなければならぬ……と、申されるのでござりましょう。のう片桐どの」
「いかにも、伊木どのの申さるる通り、先方より斬って出ましても相手にならず進むとあれば、別に少数の兵を割いて、これがあしらいをさせねばならぬ……その辺のご考慮を……と、申上げましたので」
「そうか、ただ蹴散らして通ったのでは、すぐに小牧へ連絡するか氏重は」
明けかけると、春の陽足は早かった。すでに頭上はまっ白になり、霧のおりた地上の風物が、淡い墨色で眼に入りだしている。
気がつくと、勝入の立ちどまっているすぐ七八間前方に、二三本木立がありその下へ小さくひろがった空地があった。
「そうか、向うから仕掛けてくる場合がの……」
勝入は、いまいましそうに舌打ちして、その空地へ馬を入れるように口取りにあごをしゃくった。

いかに弱小な敵であっても、襲いかかって来るものはあしらわねばならぬ。
（いっそのことに踏みつぶして通ってゆくか？　それとも小人数を割いて残してゆくか……？）
その二途しかないのだが、勝入は、ここでそのようなことを考えさせられるのが忌々しくてならなかった。
彼の胸裏へ昔の夢が甘く翼をひろげていた時だけに、一層小癪な気がしたらしい。
「城が見えまする」
「おお見えて来たぞ」
と、誰かが言った。
「なに、城などと言うほどのものかあれが。大百姓の屋敷ほどもないわ。よし、あの空地へ曳いていって馬をとめろ。残す者を決めてやろう」
しかしそこで、どれだけの兵隊を割いて行くかが、また勝入の癇にさわった。
岡崎城にある本多作左衛門の剛勇を知っているだけに、このあたりへ残す兵が惜しかったのだ。と、言って、相手が三百とあれば、味方はその二倍か三倍の兵を残さねばなるまい。
（誰をここにとどめるか……）
その事を考えていて、勝入は、敵の城が見えるということは、すでに、敵の視野に味方も入っているということを忘れてしまっていた。
「よし、残す者を決めよう。半右衛、清兵衛、ここへ来い」

言った時に「あっ！」と、馬の口を取っていた足軽がぶざまに道をふみはずし、同時に馬が、ガクリと膝をついてしまった。いや、膝を突いたと思った瞬間に、ダダーンと一発、明けかけた天地をゆすって銃声がひびいたのだ。
「おう！　馬がやられた」
「敵じゃぞ」
「殿を……」
勝入は、自分の前にサッと人垣の作られてゆく中で、ダダダーンと、また七八梃の銃の火を噴く音を耳にした。
「うぬッ！」
さすがに、見苦しく顚倒はしていなかった。
手綱をつかんだまま地上へ立って、勝入は憤怒のやり場のないままに、はげしく倒れた馬の肩を蹴っていた。
「やられたわ。肩から胸を射ぬかれている。死ぬわいこの馬は」
馬は、がっくりと両脚を折ったまま悲しげにその主を見上げて、立上ろうともがいている。
「半右衛！」
「はッ」
「清兵衛！」
「ここに居ります る」
「こうなっては許せぬ。このままでは幸先わるしとして士気にもかかわろう。朝の血祭り、岩崎

城を踏みつぶして通ろうぞ」
「では、このまま応戦して……」
「応戦ではない。血祭りにあげるのじゃ。一人も残すな。すぐにかかれ」
「父上……」
と、二男の三左衛門輝政が何か言ったが、それは、昂奮しきった勝入の耳にははいらず、やがて、敵の発砲して来たあたりの櫓めざして、味方の銃隊が、続けざまに弾丸を打ちだした。
ダダーン。
ダダーン。
次第にあたりは明るくなり、愕いて飛び立つ小鳥の群が、黒ゴマを撒いたように空に見えた。

十一

勝入は替え馬の曳かれて来るまで、仁王のように立ちはだかって、だんだんはっきりと見えて来る岩崎城を睨んでいた。
すでに傍には、片桐半右衛門も、伊木忠次もいなかった。二男の三左衛門輝政も、父の命令が出ると、そのまま城にはせ向った。
踏みつぶして通る方が、あとに兵を残してゆくよりも、容易であろうとは、はじめから両家老の意見だったのだ。
それだけに、輝政もとっさに父の意見に従ったのであろう。
しかし、替え馬が曳かれて来ると、勝入は、ふっと心に悔いを覚えた。

（筑前が、余計な道草を、と言わぬであろうか……？）
　言われてももはや仕方がなかった。
　明けかけた大地では彼の視野いっぱいに、味方が城をめざしているのだ。どれもこれも旗差物に誇りを競って進んでいる。
「早く勝てばよいのだ！」
　自分で自分に叫びかけて馬に乗ろうとした時、右足の踵がズキン！　とはげしく痛んだような気がしたが、その時には馬は歩みだしていた。
　轡をとっていた遠藤藤太が、勝入の槍を石坂半九郎に渡して駈けだしたのだ。
「おお味方の先鋒は、もう城門にたどりついたぞ。藤太、あの小川の近くの森まで馬をすすめよ」
　たかが三百。それも主の丹羽勘助氏次は留守なのだ。一発でも発砲したということで、充分に武士の意地は立っているので、相手はすぐに降参しよう……そう思っていたのは、勝入ばかりではなく、勝入に城攻めをすすめた両家老の予想であった。
　ところが、前線に馬をすすめて来てみると、相手は十文字に門を開いて斬って出ている。
「小癪な奴じゃの、氏重という男は」
　勝入はじれ切って、
「半九、槍を！」
　小者の手から槍をとって馬上でりゅっ！　としごいていって、再びズキンと右足のかかとの痛みに気づいた。
　鐙に力の入ったとたんに、全神経を削るような激痛だったのだ。

（これはおかしい……!?）

再び走り出そうとする小者に、

「待てッ！」

勝入は声をかけて、

「わざわざ、わしが出るまでもあるまい。待て待て」

と、顔をしかめた。

戦は事実、勝入が出て行くまでもなかった。

丹羽氏重は若さに任せて、討って出たものの、池田勢の一斉射撃にあうと、そのまま城に退いて、門を閉す間もなかった。

池田勢はドッと一度に城内へなだれ込んだ。

霧は次第にはれていったが、地上は両軍にふみあらされて、泥田のようになっている。

勇敢に斬死していった城兵の死屍と泥の上へ、朝の薄陽が射しかけた頃には、もはや城内へは生きた人影は見えなくなっていた。

明け六ツに始まった戦が、五ツ（午前八時）には完全に池田勢の勝利に終っていたのである。

しかし、その時になって、勝入は意外なことを言い出した。

十二

予定よりもずっと早く片付いたので、池田勢の士気は、いやが上にも上っていった。

文字どおり朝飯前に岩崎城をほふってしまったのである。

「これで、後顧(こうこ)の憂いはなく進めるぞ」
「殿もご満足であろう。全然進撃の速度に影響はなかったのだからな」
「ここらで、茶の子をしたためて、すぐに出発すればよい」
片桐半右衛門と伊木忠次とは、城内に敵のないのを見極めて、急いで勝入のもとへ引返した。
勝入は、これも表面は上機嫌であった。
「幸先がよい。ご苦労だった」
馬に乗ったまま二人の労をねぎらって、
「氏重の首はどこにあるぞ。敵ながらあっぱれの若者、われ等も礼を尽してゆかねば相成るまい」
二人はその意味をとりかねて、
「礼を尽して……と、仰せられますると？」
「首実検じゃ。このあたりに恰好(かっこう)の場所があるであろう。早速その用意をさせよ」
「えっ……あの首実検を」
おどろいて顔を見合せる二人に、勝入は視線をそらして、
「あれ、あの、城の北にある山は何というぞ」
「はい、あれは六坊山と申しまする」
「よし、あの山で実検しよう。敵ながらあっぱれな若武者、丁重(ていちょう)に扱うてやれ、そして……」
再び二人を眩(まぶ)しそうに見返して、
「その間、兵は出来るだけ城内にかくして休息、見張りはおこたるまいぞ」
「殿！」

「なんじゃ」
「先を急ぎまする。そのようなことはなされずとも……」
片桐半右衛門が言いかけると、
「指図は受けぬ！」
と、勝入はさえぎった。
「不眠のあとの戦じゃ。兵も疲れて居ろう。いや、それよりも、氏重への礼は武士の情。その間の休息は一石二鳥じゃ。わしはあの六坊山とやらで待とう。曳け馬を」
「父上！」こんども、堪りかねたように輝政が声をかけたが、勝入はもう振返りもしなかった。
恐らく、みんなにとってこれほど意外なことはなかった。寸刻を惜しんで進撃して来た勝入が、ここで氏重の首実検をしてゆくと言い出したのだから……
或る者は、首実検にことよせて、兵を休ませるためであろうと解釈し、或る者は、岩崎城の陥落で、ホッとしたのかとおくそくした。
しかし、勝入がこう言い出した理由はほかにあった。
夜明けに馬を射たれて飛びおりたおりに、彼は右足のくるぶしを踏み砕いていたのだ。
その時にはさして苦痛を感じなかったのが、次第にはげしく疼きだしている。と言って、幸先よしとふるい立っている味方に、勝入はそれを告げることを恥じた。
そこで、手当のために首実検を思い立ったのだが、思い立つと又、それは当然、なすべきことであったと頑固に思い込める勝入でもあった。
（戦には勝った！　幸運はわれらの頭上にあるのだから……）

と、こんどおいすがって声をかけたのは嫡子の紀伊守元助だった。
「父上！」

十三

勝入はちらりと元助を見たまま、口を結んで馬を進める。
「父上！」
元助は舌打ちして馬首を並べ、はじめて父の唇辺に、苦痛のいろの隠されているのに気づいた。
「はて、お顔のいろが冴えぬ。どこぞ手傷でも」
「シーッ」と、勝入は目顔で押えた。
「とりあえず、筑前どのへ、この勝利を知らせておけ。案ずることはない。踏みちがえたのじゃ」
語尾を低くおとして右足をたたいて見せた。
元助はそれをどう受取ったのか、頷いてまた後へ駈け去った。
勝入は、そのまま朝の陽の露にきらめく六坊山に、幕を張らせて首実検をはじめていった。
（今ここで、このように時を空費してよい時ではないが……）
心の中で、しきりに、続いて進んで来る森勢や、堀勢のことを気にかけていた。
堀秀政は、岩崎城の北の山寄り、金萩原にて休憩して、池田勢の城攻めの終るのを待っていたし、秀次は、松戸の渡しを越えて猪子石の白山林に陣している。
それらが先鋒の池田勢にならって進撃を停止しているのだと思うと気が気ではなかった。

それだけに馬をおりるとすぐに痛みをこらえて足をふみしめたり、三歩、四歩と歩いてみたりした。

そのたびに、刺すような疼きが胸から頭髪へ突きぬける。ただの筋違いではない。確かにくるぶしのあたりを骨折している……そう思うと、必要以上に、

「幸先がよいぞ。首級の数はどれほど挙げた」

装った声と口調で、側近の者に話しかけてゆくのだった。

「少し、足がほてる。焼酎があるであろう」

小荷駄の中からそれを取りよせ、さりげなくくるぶしを出して吹きかけたりした。

傷消毒の焼酎が、ツーンと冷たく骨にとおるほど局部はすでに熱を持ち、薄紫に腫れ出している。

（何の、これしきの痛みなど……）

酢と里芋をすりまぜて、それを塗布してゆくと痛みは半減されるのだが……そう思いながらも、負傷をみなに知られまいとして、そのまますぐに具足をつけ直した。

「どうかなされましたか」

途中で一度、伊木忠次が、ちょっと不審そうに問いかけたが、その時も、

「何でもない。それにしても、この勝ち方は見事！　これは幸先がよいぞ清兵衛」

と、そのまま話をそらせてしまった。

この戦で、何よりも大切なのは士気の鼓舞と、骨髄に刻んで知っている勝入の強がりだった。

しかし、その勝入も、やがて眼を据えて息をのまねばならなかった。

勝入の実検に供する首級の数が三百を越えるという。みな競い立って討って来たものゆえ、見てやって呉れるようにと、片桐半右衛門がはいって来たのだ。
（これはいよいよ時がかかるぞ……）
勝入は、ふしぎないら立ちで、まず丹羽氏重の首に対した。
二十二歳の氏重の首は、作法どおりに髪をすかれ、血の汚れを洗われて、薄眼をあけて勝入をあざ笑っているように見える……
「うむ、これは仲々……幸先がよい」
痛みをこらえて、勝入は又うつろに笑った。

乱戦

一

家康は、小幡城にあって、八日の夜半に斥候（ものみ）を出して敵状をさぐらせた。
その頃はまだ細い雨が止んでは降り、降っては止んでいた。地上はかすかに道が光って見える程度で、具足のままでのぞく城の窓からは、若葉の匂いが汗ばんで感じられた。
斥候（せっこう）を命じられたのは本多豊後守広孝で、広孝は二十余人の部下に七八人の村人を交え、それを四班に分けて矢田川の川筋を仔細（しさい）にさぐらせた。
そして、それ等の報告をとりまとめて小幡城に引返して来たのは丑満（うしみつ）どきであった。

家康はその広孝の口から、池田勝入と森武蔵守が夜を徹して三河をめざしていることを聞くと、
「岩崎城をそのままにして行くらしいの」
誰にともなく呟いて吐息をした。
「して堀秀政の軍勢は、池田勢に続いているのか」
「いいや、少し遅れて居りますが、或いは秀政、われらの進出を感づいて居るかも知れませぬ」
「ふーむ。それで三好秀次は？」
「これは川を渡って猪子石の白山林まで来て、ここに宿陣致して居りまする」
「そうか。それはよい！」
家康は、緊張しきって控えている旗本を見返って、
「では、出掛けようか」
と、はじめて笑った。
最後尾の秀次勢の位置がはっきりすれば、すぐに行動に移ることになっていたのだ。
先手の将は大須賀康高、つづいて榊原康政、岡部長盛、水野忠重父子の順で、ここでも丹羽氏次が道案内役であった。
目ざす猪子石は、小幡の南方約二十七、八丁。
そこまで隠密に進出して、夜のあけるのを待ち、一挙に白山林の秀次勢へ襲いかかるつもりであった。
秀次勢八千が、どのような構えでこれを迎えるか。堀秀政や、池田勝入が、この奇襲を知っ

て、どのような反撃に出て来るか？　それらに対してはすべて臨機応変、得意な野戦で各個撃破を展開してゆくより他にない。
城を出ると、家康は信雄とともに、大森、印場とすぎて矢田川を渡り、直接猪子石の白山林に立向う先手の諸隊と分れて、本地村南方、権道寺山にのぼっていった。
ここに本陣をおいて、まず夜明けを待とうというのであった。
夜が明けると堀秀政勢の位置がハッキリする。
それを確めてから、次の行動を起す気なのだ。
権道寺山にのぼり着いた頃ははや空が白みかけていた。
池田勝入が、岩崎城を攻めようか？　それとも捨ておいて進撃しようかと考えている頃であった。
「夜が明けたらの、何よりも先に堀勢の位置を確め、これにはこれで、別に攻撃をかけねばならぬ。内藤四郎左と、高木主水は、その用意を」
家康が命じている時に、ワーッとどこかで鬨の声があがった。
「はて、白山林であろうか。それとも街道筋であろうか」
（街道筋ならば、勝入が城攻めに違いないが……）
家康は耳を澄して瞬きもしなかった。

二

恐らく池田勢が岩崎の城攻めを決心した頃に違いない。十九歳の三好孫七郎秀次は、白山林の

幔幕のうちで、うとうとまどろんでいた。

　戦の経験はさしてない。が、叔父秀吉からも、父武蔵からも絶えずきびしく武将の道は説かれている。それだけに秀次もまたここで池田兄弟や、森長可と武勇を競う気であったが、しかし、周囲は彼を労わりすぎるきらいがあった。

　それに総帥として最後尾にあるというのが、彼には些かもの足りなかった。

　敵はつねに前方にあるものと思い込んでいるせいであろう。

「——このあたりから張りきることはない。暫く休んで明朝しっかり腹ごしらえをして行くことじゃ」

　秀次は、充分先の苦労に備えるつもりで、附人の木下利直や利匡と計ってここに兵をとどめたのだった。

　利直や利匡、それに小姓頭の田中吉政などは、秀次を労わる気があるので、自分たちだけ先に陣中を廻って、すいさんの用意にかからせていた。

「一刻を争う進軍だぞ。やがて御大将から命が下ろうほどに、今のうち朝の炊ぎすましておけ」

　そう言われて、兵はそれぞれ林の中でその用意にかかっていた。

　むろん秀次とて、自分では眠る気はなかった。兵を休ませて明日に備える名将のつもりであった。それがうとうとと夢路に入っているとき、ワーッと時ならぬ奇襲の声を聞いたのである。

「吉政！　今の声は……」

　はね起きざま、秀次は槍をとって幔幕の外へ走り出た。

　まだ夜は明けきってはいなかったが、そこここに焚火と、度を失った人の姿が眼に入った。

「何ごとじゃ。いさかいか。軍紀をみだると許さぬぞ」
と、その時、ころがるように彼の足許へ駈け寄って来たのは木下利匡だった。
「孫七郎君、敵でござりまする」
「な……な……なんと!?」
「徳川勢の朝駈けにござりまする。日ごろのご鍛練をいかすは今。落着きなされて……」
そう言った利匡の方が、秀次の眼にもおかしいほどに狼狽している。
「あわてるなッ!」
と、秀次は叱りつけた。
「つねづね申付けてあること、一人もあまさず討取って、叔父上の名を恥しめるなッ」
言葉で言えば簡単だった。秀次はいきなり槍をとって、行手も見定めずに駈け出そうとする。
白糸おどしの具足に同じ白の袖無し羽織をつけた姿で徒歩なのだ。利匡は飛びつくようにして抱きとめた。
「なりませぬ。御大将でござりまするぞ孫七郎君は」
「おう、大将ゆえまっ先に出て行くのじゃ」
「なりませぬ。そのお姿ではすぐに鉄砲の……」
そこまで言った時に、ドドドーッと、二、三十梃の銃声が左手にとどろいた。
「あ……」怖さを知らぬのも、戦に馴れぬ若さから。この銃声で、無理に地べたへおし倒されると、はじめて秀次はゾーッと全身に悪寒が走った。
本能的に生命の危険を感じとったのだ。

三

いちど恐怖を覚えると、歯痒いほどに全身が震えてゆく。
ワーッ、ワーッと、人声だけは耳に入るが、それが、どの方角から近づくのか、どの方向へ動いているのか皆目見当はつかなかった。
そうなると、気負った下知の声も出ず、叔父の荒小姓、加藤虎之助清正が、戦いのはじめには相手の顔も見えねば人数も分らぬもの、ただ遮二無二相手にぶつかるだけと語っていたのが思い出された。
が、その遮二無二ぶつかる相手が、いったいどこに居るのかそれすら分らない。
「推参ッ！」
と、一人の味方が、秀次を守護していた輪の中から脱兎のように前方めざして駈け出していった。そのことで、
（敵は近い！）
と、本能的に思い、いきなりすらりと刀を抜くと、
「太刀を……太刀を納められませ。今、馬を……」
行手へ立ちはだかって籠手を叩いたのは田中吉政だった。
「御大将と雑兵とは違いまする。太刀を納めて、早く馬へ！」
その頃になって、はじめて秀次は、あたりが見えだした。しらしらと夜は明けはなれているのに、それまでの彼の眼は、眼の機能を失って映ずるものの識別が出来なかったのだ。

前方十二、三間の木立の間で、
「三好孫七郎の御内、白井備後！」
こう名乗った秀次の旗本に、敵の一騎が乗りかけるようにして突きかかって来るのが目に入った。
（あ、さっき、ここから駈け出していったのは備後であったか……）
ちらりとそれを思ったとき、敵は槍を頭上にかざすような構えで、
「水野惣兵衛が家中、米沢梅干之助！」
猛々しく吠え立ててパッと備後とぶつかり合った。
とたんに、「ウーム」と断末魔のうめきをあげて、一人が馬から落ちてゆき、狂奔した馬はそのまま、右手へ矢のように逸走していった。
（備後が討たれた。これは容易ならぬ戦になったゾ！）
「孫七郎君！　いざ馬へ！」
再び急き立てられて、秀次は、小姓頭の田中吉政から手綱を受取り、夢中で馬に乗っていた。
馬に乗るとふしぎに恐怖はなくなった。
「吉政！」
「はいッ」
「敵は……敵は、誰ぞッ」
「徳川の旗本衆にござりまする」
「苦戦と見える。早く！　早く、堀秀政と池田勝入に急を告げよ」

「かしこまってござりまする。君にはひとまず……」この場を退けと言ったのであろうが、その言葉に重なって、もう一つの怒号が秀次の聴覚を占めていった。
「孫七郎どのを討たすな。退れッ。急いで退れッ」
その声が木下利直の声と分ったとき、すでに一人が、秀次のくつわに飛びついて、林の中を駈けだしていた。
「遁ぐるなッ。馬を止めよ。引っ返せ！　卑怯者めがッ」
秀次は鞍壺を揺ってわめきながら、自分が何を言い、何をしようとしているのか、少しもわかっていなかった。
ダダダーンと、また銃声が足許でとどろいた。

四

一度火蓋が切られると、どの一部隊がどこでどのような戦をしているのか、味方同志にも分る筈はなかった。
白山林攻めの水野惣兵衛忠重の部隊では、眼を血走らせて進みながらいま、忠重が、その子の藤十郎勝成を口汚く叱りつけていた。
「藤十郎、そのざまは何事じゃ。もはやここは三好勢がまっただ中ぞ」
夜があけて気がつくと、伜の藤十郎勝成は由緒あるいぬめの兜を背負ったままで進んでいる。父の忠重は、若い勝成が、狼狽して兜をかぶるのを忘れていると思ったのだ。
「なに、そのざまとは……？」

「兜じゃ、その方兜を何のために持って居るぞ。かかる時、着くべきに、何として着けざる。たわけ者め。着けぬ兜ならば、そのいぬめ、糞桶にでもしてしまえ！」
戦の時の言葉には、節度も飾りもなかった。愛情も憎悪も怒りもおなじ悪口になる。
「なに、糞桶に……!?」
「そうじゃ。戦場に来て、兜を忘れるようなうつけが、ものの役に立つと思うか」
藤十郎は歯ぎしりして忠重をふり返った。
「父上！」
「文句があるかッ」
「眼玉をどこに附けてござる。この藤十郎勝成、昨日より眼を患うているゆえわざと兜は着けぬのじゃ。それを見落されるようでは、父上の眼もあがったわ。ご免！」
「待てッ！　先駈けは法度じゃぞ。待てッ」
「待たぬ！　眼のあがった父など当てにしていて、おくれを取ってなるものか。この藤十郎、兜を糞桶にする男かどうか、一番首をあげた上で改めて見参仕る。ご免ッ！」
そう叫ぶと、そのまま馬を煽って、矢のように本陣へ突きすすんだ。
一方――
岩崎の北方、金萩原に休憩していた堀秀政は、池田勝入から、岩崎城を攻めるという知らせを受けると間もなく、白山林の方向に銃声を聞いたので、とっさに事態を悟っていった。
「誰ぞある。すぐにものみを！」
戦に馴れている秀政は、直ちに陣を、檜ケ根方面に移動しながら、全軍に、思い切った下知を

下した。
「――東軍が追躡して来て、白山林の味方に仕掛けて来たのに違いない。陣地を香流川の手前に移し、そこで敵の来るのを待て。一歩も退くことは相ならぬぞ。その代り、馬乗の敵一人を射落したものには百石ずつの加増を取らす。競えやものども」
堀秀政の立場は、戦に馴れぬ秀次を巧みに援け、時に脱線したがる池田勝入の短を補うところにあった。
それだけに、彼はあらゆる場合について慎重に思案を重ねていたのである。
部隊は無事に香流川の手前へ移せた。
と、そこへ、最初の斥候が、途中で出逢った秀次の小姓頭、田中吉政を伴って、白山林の敗色を告げてきた。
「なに、味方に不利と言われるか。よし、その旨直ちに、森どのへ！」
こうして、急は森長可のもとへ告げられ、更に池田勝入のもとへも飛んで長久手一帯は爽昧な朝の日の中で、見る間にはげしい血闘場に変っていった。

五

まず白山林の秀次勢を引っかき廻して、これを混乱に陥入れた大須賀勢と榊原勢は、あとを水野勢に托して、すぐに堀秀政の軍勢に襲いかかった。
大須賀康高と榊原康政とは、池田勝入と森武蔵守のように、やはり舅と婿の間柄であった。康高の娘が康政の妻で、両家の間は至極親しい。

それだけに士卒も顔見知りが多く、最初の戦でもいずれ劣らぬ働きぶりだったのでこんども、第一陣は康高が承わり、左手へ敵の注意をひきつけたところで、康政は右手を衝き、一挙にこれも混乱させる打合せであった。
ところが敵の姿に接すると、両将の間の取りきめは全く無視されてしまっていた。「戦場の狂気」が顔見知りの両家の士卒をはげしい競争意識にかり立ててしまったのだ。
「大須賀の家中に負けるなッ」
「そうじゃ。親類の兵におくれて、なんで殿に顔向けがなるものか」
「勝てばよいのじゃ。榊原のいだてん走りを見せてやれ」
時をおいて突き入るはずの榊原勢と大須賀勢とが、香流川に近づくころには先を争う混成部隊になっていた。
戦になれた堀秀政が、なんでこれを見遁そう。彼は陣頭にあって斬って出ようとする部下をきびしく押えて満を持していた。
「まだ出るなッ。引寄せるだけ引寄せよ。よいか、そして、一度に騎馬武者を狙って鉄砲を浴びせるのだ。騎馬首ひとつ、百石じゃぞ。忘れるなッ」
そうした構えを知らず、はやり立った大須賀勢と榊原勢とは、喊声をあげて堀勢の射程距離に入っていった。
ダダーンと、堀勢の二列目あたりで銃声がわき上った。すでに双方の先頭は、十四、五間の近さとなり、眼をひきつらせ、歯を喰いしばって衝突しようと身構えた寸前だった。
「あっ！」

「おう!」
狙い射たれて、まっ先の騎馬武者が、槍をそろえた徒士兵の中へもんどり打って落ちてゆく……
ダダーン。
ダダーン。
これは、功をあせってはやりきった寄手の出足をみごとにくじいた。中には血気に任せて足のとまらぬ者もあったが、一人の騎馬武者が落馬するたびに、その周囲の家人や小者が、わが主人に走り寄るので、見る間に、雪崩れはせき止められた。そして逆に、満を持していた堀勢が、槍先をそろえて寄手の中へ突き込んだ。
そこここで、はげしい格闘が展開された。怒号と、名乗りと、逃げる者と追う者と、討たれる者と討つ者と……そして、わずか二三分の間に、形勢は逆転して、見る間にあたりの大地は空隙を作ってゆく。
「遠く追うな。引っ返せ」
秀政が号令した頃には、この檜ケ根の合戦では、家康の先手は完全に敗れていた。
白山林で勝って、ここで敗れて、両軍の形勢は文字どおり逆睹しがたいこんとんとした乱戦になりつつあった。
六坊山で首実検している勝入や、権道寺山まで出張って来ている家康はまだこの事は知らずにいよう……

六

いったん権道寺山に陣をすすめた家康は、朝日があたりを照しだすと、すぐまた陣を色ヶ根山に移動した。

この色ヶ根山は白山林の東南にあたり、ここに陣取ると、堀秀政と池田勝入の両隊を中断出来ると思ったからであった。

この両隊に一つになられては野戦の妙は発揮しがたい。どこまでも両隊を引きはなしておいて、各個撃破を遂行したい家康だった。

「申上げまする。白山林の味方は、ついに三好勢を潰走させてござりまする」

取次いで来たのは、武よりも算用に長けているため、本陣の雑用主管を命じられている本多佐渡守正信だった。

家康は笑いもせずに、じっと晴れわたってゆく空を仰いだままで、

「当然のことよ」

と、無愛想に言った。平素もそうであったが戦場にあっては特に無愛想な家康だった。

戦場心理は知りすぎる程に知っているのだから、功に誇らせまいとしての心遣いなのに違いない。

「あとの情報を早く致せ。堀勢はまだ蹴散らせぬのか」

「もはや注進のある頃かと……では手前は外にて」

正信はあたふたと駈け去った。と、間もなく又引っ返して来て、

ざります る」

「偵察に赴きました戦奉行の内藤四郎左衛門正成と高木主水清秀、血相を変えて、かけ戻ってござりまする」

「凶報……戦場には勝っても負けても凶報はあるものじゃ。誰が討死してのけたぞ」

「殿！　凶報にござりまする」

「通せ、これへ」

「はッ、ご両所、御前へ急がれよ」

その声の終らぬうちに、内藤正成と高木清秀、それに、こんどの戦では監視役を命じられている足軽大将の渡辺半蔵守綱の三人が、あたふたと入って来た。

「殿！　わが御先手衆、檜ケ根の堀勢に敗軍、これへ引揚げて参りまする」

「なに、これへ敗走して来ると……!?」

「はい。されば、敵は勝におごって、凡そ半数以上が、味方を追いかけて居りまする。それゆえ今が絶好の時、手薄な敵の本陣へ直ちに旗本全員にて襲いかからば勝利必定と存じまする」

渡辺半蔵が一気に言うと、

「待てッ半蔵！」

と、内藤四郎左衛門がさえぎった。

「そのような無謀は、三河一国の主にて在わす頃ならばいざ知らず、今の殿におすすめ申すことではない。殿！　お先手が敗れましたゆえ、このまますぐに岡崎城までお引揚げなさりまするよう」

すると、こんどは一緒に戻って来た高木清秀が、

「殿！　この主水は、内藤どのに同意は致しかねまする。ここでこそ、すぐに敵にお掛りなさるが上分別と存じまする」
三人二様の報告と進言に、家康はニヤニヤと笑いだした。
勝てば沈黙、負くれば笑う……むろん家康とて心の動揺はまぬかれなかったのであろうが、そのままわが感情を部下に読ませることはなかった。
「申上げます」と、本多正信が顔いろ変えて双方の間に割って入った。
「それがしは内藤殿に同意致しまする。渡辺、高木のご両所は、何とてそのような途方もないことを申上ぐるのじゃ。負けた時には退くのが戦、無理は大怪我のもとでござるぞッ」

七

「なにッ、負けたときは退くのが戦の定法だと……」
場所が戦場だけに、気の立ちすぎている渡辺半蔵が、眼をむいて本多正信に喰ってかかった。
「貴殿はいったい、いつ戦の法を学ばれた。どこの戦で、どのような経験をしたというのだッ」
「そうじゃ！」
と、高木主水はあとを引取って、
「いかに佐渡どの、こなた、座敷の上で算盤持つ姿は見かけたが、戦場で生命を的の働きはしたことがござるまい。戦はのう、体を張っての駈け引きじゃ、畳の上の算用や鷹狩りとは違うのじゃぞ。差出口はお控えなされッ」
「じゃと申して」

「じゃも蝮もない。われ等はこなたに話しかけているのではござらぬ。殿！」
家康はいぜん微笑を唇辺にうかべて黙っている。
「ご無精なさらずと、早々にお掛りなされ。さもなくば敵は途中で引っ返し、破りがたい備えに戻って行きましょうぞ」
火を噴くような眼をして家康に詰め寄った。
「わかった」
家康はしばらくして、はじめて、大きく頷いた。いかにも考えぬいた結果と見せて、その実、始めからそのつもりだったのだ。
「馬を曳け！　前進しようぞ」
「はッ」
これですべては決定した。
小者頭の久右衛門が、くつわを取って馬を据えると、家康は肥った体で、ゆらりとそれにまたがり、
「万千代！」
と、声高に呼んだ。
いまは凜々しく赤母衣つけた十九歳の若武者井伊兵部少輔直政は、
「はッ」
と、はじけるような気負った声で、馬の前へ片膝つく。
「掛るぞ。待ったであろう、行けッ」

「かしこまって！」

高木主水と渡辺半蔵とは、内藤四郎左衛門と本多正信をぐっと鋭く一瞥し、肩をいからせて家康の先に立った。

家康はそのまま色ケ根山を下って、岩作へ出て、更に香流川をわたって長久手の富士ケ根山をめざしてゆく……

その頃——

池田勝入は六坊山にあって、首実検を終るところであった。

戦半ばの首実検ゆえ、ただあらためて首帳に記すだけでもよかったのに、いちいち古式にのっとる検べ方で、更に盃ごとまであったのだから、知らぬ者の眼には、勝ち誇った勝入が得意満面の姿と見えたに違いない。

が勝入は首級をしらべながら何度右足のくるぶしを踏んでみたか知れなかった。

駕乗物の用意はない。とすれば、出来得る限り負傷をかくして、陣頭を馬で進んでゆきたかった。

（馬を射たれ、足を踏み砕くとは……）

しかし、戦には勝っているのだ。不運の芽と思うては鹿島の神に相済まぬぞ……そう思ったとき、

「申上げます！」

近侍の一人が転るように幕の入口へ膝を突いた。

八

勝入はびくりと上体をうごかして、
「何じゃ、あわてくさって。いましばらくじゃ首実検は」
しかし近侍は勝入の発言を無視して、言葉をつづけた。
「白山林にありました三好勢、敵の追撃にあって潰乱致した由にござりまする」
「なに!?」
勝入もおどろいたが、傍にあった伊木清兵衛忠次も、片桐半右衛門も、サッといちどに頬を硬ばらせた。
「総大将、孫七郎秀次さまの小姓頭、田中吉政どの、身に数創を負われて、直々注進、これへお通し申しましょうや否や」
「通せ!」
叩きつけるように言って、ウームと勝入は唇を噛んだ。こんどは足の痛みどころではなかった。心の芯までえぐり抜かれたような衝撃だった。
（筑前に済まぬ! 秀次を討たせては……）
そこへ幽鬼のような表情で田中吉政が、勝入の近侍にたすけられて入って来た。
「吉政!」
「は……はッ」
「傷は浅いぞ。たわけめ、眼を開けッ」

「はッ」
「秀次どのは、孫七郎どのは……何としたぞ。生死は……生死は……」
急き込んでたずねられて吉政は、じっと宙へ視線をそらした。
「早く、救援……」
「生死はッ」
「相分らず……少しも早く……」
「家康自身か、敵は……」
そこまで訊いて勝入は舌打ちした。吉政の疲れすぎているのが分り、訊きただしている自分に腹が立ったのだ。
「吉政に手当をして取らせ。それから……」
勝入はあわてて視線をおよがせながら、二男の三左衛門輝政の上に眼をつけると、
「三左、紀伊守に申して来いッ」
「はッ、兄上に……」
「困った！　筑前どのに義理が立たぬ。いや、義理ではない、武士の一分が相たたぬ」
「父上！」
「万一孫七郎どのに……いや、木下利直、利匡が付いているゆえ万々さようなことはあるまいが、もし万一のことあらば、こなた達も生きて戻るなと……そう伝えよ！」
三左衛門輝政は、ふと父の混乱を哀れむ顔になったが、思い直したように、
「かしこまってござりまする」

すーっと立って出ていった。
それを合図に一座の者は総立ちになってゆく。
「馬を曳け！　行先は白山林じゃ」
「はい」
「何をうろたえ居るぞ。急げッ」
陽はすでに頭上に近く、時々それを雲が蔽った。心に狼狽がなかったら、若葉のそよぐ、爽やかな風の囁きに睡けをもよおすような、静かな晩春の昼近く……
勝入は、足の痛みを忘れて、
（筑前に相済まぬ！）
同じことを胸いっぱい渦巻かせ、引立てられるように六坊山をはせ下った。
ダダダーンとまた新しく、はげしい銃声が長久手の山野を揺った。

九

勝入が六坊山をはせ下って、長久手に出たときには、戦線はもはや、何れが敵か、何れが味方か、見透しがたい混乱の中に突き入っていた。
それが一層彼から百戦練磨の、身についた不敵さを奪っていたのだが、途中で出逢う幾組かの敗走兵は、みなその所属を異にしていた……
まっ先に出あった足軽風の男に、
「誰が手の者ぞ！」

と、訊ねるとその男は、
「三好勢にて候」
叫びざま、いだてん走りに路傍の藪にかくれていった。
次に出遭った、まだ若い雑兵は、
「何とて戦場を捨てて退く。引っ返せ。卑怯者め」
馬上から叱咤すると、憎悪にみちた眼をむけて、
「われ等は堀勢、遁れるのではない。進むのだわい」
悪罵を投げて目にもとまらぬ素早さで三河の方へ駈け去った。
むろんこれも味方の敗色に、戦場離脱を企てている半狂乱の悪罵であった。
三度目に出あった壮年の雑兵は、全身に手傷をうけて槍にすがっていた。
「誰が手の者ぞ！」
勝入がたずねるのに、ヨロリと槍をつけて来た。もう視力があがっているらしい。
「敵か、そちは……」
相手は、それに応えず、
「大久保七郎右衛門が家臣、磯部……」
名までは言い得ず、そのまま赤土の上へ倒れた。
大久保七郎右衛門と言えば家康幕下の忠世がことに違いない。その家臣がこのあたりに来ているのでは、婿の森武蔵守は、どうなっているのであろうか……？
（筑前に済まぬ）

勝入が岩崎城などにこだわらず、そのまま三河をめざしていたらもう味方は、誰もこのあたりにはいなかったであろうのに……
あたりの地形は徳川勢の得意な野戦に最適のものと見てとれたし、堀勢までが敗走兵を出しているのでは、秀次ばかりか、秀政も武蔵守も、苦戦しているのに違いない。
銃声はしきりに、前後で聞えだした。
勝入自身が次第に戦場のまっただ中に出て来ている証拠であった。ピュッと弾丸が耳もとをかすめて左手の松の幹に打ちあたった。
空は晴れている。そして、その空のあちこちからワーッ、ワーッと鬨の声が降って来るように聞えるのは、勝入自身の狼狽を語るものと、自分でハッキリ分るのが、いらだたしい。
その筈だった。
その頃にはすでに、戦況は、はじめの一勝一敗の均衡を完全に失ってしまっていたのだ。
秀次勢を破った余勢をかって、堀勢に襲いかかった大須賀、榊原の二隊が、檜ケ根で敗れて混乱しかけているところへ、家康の命に依って、出撃して来た十九歳の井伊直政が、剛兵三千をひっさげ、六百梃の鉄砲の筒先をそろえて、堀勢に立ち向って来たのである。
そうなると堀勢は浮足立ち、逆に、榊原勢と大須賀勢は、頽勢挽回、三河者の名誉を賭けて、悪鬼のようにあばれだした……

十

何といってもこの戦場での重荷は、三好秀次だった。

彼が戦に不馴れだというばかりでなく、実子のない秀吉にひどく愛されている肉親の甥だということだけで、みんなの頭脳に計り知れない負担をかけていた。

もし、秀吉に計算おちがあったとしたら、この点だったであろう。勝入ははじめからその事にこだわりすぎていたし、堀秀政も又白山林を気づかって動作を掣肘されている。

彼が若し、さっさと秀次を見捨てて、森長可とともに、池田勢と合体していたら、充分徳川勢と対抗し得たに違いない。

ところが、堀勢が森勢と合体した時は、堀勢が敵の猛攻を支えきれずに追われだしての合体であった。

流れる水圧は支えがたい。森勢はそのために、却って、その場へとどまる力を半減される結果になるのは当然だった。

こうしてすべては家康の思う壺へと戦況は進展していった。井伊直政はまっ先に立って堀勢を追いながら森武蔵守に襲いかかり、榊原康政と大須賀康高がこれに続いた。

森武蔵守が歯ぎしりして、これを迎え討ったのは言うまでもない。

と、その時になって、六坊山を降りて来る池田勢と、森武蔵守勢の中間へ、家康は旗下を引っさげて、とどめを刺しに富士ケ根山を下って来たのである。

勝入の耳に、銃声も鬨の声も、四方八方から聞えだしたのはこのためだった。

第四の敗走兵が四人、彼の馬の前で、力尽きて倒れた時には、もう、勝入の周囲には嫡子の紀伊守元助も、次男の三左衛門輝政もいなかった。

全神経を火のような逆上にかり立てる肉迫戦が、すでに彼等の皮膚まで迫っている証拠であっ

た。
「誰が手の者ぞ！　気をたしかに持て」
と、ここでも、勝入は、自分自身を叱るようにたずねていった。
四人は主従らしかった。さして身分のある者ではない。が、主らしい二十二、三の若者は、
槍傷らしく、右わき腹をしっかりとおさえて、
「森勢にござりまする……」
と、虚空を見据えた。
「森勢も崩れ立ったか!?　傷は浅いぞ。頭を下げるなッ」
しかし、その若者はそれなりガクリと首を垂れ、援けようとしてすがっていた五十近い小者の
方があわてて、若者の体をゆすぶりながら答えた。
「武蔵守さま討死なされてござりまする」
「なにッ!?　武蔵守が討死したと……」
「はい。敵を喰いとめようとなされて、馬上で指揮中、鉄砲に眉間を割られ……そのまま声もな
くご落馬……」
「声もなく、死……死……死んでいったか」
「その首級、たしか、大久保七郎右衛門の家来、本多八蔵と申す者に掻き取られてござりまする」
勝入は一瞬、眼の前がまっ暗になっていった。
全身で敗戦を知ると同時に、ズキン！　と足の傷がいたんだ。
と、その時に、すぐ眼の前で、ワーッと小高い丘が鳴った。

十一

森勢の総崩れから、家康の旗下の圧力が、いちどに池田勢へかかって来たのだ。
（ついに来たかッ！）
戦い馴れた勝入は一瞬にしてそれを観破した。眼の前で息を引きとった侍を小者たちがあわてうしろの藪畳にかつぎこんでゆく間、勝入は、自分を追い越して敵に向ってゆく、味方の士卒の足並みを見まもっていた。
みな一様に爪先立って、上半身ばかりが、のめるようにフワフワと前へ出ている。狼狽した時のあせった兵の姿態で、これでは半刻と躰力が持つものではなかった。
その筈だと勝入は思う。勝入ほどの者が、愕然とした思いでいるのだ。勝ちに誇って一息いれていた軍兵が、狼狽するのも無理はない。
こうした姿勢で進む兵は、相手が意外に弱く、すぐ味方に背を向けてくれると持直すが、さもない時には、力尽きてへたり込むか、ヤケになって滅するかが落ちであった。
今ごろは、そのあがり気味の兵の先頭に立って負けぎらいの紀伊守元助は、狂気のように槍をふるっているであろうし、若年の輝政はそれ以上にあがっていることだろう。
そう思ったとき、また右前方で、ワーッと遭遇戦の喊声がぶつかり合った。
ダダダーンと、こんどは銃声はすぐ間近かだ。
「危いッ！」
と、くつわを取っていた小者が、勝入の馬をいきなり道から草むらの中に曳き込んだ。

敵の先鋒が、行手の丘の下から姿をあらわして来たからだった。
「たわけめッ」
と、勝入は叱りつけた。叱りつけて手綱をとると、しかし、勝入は、敵の正面へ馬を返さず、そのまま草むらを森の中へすすんでいった。
その馬を取巻くようにして三十余人の若侍が道をそれた。
「殿を、殿を頼むぞ！」
そう言ったのは岩崎の城攻めを進言した片桐半右衛門らしい。そのまままこれも前のめりに敵に向っていった。
森の中は眼のくらむような陽と若葉の影の交錯であった。
勝入は何と思ったか馬を停めて顔をしかめながらその場へ降り立った。
あわてて小者が、床几を持って走ったが、それより先に、草の上へ胡坐していった。
「済まぬ！　筑前どの……孫七郎どのを殺してしもうたわ……」
みんなは眼くばせして、勝入の周囲を離れて見張についた。
婿の森武蔵守の戦死を聞いて、気落ちがしたのだと近侍は思った。
「その代り、わが子も婿も、そして、われ等も後を追おう……許されよ」
戦おうにも足の痛みがはげしくて、騎乗に耐えなかったのだ。むろん徒歩戦など思いも寄らない。とすれば、勝入の最期はおのずから決ってゆく……
「やあ、寄せたぞ敵が……」
「うぬッ、来いッ」

こんどは勝入のすぐ脇で声がして、一人の武者が脱兎のように警衛の輪を破って、勝入に走りよった。
「池田信輝入道勝入どのと覚えたり、見参！」

十二

　勝入の眼が、ちらりと相手の上に移ったとき、その武者は、前かがみに辷るような姿勢で、眼の前まですすんでいた。
（よい姿勢だ！　勝つ姿勢だ！）
　そう思いながら勝入は、
「何者じゃ。名乗れッ」
　声だけは放図もない大声で叱咤した。
「家康が旗本、永井伝八郎直勝！」
「うむ、天晴れな若者、来るかッ……」
　はじき返すようにそう答えたが、膝も立てず、差料も抜かなかった。
　恐らく相手の眼には、勝入の姿が不動の巨巌にも見えたことであろう。
　槍をつけたままじりりッと横にまわりながら、額の汗をたたくようにして籠手ではらった。
「おのれッ、殿に何とするぞ！」
　追いすがって来た勝入の家臣が、わきからいきなり躍りかかった。
　相手はそれをパッと伏せてかわしておいて、そのまま槍を次に近づくもう一人ののど輪をめが

けて投げつけた。
「ウーム」と、一人は突き立った槍をつかんでのけぞり、先に斬りつけた家臣が、再び伝八郎に斬りかかった。
伝八郎直勝は、また目にもとまらぬ早さで、太刀を抜きながらかわしていった。かすかに音はしたが白刃はふれ合わず、次に二人で構え合った時には、伝八郎の左手の人さし指からタラタラと血が流れていた。
いや、指はすでに無くなっているのかも知れない。
白刃をふれ合わなかったのは、天晴れだと勝入は思った。
(こやつめ、まだ人を斬る気で、太刀の刃こぼれをふせいでいる……)
「やあっ！」
と伝八郎がふんごんで、こんどは斜めに勝入の家臣をなぐりつけた。
「ウーム」と、断末魔の呻きが低く尾をひいて、次には白刃はまっすぐ勝入に向けられていた。
これだけの荒い行動のあとで、相手の息はみだれていない。玉のような汗を噴かせて眼も、唇もぴたりと据わってみじんも揺らいでいなかった。
「ほう……」
と、勝入は太刀をぬいた。篠の雪と名づけた勝入が自慢の愛刀だった。
「永井伝八郎直勝と申したの」
「いかにも！」
「勝入ほどの者によくぞ眼の保養をさせた。このまま自害しては情にもとろう。こなたの意気に

免じて、太刀を抜いたぞ」
「みしるし頂戴！　ご免！」
「待てッ！」
「な、な、なんと、おくれられたか」
「たわけめ、先程より見てあれば、こなたは太刀を粗末にせぬ男じゃ。この勝入の首級をあげたのち、この篠の雪、共に持参して差料と致せ」
「これは忝けないこと……」
「それに、折あって万一手蔓もあらば、この勝入、筑前どのに済まぬと申して討たれていったと言いのこせ。それだけじゃ。来いッ」
「ご免！」
絵のような美しい光と緑の斑の中で、こんども白刃は音を立てずに、はげしく虚空で左右になかれた……

十三

勝入は、決して立合いをなおざりにはしなかった。勝三郎の昔から誇りを持って生きとおして来た武将が、全力を尽さぬまま死ぬことなどは思いも寄らない。
それでは相手にも済まぬと思った。
「手ごころは加えぬぞ」
「おう！」

ふたたび二人の太刀は陽と影の斑の中でからみあった。
誰もこの格闘に介入して来る者のないのがふしぎであった。
いや、それほどすでに乱戦になっていて、進む者も退くものも、この場の近くを絶えず右往左往しながら、自分のことしか見えなくなっていたのだとも言える。
「やっ！」
と、伝八郎が、隙を見つけて躰ごと勝入にぶつかった。
その刹那、勝入は、再び全身の千切れるような骨折の痛みを覚えて顚倒しながら、
「あっぱれ！」
と、相手を褒めた。
それが最後であった。伝八郎は飛鳥のように躍りかかって、上体へ馬乗りになったまま首をあげた。
しかし、それを手にして突立ってから、一瞬放心したようにその場に立ち尽した。
ふみにじられた草の上へ、おびただしく血がしぶき、それを見る眼に、光がまぶしい。耳はワーンと鳴っていたし、全身は、半ばしびれて知覚を失っているようだった。
「勝った！」
自分だけではない。味方はどこでも……
（おれは敵にほめられた……おれはあっぱれなことをしたのだ……）
こんどはあわてて、勝入の手から、篠の雪の名刀をもぎとり、それから屍体の鞘をとってそれを納めた。

ふいに首のない屍体が笑いだしたような気がした。いや、笑ったのではなくて泣いたのだ……
(見たか伝八郎、これが武将の最期の姿なのじゃ……)
永井伝八郎直勝は、はげしく首を振って、狂ったように獲物を高くかざしていった。
「三河大浜の住人、永井伝八郎直勝、敵の大将、池田入道勝入の首討取ったり!」
間近かに答える者はなく、散らばった屍体がいっせいに拍手したような気がした。
(これでよいのじゃ! 勝ったのじゃ! 手柄したのじゃ!)
そのまま伝八郎は、後からやって来る家康の馬印めがけて、いっさんに走りだした。
あたりはふいに静かになり、どこからともなくもう蠅が飛んで来て、むざんに肉をひろげて陽をうけた、勝入の首のきりあとにとまった。
「わーっ」とまた右手の藪をふみしだいて、池田勢が遁げていった。
この頃には、すでに紀伊守元助も討死していた。ただ父と兄の死を知らぬ二男の三左衛門輝政だけが、まだ夢中で頽勢を挽回しようとして荒れ狂っていたが、勝敗はもはや決定的といってよかった。
ボオーと法螺が鳴りだした。
家康勢が、勝利を確認して、兵をまとめだしたのかも知れない。
屍体の蠅が、あらわな陽の下で次第に数をましだした……

鹿と瓢

一

秀吉が、家康の池田勢追躡を知ったのは同じ九日の五ツ半(午前九時)近かった。
それ迄秀吉は、楽田にあって、しきりに小牧周辺の徳川勢に小ぜりあいを試みさせていた。むろん陽動で、味方の三河侵入を家康に悟らせまいとしているのである。
「――家康が、今日の昼まで気づかなんだら、面白いことになるが……」
起き出すと秀吉はめずらしく運動のためと称して馬を曳かせ、陣屋の周囲を二めぐりほどして戻って来た。
彼の考えでは、味方の中入りももはや今日は知れずにいまい。知れれば必ず家康は動き出す。動き出した時がわが腕の見せどころだと思っていた。
家康は、本国の危急を知らされて動顛している。それに追討をかけてやるのだから、
(これは賤ケ岳の二の舞いじゃ)
いかに野戦の巧妙な家康も、立ちどまって戦う機会が見出せなければ、佐久間玄蕃同様の苦境に追込まれて、収拾出来ない崩れ方をしてゆこう。
(決戦は今日だぞ!)
陣屋へ戻って食事をしながら、秀吉は傍の石田三成を見やって、

「今日の昼には、勝入も三河へ入っていようでな」
と、ひとり言のように言った。
「むろん入っていましょうが、家康はまだ知らずに居りましょうか」
「知っていて動かずに居れるものか。わしとて、大坂城が攻められていると聞かされたら、こうして湯づけを啜ってては居れぬわい」
笑いながら、膳を下げさせ、それから、又、幽古を呼んで、あちこちへの手紙を書かせにかかった。
と、そこへ二重堀の日根野備中のもとから、家康が、すでに小牧山を降っている旨の知らせを受けたのだ。
「なに、家康が居らぬと!?」
そう言った時には、秀吉はもう席を蹴るようにして起っていた。口述を受けて、筆を走らせていた幽古が、
「それでは、この書面は、いったん中止に致しまして……」
そこまで言った時には、姿はもう仮屋の中にはなかった。
今日ははじめから秀吉も出陣する気でいたのだ。恐らく手紙の口述を終えたのち、龍泉寺へむけて出発するつもりだったのに違いない。
秀吉自身が、出発したあとの配置は決っていた。約六万の兵を、いぜん厳重に小牧山の周囲に残して、秀吉は、堀尾吉晴、一柳末安、木村隼人等と共に、その自慢の旗本衆をひっさげて、もう一度賤ケ岳七本槍の功名を夢想していたのに違いない。

それが少しばかり狂いを生じて来た。
（戦場では一刻の狂いが、勝敗ところを変える大事になる……）
秀吉は陣屋を出ると、
「行くぞォー」と、叫んだだけで馬に乗った。自慢の馬印も、槍も、旗も、秀吉の姿が、疾風を捲いて駆け出してから動きはじめた。信長の田楽狭間に赴く時の出陣がこれであったが、はじめはただ秀吉一騎……
例の唐風な、馬藺の後立の兜に、赤地錦の派手な陣羽織姿で、後をも見ずに龍泉寺をめざして駈けつづける。
そんな時の秀吉は、全く何も考えない若者のようでさえあった。

二

龍泉寺へ着くまで秀吉はまだ長久手の味方の敗戦を知らなかった。
家康の出発が、予想以上に早かったと言うことで、この戦の前途へ危惧は感じだしていたが、しかし負けるなどとは思ってぃなかった。
もともと彼の辞書に敗れなどという文字はない。
「茂助！　末安！」
龍泉寺にあって命令一下を待っていた堀尾の陣幕に近づくと、
「今日の戦は、利を失うやも知れぬぞ。急げや――」
悪童のように怒鳴り立てながら馬を降りて、はじめてそこで味方の敗戦を知らされたのであっ

た。
「すると勝入は岩崎城など攻めていたのか」
「はい。その上で、首実検をやって居ったと申します」
「はイあ！」
と、秀吉は、肺腑から絞るような奇声まじりの吐息をもらした。
何も彼も計算ずくめで、これから一挙に家康勢を混乱させるつもりの策戦が、味方の救援という、別の意味の出兵になってしまった。
「あのお人好しがッ！」
秀吉は吐き出すように言って膝を叩いた。
「あれほど言ってあったのに、まだ岩崎城など……」
勝入がぐんぐん進んで居さえすれば、家康もそれを追って、充分決戦は伸ばせたのだ……そう思うと、肚の底から腹が立った。
が、すぐ次の瞬間には、そうした感情にこだわることは、百害あって一利のない事を悟った。
「その勝入を出してやったはこの秀吉じゃ。よし、勝入を救いながら叩け家康を……徹底みじんに叩きつぶせ」
さらりと心の方向を転換し、それに向ってすぐに全力を打ち込めるのが秀吉だった。その意味では秀吉の気分転換は、さながら名人の剣の変化によく似ている。
ここで秀吉はまず、堀尾、一柳、木村の三隊を長久手へ急行させ、これを池田勢救援にあたらせておいて、自らは家康攻撃勢として出発した。

その総勢は三万八千。
敗戦を、そのまま勝利にみちびかなければ止まない秀吉の性格と気性であった。
「何はともあれ、家康の旗本を引きつつめ。包んだ上で一人も余すな。敵はもう戦い疲れているが、味方は新手なのじゃ」
その頃に——
家康の留守を預っている小牧山の本陣では、石川数正と酒井忠次、それに猛将本多忠勝の三人が、口を尖らして激論の最中だった。
「では、それがしの意見には従われぬと言われるのか」
「従わぬとは言わぬ。が、考え落ちがあるというのじゃ」
猛り立っている本多平八郎忠勝に、石川伯耆守数正は、苦りきった表情で相対していた。
酒井忠次は、時々舌打ちしながら、等分に二人を睨みまわしている。
いずれも兜だけは着けていなかったが、厳重な武装をしていて、何か言うたびに床几がきしんだ。
「なに、おれの考えに、考えおちがあると。こいつは聞きずてならぬ。どこが足りぬ。さあ言え数正！」

三

石川数正は、年長者らしい落着きで、
「みな殿のお考えのうちにあったことじゃ。平八どのはそれを思わぬのか」と、切り返した。

「殿が、池田勢を追っていったと気がつけば、筑前が更にそれを追ってゆく……その位のことを考慮に入れぬ殿ではない。うかつに犬山城など攻めて見さっしゃい、収拾出来ぬことになろう」
「ええッ、歯痒いッ！」
忠勝はもう一度歯をかみ鳴らして舌打ちした。
彼の考えでは、秀吉があたふたと楽田を出発していったゆえ、その留守に数正、忠次、忠勝の三人で、手薄になっている犬山城を一挙に手に入れようというのであった。
そうすれば中入りする気で出て行った敵が見事中入れされる結果になる。今をおいてその機会はない。すぐに攻めようと言いだしたのに対し、石川数正は、頑強に反対しているのだ。
数正の言い分は、そのような危険を冒して、若し敵に囲まれ、小牧山へ引きあげ得ぬようなことになったら何とするか？
家康は、われ等に、ここをきびしく守れとは命じて出ていったが、隙あれば犬山城を攻めよとは言わなかった。
万一家康勢が、池田勢を破って引きあげて来た時に、小牧山が敵の手に落ちているようなことがあっては、たとえ犬山城を手に入れても、それは決して利益にはならぬ。むしろ、一時的にせよ混乱を引き起し、悪くすると、清洲まで後退を余儀なくさせられよう。そうなっては城攻めに巧みな秀吉に、犬山、清洲で各個に囲まれる恐れがあるというのだった。
「おれが言うのは、犬山城へそのままみんなで居残れと言うのではない。誰かが一人残ってあとの二人はここへ引っ返す……小牧と犬山の二つを手に入れる策なのだ。それをなぜ、犬山と小牧を引きかえにするように言葉を曲げて反対するのか」

「反対する。いまは二兎を追う時ではない。ここでじっと殿の次の指図を待つ時じゃ」
「石川どの！」
「何度言われても、小牧の留守を預けられた数正、賛成は致しかねる」
「貴殿、陣中へとかくの噂あるをご存知か」
「何の噂じゃ。知らぬ。また知ろうともせぬ」
「知ろうともせぬ筈じゃ。貴殿が筑前のもとへ度々密使を出している。事によると石川数正、秀吉に通じているのではあるまいか……と、いう風評をご存知なかろう」
「なに……わしが、秀吉に通じて居ると！」
「おう、それゆえ犬山城を攻めるなと申す……そうした噂が飛んでも、おれは知らぬと言ったのだ」
「だまれ。だまれ平八……」
二人が少しも譲らないので、酒井忠次がたまりかねて割って入った。
「敵に通ずるの通じないのと、穏かでないことを言うな」
「風評だと言ったのだ。風評はおれの責任ではない。他人の口に戸がたてられるか」
まだ言い募ろうとする忠勝をおさえて、
「では数正は、どうあっても、犬山攻めはせぬというのだな」
「されば、勝ってさして利にならず、負ければそれこそ一大事じゃ」
それを聞くと、忠次は大きくうなずいて、
「よし、わしもやめた。平八。おぬしも止めよ」

と荒々しく立上った。

四

忠次は、その態度で忠勝の不平を押えようとしたのに違いない。
内心では忠勝の犬山攻めに賛成なのだが、石川数正がこう頑強に反対するのでは止むを得まい……そう思わせて忠勝の怒りを静めようとしたのだが、怒っている忠勝はそれを逆に受取った。
忠次も数正に言い伏せられたと思ったのだ。
「そうか、分った！」
彼は憤然として、岩くれのような腕をのばしいきなり自慢の兜を取って席を蹴った。
敵味方の間に鳴りひびいた三股鹿の角の大兜であった。
「おれはともかくここには居られぬ」
「待てッ、忠勝！」
「いや待たぬ。犬山攻めが出来ねば出来ぬでよい。おれは一人で覚悟を決めだ！」
「待てと申すのじゃ」
「待たぬと申すのじゃ」
あわてて引きとめようとする数正に、浴びせるように怒鳴り返して、そのまま北側の自分の陣へ取って返すと、犬山とは反対に、こんどは秀吉の後を追い出した。
「手を拱いているほどなら、秀吉と引っ組んで死んでやるわい！」

本能的に、家康の身の危険を感じてのことであったが、その行動は全く理性を超えていた。
彼はわずかに五百あまりの手兵を引きつれ、龍泉寺を発した秀吉の本隊に追いつくと、駒をあおって千成瓢の馬印に並行し、いきなりこれに発砲していった。
長久手へ急行している秀吉は、これを見て眼を丸くした。
改めて何者だと訊くまでもなかった。ぐんぐんと秀吉の後尾をぬいて来て、小川を距てた向うの道を並行したままですすんで来る。まっ先の鹿の角の大兜は、それが本多平八郎忠勝と一眼でわかるからだった。
「やーイ、止まれッ猿面!」
と、両者の間が、川幅だけになると忠勝はわめきかけた。
「それとも、この兜が、恐ろしくて止まれぬのか。千成瓢は三河の鹿に出遭うてしぼんだのかッ」
その悪罵と発砲にたまりかねて、
「殿!」
と、荒小姓たちは秀吉に言った。
「あの無礼な蠅奴、揉み潰してはなりませぬか」
しかし秀吉は、それを許さなかった。彼はこの悪罵を考えあっての進出妨害と見てとっているからだった。
「やいやい、その大軍は木偶か人形か。生きた武者は居らぬのかッ」
その都度、秀吉の旗下は、小波立って歩みを止めようとする。その煩わしさは、たしかに蠅のようであった。

「殿、ひと揉みに、あの無礼者を……」
「捨ておけ、捨ておいて長久手へ急げ。あのような突飛なことの出来る奴は生けておくものじゃ。死ぬ気の奴を殺してみたとて、向うの思う壺であろうが……」
てんで相手にされないと分ると、こんどは忠勝は、秀吉勢の前方へ出てうるさくまつわり出した。
「羽柴筑前が瓢を、三河の鹿が喰うて見せる。とまらぬかッ」
それはさながら、逆上した悪童。たまりかねて、秀吉勢から、狙いうちがはじまった。

五

常軌を逸した人間の行動……と言っても戦場では決して珍しいものではなかった。遭遇戦の場合は十中七までは逆上するのが通例で、これが若し半数にとどまったら、大勝を博するか、大敗を喫するかだと言われている。
理性は、相手の隙をよく見出すと同時に、恐怖感をも倍加する。したがって、適度に逆上させ、適度に落着かせるのが用兵の妙なのだ。
秀吉は、味方が本多勢と打ち合うのを、あえて止めはしなかったが、停まらせもしなかった。
「面白い奴じゃの、平八と言う奴は」
彼は絶えず馬を急がせながら時々大声で笑った。
「しかし、家康はよい家来を持ったものよ。生命を投出して、われ等の進出を遅れさせようとして居る。あ奴、いまに、わしが家来にして呉れよう。殺すな殺すな」

この言葉は、逆上しかける味方を、危いところで引きとめて、ついに戦場は長久手に近くなった。

この頃池田勢は、紀伊守元助もまた安藤彦兵衛直次に首を討たれて、わずかに生き残った輝政を擁して、その士卒は志段味、水野、篠木、柏井方面へ潰走中で、時刻はすでに正午をすぎていた。

本多平八郎忠勝は、しだいに冷静さを取戻した。

自分を相手にしない秀吉の急行が、何を意味するかが分って来たのだ。

（秀吉め、ただ一筋に殿との決戦を求めている……）

そうなれば、忠勝もまた道草など喰っていられる場合ではなかった。

少しも早く家康の本隊に合して、秀吉の大軍を迎え撃たなければならない。

「ようし、先に廻って、待ち伏せしてやる。鹿の餌食を覚悟の上で、ゆるゆるとやって来いッ」

忠勝は悪罵を投げて、真昼の陽の下で、ぐんぐん秀吉勢を抜きだした。

せいぜい五百騎あまりのこととて、その進退は軽捷だった。

秀吉はいぜん相手にならず、矢田川をわたり草掛をすぎて、ついに本多勢を見失った。

銃声はしだいに少くなり、重なりあった四囲の緑に、うららかな晩春の陽が嘘のように静かにあたっている……

（これはおかしい……）

秀吉が、小首をかしげだしたのは九ツ半（午後一時）。すでに長久手へ着いているのに、どこにも敵らしいものの姿が見えなかったからであった。

（これはあの鹿めに一杯喰わされたかも知れぬ……）
本多忠勝が、あのふしぎな挑み方で、わざわざ自分を長久手へ誘い出したのではあるまいか？
という疑念であった。
もしそうだったら、家康は、その間に池田勢を追って、秀吉とは逆に小牧の方向へ、退くと見せて進んでいったことになる。
（もし留守を衝かれたら、どうなろうか？）
智略に長けた秀吉だけに、一度疑念が湧きあがると、それはそのまま自分を縛る縄になった。
彼は、稲葉一鉄を声高に呼んで、性急に敵状の偵察を命じていった。

六

恐らく秀吉の生涯で、これほどひどく目算のはずれた戦ははじめてだったに違いない。
小癪な本多忠勝の挑戦に、じっと肚の虫をおさえ、まっしぐらに目ざして来た戦場へ、敵の姿が無かったのだ……
秀吉は、再び彦右衛門の倅の蜂須賀家政と、日根野弘就に偵察を命じた。
「一鉄はおそい。その方たちの手からも八方へ人を出して探らせよ。家康はどうしたのじゃ。どこにもぐって居るのじゃ」
めざす相手の本陣が分らなくなったのだから、薄気味わるさは想像のほかであった。
と、一方、秀吉をこの疑惑の中へ誘い込んだ本多忠勝は、その頃どこに居たのであろうか……
忠勝は馬を煽って、前夜家康の泊った小幡城に向っていた。

彼は、彼の怒りにかられた悪童のような秀吉勢への進出妨害が、家康の進退を計り知れないほどに助けたことなど全く知らず、

（今ごろ、小幡に引きあげるとは何というとぼけた殿なのだ……）

再びカンカンになって怒りだしていた。

甥の三好秀次はじめ、池田、堀の両勢を潰滅させられ、秀吉はいまあせりきっている。今こそ勝ち誇った味方を煽って、秀吉を一挙に叩き潰す絶好の時なのだ。

小牧にはまだ酒井忠次と石川数正が控えているので、敵は早急に増援を送り得ない。

（それなのに、小さな勝利に甘んじて……）

忠勝は、まだ遅くはないと信じていた。これから家康にすすめて秀吉勢の後方から襲いかかったら、秀吉は、長久手の山野へとりこになったも同様だった。それを得意の野戦で縦横に蹴ちらしてやったら、日没までに大勢は決してゆく。

（見す見す目の前に、天下がころがって居るというのに、それを取ろうともせず、小幡へ入って休息とは、何という殿であろうか）

それだけに、

「殿はいずれじゃ、殿々……」

小幡城に引きあげて、まだ血ぬれた具足のまま固めにかかっている士卒の間を、風のように駈けぬけていった。

「旗本の奴らもとぼけたものじゃ。一人も殿に、この好機を進言する者がなかったのか」

ひらりと馬を降りると、赤鬼そのままの形相で、

「殿！」と、家康の幔幕にとびこんで、
「この、ざまは、何でござりまする」
　と、怒鳴り立てた。
　家康はいま、兜をとって、額の汗を拭き出したところであった。
「おや、平八ではないか」
「いかにも平八でござる。殿！　秀吉はいま、あせりにあせって長久手へやって来て、あっけらかんとしてござる。天下は宙ぶらりんじゃ。早く兜を……馬を……」
「あせるなッ」
「急いで、殿！　寝とぼけてござる時ではありませぬぞ」
「寝とぼけて居るものか。落着け、秀吉が何としたのだ」
　言いながら家康は、小姓に命じて、鎧の胴の紐をとかせてゆく。
「解くなッ！」
　と、忠勝はおどりあがって小姓を叱った。

七

「殿！　耳に入らぬのかこの忠勝の声が」
「入っている。静まれ」
　家康は、一度手をとめた小姓に、そのまま鎧を取らせて、喰いつくような表情の忠勝に笑いかけた。

「まあ、掛けよ。そこに……」
「殿は……殿は、味方に勝味がないと言わっしゃるのかッ」
「いいや。あるであろう。あるが、出ては行かぬのじゃ」
「なんと言わっしゃる!? 勝てる戦でも出ては行かぬと……」
「そうじゃ」
家康は大きくうなずいて、ぐっと表情を引きしめた。
「もう行っても間に合うまい」
「いや、まだ間に合う! 秀吉は、長久手でわれ等の姿を探していよう」
家康はゆっくりと首を振った。
「もう気づいて、あわてて引返しているに違いない」
「どこへ引返すと言わっしゃるのじゃ」
「楽田じゃ。さもないと、おぬしのような暴れ者に退路を断たれる。それ位のことの分らぬ筑前ではない。聞け鍋(なべ)！」
家康が、忠勝の幼名鍋之助の、鍋で呼ぶ時は、きまって意見をする時だった。忠勝もまた、鍋と呼ばれると、つい、少年の頃を思い出して、何となく怒りの的(まと)をはずされてゆくのである。
「分らぬことを言わっしゃる殿じゃ。分らぬ！ この好機……一生の悔いになろうに……」
言いながら、小姓の持出す床几にかけて、はじめて平手でおとがいの汗をはらった。
「戦はな、勝ちすぎてはならぬものじゃ」
「な……な……なんじゃと……」

「ここで秀吉を逃がしておくが、まことの戦じゃと申すのじゃ」
「ふん、そのようなことを言うて、いまに秀吉に首を取られる。それでも勝ちと言わっしゃるのか」
家康はそれには答えず、
「いま秀吉を討って見よ。日本中、麻のように乱れてゆくわ」
そっと空を見上げて、つぶやくような声になった。
「わしにはな、秀吉ほどの力はない。逆上して秀吉を討って見よ。信長を襲った光秀と同じ目に遭う。光秀は勝って負けたのじゃ」
「これはいよいよおかしなことを……」
「おかしくはない。鍋！　ここではな、よくよく神仏のお心を考えてみねばならぬのじゃ。神仏は、もはや戦に飽きておわす……その時にわざわざ秀吉を討って世を乱してはならぬのじゃ。秀吉に、わしの代りに天下を取らせたとて、わしが秀吉の下風に立たねばよいではないか。よいか、わしがここで秀吉を討ってみよ。日本中の大名を相手にして戦わねばならなくなる。そのわしの代りに秀吉がみんなの矢面に立って居て呉れる……秀吉で治まるものを、わざわざ乱世にしていっては、わしの誓いが嘘になる。わしは、神仏の意を体して、早く戦のない世にしますと心願を立てて来たのだ」
家康の眼が、ひたと忠勝の面に据えられると、忠勝は、じれきって鼻を鳴らした。
「嘘じゃ。それは……嘘じゃ！　自分で天下を取って定める。それが心願の筈……殿は気遅れしているのじゃ」

八

家康はもう忠勝を無視して、本多正信と話しだした。正信に、秀吉の引揚げるさまを調べさせ、それに備えながら家康もまた、出来るだけ早く小牧山へ引きあげようという肚らしかった。
（今日の戦勝を、一時のこととして、再び以前の対陣に戻ろうとする……）
忠勝はプリプリしながら陣幕の外に出た。
腹立ちはまだ納まりそうにもなかった。
（折角の勝利を……）
と、思うと、家康のために忌々しくてならないのだ。
（おかしな人になったぞ。うちの大将は）
神仏が声を出して、誓いを破るなと言う筈はなし、信雄と家康と北条父子の三者が結んでいったら、立派に日本中を敵として戦えるのに、ひどく秀吉を恐れだしている。
（この辺が、殿のせいいっぱいのところだったのか）
もともと天下の取れる器ではなく、駿、遠、三のほかに甲州と信州の一部を手に入れたので、それで充分と思っているのではなかろうか。
（そんな殿にしたのはいったい誰であろう？）
外はまだ陽が高く、城の周囲は、一息いれた人馬であふれている。
昨夜一睡もしなかったので、草の上に倒れて、死んだように眠っている雑兵が多かった。
「本多どの！」

草を蹴散らすようにして、大手前へ止めてあった三浦九兵衛と牧野惣次郎のもとへ戻って来ると、そこにもう一人眼を血走らせて彼を待っている男があった。
まっ先に秀次の陣へ斬りこんで戦勝の因を作った水野忠重だった。
「忠重どのか、何の用じゃ」
「お館は、秀吉勢の攻撃を許さぬ。お身も一緒に行って呉れぬか」
「どこへ行くのじゃ」
「お館のもとへ……秀吉は、今夜龍泉寺まで退いて宿営し、夜明けを待ってこの小幡城を攻める肚と見きわめがついたのだ。このままに捨てておいては一大事、今夜夜襲をして秀吉の首級を挙げねばならぬ」
「だめじゃ！」
と、忠勝は無愛想に首を振った。
「いますぐ追おうというのさえ許さぬ。夜襲などを許すものか」
「許さぬというて捨ておいては相済むまい。明早朝……」
「分ってござる！　明早朝になったら殿も分ろう。が、いまは秀吉の新手に怖けづいていて話にならぬ。おれの考えでは……」
「お身の考えでは？」
「殿をこう臆病にしたものは、知恵者ぶった正信だの、石川数正だののような気がする。どうも数正が臭い！　あやつ、おれに、犬山城の留守も攻めさせなんだ……」
そう言うと、忠勝は、そのままさっさと牧野惣次郎の陣幕に入っていった。

その頃には秀吉はすでに長久手から龍泉寺へ引っ返し、水野忠重のいう通り、そこから改めて小幡城攻めを決行するための軍評定を開いていた。

したがって、このまま今夜を小幡城で過しては、それこそ家康勢は大打撃を受けねばならぬことになろうが……

小欲大欲

一

家康は近侍を遠ざけて、茶屋四郎次郎の松本清延と二人でかがり火をはさんでいた。

すでに夜に入って、さまざまな諜者のもたらす情報が彼我(ひが)の位置だけはハッキリとさせていた。

秀吉は、龍泉寺に、細川忠興と堀尾吉晴をとどめて、自身は稲葉一鉄、蒲生氏郷等と共に、上条に引きあげて宿営していた。

「するとお館さまは、本多、水野両将の夜襲をお許しなさらなかったので」

清延が声をひそめてそう言うと、家康はコクリと頷いて、

「数正はどう申した？」

と猪首(いくび)をのばして瞬(まばた)いた。

「その前に、なぜ夜襲をお許しなかったか、そのお考えから先に伺いとう存じまする」

「なぜじゃ。わしの肚が分らねば数正の意見は言えぬのか」
「というわけではござりませぬが……それを伺えば、石川どののお考え、申上げ易いように存じまする」
「それほど数正の肚は複雑だと申すのじゃな」
「その通りにござりまする」
「よし、では言おう。わしは信長や筑前とは違うた行き方で天下を狙おうと思うて居る」
「違うた行き方で天下を……!?」
「そうじゃ。信長も筑前も……いや、武田も明智も、みな力だけに頼って、あまりに事を急ぎすぎた。分るかそれが……」
「分るような、気が致しまする」
「この急ぎすぎた所に大きな隙があった。信玄も信長も光秀も、その隙のため倒れていった。筑前もどうやらそれによく似ているでの」
「なるほど……」
「わしは急がぬ。急いで今夜夜襲を許し、小さな局面で勝ってみてどれほどの利益があろう。もし万一攻め損じて、忠勝や忠重を失うようなことがあったら、それこそ大きな損害じゃ。大きな損害を賭けて、小さな利を得る……これは算盤に合わぬことじゃ」
「と、仰せられまするが、若しも秀吉の首級を挙げ得ました節は……」
「あとの難儀はわし一人の身にふりかかる。それゆえ、これも算盤にはずれて来る」
家康は声を落してニコリとした。

「清延、のぼる朝日は引きおろせぬものぞ、秀吉を今日まで加護して来た神仏が、ここでガラリと掌を返すと思うなよ。勝って利にならず、敗れて大損の夜襲など、何でわしに許せるものか」
「もう一つ伺いとう存じまする。その昇る朝日の秀吉が明早暁、四万の大軍で、この城に押し寄せました時は何となされまする」
「清延！……」
「はいッ」
「案ずるな。戦にならぬ」
「は……戦にならぬ……と、仰せられると？」
「わしは明日の朝まで、ここには居らぬ。今夜子の刻（午前一時）月の出を待ってさっさとここを引払う。いかな筑前でも、相手の居ない戦は出来まい……そのうちには、急いて無理する筑前から、若くて無理せぬわしの上へ、神仏の頼みが移って来よう。人はの、人がわざわざ手にかけて、殺さずとも、神仏に寿命を召される時がある。それゆえ、神仏の意に叶うよう、部下も殺さず、筑前も殺さぬよう……これをわしの天下取りの掟と決めたぞ」
松本清延は膝をたたいて身をのり出した。

二

「恐れ入ってござりまする！」
顔いっぱいに感動を見せて身をのり出した清延を見ると、家康は又一つ、素っ気ない表情でうなずいた。

「数正も、戦は避けよ、さっさとこの城を引揚げるがよい……と申したのじゃな」
「その通りにござりまする！」
清延は、昂ぶる感情をおしころして、
「諸将のうちには、勝っている戦ゆえ、反対する者が多かろう。が、ここで筑前どのに挑んではならぬ。この旨、よくご得心下さるようお話して来いと……」
そこまで言うと、堪らなくなったように顔をそむけて涙を拭いた。
「そうか。それを聞いてわしも自信を深めた気がする……」
「嬉しゅうござりますお館さま！　私も石川どのと同じ意見でござりました……」
「その事にござりまする、真に天下を狙うほどの者ならば、眼の前の人を相手にすべきではない、天を相手にすべきものじゃと……」
「数正が申したのじゃな」
「は……はい、筑前は人……お館はその上に立って神仏のお目を持たれたい。神仏はつねに民百姓のお味方。筑前が、その民百姓の仕合せに通ずる働きをしてゆく限り、お館は褒めてこれを助けるだけの、寛いお心を持たれたいと……はい、その石川どののお言葉と、お館さまのご心境とは、符節を合してござりました」
家康は、むっつりとした表情で清延を見返したまま、三度び、大きくうなずいた。
「筑前を褒めて働かせよと申したか」
「はいッ、それでこそ器は筑前どのの上と……譲るがこの場の勝ちじゃと申されました」
「分った。わしは譲ったとは思わぬ。こんどのこともこれが駈け引き、戦うているのじゃどこま

でも」
　そう言うと、家康ははじめて頬の線をゆるめて、
「清延、おぬしは、これから平八が陣に赴いてな、平八に、今日の手柄は、こなたが第一だったと申して来い」
「かしこまりました」
「あれが、秀吉の進出を半刻あまりも遅らせた。その間に、わしは、さっさとこの城へ退いて、筑前が鼻を明かしてやれたのじゃ。人の鼻をあかすは一度ではならぬもの。それゆえ、第二の鼻をあかす支度に取りかかれと……」
「第二の鼻をあかす……？」
「そうじゃ。今夜の夜襲もその一つであろう。が、これは幾分相手も予期していよう程に上乗の策ではない。それよりも、夜が明けていざ総攻撃を……と、力み返って進んで来てみたら、その城は空っぽだった……ハハハ……その方がぐんと大きく鼻を明かす……それゆえ子の刻を合図に小牧へ引きあげるのじゃ……と、申せば、あの猪武者も腑に落ちよう。血を流して勝って見せるは昼間の戦で充分、あとは智略で勝って見せよと、そう申せ」
「かしこまりました！　なるほど、それでこそ神出鬼没。三河勢の野戦の妙はここにありと申上げまする」
「そうせい。急いでな」
　家康は、自分も清延とともに床几を立って、
「正信、正信……」

声高に本多正信を呼んで、退却の準備を命じた。

三

その夜の羽柴勢の陣営も、徳川勢の小幡城も明けそめる迄、空をこがすかがり火の海であった。

それゆえ、付近の村人たちは、いずれからか、必ず夜襲があるものと怖えきって息をころしていた。

しかし、夜中の大衝突はついに起らず、やがて空は白みかけ、羽柴勢の方から先に、人馬の動きが感じられた。

秀吉は、この朝も、まだ色づかぬ東天へ、高らかに柏手を打鳴らして、それから自慢の孔雀尾の陣羽織をつけて馬に乗った。

旗本の諸隊を、無言で見回り、士気を引きしめるためで、その傍にはいつも石田三成が根づけのように従っている。

武功の荒小姓たちはそれぞれ槍先の手柄に気を取られて、大局へは目が届がなかったが、佐吉三成は智力で腕力に対抗しようと競っているので、その眼は時に、秀吉すら気付かぬところへ届いている。秀吉が彼を傍から離さないのはそのためだった。

まだ明けきらぬ、そこここの暗がりで、出撃の用意を急いでいる雑兵の間をぬけ、上条から堀尾、一柳、木村等の宿営している龍泉寺をのぞめる丘にやって来ると馬を停めた。

すでに小幡城攻めを命じられているので、龍泉寺では兵の移動が開始されている様子であっ

た。
「佐吉……」
「は……」
「そなたが家康だったら、何とするな、今日の戦は」
三成は、その意をはかりかねて、
「どうするとは、何のことでござります？」
「昨日の戦ではとにかく勝った。家康がな……しかし、そのために、折角苦心して築いた小牧山でもなく、堅固な清洲城でもないところで、このわしと決戦しなければならなくなった……勝って負けるとはこの事じゃと思わぬかい」
「なるほど……小幡の小城で決戦を挑まれたのではやりきれませぬなあ」
「それゆえ、こなたが家康ならばなんとするかと訊いてみたのじゃ」
三成はチラリと秀吉の横顔へ眼を移して、
「戦のことは分りませぬ。お館さまならば、何となされまする」
「なに、戦のことは分らぬと」
「はい」
「ずるい奴だ。戦のことが分らぬでは大名にはなれまい。わしの知恵ばかり吸い取ろうとする」
「はい。しかし……」
「しかし、何じゃ」
「お館は、家康どのを、小幡城で討取る気でござりまするか」

「おう、許さぬぞ今度は。毛利にも上杉にも必ず討取ってみせると申し遣わした。討取らねば嘘つきになるわ」
「家康も、それを知ってござりましょうなあ」
「うん、知っていようとも」
「それで、若しお館が家康ならば、何となさるか伺ってみとう存じまする」
「ハハハ……わしが家康ならばな、昨夜のうちにさっさと小幡城を捨てているわ」
秀吉は事もなげに言い放った。

四

「なるほど……」
と、佐吉三成は、白皙の額へ竪皺をきざんで、感心したように言った。
「しかし、これだけの大軍が後詰めに来ている。その中で、果して無事に引きあげることが出来ましょうか」
「出来るとも！」
秀吉はもう一度屈托なげに笑った。
「世の中にはな、小欲と大欲の区別がある。大欲の者ならば、どんな窮地におちいっても、ちゃんと算盤ははじくものじゃ」
「……で、ござりましょうなあ」
「家康にはよい家来がある。あの本多平八郎のごとき者に夜襲をかけさせ、われ等の眼をその方

へ奪っておいて、その間にさっさと兵を引きあげる。さすれば、本多勢だけの犠牲で、大勢に変化はない。再び小牧で対陣に入ったのでは、困るのは、家康では無うてこの秀吉じゃからの」
「お館！」
「なんじゃ。人の意見をきいてから出る知恵はまことの知恵ではないぞ佐吉」
「下司の知恵は後からで、それはよく存じていますが、ちょっと気にかかります」
「なにが気にかかる？」
「家康は、その位の算盤、はじかぬ人でござりましょうか？」
「なにッ……!?」
一瞬、秀吉の表情は、サッと硬ばったかに見えた。
正直に言って彼は、昨夜、その事について考え落ちをやっていた。それは秀吉の最も美点でもあったのだが、池田父子の討死が、人情家の彼の胸をかきむしりすぎていたのだ。
(どこまでも自分を信じ、義理を立て通して来た好人物の勝入……)
その実力も欠点も知り尽すほどに知っていながら、うっかり総大将に甥の秀次をつけてやってしまった……
(秀次が真先に叩かれていなかったら、或いは勝入父子は敗れることはあっても、死ぬようなことは無かったのではあるまいか……)
憎いところの全くなかった勝入だけに、勝入の顔が眼先にちらつき、朱具足に頭形の兜で、腰に赤熊をさし、赤熊の麾を持った紀伊守元助の凛々しい武者ぶりが想われて、家康の思惑への検討は足りなかったのだ。

「私は家康が、その算盤をはじいたようで、長久手の戦場から、さっさと身をかわしたように思われてなりません……いいえ、それも、お館の、いまのお言葉を聞いてから、始めて気付いたのでございまするが」
「佐吉！」
「はい」
「家康は大欲の人物……と、見るのじゃな」
「はいッ。むろんお館ほどではございませぬが……」
「そうか。よしッ、よく言った！　よくぞ申した佐吉！」
「と、おっしゃられても分りませぬ。何となされまするので」
「家康を助けるのじゃ！」
と、秀吉は眼玉をむいて膝を叩いた。
「わしはな、大欲を持って居る。日本国を斬り従えたら、大明まで平定する気だ。その折に家康めは役立つ奴じゃ。そうじゃ、それを忘れていたわ。ワッハッハッハッハ……」

五

秀吉は大口あいて哄笑してみせながら、自分の表情が素直な笑顔になっている筈のないのをよく知っていた。
（しまった！）
腹の底からそう思い、それをまぎらすための笑いであった。いや……その笑いが、ただ側近の

者の前を取繕ろうためだけだったら、これほどうろたえはしなかったであろう。彼は彼自身の考え落した失策に、
（この位のことで狼狽するものかッ！）
と、はげしく反撥し、そこから湧き出そうとする不安を捻じ伏せなければ納まらない性格なのだ。
「佐吉来いッ！」
急いで馬首をめぐらしてから、秀吉はもう一度早口に言った。
「中国征伐のおりにな、右府さまから、無事に大役を仕果したら、中国、四国をそっくりそなたに遣わそうと仰せられた……その時じゃ、いりませぬ！　と、はっきりわしは答えたものじゃ。それがしは、いまに、三韓から大明国を、頂きまする。狭い日本の領土などは眼中にござりませぬとな……」
佐吉は、ポカンとしていた。秀吉の言葉の意味が分らなかったのではない。この場合、ポカンとして見せなければ、秀吉の顔の硬ばりが和がないのを知っているからだった。
「ええッ、分らぬのかッ」
「は……はい。あの三韓から大明国でござりまするか……？」
「そうじゃ！」
秀吉は大きく胸を叩いて又笑った。
こんどは以前よりも少しく笑っている笑顔であった。
「ハッハッハッ、それがこの秀吉の志じゃ。さすれば人手の、あり余るという事はあるまい。家

康なども生かしておいて、手足の如く使わねばならぬ時がくる。それをうかと忘れかけていた。よいか、家康は助けておいて、われ等はすぐに楽田へ引きあげるぞ」
「はいッ、よく分りましてござりまする」
「呑み込みの悪い者には、わしが勝入父子の死に気を取られて、小幡城のことなど眼中になく、さっさと引揚げるよう命じたと言うがよいぞ。急げ、稲葉、蒲生にそなた早く知らせて来いッ」
佐吉三成は、笑いをこらえ、生まじめにうなずいて背を向けた。
いったん背を向けると、おかしさがこみあげた。家康に引きあげられたと感付いて、
(――しまった!)
と言う代りに、三韓から大明の名まで飛び出して来ようとは……
(しかし、これは案外、あとで、事実になってゆくかも知れぬぞ……)
ふとそんな気がしたのは、三成が、秀吉の気性を知りすぎるほどによく知っているからであった。
秀吉の発想方法はつねに天衣無縫であった。常人ならば手のつけられぬ妄想で、そのまま雲霧のように消え失せるに違いない。ところが秀吉はその着想を、執拗にいじり廻して必ず活かす天稟の才を持っている。
夜は明けた。
秀吉勢のうち、堀尾、一柳、木村の諸隊の先手は、家康の捨て去った小幡城にたどりついて面喰っている頃であろう。秀吉は、それ等の諸隊にかかわりなく、さっさと北上をはじめていた。

六

上条から楽田に帰り着くまでの秀吉の胸中は、人を喰った高笑いとは凡そうらはらなものであった。

彼は、家康の端倪すべからざる用兵の至妙さに接し、その実力をはじめて思い知らされたのだ。

（これは、わしの考えていたよりも、ずっとずっと喰えぬ男じゃぞ）

今までも卓抜した武将とは睨んでいたが、せいぜい、毛利、上杉、北条などに毛の生えた程度のものと思っていた。ところがここでは立派に自分と肩を並べ、自分を出しぬいて行動してみせたのだ。

いかに自信強く考えても、今日までの所では、完全に秀吉の負けであった。

（さっさと引きあげた空巣の小城とも知らず、秀吉ほどの大将が気負い立って攻めかかっていたら……）

そう考えるだけでゾーッと冷い汗が腋を流れた。家康は、それを笑ってやるつもりで何の未練も示さずさっさと引きあげていったのに違いない。

（人の悪い奴め……）

その人の悪さで一足先に小牧へ戻り、楽田から犬山と秀吉の留守を衝かれたら、その勝負も逆睹しがたいものになろう。

（わしとした事が、やはり、勝入の死に気を取られ過ぎていたらしい……）

それだけに、楽田へ辿りついて、本陣の無事を知った時には続けざまに吐息が出た。
（これはこのままの戦法では、埒はあかぬぞ）
と言って、ここへ戻れば、勝入父子と森長可を失って、又、以前のままの対陣があるばかりであった。
こちらから攻め掛らねば家康は動くまいし、家康が動かなければ、秀吉も動けない。釘づけにあって損する者は家康ではなくて秀吉なのだ。
（それらの算盤をきびしく弾いて、家康めはゆっくりと山の上から、おれを見ている……）
秀吉が楽田の本陣に戻ると、彼を待ちうけていたのは、九死に一生を得て、白山林から遁れて来た甥の三好秀次であった。
秀次が、木下利直に附き添われ、仮屋にあって沙汰を待って居ると伝えられた時、秀吉は、はげしく舌打ちをして三成を叱りつけた。
「後で沙汰する。忙しいわ。いまは……」
すぐ逢っては、時の勢い、必ず自決を命じそうな気がして、自分で自分が怖ろしかったのだ。
（家康め……）
どうしてくれようかと、その思案に道をつけねば、身動き出来ない気がするのだ。
三韓や大明国の大風呂敷は、この場の戦局を救う手段にならず、
（わしが困っている程ゆえ、家康めも困っているに違いないのだが……）
そうは考えても、打開の方法は発見されない。
本陣に入ると、秀吉は幽古に茶を点てさせて、それをすすりながら、暫くひとりで、大きな壁

に対していった。
（家康を……家康めを……）
そして、とつぜん、
「腹が空いたぞ。膳を！」
大声で喚くように命じた時には、もうあたりはすっかり暗くなっていた。

七

膳が運ばれると秀吉は、
「物見の者が立戻らば、直接これへ連れて来い」
不機嫌な声で言って箸をとった。箸をとっても、いつもの軽口は出なかった。ぴーンと開いた耳と二重に底光る眼。高い頬骨と痩せた頬……それ等は、じっと表情を緊めてもだしていると、そのまま殺気に連なるものがある。
出入の小姓たちはひとりでに足音を殺し、近侍もお伽の者も息をころしていた。
もし秀吉の背後で、勝入父子に手向ける一筋の香煙が立ちのぼっていなかったら、或いは彼等は秀吉の胸中を見抜いてしまっていたかも知れない。
彼はいま、勝入父子の死を悼んでいると見せかけて、五十歳になろうとしてぶつかった大きな壁を全力で押し開こうとしているのだ。
大坂から紀州方面のことも気にかかったし、上杉や長曾我部の去就も安心出来なかった。
ここで、万一戦が長びき、秀吉方の敗れが大きく世間に流布されては、彼の功業は一頓座を来

たすことになろう。

（このような大障碍として、家康めが、自分の前に立ちふさがろうとは……）

食事の最中に、斥候の者が二人戻って来た。

そして、それはいずれも、小牧山の敵が、ひっそりとして動く気配のないことを告げていった。

（思うたとおりじゃ……）

食事を終って膳を下げさせると、秀吉ははじめて、小さく息をつめている大村幽古に話しかけた。

「幽古……」

「はい」

「こんどは、わしの方が少々敗けと見られそうじゃの」

「はい」

「このような時に、あの、軍師どのが生きていたら、どうせよと言うであろうなあ」

「軍師どの……と、仰せられまするると、あの竹中さまのことで」

「そうじゃ半兵衛重治がことよ」

「さよう……」

と、幽古は探るように眸を伏せて、

「やはり、黒田官兵衛さまにご相談を……そう申されるのではござりますまいか」

はばかるように答えてから、

「竹中さまが、中国の陣中でお亡くなりなさる前に、お洩しなされたというお言葉をお聞きでござりまするか、上様は……」
「なに半兵衛が申したこと……われ亡き後の相談は黒田にせよと申したことか」
「いいえ、さすがの竹中さまも、故右府さまと上様には歯が立たなんだと、しみじみこぼされたというお話でござりまする」
「なに、半兵衛がそのようなことを申したのか!?」
「はい。わしはついに、右府と殿に使い減らされて死んでゆく。残念ながら、お二人とも、わしよりずっと人間が上であったゆえ、やむないことじゃが、なぜもう少し、バカに生れて来なかったか、バカに生れていたら大大名になれたのに、それが口惜しい……と、こぼされましたそうで」
　そこ迄聞くと、秀吉の体は引かれるように前へ乗り出していた。
「まことか、それは……」

八

「半兵衛が、わしに……この秀吉に使い減らされたと?」
　秀吉は意外な幽古の言葉に息をのんで眼を据えた。信長のことは知らず、秀吉だけは半兵衛を、どこまでも得難い軍師として一目おいて待遇して来たつもりであった。その竹中半兵衛重治が死に臨んでバカに生れたかったと愚痴をこぼしていったという……
「はい、自分がもう少し先の見えぬ人間に生れていたら、右府さまも上様も、五千、八千の手勢を与えて勝手に手柄を立てさせたであろうが、少しばかり先が見え、戦上手に産れついているば

かりに、軍師と言う名でお傍におかれ、一兵も持たせられなかった。言わば危い奴と思われて檻につながれていたも同然、それゆえ、わしよりも愚かな者はどしどし大大名になっていくのに、わしは、いつまで経っても、殿に曳かれている番犬も同様……先は見えた。この辺が死場所であろう、と病床でこう申された由にござりまする」

「フーム」

秀吉は、肚の底から大きく唸った。そう言えば、半兵衛から、際立った意見が具申されて来るたびに、

（――これが敵だったら……）

ふと怖れに似たものを覚えたことは確かにあった。

「そうか、半兵衛は、そのような気持で死んでいったのか」

「はい、人間の位の相異というものは恐ろしいものでござります。このたびのことにしましても、家康どのは、案外、勝って震えているのではござりますまいか」

「そうか、半兵衛が、そのようなことを……」

秀吉はもう幽古の言葉を聞いてはいなかった。

半兵衛をそのまま家康におき替えて、おのれの壁に対していた。

（半兵衛ほどの者が、そのような考えすぎを……）

「幽古！」

「は……はい」

「よく聞かせてくれた！　そうか半兵衛は、わしに手綱を取られた番犬だと申したか」

「持って生れた位の相違でござりまする」
「そうか。分った！　家康とて同じことじゃ。敵にせずに味方に引きつけたらのう……」
「は……？」
「いや、もうよい。決った！　ハハハ……人間は時々自分の作った瓢の中に閉じこめられる。これを破って出てみれば、あたりは無限の青空じゃ。分った！　ハッハッハッハ佐吉！　佐吉！」
秀吉は次の間にあった三成を声高に呼び寄せて、
「小牧山の、それ、石川伯耆がもとまでな、密使を出すぞ用意をしておけ」
そう命じてから、明るい笑顔で幽古をふり返った。
「幽古、筆、紙！」
「はっ、かしこまりました」
「家康は、よいか、せいぜい狙っても日本の天下じゃ、わしは大明から天竺まで……同じ狙うにしても天下に器の大小があるわさ。さ、用意はよいかの」
そう言うと、秀吉は燭台を引寄せるようにして、じっと虚空へ眼を据えた。

和平の供物

一

松本四郎次郎清延は、また以前の茶屋四郎次郎にもどって、二人の手代を伴って浜松から京へ

戻る途中であった。
　すでに季節は十一月の下旬で、岡崎へつづく街道の葉をおとした欅並木に、木枯が音をたてて吹きあれていた。
　四郎次郎は、時々立ちどまって草鞋の紐をしめ直しながら、何故ともなしに目頭が熱くなってならなかった。
　春からこの月の始めまで一年近くつづいた戦は終って、いま、家康と秀吉の間には講和が成ろうとしている。
　いや、成るものと見きわめて、再びもとの町人に戻ることを許された茶屋であった。
「以前にはな……」
　茶屋は、足をとめて待つ手代に、
「町人になり切ろうとしながら、時々、武士の暮しを忘れかねたもの……だが、こんどという今度は、ふっつりと縁を切れそうじゃ」
　手代は主人が何を言い出そうとしているのか分らぬらしく、笠のうちであいまいに顔を見合せてうなずき合った。
「武士というのは、どこまで罪の深いものかのう……」
「戦を、するからでございまするか」
「そうじゃ、戦もする……」
　四郎次郎は、これもべつに二人に分らせようとしているのではないらしく、腰をのばして、暗澹とした空を見上げながら吐息をした。

「義理という、目に見えぬ縄でがんじがらめにされてな、身動きもよう出来ぬ……それにまわりの人々も単純すぎる」
「さようでございますかな」
「そうじゃ。わしが、何でこのようなことを言うか、お前たちには分るまい」
「はい」
「ハハ……、分る筈はなかったの。わしは、分るようには話してなかった」
「さようでございます」
「実はな、わしはいま、岡崎で、さるお人に会ってゆこうか、止そうかと、それに迷っているところじゃ」
「岡崎の……どなたさまでござりまする」
「うん、話しても詮ないことじゃが……」
自分で自分に言いきかせるように、
「ご城代の石川数正さまにな」
手代は、またちらりと眼を見合ったまま黙って歩いた。
彼等にはご城代と言えば、偉い大将と分る程度で、それ以上の感慨はなにも無かった。
茶屋はそれに気がついたと見えて、又、淋しげに笑っていった。
「石川さまと言えばの、こんどの戦で、どれほどご家来衆の生命をお助けなされたか分らぬ、大恩人じゃ」
「ご家来衆の生命を……」

「そうじゃ。小牧にあって、味方に無駄な戦を一切させなかったのはこのお方じゃ。ところが、いまはそのお方が、ご家来衆に自分の生命を狙われてござらっしゃる」
「大恩人が……で、ござりますか」
「そうじゃ！」
　と、茶屋は首をすくめて、
「う、寒い。みぞれ模様になって来たの」
「はい」
「よし、やっぱり寄って参ろう。商人に戻っては又逢うこともあるまいからの」

二

　茶屋四郎次郎は落ちだした雨をたしかめると、笠を傾けて足を早めた。
　いま、石川数正を訪ねてみても、言うことは何もなかった。すでに和平の条件は決っていて、茶屋の意見をさしはさむ余地などは全くない。
　それでいて岡崎を素通り出来ないのはなぜであろうか？　数正の苦しい立場を、ほんとうに知っているのは、家康と自分だけ……いや、或いはもう一人、本多作左衛門が知っているのかどうか……そう思うだけで黙って数正の前に立ってやりたい一心からだった。
（もし数正が、自分の前で愚痴のひとつも洩らして呉れたら……）
　といって、ただ手を執って泣くこと位しか出来ないのだが、それでいて、やっぱり訪ねずにいられなかった。

もともとこんどの戦は、はじめから複雑をきわめた奇怪な戦であった。

勝ってならず、負くれば身の破滅。

それを胸につつんで長久手の一戦に大勝すると、家康方の家中の主張ははっきりと二つに割れた。

というよりも家康と数正を除いて、主戦論一つに凝り固まってしまったと言ってよい。

(秀吉怖るるに足らず!)

もともと剽悍で単純な三河武士だった。秀吉のひるむ隙に追い討ちを掛けて、一挙に息の根を止めるか止められるかというように、決戦を望んでゆくのは当然であった。

家康が今は、秀吉を討つべき時ではないと説けば説くほど彼等はいきまいた。他意があるわけではない。家康が、自分たちを労わるあまり、大事な時に逡巡する……それでは済まぬと律義に考えてのことでさえあった。

したがって家康以外に彼等のこうした強硬な主戦論の前に立つのは数正ひとりであった。本多正信などが口を出しても相手にせず、

「――主君を気臆れさせているのは数正じゃ」

「――そうじゃ、数正には秀吉の手が及んでいる」

「――それに相違ない。秀吉のもとへ使いして、ばかされて戻って来たのじゃ」

そうした人々を押えて、とにかく家康は、徹頭徹尾秀吉との決戦を避けさせた。

秀吉もまた、長久手から楽田に引揚げると、本陣を小松寺山にすすめて、いかにもすぐに攻めかかりそうな気配を見せたまま対峙戦に入った。

あとで伝え聞くところによれば、小松寺山の本陣で秀吉は碁ばかり打っていたという。

「——敵の様子が変りましたが」

前線からの注進が届くと、振返りもせずに、

「——向うが出て来れば戦うぞ。出て来ればな……」

そう答えて、家康の方から攻めかかって来ないことをよく知っていたという。

むろんその間、家康の旨をふくんで石川数正が、秀吉方と連絡していたからの事であったが……

（そのために敵味方とも、どれだけ多くの生命を捨てずに済んだことか……）

茶屋四郎次郎は岡崎の城下へ入るとまた思い出したように吐息をして、その頃の蒼ざめて緊張しきった数正の顔を瞼に描いた。

全く、一歩を誤れば、どんな破綻(はたん)に逢着するか分らない、危い数正の駈け引きだった……

三

相手は名に負う智将の秀吉なのである。その秀吉を向うにまわして、互角の謀略を考えてゆかなければならない数正の立場。

万一秀吉の肚を読み誤って、隙を見せるようなことがあったら、秀吉勢は怒濤(どとう)のように小牧山を洗い去ったに違いない。

したがって、味方も攻めぬが、敵にも断じて攻めさせてはならない。家康の肚と称して秀吉に密告してゆくことは、事実は家康の肚であって、同時にまた秀吉方の利益にもなるよう、緻密(ちみつ)な計算のもとに割出された唯一(ゆいいつ)の答えでなければならなかった。

その間に、一分の狂いでもあったら、敏感な秀吉は、数正が家康の意を受けて動いていることを、すぐに看破してしまったであろうし、それを看破されてはどのような手で裏を掻かれるか分らなかった。
こうして双方ともに、戦うことの不利を植えつけながら、的確に秀吉勢の動きを摑んで味方の布陣をこれに対応させていったのだから、その戦功は比較するものもないほど大きかった。
秀吉は、四月いっぱい小松寺山に居て、数正の密告が充分に信頼出来るものであることを確かめると、はじめて木曾川に舟橋を架けさせてこれを渡り、各務ケ原を経て美濃の大浦に入った。
戦線の膠着を打開するため、東軍の美濃における諸城を攻めはじめると見せかけて動きだし、加賀野井城、竹ケ鼻城と攻めて、一度大坂へ引揚げたのが六月の二十八日だった。
この時、伊勢方面でも秀吉は活潑に兵を動かした。松ケ島、峯の諸城から、神戸、国府、千草、浜田、楠と陥していったが、これはもはや家康を降すためとは全く別の目的になっていた。
家康と和平を結ぶためには、先ず信雄と講和しなければならない――そう考えての用兵で、そう考えさせるように仕向けていったのも又数正であった。
家康は義に依って信雄を助けるために出兵して来たのである。したがって、本人の信雄が秀吉と和してしまえば、すべては終ったものとして、徳川勢は引揚げ得る道理であった。
その後も、小ぜりあいはしばしばあったが、すでに双方の肚は決っていたので、秀吉も家康も、それぞれ自分の面目を傷つけることなく、信雄と秀吉が講和出来るよう、充分な含みを持たせての動きだったと言ってよい。
そうして八月二十八日に、再び大坂から出て来た秀吉との間に小牧の周辺で偵察戦があった

が、それを最後にして休戦状態に入り、家康は九月二十七日に清洲へ入り、十月十七日には三河へ引揚げて、それから講和の交渉に入ったのだった。
そしていま、秀吉との交渉一切を任せられて取仕切って来た石川数正の上にのしかかっている問題は、秀吉から家康に求めて来た人質の問題であった。
家康の子供一人に、石川数正と本多作左衛門の両家老の子供を添えて大坂に送るようにと提議して来たので、そのことで家中が憤怒にわき立っているところであった。
「——数正はいったいどちらの味方なのじゃ」
「——勝った方が人質を出す……聞いたこともない話じゃ。ならぬ！　と、なぜ一喝して戻って来なかったのか」
そうした数正の住む岡崎城の二の丸に、茶屋四郎次郎がたどり着いた時は、氷雨は本降りになっていた。

四

取次に出た若侍は、いかにもいそいそとして引込んだが、予期に反して、なかなか戻って来なかった。
茶屋はちょっと首を傾げた。
自分がわざわざ立寄ったとなったら、或いは自身で出迎えて呉れるのでは……それほど今は淋しい孤立に追い込まれている筈の数正と、予期して来たのに意外であった。
やがて若侍は戻って来て、

「ほんの暫くならば、お目にかかると、かように申されて居りまするが」
長居は無用に願いたいと、露骨に伏線を張った感じの挨拶だった。
茶屋は首を傾げたまま、
「それはもう……ご用繁多とは存じながら、京へ参りますると、何時又、お目にかかれるやら分りませぬ。それでちょっとお顔を拝して参りたいと存じまして」
二人の手代を供待ちに残し洗足をとって玄関へ向った。
「伯耆守さまは、ご機嫌にわたらせられましょうな」
書院にわたる廊下でもう一度案内の若侍にたずねると、
「は……はい」
若侍はちょっと口籠ってから、
「何分、ご心労が……」
と、また語尾を濁していった。
或いは数正に叱られて来たのかも知れない。
書院に通ると数正はすでに燭台を運ばせて待っていた。
(瘠せた！)
と茶屋は思った。きわ立った頬骨が不機嫌な翳をきざみ、正坐した肩まで尖って眼に映った。
「これは、ご多用中、ご無礼申上げまして」
言いながら両手を突くと、
「何用じゃ。おことにはもはや、お暇が出たそうな。さすれば家中の者ではなく、朋輩でもない

わ。わざわざ立寄られるは律義すぎる」
　数正は、近づき難いとがり声でそう言って、
「みな、退っていてよいゾ」
　と、二人の若侍を叱りつけた。
　若侍よりも、茶屋の方がびっくりした。心外でもあった。つい先頃まで、共に家康の側で枢機にあずかった仲であり、自分が何のために浪人し、何のために商人になりきろうとしているかも、よく知っている筈の数正ではなかったか……
　若侍がさがっていっても、しばらく数正は茶屋を見なかった。
「石川さま、心労のほど、お察し申上げまする」
「無用に願い度い！」
「は……？」
「石川数正、商人になったこなたに、同情されて喜ぶほど弱くはない」
　茶屋は思わず息をのんで数正を見つめた。
　数正がこのような事を言うのは、茶屋の想像以上に周囲の風が冷く当っている証拠なのだと受取った。
「念のために申しておこう。いま、この数正のもとを訪れる者の上には、誰彼の別なく家中の者の眼が光って居る」
「えッ、あの訪れる者の上に……」
「律義すぎて怪しまれ、生命を落しては詰るまい。殊にこなたは京に赴く身……京は秀吉が勢力

下とは思わぬのか」
　言われて茶屋は、はじめてハッと腑におちた。
（数正は、この茶屋の身を案じているのだ……）

五

　茶屋四郎次郎はぐっと胸がせつなくなった。
　家中第一の忠臣が、訪れる者の生命を案じなければならぬほど、大きな誤解を受けている……
「石川さま、この茶屋めは、武士と縁切るこんどの門出、思いきってお訊ね申上げたい儀がありましてお邪魔致しました」
　数正は、いぜん脇を向いたまま、
「言ってみさっしゃい。答えられることならば、旧いよしみで話さぬものでもない」
「ありがたき仕合せ……」
　茶屋はどこまでもいんぎんに一礼して、
「秀吉方からの人質の申出、お館さまは、ご承知なされたのでござりましょうか」
「その儀か……」
　数正は大きな吐息といっしょに、はじめて茶屋を正視した。
　最初の不機嫌な表情とは凡そうらはらの、悲しく澄んだ凝視であった。
「その事で、近々またこの数正、秀吉どののもとをたずねることになっている」
「ご承引の旨、お伝えに」

「いいや、お断りにじゃ」
「えっ！　でも、お館さまのお心は……」
「茶屋、家中のことはの、殿のご一存だけでは決めかねる事もあるものだ」
「しかしそれは……」
「大反対の張本は、名指しでお仙を人質にと言われた本多作左……作左眼の黒いうちは、伜どもを秀吉のもとへなど人質に出すものか、強いてと言わば、お仙（仙千代）を連れて、牢人すると、皆の前ではっきりと言いきったわ」
茶屋はそっと頷いた。
作左衛門の言ったことなら、さして気にする事はない。作左衛門と数正とは、はじめから家康と打合せてあった筈……そう思ったからであった。
「茶屋」
「はい」
「こなたは、堺衆に知己があったの」
「はい、納屋蕉庵、津田宗及、万代屋宗安、住吉屋宗無などとは」
「宗易（利休）はどうじゃ。面識はなかったか」
「ござりまする。いまでは秀吉どのが特別お目をかけさせられてござりまするようで」
数正は、うなずいていてそのまま話をそらしていった。
「こんどの人質一件は秀吉どのに、無理があった」
「なるほど……」

「信雄さまと秀吉どのの和議に、お館さまが一言も邪魔を入れなんだは、義によって終始しようとの、あっぱれなお心がけ……勝った戦に一紙半銭の報いも望まず、黙って兵を退くほどの、武将がかつて有ったであろうか」

「それは、ござりますまいとも！」

「そのお館さまに、人質出せとはとんだ筋違い。信雄どのにならば、どのような条件を出そうとそれは当方の知らぬこと……事のついでに徳川家へも、とあっては、兵を退かせて欺ましたものじゃ……と、言われてみると、この数正も出直して来ねばならぬ道理じゃ」

茶屋四郎次郎は、吸いつくような眼になって、じっと数正を見つめ続けた。

数正はこれも、茶屋を見つめたまま、いつか眼のふちを赤くしている。

恐らくこの辺の、数正の苦衷を裏から秀吉の耳に入れる手段はないものかと、謎をかけているのに違いなかった。

六

茶屋が知っている限りでは、家康も作左衛門も数正も、人質のことはやむないこととして承知するよう肚を決めている筈だった。

が、どうやら家中の硬論は、これを許さぬ模様になったらしい。

そう言えば、確かに、この硬論には理があった。家康はどこまでも、こんどの戦を信雄の戦として終始した。乞われるままに助けはしたが、和平は信雄の意志に任せて、あっさり兵を納めたことになっている。

それが、人質を取られたのでは、信雄ともども秀吉に敗れたことになりそうだった。

若し家康が、義に依って信雄を助け、和平はわれ等の与り知らぬこととして、さっさと兵を撤したものならば、家康と秀吉の間は無勝敗。

改めて両者の提携を計るとあれば、秀吉方からも人質に匹敵する何ものかを家康に差出すのが当然だった。

と言ってこれは表面の理窟であって、数正にわからぬほどの事ではあるまい。

数正が、そのような事などよくよく承知の上で、敢て人質のことを取次がねばならなかったのは、秀吉に、

「――こなた、家康の力とわしの力を同じだと思うているのか」

あっさりと言われて押切られたからに違いなかった。むろんそのことは、家康自身もよく知っている。したがって、家中に硬論が出なければ、そのままとまる可能性は充分にあったのだが……

「石川さま、するとお館さまも、その理に服して、人質はならぬと……」

「理には、お館ならずとも服さねば相成らぬ。それゆえ、わしは、断わりに出向くのじゃが……」

茶屋四郎次郎は、ごくりと固く唾をのんで身を乗り出した。

「それで……それで、私めに、何か役立つことはござりますまいか。人質を断わられて、万一、双方また干戈を取りましては……秀吉どのにも大きな損かと……」

「そのことじゃ！」

「はいッ」

「こなたは商人、損と得とはよく分ろう。秀吉どのにそのあたりの算盤を、伝える手づるが欲しいものじゃ」
「それはもう……して、石川さまの最後の肚は……と、伺うは、あまりに出過ぎて居りましょうか」
数正は眼をそらして燭台の丁子(ちょうじ)を除(と)った。パッとあたりが明るくなって、火桶(ひおけ)の灰の白さが目立って来た。
「最後はのう茶屋、何も彼もみな捨てる気じゃ。わしも作左も……」
「恐れ入りました。お察し申上げまする」
「秀吉どのが何というか。わしに一つの案はあるが……」
「どのようなご案でござりましょう」
「秀吉どのには実子がない」
「その通りで……」
「それゆえ、於義丸(おぎまる)さまを養子に貰うて頂くのじゃ。人質では断じてない！　そのご養子に、わしの子供と作左が子とをつけてやる……これが通れば、織田、徳川の間同様、両家の間は親類じゃ」
そう言ってから数正は、
「これが通らずば、家中を押える力はわしにはない。切腹じゃ。大坂城の襖絵(ふすまえ)に、数正が腸(はらわた)で、三河者の絵を描くまでじゃ」
と、きびしく笑った。

七

茶屋四郎次郎は、凍りついたような表情で石川数正を見返していた。

これでハッキリと数正の肚は分った。

数正は――人質のことは承服出来ない。が、若し養子として迎えるとならば、秀吉の言い分をそのまま通し、お万の方の産んだ二男の於義丸に、側小姓として数正の子の康長と、本多作左衛門の子の仙千代とをつけて寄こそう。

「――それでお納得が参らずば、それがしには、主君家康を説き伏せることは出来ませぬ」

名を取るか実を取るかと、開き直って秀吉に最後の切札を突きつける気なのに違いなかった。が……

(果してそれをそのまま秀吉が呑んで呉れるかどうか……？)

と、なると、数正も自信はないらしい。

茶屋が考えても同じであった。というのは秀吉が、こんどの戦では、ひどく名分を気にしているからであった。

世評が家康の強さをたたえ、

「――こんどの戦だけは筑前どのの負けであったぞ」

大坂城内にまで、そんなひそひそ話がひろがっている。そうなると、仲々もって、あっさりと養子のことなど承知しそうに思われない秀吉だった。

「もう一つだけお伺い致しまする」

「聞くがよい。話しついでじゃ」
「石川さまは、この申出を、秀吉どのがあっさり聞き入れる代りに、別に条件をお出しなされた場合には何となさりまする」
「なに、承知する代りに別の条件を⁉」
「はい。私にはそのように思われまする。ここではたとい親類という名目でも、和議を結んだ方が秀吉どのにも利がござりまする。それゆえ、強く押せば或いはご承諾なさるかと……」
「そして、その代りに、何を求めて来ると思うのじゃ」
「はい、この茶屋の考えでは……」
四郎次郎は、慎重に首をかしげて、数正の表情を見つめながら、
「家康自身、於義丸さまを連れて大坂城へ参るよう……そう仰せられるような気がしてなりませぬが」
「なに、わが君直々に……⁉」
数正の額はサッと困惑に曇っていった。
言われてみると、確かに数正にもそう思われて来るのである。
（問題は秀吉の顔を立てることにある……）
剛愎そうに、家康の子の於義丸を養子にしたと見せかけて、家康を大坂城内へ呼び寄せ、大ぜいの大名たちの前で家来扱いにしてみせる。その事で、自分の地位と実力をハッキリとさせさえすれば、秀吉の顔も立ち虫も納まるのかも知れない。
「なるほど、これはありそうな事……」

「私は、たぶんそうなりはせぬかと存じまするが、その時にはお受けなさりましょうか石川さまは」

石川数正はそっと首をふって嘆息した。

「お館がご承知なされても、なんで家中の者が大坂などへやるものか。それは欺して斬る気じゃと、いよいよ疑惑を深め騒ぐばかりじゃ」

こんどは茶屋四郎次郎が、何度も小さくうなずき返した。彼にもまた、これは無理……とはじめから分っているのだった。

八

「それを伺うておいて、茶屋は茶屋らしゅう、手を打ってみるつもりでござりますが」

茶屋は、数正の顔を見ているに忍びなくなって、そっと座を立つ気配を示した。

「そうか、そう言われるに違いない！　そのような気がして参った」

数正は、もう一度虚空を見つめて呟いて、

「このまま戻られるか」

「はい。ご事情を承われば、無理にお宿も願えませぬ。ちょっとご挨拶だけ申上げて、城下へ旅籠を求めることに致しまする」

「茶屋どの」

「はい」

「城を出てゆく時にご用心なさるがよい。こなたが考えているよりも、ずっとみなの憤りははげ

しいものじゃ」

「お心も知らず、三河者の欠点でござりまするなあ」

「いや、この単純さ、硬骨さは又得難い美点での。彼等がこの数正を腰抜けと罵り、歯痒いと立ち騒ぐ間は、ご主君もご安泰であろうゆえ」

「つくづく感じ入りました。まこと御家のご柱石にござりまする。では、呉々もお体をおいといなされて、ご大任を果させられまするよう」

「かたじけない。ではこなたも……」

そこで数正は手を叩いて、さっきの若侍を呼んだ。

「客人が戻られる。玄関までお送り申せ」

「かしこまりました」

茶屋はもう数正には声をかけず、恭しく一礼してそのまま廊下へ出ていきながら、

（ふしぎな奉公もあるものだ……）

と、しみじみ思った。

秀吉という、ひろい幅の人間は、家人の人を計る尺度をはるかに超えている。

それだけに、秀吉の言行のすべてが、素朴な三河武士には、信じがたい詐術や謀略に見えるらしかった。

或いは大将として軽薄で気障で移り気で鼻持ならぬのかも知れない。それにしても、その秀吉のもとへ使者に立ち、人質のことを伝えられて戻ったからと言って、数正のもとへ出入りする者にまで眼を光らしているのだとは恐れ入った偏狭さと言うよりない。

（事によると石川どのも、少し神経質になりすぎているのではあるまいか……）
そんな事を考えながら城門を伝馬口の方へ出て、従えている二人の手代に話しかけようとして振返った時であった。
「待て！」
濠添いの松並木の下から面を包んだ二人の武士が出て来て、茶屋の前へ立ちふさがった。
もうすっかり夜になって、あたりは男女の別を見分けるのがようよう位の暗さであった。
「はい、何のご用でございましょう」
茶屋は内心呆れながら足をとめた。
（なるほど見張っていたぞ。これはこれは）
「その方の名は何と言うぞ」
「茶屋と申しまするが何か……？」
「茶屋と申すと松本清延どのじゃな」
「さようでござりまする。この間まではそう申して武士でござりました……しかし今では、お暇を頂き、呉服商人の茶屋でござりまする」
言いながら四郎次郎は、相手が刀の鯉口（こいぐち）を切っているのにいよいよ呆れた。

九

「よい。茶屋であっても松本氏であっても、それはわれ等の問うところではない」
黒い影は用心ぶかく一定の距離をたもって、

「おぬし城内に誰をたずねた」
茶屋は大人げないと思いながらもムッとして、
「それを言わねばどうなされまする」
「斬る！」
まことにあっさりと、竹を割ったような答であった。
「ほう……これは耳よりな」
茶屋にもまた三河武士の血は流れている。語尾に笑いを交えたのは、せめてもの自制であった。
「お城へご挨拶にあがって斬られたとあれば話の種、何かこの茶屋に不都合がござりましたか」
「ある」
「と、だけでは得心がゆかぬ。どのようなご不審であろうか」
「おぬしはこれから京へ戻ろう」
「仰せの通り、徳川家の呉服御用、京の茶屋でござりまするゆえ」
「おぬしは筑前が出入りの者と特別懇意と聞いている。中には、おぬしを、小牧の陣中へまぎれ込んで来た筑前が間諜と言う者もあるが、それまでは信ぜぬ」
「なるほど」
茶屋は感心したように嘆息をついた。
「そのような噂がござりましたか。なるほどそれはお信じなさらぬ方がよい。まことこの茶屋が間諜ならば、お館さまがとうに斬っておしまいなされた筈。して私が、行先を申上げましたら

……」
「申せ。しかと」
「ハハハ、ご存知でござりましょう。ご城代、石川さまのもとへ、お別れの挨拶に参ったことは」
茶屋がすらすらと答えてゆくと、二つの影は、ちょっと顔を見合せた。
はじめの短気そうな態度が、次第に落着きを取戻して来ている。
「申せ。ご城代が、おぬしに話したことを」
「これはしたり。話したことは世間話で……」
「それを申せ」
「申さねば、やはり斬りまするか、この茶屋を」
「そうだ。斬る！」
「やれやれ、では話さずばなりますまい。ここで斬られては身代限りじゃ」
再び噴き上げて来る怒りをおさえて茶屋は笑った。
「筑前が人質を出せと申して来たと、ひどく怒って居られました」
「怒っていたと？」
「されば、このようなことを重ねて申さば、大坂城の襖絵に、腹かき切ってたたきつけて来ると、それはもう大そうなお腹立ちで……」
「嘘はないな」
「嘘……嘘とは心外な。茶屋も以前は三河武士。白刃が怖うて嘘をつくような腰ぬけではござり

ませぬ。それゆえはっきりと申しました。そう腹をお立てなされては損でござりましょうと……」
「なに損だと!?」
相手はまた顔を見合せてうなずきあった。
二人の手代はどうなることかと、木影にひそんで、ハラハラと、震えながら対話に耳をかしげている。

十

「何が損じゃ。心得ぬことを言うぞおぬしは。申してみよ。損のわけを……」
相手はいつか刀の柄から手を放して、おかしいほど素朴に、茶屋の意見を聞く態度になっていた。
（なるほど、ここらに石川どのの言われた、何とも言えぬよさがあるわい……）
茶屋の心も見るまにほぐれた。
「損のわけなら申しましょうとも。先方の人質乞うたは何のためか、よく考えて見なさるがよい。これは筑前が、おれの顔を立てて呉れぬかという哀れな頼み。人質もとらずに和議を結んだ……とあっては世間に笑われようかと、子供のような見栄ではないか。それゆえ、こっちから、怒らずに、それは出来ぬのう……あっさりと断ってやればよい……と申して来ました。そうであろうが。石川どのは一度は使者ゆえ、お館さまへ取次がねばならぬ。が、取次いでみて断る分に何の差支えがあるものか」
「フーム」

と、相手はうなって、
「それで、ご城代は何と言われた」
「なるほどそうじゃ。これは怒ったわしが大人気なかったと言われました」
「大人気ないと……」
「さよう、何も大坂城の襖絵に、腸を投げつけるほどの事ではなかった。それはならぬと、あっさり断ったら、向うで折れて別のことを言い出そう。その時には又、それを取次げばよいのであった。顔が立たねば困るのは当方ではなくて筑前の方であったわ……と、お笑いなされてなあ」
「なるほど」
「それで、わしも京へ戻ったら、少しはご城代のお手伝いも致しましょうと言うて来ましたわい」
「何を手伝うと言われるのじゃ」
「三河武士の覚悟のほどが、少しは筑前の耳にも入るよう、大坂城の出入りの商人たちに、通らぬ無理は言わぬものじゃと、噂をまいてやる気でいます。これはかくべつ、石川どのに頼まれはせなんだが、交渉ごとには、こうした世間の噂話が、けっこう人を動かすものじゃからの」
そこまで言って、茶屋は思わず噴き出しそうになった。すぐさっきは、今にも一刀両断と、襲いかかって来そうな二人が、テレ隠しに胸をそらして歩きだしたのだ。
「これ、お待ちなされ、まだ話が終って居らぬ」
「もうよい」
「そっちでよくても、こっちに用がござりまする」

「なに、用があると」
「さよう、これから街道筋へ出て旅籠をとらねばならぬわれ等、この後もお前さま方のような人に出て来られては物騒でならぬ」
「送れと申すのか」
「送るばかりでは念が足りませぬ。安堵して眠れるよう、今宵は、木賃のまわりに見張りをおいて下さるが、まことの親切でござりましょう」
「もっともだ」と、相手は大きくうなずいて、
「そうしよう」
と連れに言った。連れもガクンと頷いて、
「来るがよい」
茶屋は怖えている手代をうながしながら、何となく泣けて来そうな気持になった。

十一

全然子供のように単純な生一本さを持っている三河武士。この単純さがある限り、長男の信康を失って、いまは家康の第一子になっている於義丸を、人質に出すなどと言われたのでは聞き入れる筈はあるまい。
しかし茶屋が、数正ははっきりそれを断わる気になっていると聞かせると、それだけでもう、あっさりと殺気を捨てて、道案内に変っているのだ。
竹を割ったようとは、このことを言うのであろう。それだけに、あとのことも思いやられた。

秀吉が果して何と言うか？

数正が次に伝えて来るものが、また彼等を憤怒の底に叩き込まぬとは言い得ない……

「いや、これは忝けないのう」

さっさと街道筋に向って歩いてゆく二人のあとから、茶屋はまた話しかけた。

「ここでは三河衆もしっかりと肚を決めておかねば、のうみなさま」

「いかにも」

「どの程度までは秀吉の申分をいれてやり、どこから先は断じてならぬか、そのけじめをのう」

「それならばもう決ったことじゃ」

と、一人がぶっきらぼうに応えた。

「勝ち戦に何の条件も出さず、あとの事はすべて信雄さまに任せて兵を退いた。これがぎりぎりの譲歩じゃ。あとは無い！」

「なるほど、しかし秀吉の方では負けたと思うていまいでの。そこが難しいところなのじゃ。もう少し戦うていたらきっと勝つ……そう思うているに違いないのだから、この辺のことも少しは考えておかねばなりますまいて」

「その必要はない」

「というと、再び合戦になったら……」

「その時には思い知らせてやるばかり」

茶屋はそれなり話をやめた。全然負けると思っていない。そこに大切な強さのもとがあるのだから、家康や数正の説き伏せがたい苦心のほどが思いやられた。

無理に味方の弱味を説いて、この大自信を揺がせたら、それこそ角をためて牛を殺すもの、再びこの壮烈な士気は取戻せまい。
（そうか。これで、同じ肚をもっていながら、本多作左は強気一本で押して見せるのか）
その夜茶屋主従は、二人の武士が案内して呉れた越前屋という木賃に泊った。
その旅籠の亭主は、よく二人を知っているらしい。しかし茶屋は敢てその名は訊ねず、彼等はその夜一椀ずつの濁酒に舌つづみを打ってやすんだのだが、夜中に厠へ起出してみてハッとなった。
何という義理堅さであろうか。彼等は夜中も、この旅籠をひっそりと取り巻いて、茶屋の一行を警護していて呉れたのだ。
あの角、この庇の下と、数えてみると四つ五つに人影は殖えている。
茶屋四郎次郎は、その人影を見たおかげで、却ってその夜は寝そびれた。
愚直とは思いたくなかった。やはり鉄壁の律義さを持っている。このように正直な剛直な気風がほかにあるであろうか……？
それだけに恐ろしいものと感ずるのは矛盾であって矛盾でなかった。
（なるほど、このために、供物になろうと、数正どのは考えておられるのか……）
翌朝、茶屋は暗いうちに岡崎を発って京をめざした。彼もまた和平の供物にならねばならぬと、深く決するところがあるからだった。

茶道三略

一

ここは大坂城内に建てられた、秀吉自慢の山里の茶亭であった。
そこに今日は朝会が催されている。
庭いちめんに霜がおり、それが東の空の紅をうつして、ひどく壮厳なたたずまい。集る人々の吐く息のまっ白に見える晴天であった。
この山里の茶亭の座敷は三畳敷、柑子戸まで、千宗易が出て来て作法どおりに人々を案内する。秀吉は戦陣でみる彼とは全く人の違った神妙さで、津田宗及、納屋蕉庵、万代屋宗安、住吉屋宗無といった堺衆たちとともに座敷に坐った。
と、言って、ここで彼が無心に一服の茶に没頭しようとしている……などと考えたら、それは恐らくとんだ誤り。彼はいま、この茶室でこれから次々に天下の大名どもを戸惑わせてやろうとする、その芝居の演出を練習しているつもりであった。
まず、九層の広大比なき城廓を見せて、その威力をいやというほど示してやり、そのあとで、この清閑風にも耐えない茶亭に案内してやるのだ。
そして、秀吉みずから鹿爪らしい顔つきで薄茶をたててやったら、大抵の武将は煙にまかれるに違いない。別に設けてある黄金の数寄屋で、金の茶釜を誇示する気持と、神妙にここへ坐るの

とは五十歩百歩、同じ秀吉の人を喰った性格の表裏にすぎなかった。
茶道の面々もむろんその辺のことをよく知っている。いや、知っている以上であった。
彼等は彼等で、秀吉を堺衆の大番頭か武力係位に心得ているのかも知れない。
それにしても道具は凝った逸品ぞろいであった。
そろりの花入、紹鷗の釜、白天目、数の台、にたりの茶入、ごうしの水こぼし……
が、ありていに言えば、それがとんだ偽せものであっても、まだ今の秀吉にはチンプンカンプンらしかった。
だからと言って秀吉が趣味に乏しいとか、人間が低俗なのだとかいうことにはならない。彼の人生には、まだこうした事を楽しむほどの時間の余裕は全く無かったのだ。
したがって彼の方では、堺衆や茶道の者を又とない間諜であり、金儲けの蔓でもあると思っている。
その両者が神妙な表情で集って、まず会席があり、それから宗易の点前で薄茶になった。
その間、秀吉は、少し意地のわるい百姓が、勝手の違う場所へ招かれて来たというかっこうで、宗易の手のうごかし方を見つめたり、宗及の咽喉ぼとけを見やったりしている。
何かそこに、爽やかな、厳粛な雰囲気があって、それが何となく甘く、侘びしく、切なかった。
最後の茶を宗無がのみきるのを待って、
「大体この道は分ったが……」
と、秀吉は言った。
「ここで天下のことを話してはならぬなどという掟は、わしだけにはご免に願わねば相成らぬ。

ここはわしとこなた達が密議するにはもって来いの所じゃからのう」
「ハハハハハ」
と、まっ先に蕉庵が笑った。
「まさか宗易どのも、それはならぬとも仰せられますまい。実は、私どもの方からも申上げたいことがいろいろとござりますので」

二

蕉庵は無遠慮に話しだしたが、宗易は決して笑ったりうなずいたりはしなかった。
表面は、かかる外道(げどう)は相手にせず……と言った静かさで、しずかに茶碗を拭(ぬぐ)っている。その癖、「宗易」と、呼びかけると、素直に、
「──はい」と、答えてゆく。
「まず聞きたいのは、家康がことじゃが、あれから何もこなたの耳には入って来ぬかの」
「はい、阿部なにがしとか申す者が、鉄砲を買いに来たと申したの宗無どの」
「さようでござります。二百梃(ちょう)あまり甲州金で求めていきましたそうで」
「ふーん、こっちへ戦の用意ありと見せる手じゃ。すると堺衆の中へも、家康の息のかかった者は居るのだな」
「それは居りましょうとも」
「ところで、わしの人質を出せと言うてやったことへの反応は何か聞かぬか」
「筑前さま」再び蕉庵は笑顔になって、

「茶室の行儀は、筑前さまご自身で破られましたから、われ等ももはや抜きに致しまして、そのような小さな事より、もっと大切なことがござりまする」
「もっと大切なこと⁉」
「そうで。もはや日本の平定は目安がつきました。もう少し視野をひろげて、大局へお目を向けられたいので」
「大局……と、申すことは天下のことか」
「さようでござります」
と、蕉庵は膝の上で手をもんだ。
「天下は日本六十余州などと言う小さなものではござりません。三韓から唐天竺、南方の島々からヨーロッパまでもござりまする」
「ふーん。それが……天下じゃのう」
「さようでござりまするとも、みなこれは一つのお日さまの下にある国、天下というを六十余州などと考える時代は去ってござりまする。それが証拠に、堺の港へは、あのように南蛮の船が入って来ているではござりませぬか」
「その事よ！」と秀吉は言った。
「わしもな。中国征伐のおり、信長公がわしに四国中国をやろうと言うたゆえ、言い返してやった事がある」
「ほう、これは始めて伺いました」
「四国中国などはいりませぬ。いずれそのうち、大明国四百余州を頂戴致しまするとな」

そう言うと秀吉はもう、そこが狭い茶室であることなどすっかり忘れて、屋根の吹きとびそうな声で笑った。
「これは、はや、恐れ入ったお行儀で」
宗易が苦笑すると、
「許せ許せ」
秀吉は素直に頭をかいて首をすくめ、
「その天下に何事か起っているかの」
「起って居りますとも。大明国の役人どもが、和寇など唱えて、日本との交易を拒んで居るうちに、南蛮船の方では、エスパニヤ、ポルトガルの他に、イゲレス、オランダなどと申す新しく出来た国々が、天竺から大明をめざして続々とやって来ている。捨ておくと四百余州も三韓も、みな彼等に分け取りされてしまいまする。徳川どのなどお相手に、猫の額のような所で争っている時ではござりませぬぞ」
蕉庵がそう言うと秀吉は苦い顔になって、もう一度そっと小鬢をかいた。

三

「蕉庵、おぬしは、わしをおだてて、家康がために、何か考えて居るようだの」
意地わるい上眼になってたしなめると、蕉庵はケロリとした顔で答えた。
「その通りでございます」
「なに、その通りじゃと……」

「はい。私は、ひとり家康どののみならず、堺衆のため、日本国中の民のためになる事で、しかも、上様のお為めになる事……これを考えて行きたいのでございます」
「ふーん、それは、確かにそうじゃの」
「もはや、上様と故右府さまとの、お違いが、そろそろ出て参らねばならぬところ……右府さまの時代には、まず日本の統一がその目的のすべてでござりました。しかし、上様がそれでご満足なされましたら、後世の人々は、何と申しましょう。秀吉は、結局信長の真似をしているに過ぎなかったのだ……と、申されまする」
「蕉庵」
「はい」
「おぬしは又、思いきったことを、ズケズケと申す男じゃの」
「はい。その位のことで、お怒りなさる上様ではない……そう存じて居りますので、別に歯に衣は着せませぬ」
「おだてるなッ」
　秀吉は叩きつけるように言って、しかし、満更でもなさそうに眼を細めた。
「そうじゃ。たしかに蕉庵の言うとおりじゃ。後世の人々は、わしを右府さまの遺志を継ぎ、右府さまを真似て生きただけの男というに違いない。かりにこうして茶を弄ぶのまでが、右府さまの真似……と、見れば真似じゃからのう宗易」
　しかし宗易は、返事もしないで、こんどはシンシンシンと音を立てて鳴りだしている釜のふたを拭いていた。

「上様、もはや、狭い日本の土から取れる稲ばかりをあてにして、百姓どもを苦しめてゆく時代ではござりませぬ」
「それはそうじゃ。わしも、つねづねその事は考えている」
「富と言えば米……それしか考えられずに寸地尺土を奪い合う、そのような武将は、とにかく上様によって平定された……もう、されたと言いきって誤りはござりませぬ」
「また、おだてかおぬしの」
「おだてと志の大きさとは違いまする。このあたりで、土から取れる稲ばかりが富力ではない事を、はっきり皆に知らせてやらねばなりませぬ。堺衆やそれと手を握って動く豪商の考えは、ずっとずっと進んで居りまする」
「そうだの」
「九州唐津の神谷は、山から無限の富を掘出そうとして、遠く亜馬港(マカオ)まで、伜どもに採鉱冶金(やきん)の法を学ばせにやって居りまするし、又、豊前(ぶぜん)の中津で大賀某は、南蛮鉄を仕入れて刀剣を打たせ、これを再び海外へ売出して巨利を博して居りまする。このあたりで、無法な海賊などはきびしく押え、新しい天下の眼をもって海へのぞまば、なすべきことは無限にござりまする」
　蕉庵が熱心に言うと、秀吉はあっさりとうなずいて又言った。
「分った分った。それで、家康はどうせよと言うのじゃ蕉庵」

四

　ずばりと急所をつかれて、しかし蕉庵はいっこうに悪びれなかった。

「上様もお気が短い」
　と明るく笑って、
「折角、大きく話に花が咲いているのに、家康どののことなどは、後でもよいではございませぬか」
「と言うが、おぬしは、誰かに頼まれて、それをわしに言う気であろうが」
「その通りなので……」
「わしに、その頼んだ相手の名だけを知らせ。さすればわしもおぬし達の話に乗って、この眼を世界におき直してもよい」
「はいはい、そのようにお気にかかりますならば申上げましょう。茶屋四郎次郎と申す者から頼まれました」
「なに茶屋から……」
「はい、これも、後にはきっと大きな船を造って世界の海に浮べる男……と、この蕉庵も、宗及、宗易どのもみな睨んで居る、少しばかり見どころのある男でござりまする」
「その男が何と申した。家康をいじめるなと申したのか」
「それが、あまり石川数正を痛めつけないようにと頼まれました」
「ふん、石川伯耆をなあ……」
「上様！」
「なんじゃ、改まって」
「このあたりで、はっきり海外策をお樹てなされませ」

「また、話をホラにそらしてゆくのか」
「ホラではございませぬ。これが一年遅れたら、それだけ南蛮人にあちこち土地を奪われまする。天竺、シャム、安南、ジャガタラ、ルソン、大明と、彼等は刻々に足場をひろげて、行く先先で出稼ぎしている日本人に邪魔をしかけて居ります。それ等の日本人の後楯をしてやるだけでも、これは、故右府さまの志にうえ越すものではございませぬか」
「よしよし、さすればいちばん得をするのは堺衆じゃ。その方たちはわしを堺衆の番頭か何かのように思うて居る。が、よかろう、それが新しい行き方ならば、よく思案を練らねばなるまい」
「その事で。日本国内の軍費など物の数ではございませぬ。お眼を世界にひらかれて、故右府さまに出来ない仕事をなされてゆく……そうなると人を見る眼も違って参りまする」
「なに、人を見る眼じゃと……!?」
「はい。狭い土地を争うのでは、斬らねばならぬ厄介者も、広い世界では許してどこかで使い得ましょう。故右府さまの欠点は、人を斬りすぎたことにあると、心ある者どものひとしく洩らす世評のようで」
「フーム」
　と、秀吉は唸った。再び、その眼は星のように光りだしている。
「蕉庵」
「はい」
「こなた達は、わしに眼を海外へ向けよ、そして、大志をとげるために、要る人間か要らぬ人間か、人間の値打ちを決めるめどをそこに置け……と、こう申しているのだな」

「まさにその通り、恐れ入ってござりまする」
「分った！　そうなると家康は、得難いわしの番頭になる男……そう言いたいのじゃな」
そこまで言うと秀吉は、また無遠慮に笑いだした。

五

笑いながら秀吉は、少なからず腹を立てていた。
（この堺の町人どもめ、わしの肚を読みきって居る……）
そう言えば近ごろ秀吉の胸を去来するものは、どこで、自分が信長以上の人間だったという証を世人に示そうかということだった。
それでなければ、秀吉は、信長の平定しかけていた天下を、遺志を言いたてたり、仇討を言い立てたりして盗んだもの……とも言われかねない。人材の登用のし方も、疾風無尽の戦法も、堺への注目も、大坂への築城も、そういう観点に立って見れば、一つとして信長の真似でないものはない……とも言い得るのだ。
（それではならぬ……）
しきりにそう考え出しているのを、堺の町人共は敏感に読みとって、その急所を衝いて来るのだが、今日の蕉庵の話はせんじ詰めると、すべてこれ、家康のための画策になって来るのだ。
「ハハ……」秀吉はこだわりなく笑ってから、
「なるほど、家康という男は仲々手腕のある男と見えるの。こなた達をすっかり丸めこんで、わしに当らせて居る」

皮肉と言うより、その位の腹の読めぬ秀吉ではないぞという、一流の先制癖であったが、それを聞くと、納屋蕉庵の顔いろはすーっと一度に硬ばった。
「上様！」
「なんじゃ。わしの申したことが気に入らぬのか」
「気に入りません」
「ほう、どう気に入らぬ」
「上様、われ等を、家康に動かされて、上様に当るようなケチな者と思召されまするか」
「というと別に思案があるというのか」
「われ等は、家康と上様とを対立させて考えたことはございませぬ。われ等が考えて居るのは日本国の発展、これ一つにございまする」
「ふーむ。大きく出たな蕉庵が……」
「さようで。もはや小さい事を申していては日本国は立行きませぬ。日本の平定が出来ましたら、すぐに国内の総石高を検地の上お調べなされませ。さすればハッキリと答えが出て参りまする。仮りに……」
と言って、蕉庵は、自分の言葉が激しすぎているかどうか、ちらりと宗易と、宗及に眼をやった。どちらもパチリと瞬いたまま平然と坐っている。この瞬きは、大いにやるがよい、というほどの意味らしかった。
「仮りに……日本は六十余ヵ国、上様がすべてこれをご平定なされましたら、一国宛遣わしたいと思召される家臣が六十余人で済みましょうか。恐らく、三百人、四百人とも相成りましょう。

さすれば、もはやその論功行賞で行詰りまする。かつて、南北朝の昔、建武の中興が崩れ去りましたのも、このためでござりました。それゆえ、広く眼を世界に向け、世界から土地に代る富を集める……この大事の成せるお方は上様……と、思えばこそ、国内のことはなるべく穏やかに事を急がれたいとの思い。家康どのの問題は、その途中に現われた小さなこと……上様があやつは生かしておけぬ、何年かかろうと叩き潰す……と、仰せらるれば、さようでございますかと言うまででござりまする」

秀吉は、もう一度笑って、あわてて鼻の尖で手を振った。

六

「止せ！　分ったよせ！」

と、秀吉がさえぎると、蕉庵もテレたように「ハハ……」と笑った。

「これは、とんだ茶道を致しました。お許しなされませ」

「詫びるな。その方などに詫びられると、こんどは何を言い出すのかとゾーッとするわい。なあ宗易」

「は……」

宗易は、それでも答えようとせず、傍から宗無がいかにも感心したように、しかし、充分一座の空気を意識して口をはさんだ。

「蕉庵どのには、おどろき入りました」

「はて、なにをおどろかれたのじゃ」

「上様の前で、われ等が考えて居るのは、日本国の発展、これ一つ……などと大見栄をきられるお方は蕉庵どのお一人でございましょう」
「ハハ……、これは堺衆の発展のため……と、言った方がよかったかの宗無どの。しかし、日本の発展がなければ堺の栄えもわれ等の栄えもありようがない。南蛮の諸国はみな、国王から、僧侶、船乗り、と心を協せてやって来るのに日本人だけはバラバラで出かけている。国の内が一つにならねば、海外へ出掛けてみてもただの流民、流民では栄えようがないからの」
「まことでございまする」
と、宗無は笑顔をおさめて生まじめに頷いた。
「いま日本から、大明、アンナン、カンボジャ、ルソンなどめざして、世界の海へ出ている船は百艘を超えていよう。それ等がみな同じ、日本国の旗印をかかげて出て行けるようにならなければなあ……その事を上様によくお願い申しましょう」
秀吉はその時にはもう、みんなから視線をはなして立上る身構えになっていた。
「そうじゃ大事な用を忘れていた。では、雑談はこれまでにして」
「はッ」
秀吉が立つと、みんなも立った。
もう外へは、朝の陽があたりだし、霜の白さが、一層あざやかに光りだしている。
秀吉はその陽の中を、さっきとは打って変った、きびしい表情でしばらく歩いて、それからふと足をとめると、わが自慢の天守閣をふり仰いだ。
地下をふくめて九層の大天守は、青すぎるほどに青い朝の空へ、かっきりと聳え立って、次第

に町割の出来てゆく難波（なにわ）の街を見おろしている。
おそらくこの偉容を仰いで、今朝もまた川筋は、出船千艘、入り船千艘の賑（にぎ）わいを繰りひろげているに違いない。
この地の発展を予期して、堺からも京からも続々と町民の移住がつづき、すでに人口は京を抜きかけている……
秀吉は、しばらく、瞬きもせずに天守閣を睨んでいたあとで、
「日本国の栄えか……」
ぽつりと一言口の中で呟（つぶや）くと、庭を眺めているお伽衆（とき）など忘れたように、またさっさと、本丸のわが居間の方へ歩いた。
「佐吉、富田左近と、津田隼人（はやと）を至急に呼んで参るよう」
百間廊下をせかせかと渡りながら出迎えた石田三成にそう言って、秀吉はもう、茶道のことも堺衆のことも素早く頭から追い出していた。
「よし、家康がことを片付けねばならん」

七

秀吉のお使番、津田隼人と富田左近がやって来たのは、それから半刻ほど後であった。
秀吉は二人が坐ってゆくのを待ちかねるようにして、
「その方たち、いまいちど浜松の家康がもとへ使して呉れ」
と、身をのり出していった。

二人はちょっと顔を見合せた。
「では、石川伯耆守どのから、人質不承知のご返事でも……？」
富田左近が両手を突いたままで訊ねる。
二人はかつて一度岡崎まで家康をたずねているからであった。
信雄と秀吉の間に和議の成ったことを知らせに、信雄の家老、滝川三郎兵衛雄利と土方勘兵衛雄久が出向いてゆく時、秀吉の使者として、同じく和平を知らせるために同道したのである。
石川数正が、大坂へ出て来て人質のことを言われ、困惑して戻っていったのは、表向きは、二人の答礼ということで大坂へ来たおりの事であった。
「いや、その事じゃ。数正からの返事のないうちに行かねばならぬ」
「と仰せられると、人質ご催促の使者でござりましょうか」
「その方たちも、そう思うか」
秀吉は「フフフ」と笑った。
「は……？」
「わしが、石川に人質を出せと申した……そう思うたのか」
二人はまた顔を見合せて瞬きあった。
人質を出せと言った……と思うにも思わぬにも、出さねば許さぬと数正を責めたのは秀吉自身ではなかったか。
「フーム」
と、秀吉はもう一度もったいらしくうなずいてから、

「その方たちまでが、そう思うているようでは、数正も勘違い致しているかも知れぬなあ。それゆえ、数正がやって来る前に行かねばならぬ」
「と、仰せられますると、上様は、人質を出せと仰せられたのでは無かったので」
「そうじゃ」
秀吉はそこで、すでに認めさせてあった書状を二人の前に差出させた。
「或いはわしも少し言葉が足りなんだかも知れぬと思うたゆえ、その旨、これを認めさせておいたが、両人の口からもよく申せ」
「はッ」
「これがただの時ならば、人質を取らねば許せぬところ、と、こう申したのじゃ。家康が長子に家老どもの子供二人をな。しかし、今は日本国のため、私情を捨てて早く天下の統一を計らねばならぬ時。名もなき小大名ならばいざ知らず、家康ほどの者ゆえ、この道理は分っていよう。又養子となるべき者の片腕とも成るべき、両家老の伜どもをつけて寄こせ……こう申したのを、或いは数正め、あわてくさって人質と思い込んでしもうたような節がある。よいか、これは人質では断じてない。秀吉が大切な養子にしたいと申したのじゃ。誤解があってはならぬゆえ、もう一度念を押して参れ。分ったな」
二人は狐につままれたように、もう一度顔を見合ってまたたき合った。

八

八

秀吉はいよいよけろりとして、
「分らぬのか二人とも。いや、よかったよかった。二人が勘違いしているようでは、石川数正も勘違いしているに相違ない」
「恐れながら……」
たまりかねて富田左近が口をはさんだ。
「すると、あの、石川どのに、人質出せと仰せられた、あのお言葉は取消されまするので」
「なに、取消しじゃと⁉」
「はい、私めもその場に居合わせ、上様がたしかにそう仰せられた……と、記憶致して居りまするが」
「左近！」
「はいッ」
「その方は、耳をどこへ付けて居るのじゃ」
富田左近はムッとしたように、
「ご覧の通り、顔の両側に、少々他人より大きなものをつけて居りまする」
「それが飾りでなくばしっかりと聞きなされ。わしは人質を出せと言うところじゃが、左様なケチなことは言わぬ……と、こう申したのだ。人質ではなくて、養子に呉れ……とこう申したのだ。そのあとの方を、その方が聞き落す程ゆえ、石川数正も聞き落して参ったかも知れぬ。よっ

て、これはどこまでも養子なのだからそのつもりでと申して来い」
こんどは左近もようやく腑におちたと見えて、津田隼人とうなずきあった。
「それでは、もう一言承わって参りとう存じまする」
「呑みこみの悪い奴め、もう一言とは何事じゃ」
「恐れながら、先方では、人質と言われたものと思い込んでいるやも知れませぬ。たしか、石川どのの耳はそれがしよりも小そうござりましたゆえ」
「フン、それで、どうしたと申すのだ」
「先方では早合点をして、カンカンに怒って居り、今ごろになって妥協を申込んで参っても、承服出来かねると申したら何と致しましょうや。その折には、われ等は知らぬと、書状だけおいてさっさと戻って宜しきや否や」
「左近！」
「はい」
「おぬしはそれでふぐりを下げた男か」
「ご念には及びませぬ。それも他人よりは少々ばかり……」
「大きいのじゃな。ただ大きくても狸の類ではものの役には立たぬぞ。その時には、坐り直せ」
「どう坐り直しまするので」
「石川数正に腹を切らせて来い。よいか、わしが、念には念を入れて、手紙に聞き違えていはせぬかと書いてある。そなたもその場で聞いていたことじゃ。それを数正一人が聞き違えて、わざわざわしと家康が間に波風の立つような取次方を致してあれば、許せぬことと思わぬか」

「なるほど……」
「その方の主人、秀吉は、そのようにケチな人物ではない。それを妥協などと言いがかりをつけられてはこのままは帰れぬ。石川が首を貰いうけて行きたいと、そう申せ」
「もう一つ伺いとうござります」
「しつこい奴だ。まだあるのか」
富田左近は神妙にうなずいて、もう一度津田隼人と眼くばせした。

九

「万一、われ等がそう申し、宜しゅうござると、石川どのが腹を切られた節は、その首をひっさげて戻って宜しゅうござりまするので」
「なに……」
「上様！　この事は、上様がお考えなされて居るほど簡単なこととは思われませぬ。先方で、どのような話になって居るかは存じませぬが、人質と言い、ご養子と言ってみても、差出す方では五十歩百歩。拒絶(きょぜつ)された場合のことも、充分に考えて参らねばならぬかと存じまする」
富田左近がそう言うと、脇から津田隼人もうなずいた。
二人とも、このことで、石川数正がどんなに困りきっていたかをよく知っているからだった。
秀吉は、とつぜん大声で叱りつけた。
「たわけめッ！」
「はッ」

「その方たちは、この秀吉を何と思うているのじゃ。その方たちに取っては馴れ易い主人でも、家康にとってはこの世でいちばん恐ろしい人物がこの秀吉じゃ。わしの言うままに申してみよ。家康が、それも出来ぬなどと言う筈はない」
「は……その点は重々心得て居りまするが、然し、使者としては万が一の場合も、肚になくては主命を辱しめることもあろうかと、それを恐れるのでござりまする」
「恐れるなッ」
　と、秀吉はまた怒鳴り返した。
「万一にも、拒絶するようなことがあったら、大声で笑ってやれ。われ等が主人秀吉は、家康を話相手になる奴と言うておわしたが、これは大違いであった。このようなうつけならば相談相手どころか肩の荷になるばかり。養子縁組などは、主人が致すと申しても、われ等でさせてはならぬ。そう言って、さっさと席を蹴って立って来い。分ったか」
　富田左近はニコリと笑って、津田隼人をふり返り、
「分ったのう隼人、そう承わればのう」
「よく腑におちてござりまする。が、この隼人にも、特別をもちましてもう一つだけおたずねを許されまするよう」
「その方もか。よし、申せ」
「余の儀ではござりませぬ。それはそれはと、先方で二つ返事で承諾なされた時のことでござりまする」
「ほう、こなたは二つ返事の場合のことが訊きたいのか」

「はい。その場合家康どののご子息を、われ等にそのまま連れて行け……と、もし、かように申された節は、受取って参っても宜しゅうござりましょうや否や」

津田隼人にそう言われると、秀吉はわきを向いて渋い顔になっていった。

「その時には断れ」

「はい。何と申して断りまするので」

「かりにも家康が子を、この秀吉が、日本一の大坂に迎え取って養子とするのだ。世間への聞えもあれば、充分に用意の上で披露したい。何日にお連れ下さるか、それだけ伺うて立帰り、早速お支度を……と言うて戻れ」

「ではもう一つ……」

「うるさいの、何じゃ」

「その時に、家康どののご自身で送って来い……とは、申さいでも宜しゅうござりまするので」

秀吉はギクリとして、またわきを向いた。

十、

津田隼人の問いは、いちばん鋭く秀吉の肚をえぐった。

人質……と言い出してあることを、養子に譲歩して折合う気になったのは、むろん家康を大坂城へ呼び出そうとする下心があってのことであった。

家康さえ大坂城へやって来て秀吉に挨拶してくれたら、仮りに「養子」と名目は変っていっても諸侯はこれを「人質」と解するに違いなく、その点では些かも秀吉の権威は損われない。しか

なると、人質を拒まれたのと大差ない不面目になってゆく。

いま、津田隼人に「その通りだ」と答えたら、隼人はすぐに「送って来ぬと言われた時は」と、きき返すに違いなかった。

「隼人……」

秀吉は、あわただしく脳裏でその計算をつづけながら、

「そなたの考えでは、家康は、ハイと素直に自身で連れて来ると思うかどうじゃ」

と、心とは反対のことを言った。

「恐れながら、その儀は……」

「分るまい。こなた達に分る筈はない。家康はな、心中では、あああありがたいお計らいと、われ等に感謝するであろうが、家中の者の中には、それは無用心！　万一大坂城へ赴いて、そのまま斬られでもしたら何とする……などと言い出し、反対する者がきっとあろう。それゆえな、向うが断った場合には、こう致せ。家康は病気で来れぬとなあ、よいか、病気も病気、大病じゃぞ。それゆえ、治ったらば改めて参るという態にして養子の行列は軽々しくならぬよう致して欲しいと、こう申せ」

「よく相分ってござりまする」

「もはや、ききたい事はないか」

「伺いたいこと、すべて、肚に入ってござります」

「よし、では急いで行くように」

そう言ってから秀吉は、何を思ったのか、
「しばらく待て、盃を取らそう」
　と、傍の石田三成をふり返った。
「どうじゃ、こんどの事では、わしの処置は寛大であろうが」
　と、溶(と)けるような笑顔になって二人を見比べた。このあたりからが、秀吉の最も得意とする宣伝戦の領域だった。二人が浜松へ赴けば正式の口上を伝えたあとで必ず酒食の饗応(きょうおう)はある筈。その折の、雑談の材料を思いきり二人に持たしてやろうという魂胆(こんたん)なのに違いない。
「いや、家康は天晴(あっぱ)れな生れつき。家康が家来どもに、わしが心から褒めていたと申すがよい。家康には、小牧(こまき)のおりの駈け引きに手落ちがない。これが第一……第二は、更に狼狽のあとがない。これは並大抵の生れつきで出来ぬものじゃ。第三には、あとの目がよく天下のことに行き届いている。これが光秀や勝家であったら、必ず四国の長曾我部か、相模の北条に煽動(せんどう)されて、無益(むえき)な戦にしたであろうが、その無謀には乗らなんだ。天下の事が見えるからの……わしが、家康の長子、於義丸を養子にしたいと考えだした原因はそこにある。この家康の血を享(う)けた於義丸、これをわしの手で育てあげたら、どのような名将が出るかと、のう、それがたまらぬ楽しみじゃ！」
　そう言うと、秀吉はほんとうに眼を細めてコトコトと笑った。

十一

「わしはな……」

秀吉は、三成の指図で、小姓たちが銚子を運んで来ると、それを両人に注がせながら、又言葉をつづけた。
「ここでは器量抜群の子を育てるのが、いちばん大きな、わしの目的になって来ているのじゃ。わかるか両人に」
「は……お子を育てるのが？」
「そうじゃ。よいか、これからの日本はな、昨日までの日本ではなくなるのじゃ」
「と仰せられまするると……？」
「昨日までの日本の目当ては、どうして国内を平定するかにあった」
「なるほど……」
「ところが、故右府さまとこの秀吉の手によって、国内の平定は、あと一、二年で完全に出来上る。するとこんどは大きく世界へ向うてゆく日本じゃ」
津田隼人と富田左近は、またちらりと眼を交してうなずき合った。
「そうなると諸事万端、昔のままでは役に立たん。人も物も、考え方も、武士道もじゃ。よいか、たかが六十余ヵ国しかない今の日本などものの数ではない。というて、人間だけは一朝一夕には育てられぬ。今からそのつもりで、世界の睨める大いなる者どもを育てておかねばのう」
「なるほど……」
と隼人は、またも左近をかえりみて、
「それで、於義丸どの、ご懇望の意味が、まことにハッキリと致しました」
「ハハハ……家康が家来どもによく話してやれ。わしはいまに、秀勝や於義丸と共に、小山のよ

うな軍船を仕立てて世界の海へ乗出して参る。その支度をしているのじゃとな。それにはしかし、しっかりとした留守居も入用じゃ。それゆえ有能な者があったら、昔日の敵味方など問題ではない。新しい日本国のため、どしどし推挙して呉れるようにと頼んでおけ」
「かしこまってござりまする」
「よし、では、そのあたりで盃を納めて、石川数正が安堵するよう、早く発ってやるがよい」
二人は言われるままに盃をおいて退出していった。
もはや、幾度も使者には立っているので、彼等も充分これで秀吉の思案の奥へふみ込んでいったつもりであろう。
二人が去ってゆくと、秀吉はしばらく黙って宙を見つめだした。
「上様、何となされました？」
三成が盃盤を小姓たちに片付けさせながら、不審そうにたずねると、
「佐吉、わしは家康が憎い！」
と、とつぜん言った。
「これは、上様らしくもないことを……」
「あやつは、わが子を養子に奪われても、この城へ挨拶には来ぬかも知れぬぞ」
「来なかった時には何となされまする」
「来なかった時には……」
秀吉はサッと双眼に殺気をやどして、しかしすぐそのあとで笑っていった。
「ハハハ……来させずにおくものか。必ず来させて見せてやる！　が、それにしても憎い男よ」

そこで再び声をおとして、
「佐吉、したが、いまの事は誰にも言うな」
三度びその眼に凄(すさま)じい底光りをたたえて囁(ささや)くのだった……

榊原氏・池田氏系譜

（—は直系或は直系編入の別の明らかでないもの。‖は同族・異族よりの編入）

榊原氏

利長（仁木氏より）—勝長—清長

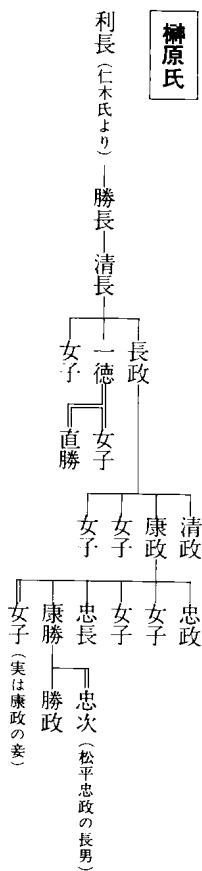
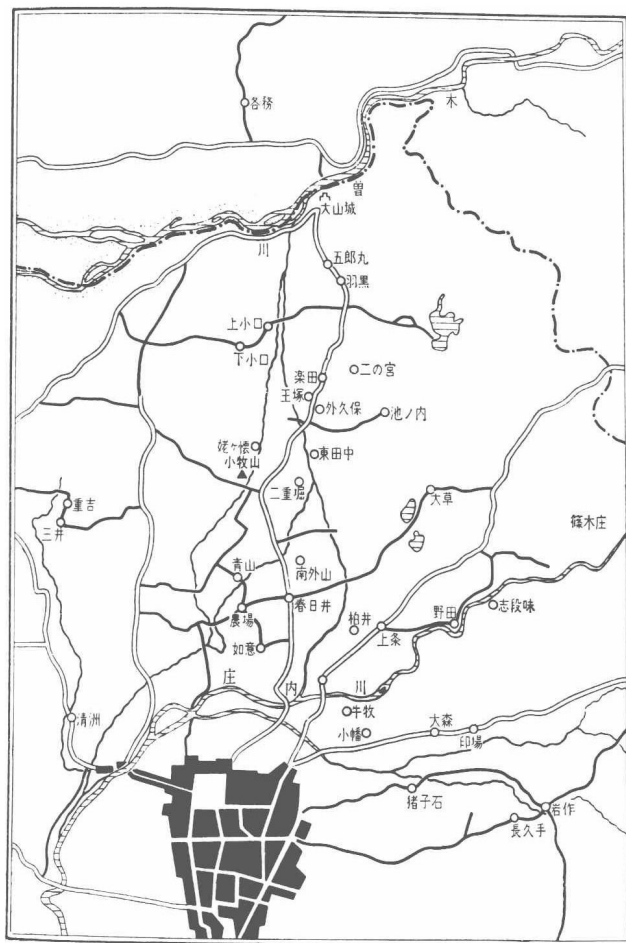
- 清長
  - 長政
    - 清政
    - 康政
      - 忠政
      - 女子
      - 女子
      - 忠長
      - 康勝
        - 勝政
        - ‖忠次（松平忠政の長男）
      - ‖女子（実は康政の妾）
    - 女子
    - 女子
  - 一徳
    - ‖女子
    - ‖直勝
  - 女子

池田氏

恒利（源頼光裔）—信輝（勝入）

- 信輝
  - 元助
  - 輝政
    - 利隆
    - 忠継
      - ‖忠雄
    - 忠雄
    - 政綱
  - 長吉—長幸

小牧・長久手の戦参考図

各務
木
曽
川
大山城
五郎丸
羽黒
上小口
下小口
二の宮
楽田
外久保
池ノ内
姥ヶ懐
小牧山
東田中
二重堀
大草
重吉
三井
篠木庄
青山
南外山
春日井
志段味
野田
農場
柏井
上条
如意
庄
内
川
清洲
牛牧
大森
小幡
印場
猪子石
岩作
長久手

大坂に築城して天下に覇を唱えようとする秀吉に対して織田信雄が起つと、家康は義によって織田方に味方して小牧長久手に戦うが、双方とも、相手を滅すことの不利を悟り、和を講じる。が、秀吉からの、家康の二男於義丸（結城秀康）の人質要求が、勝ち戦だったと思い込んでいる家康の家臣を怒らせた。

3-312100-2253 (1)　　360円